巻頭図版１　西寺跡（38次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡　遺構

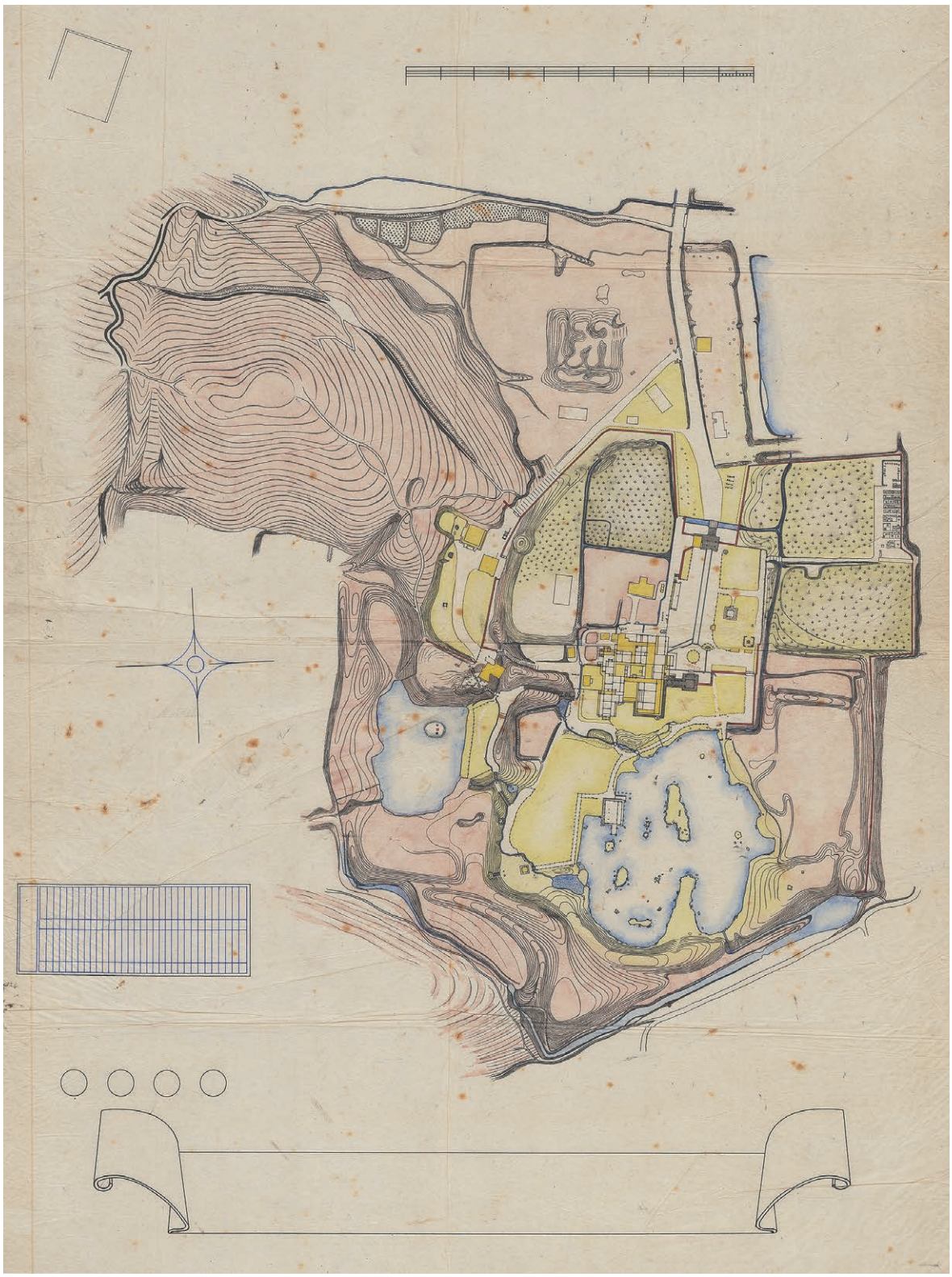


1　上層全景（北から）



2　下層全景（北から）

巻頭図版２　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）　測量図



1　鹿苑寺（金閣寺）庭園測量図（京都府所蔵・原図縮尺１：1,000，左が北）

巻頭図版３　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）　遺構



1　第１トレンチａ区（南東から）



2　第１トレンチｂ区（南から）



1　第２トレンチ（北東から）



2　第２トレンチ（東から）

京都市内遺跡発掘調査報告

令和２年度

２０２１年3月

京　都　市　文　化　市　民　局

例　言

1　本書は，京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した，令和２年度の京都市内発掘調査報告書である。本書では令和２年度に実施した発掘調査成果を報告する。

2　調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が主体となり，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の支援を受けた。

3　調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は，下記のとおりである。

Ⅰ　平安京左京一条三坊十一町跡・旧二条城跡　（受付番号　19H613）
京都市上京区室町通下立売上る勘解由小路町171
2020年４月７日～５月15日　81㎡　　赤松 佳奈

Ⅱ　西寺跡（38次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡　（受付番号　20H009）
京都市南区唐橋西寺町17
2020年６月１日～６月26日　75㎡　　鈴木 久史

Ⅲ　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）（受付番号　2N041）
京都市北区金閣寺町１
2020年８月31日～10月21日　34.2㎡　　熊井 亮介

Ⅳ　植物園北遺跡（受付番号　19S614）
京都市左京区松ヶ崎芝本町４－３，４－８
2020年４月27日～５月19日　73㎡　　新田 和央

Ⅴ　北白川廃寺・上終町遺跡　（受付番号　19S476）
京都市左京区北白川東瀬ノ内町25－１
2020年４月６日～４月22日　78㎡　　熊谷 舞子

Ⅵ　北白川廃寺・上終町遺跡　（受付番号　20S346）
京都市左京区北白川東瀬ノ内町25－２
2020年10月７日～11月５日　85㎡　　清水 早織

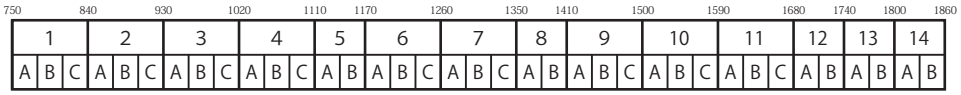
Ⅶ　山科本願寺跡（24次・25次）
《24次》京都市山科区西野山階町36－2，38－1，51（受付番号　18S578）
2019年12月９日～12月19日　30㎡　　奥井 智子
《25次》京都市山科区西野山階町44（受付番号　20A001）
2020年６月１日～６月30日　64㎡　　奥井 智子

Ⅷ　鳥羽離宮跡（156次）（受付番号　20T495）
京都市伏見区竹田浄菩提院町65
2020年11月９日～11月19日　50㎡　　黒須 亜希子

4　本書の執筆分担は，本文の末尾に記している。

5　本書に使用した写真の撮影は，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し，遺構・遺物の一部は調査担当者が行った。

6　本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は，一部を除き，平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第12号　（公財）京都市埋蔵文化財研究所2019年 に準拠する。



7　本書で使用した土色名は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

8　本書中で使用した方位および座標の数値は，世界測地系　平面直角座標系Ⅵによる（ただし，単位（m）を省略した）。また，標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。なお，調査における測量基準点の設置は，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託した。

9　本書で使用した地図は，本市都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）「聚楽廻」「御所」「中河原」「梅小路」「安祥寺」「今熊野」「山科」「稲荷山」「勧修寺」「丹波橋」「中書島」を調整したものである。

10　本書の作成及び編集は，京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課で行った。

本　文　目　次

Ⅰ　平安京左京一条三坊十一町跡・旧二条城跡

1．調査経過 …… 1
2．遺　跡 …… 1
3．遺　構 …… 4
4．遺　物 …… 11
5．小　結 …… 13
6．附　節　旧二条城跡内堀の表面波探査 …… 15
7．総　括　旧二条城跡の都市史及び城郭史上の特徴 …… 19

Ⅱ　西寺跡（38次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡

1．調査経過 …… 23
2．遺　跡 …… 23
3．遺　構 …… 31
4．遺　物 …… 34
5．まとめ …… 34

Ⅲ　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）

1．はじめに …… 38
2．位置と環境 …… 40
3．地形測量 …… 45
4．第1トレンチの調査 …… 49
5．第2トレンチの調査 …… 59
6．土壇地形の改変 …… 62
7．遺　物 …… 65
8．まとめ …… 66

Ⅳ　植物園北遺跡

1．調査経過 …… 70
2．遺　跡 …… 70
3．遺　構 …… 73
4．遺　物 …… 78
5．まとめ …… 79

Ⅴ　北白川廃寺・上終町遺跡Ⅰ

1．調査経過 …… 82
2．遺　跡 …… 83

3．遺　構 …… 85
4．遺　物 …… 89
5．まとめ …… 93
Ⅵ　北白川廃寺・上終町遺跡Ⅱ
1．調査経過 …… 96
2．遺　構 …… 97
3．遺　物 …… 100
4．ま と め …… 111
Ⅶ　山科本願寺跡（24・25次）
1．調査経過 …… 115
2．遺　跡 …… 116
3．遺　構 …… 123
4．遺　物 …… 135
5．まとめ …… 137
Ⅷ　鳥羽離宮跡（156次）
1．調査に至る経緯と経過 …… 139
2．位置と環境 …… 140
3．調査成果 …… 145
4．まとめ …… 148
報告書抄録 …… 149

図　版　目　次

巻頭図版１　西寺跡（38次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡　遺構
1　上層全景（北から）
2　下層全景（北から）
巻頭図版２　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）　測量図
1　鹿苑寺（金閣寺）庭園測量図（京都府所蔵・原図縮尺１：1,000，左が北）
巻頭図版３　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）　遺構
1　第１トレンチａ区（南東から）
2　第１トレンチｂ区（南から）
巻頭図版４　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）　遺構
1　第２トレンチ（北東から）
2　第２トレンチ（東から）

図版１　平安京左京一条三坊十一町跡・旧二条城跡　遺構
1　第１面全景（東から）
2　第２面全景（東から）
図版２　平安京左京一条三坊十一町跡・旧二条城跡　遺構
1　A-A’断面（旧二条城濠跡SD18）（北西から）
図版３　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）　遺構
1　第１トレンチａ区東壁（西から）
2　第１トレンチａ区北壁東部（南から）
図版４　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）　遺構
1　第１トレンチａ区断割西壁全景（南東から）
2　第１トレンチｂ区（南から）
図版５　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）　遺構
1　第２トレンチ（南東から）
2　第２トレンチ盛土層近景（東から）
図版６　植物園北遺跡　遺構
1　拡張前全景（北西から）
2　SD14（北東から）
3　拡張後全景（掘立柱建物37）（北から）
図版７　北白川廃寺・上終町遺跡Ⅰ　遺構
1　調査区全景（西から）
2　SD５・６（西から）
図版８　北白川廃寺・上終町遺跡Ⅱ　遺構
1　調査区全景（北から）
2　SD２セクション断面（東から）
図版９　北白川廃寺・上終町遺跡Ⅱ　遺構
1　拡張区　SD２（北東から）
2　拡張区　SD６（南から）
図版10　山科本願寺跡（24次）　遺構
1　24次　１区土塁断面１（北西から）
2　24次　１区土塁断面２（北西から）
3　24次　１区土塁基底部断面（北西から）
図版11　山科本願寺跡（24次）　遺構
1　24次　２区土塁検出状況（南東から）
2　24次　２区土塁検出状況（北西から）
3　24次　２区土塁濠断面状況（北西から）

4　24次　3区検出状況（北西から）
図版12　山科本願寺跡（25次）　遺構
1　25次　調査区　遺構検出状況（北東から）
2　25次　拡張区1　遺構検出状況（東から）
図版13　山科本願寺跡（25次）　遺構
1　25次　調査区東壁及び断割り断面状況（南西から）
2　25次　SE17断面状況（東から）
図版14　山科本願寺跡（25次）　遺構
1　25次　調査区西壁（E-F間）断面状況（北東から）
2　25次　調査区西壁（H付近）断面状況（北東から）
3　25次　調査区遺構検出状況（北東から）
4　25次　整地土断面及び井戸検出状況（南東から）
5　25次　SE17北肩検出状況（南東から）
6　SK8断面状況（南東から）
7　SK9断面状況（南から）
8　拡張区2　整地土検出状況（北西から）

挿　図　目　次

Ⅰ　平安京左京一条三坊十一町跡・旧二条城跡

図1　平安京内の位置 …… 1
図2　調査地位置図 …… 1
図3　調査区配置図 …… 2
図4　作業風景（北西から） …… 2
図5　①地点検出の旧二条城跡濠北石垣（南東から） …… 2
図6　同南石垣東端　（北から） …… 2
図7　旧二条城跡堀推定線と周辺の調査事例 …… 3
図8　壁面断面の切り位置 …… 4
図9　北壁断面図　B-B' …… 5
図10　南壁断面図 …… 6
図11　A-A'壁面（SD18）　断面図 …… 7
図12　直交・平行断面　模式図 …… 8
図13　第2面　平面図 …… 8
図14　SD15・17　変遷図 …… 9
図15　SD15　断面図 …… 9

図16　第１面　平面図 …… 10
図17　SE12　平面図・断面図 …… 11
図18　出土遺物実測図１ …… 12
図19　出土遺物実測図２ …… 13
図20　表面波探査実施地点　過去の発掘・ボーリング調査地点 …… 16
図21　旧二条城跡内堀の表面波探査と推定復元 …… 17

Ⅱ　西寺跡（38次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡

図１　調査地位置図 …… 23
図２　調査区配置図 …… 24
図３　調査前全景（南東から） …… 24
図４　作業風景（北から） …… 24
図５　埋戻し状況（南から） …… 24
図６　埋戻し終了状況（南から） …… 24
図７　周辺調査位置図及び伽藍復元図 …… 26
図８　調査区及びセクション断面図 …… 32
図９　調査区平面図 …… 33
図10　溝14断面（北から） …… 34
図11　西僧房復元図 …… 35

Ⅲ　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）

図１　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園位置図 …… 38
図２　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園指定範囲 …… 39
図３　周辺調査事例 …… 42
図４　鹿苑寺（金閣寺）庭園　土壇測量図Ａ …… 46
図５　測量図Ａ　トレンチ設定位置図 …… 47
図６　鹿苑寺（金閣寺）庭園　土壇測量図Ｂ（部分） …… 48
図７　鹿苑寺（金閣寺）庭園　土壇測量図Ｃ …… 48
図８　昭和25・昭和10・昭和５・大正11年地図 …… 49
図９　第１トレンチａ区　調査着手前（南東から・令和２年（2020）８月26日） …… 50
図10　第１トレンチｂ区　調査着手前（東から・令和２年（2020）９月23日） …… 50
図11　令和２年度　鹿苑寺（金閣寺）庭園　（25次）第１トレンチ位置図 …… 51
図12　令和２年度　鹿苑寺（金閣寺）庭園　（25次）第１トレンチ平面図 …… 52
図13　第１トレンチａ区土層断面図 …… 53
図14　第１トレンチｂ区土層断面図 …… 54
図15　第13次調査トレンチ（南から・平成25年（2013）８月） …… 55
図16　第１トレンチａ区塩ビ管SX 101掘削開始（西から・平成25年（2013）12月13日） …… 55

図17　測量図A・B・C　第１トレンチ周辺 …… 56
図18　第１トレンチ該当部遠景（南西から・平成26年（2014）１月16日） …… 57
図19　第１トレンチ該当部近景（南西から・平成26年（2014）１月22日） …… 57
図20　第１トレンチ設定地点（東から・平成27年（2015）１月30日） …… 57
図21　令和２年度　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）第２トレンチ位置図 …… 60
図22　第２トレンチ地点　調査着手前（北東から・令和２年（2020）８月25日） …… 60
図23　第２トレンチ地点　苔・堰板除去状況
（南東から・令和２年（2020）９月14日） …… 60
図24　第２トレンチ平面図・土層断面図 …… 61
図25　第２トレンチ地点　平成28年度調査終了状況
（北東から・平成28年（2016）11月19日） …… 62
図26　測量図B　土壇部分 …… 63
図27　測量図A・B　合成 …… 63
図28　測量図C　土壇部分 …… 64
図29　測量図A・C　合成 …… 64
図30　出土遺物実測図 …… 66

Ⅳ　植物園北遺跡

図１　調査地と周辺調査位置図 …… 70
図２　調査前全景（北から） …… 71
図３　作業風景（北西から） …… 71
図４　調査区配置図 …… 71
図５　今回調査区と周辺調査区 …… 72
図６　調査区（拡張前）北壁・東壁断面 …… 73
図７　調査区平面図 …… 74
図８　竪穴建物36平面図・断面図 …… 75
図９　掘立柱建物37平面図・断面図 …… 76
図10　SD14平面図・断面図 …… 77
図11　SD32・SK33平面図・断面図 …… 77
図12　出土遺物実測図１ …… 78
図13　出土遺物実測図２ …… 79
図14　近接調査区の遺構展開 …… 80

Ⅴ　北白川廃寺・上終町遺跡Ⅰ

図１　調査区配置図 …… 82
図２　調査前全景（南から） …… 82
図３　作業風景（南西から） …… 82

図４　調査地と周辺調査位置図 …… 83
図５　調査区断面図 …… 86
図６　遺構平面図 …… 87
図７　断割り調査区平面図・B-B'間断面図 …… 88
図８　出土土器実測図１ …… 89
図９　出土土器実測図２ …… 89
図10　出土瓦実測図１ …… 91
図11　出土瓦実測図２ …… 92
図12　今回の調査と調査２との遺構関係図 …… 93

Ⅵ　北白川廃寺・上終町遺跡Ⅱ

図１　調査地位置図 …… 96
図２　調査前全景（南から） …… 96
図３　作業風景（南西から） …… 96
図４　調査区配置図 …… 97
図５　調査区断面図 …… 98
図６　遺構平面図 …… 99
図７　出土土器実測図 …… 100
図８　出土瓦実測図１ …… 101
図９　出土瓦実測図２ …… 104
図10　出土瓦実測図３ …… 105
図11　出土瓦実測図４ …… 106
図12　出土瓦実測図５ …… 107
図13　出土瓦実測図６ …… 108
図14　出土瓦実測図７ …… 109
図15　出土瓦実測図８ …… 110
図16　調査①～③との遺構関係図 …… 112
図17　調査①～③と塔との関係図 …… 113

Ⅶ　山科本願寺跡（24・25次）

図１　各調査地位置図 …… 115
図２　24次　重機掘削風景（南西から） …… 117
図３　24次　埋め戻し風景（北から） …… 117
図４　24次　測量風景（東から） …… 117
図５　24次　写真撮影風景（北西から） …… 117
図６　25次　調査前風景（南から） …… 117
図７　25次　重機掘削風景（東から） …… 117

図８　25次　調査風景（南東から）…… 118
図９　25次　写真撮影風景（東から）…… 118
図10　25次　測量風景（南から）…… 118
図11　25次　埋め戻し風景（北東から）…… 118
図12　主要調査位置図 …… 119
図13　奥田家住宅と23・24次調査 …… 122
図14　土塁と各調査区配置図 …… 124
図15　１区東壁断面図及び土塁東壁断面模式図 …… 126
図16　１区北壁・南壁断面図，２区東壁断面図 …… 127
図17　３区東壁断面図 …… 128
図18　24次調査とＨ19年度試掘調査の合成図 …… 129
図19　25次　調査区配置図 …… 131
図20　25次　平面図 …… 132
図21　25次　断面図１ …… 133
図22　25次　断面図２ …… 134
図23　24次　出土遺物実測図 …… 135
図24　25次　出土遺物実測図 …… 136
Ⅷ　鳥羽離宮跡（156次）
図１　調査位置図 …… 139
図２　調査区配置図 …… 140
図３　調査区全景（東から）…… 140
図４　調査区南壁断面（北から）…… 140
図５　鳥羽離宮内御所位置推定図 …… 141
図６　東殿推定地の既往の調査 …… 142
図７　調査区壁断面図 …… 146
図８　出土遺物実測図 …… 147

表　目　次

Ⅰ　平安京左京一条三坊十一町跡・旧二条城跡
表１　周辺の調査事例 …… 4
表２　遺構概要表 …… 6
表３　遺物概要表 …… 11
Ⅱ　西寺跡（38 次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡
表１　西寺跡発掘調査一覧表 …… 27

表２　遺構概要表 …… 31
表３　遺物概要表 …… 34
Ⅲ　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25 次）
表１　周辺調査事例一覧 …… 43
表２　遺物概要表 …… 65
Ⅳ　植物園北遺跡
表１　遺構概要表 …… 73
表２　遺物概要表 …… 78
Ⅴ　北白川廃寺・上終町遺跡Ⅰ
表１　近隣調査事例一覧 …… 84
表２　遺構概要表 …… 85
表３　遺物概要表 …… 90
Ⅵ　北白川廃寺・上終町遺跡Ⅱ
表１　遺構概要表 …… 97
表２　遺物概要表 …… 101
表３　出土瓦観察表 …… 102
表４　調査地別　溝の確認状況比較表 …… 112
Ⅶ　山科本願寺跡（24・25 次）
表１　近隣調査事例一覧 …… 120
表２　遺構概要表（24次） …… 123
表３　遺構概要表（25次） …… 131
表４　遺物概要表（24次） …… 135
表５　遺物概要表（25次） …… 136
Ⅷ　鳥羽離宮跡（156 次）
表１　東殿地区の既往の調査 …… 142
表２　遺構概要表 …… 145
表３　遺物概要表 …… 147

Ⅰ　平安京左京一条三坊十一町跡・旧二条城跡

１．調査経過

本件は個人住宅兼共同住宅建設にともなう発掘調査である。調査地は上京区室町通下立売上る勘解由小路町171に位置する。周知の埋蔵文化財包蔵地である「平安京跡」および「旧二条城跡」に該当し，令和元年12月11日に文化財保護法第93条第１項に基づく届出が提出された。当該地は旧二条城跡の内郭北濠の推定線上に位置しており，立地上の重要性から発掘調査を実施した。調査は令和２年４月７日から５月15日まで行った。調査区は計画建物範囲内の西側に設定した。これは旧二条城濠跡の屈曲部推定位置を調査するためである。調査面積は西側の拡張範囲を含め約81㎡である。

２．遺　跡

（１）立地と歴史的環境（図１・２）

調査地は京都盆地の東部に位置し，現在の京都御苑西側にあたる。中世の中心的な街路である室町通に面している。平安京条坊では左京一条三坊十一町跡に該当し，中世には室町幕府15代将軍足利義昭の居城「旧二条城」があった。下立売通を挟んで南側には，義昭の兄で13代将軍の義輝が造営した「武衛陣御所」があり，現在も町名として「武衛陣町」の名が残る。室町時代末期の要地であったと言える。ただし，中世京都における相対的な位置で言えば，防御用の堀で囲まれた街区「上京」および「下京」の中間地帯に当たる。

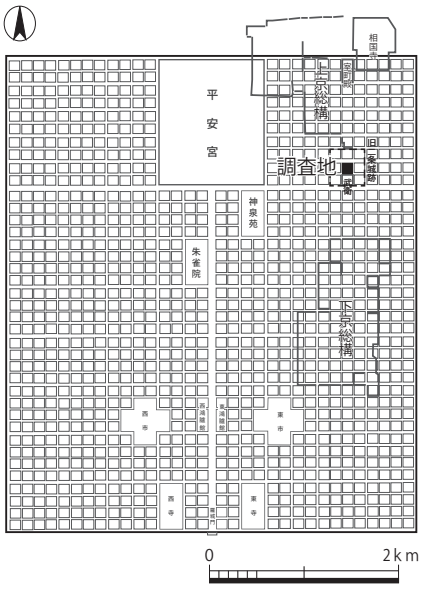


図１　平安京内の位置（1：80,000）

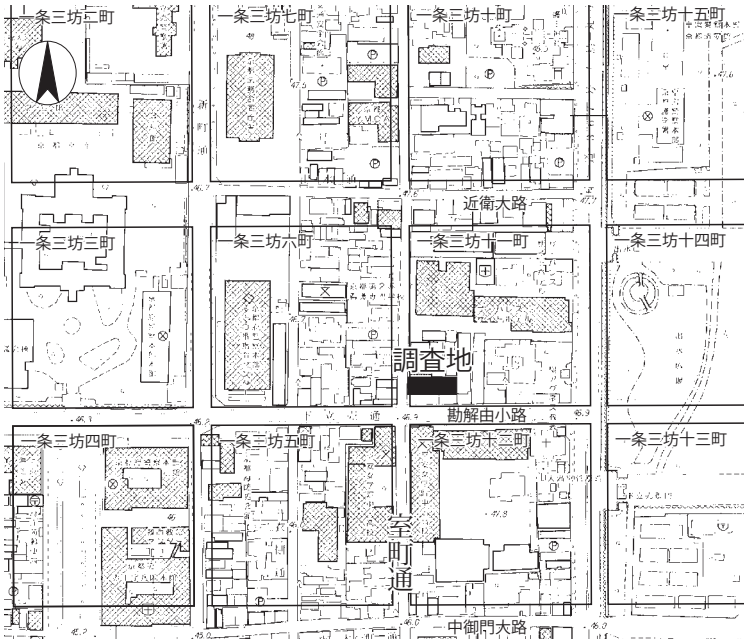


図２　調査地位置図（1：5,000）

「旧二条城」は，義昭のために織田信長が建設した城で『言継卿記』などから「武衛陣御所」の跡地を含む地域に建設されたことがわかっていた。想定地は広範囲に及んでいたが，地下鉄烏丸線の工事時に東西方向の濠が4条確認されたことから，おおよその場所が判明した。この調査結果を受けた想定図によると，当該地は内郭北濠跡に比定される。

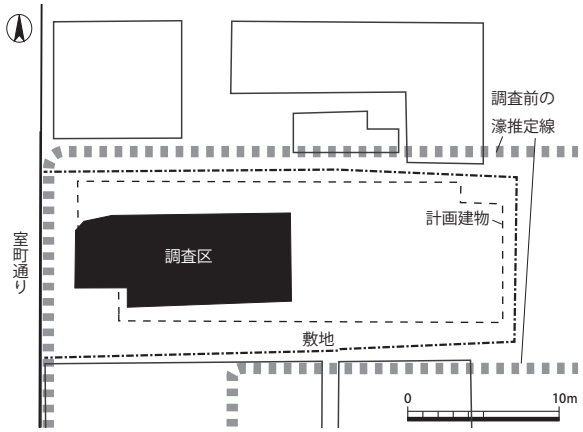


図3　調査区配置図（1：500）



図4　作業風景（北西から）

（2）周辺の調査（図5～7・表1）

地下鉄烏丸線建設の調査で確認された4ヶ所の濠跡には石垣が伴っていた。石垣には，石仏や五輪塔などの石造物が使われており，位置が旧二条城の推定地であったことから，地中に旧二条城跡の痕跡が残っていること，ルイス・フロイスの記述（『日本史』）にあるように石垣には石造物が使用されていることが明らかとなった。烏丸線の調査成果によって「旧二条城跡」は少なくとも内郭と外郭を持ち，内・外二条の濠が巡っていたことが確実となった。またこの4ヶ所は濠位置の復元に際する定点となった。

その後現在までの40年間で行った発掘・詳細分布調査により外濠と内濠の間にもさらに一条堀が巡っていることが分かった。ただし，旧二条城跡の範囲には武衛陣御所もあり，新たに見つかった堀は足利義輝期の堀の可能性もある。これらを含めた調査事例については表1にまとめた。

本件は内濠北辺の西端推定地にあたり，濠が確認出来ればこれまでは“点”であった内濠の情報が“線”になる。また，これまでの復元案[1)]では，濠は室町通の手前（東）で南に曲がると想定されており，それを検証する必要があった。



図5　①地点検出の旧二条城跡濠北石垣（南東から）



図6　同南石垣東端　（北から）

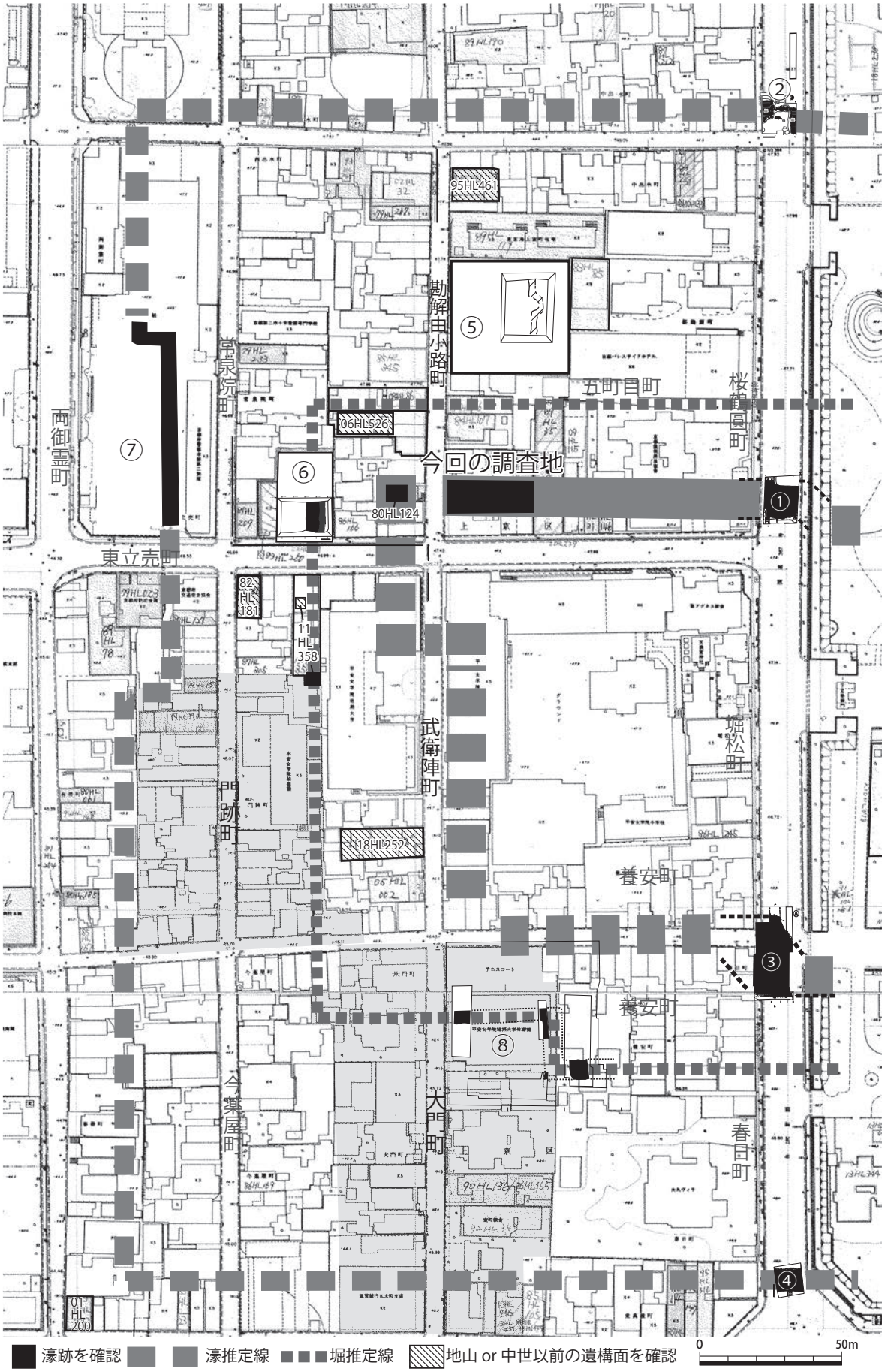


図７　旧二条城跡堀推定線と周辺の調査事例（１：2000）（京都市現況平面図昭和63年を改編）

表１　周辺の調査事例（図７に対応）

番号	調査記号（発掘調査）	掲載書籍
①	烏丸線 X-1	『京都市高速鉄道烏丸線内　遺跡調査年報Ⅰ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会，1979 年。 『京都市高速鉄道烏丸線内　遺跡調査年報Ⅱ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会，1980 年。 『京都市高速鉄道烏丸線内　遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会，1981 年。
②	烏丸線 X-2，№ 44，№ 46，№ 52	
③	烏丸線 X-6，№ 15，№ 24，№ 25，№ 53，№ 54	
④	烏丸線 X-7	
⑤	00H120	平安京左京一条三坊十一町跡 発掘調査終了報告，古代文化調査会，2001 年。
⑥	08H094	『平安京左京一条三坊六町・旧二条城跡』古代文化調査会 2012 年。
⑦	京都市警庁舎敷地遺跡調査報告	宇佐晋一「京都市警庁舎敷地遺跡調査報告」『古代学研究』第２号，古代学研究，1950 年・中居和志「旧二条城跡」『京都府中世城館跡調査報告書－山城編－』第３冊，京都府教育委員会，2014 年。
⑧	80HK-IF，15H277	「16　平安京左京二条三坊九町」『昭和 55 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，2011 年・『平安京左京二条三坊九町跡・旧二条城跡・烏丸丸太町遺跡』－大門町の調査－，古代文化調査会，2016 年。
調査記号	詳細分布調査の内容	報告書名
80HL 124	GL-0.35 ～ -1.7 mまで灰色泥砂層を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和 55 年度』京都市文化観光局，1981 年。
82HL 181	GL-1.3 mにて鎌倉時代の包含層。西側では -1.4 m室町時代の土壙８基検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和 57 年度』京都市文化観光局，1982 年。
95HL 461	№１:GL-1.5 m室町の包含層。№２:GL-1.7 m 15 ～ 16 世紀の包含層。排土より瓦質の脚部	『京都市内遺跡立会調査概報平成８年度』京都市文化市民局，1997 年。
06HL 526	№1:GL-0.71 m，-1.12 m近世以降の包含層。№2:-1.8 mまで褐色砂泥の地山を切って室町の土坑。	『京都市内遺跡立会調査報告平成 19 年度』京都市文化市民局，2008 年。
11HL 358	№1:GL-0.6 m近世以降の土坑，-1.56 mオリーブ黒色砂泥，-1.83 mオリーブ黒色砂泥　№2:GL-1.0 m室町後期の包含層），-1.4 m平安の包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成 24 年度』京都市文化市民局，2013 年。
18HL 252	GL-0.48m で暗褐色シルトの近世包含層，-0.83 mで黄褐色粘土質シルト時期不明整地層，-1.05 mで暗褐色シルト混砂礫，-1.17 mでオリーブ褐色砂礫。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成 30 年度』京都市文化市民局，2019 年。

３．遺　構

（１）基本層序（図８～10）

調査の結果，当該敷地は全て旧二条城の濠跡であった。濠埋土の上位には近世の整地層が積み重なっていた。基本層序は以下のとおりである。

現地表面（以下GL）下0.2ｍで暗褐色砂泥からなる幕末整地層，この層以下GL-1.1ｍまで近世中期以降の整地層が重なっていた。整地層最上面から幕末の火災処理にともなう土坑が掘り込まれており，その下位に少なくとも３層の整地が確認できた。幕末よりも古い火災処理土坑もあり，当該地は何度も火災に見舞われたと推測される。GL-1.1ｍで黄褐色粘質土と泥砂からなる整地層の上面を第１面として遺構検出を行った。時期は近世前期である。GL-1.2～-13ｍで暗灰黄色砂泥や粘質土からなる整地層を検出した。この上面を第２面とした。時期は安土桃山時代から江戸時代の初頭と推測された。

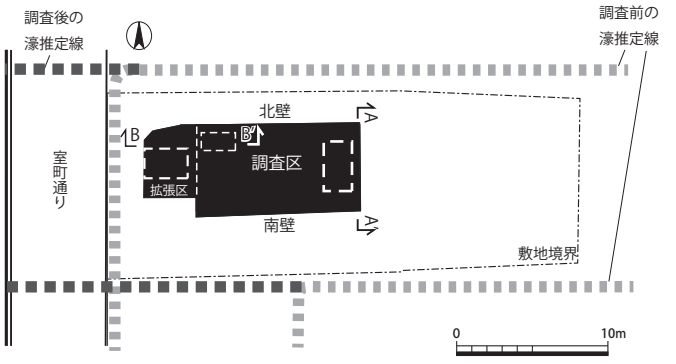


図８　壁面断面の切り位置（１：500）

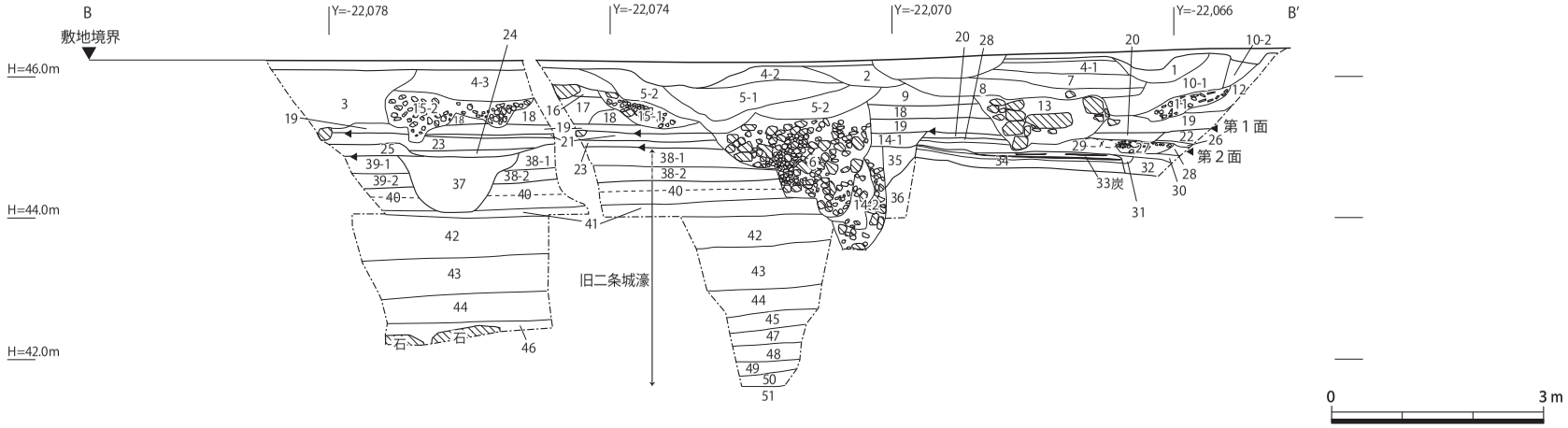


図９　北壁断面図　B-B′（１：100）

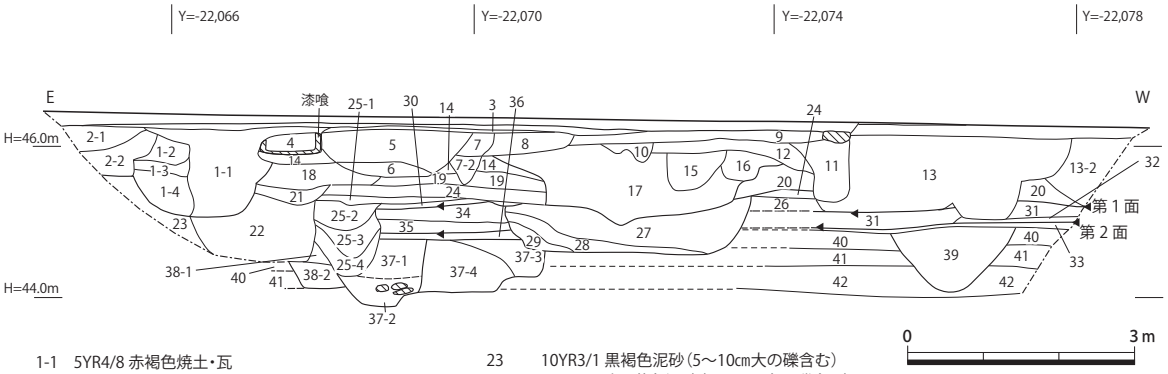
1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂（5 ㎝大の礫含む）
2　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（2 ㎝大の礫含む）
3　5YR4/6 赤褐色砂泥（焼土・炭多量に含む）
4-1　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂（漆喰含む 5 ～ 10 ㎝大の礫含む）
4-2　10YR3/3 暗褐色泥砂（焼土・2 ㎝大の礫含む）
4-3　7.5YR3/2 黒褐色泥砂（炭・焼土含む）
5-1　10YR3/4 暗褐色砂泥（焼土含む）
5-2　10YR4/2 灰黄褐色泥砂（2 ～ 5 ㎝大の礫含む）
6　2.5Y4/2 暗灰黄色礫【SK4】
7　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂（2 ～ 10 ㎝大の礫多量含む，固く締まる）
8　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂（2 ～ 10 ㎝大の礫多量含む，固く締まる）
9　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂＋2 ～ 3 ㎝大の礫（固く締まる）【整地層】
10-1　2.5Y3/2 黒褐色砂泥（10 ㎝大の礫含む）
10-2　2.5Y3/2 黒褐色泥砂（漆喰片含む）
11　2.5Y4/2 暗灰黄色瓦＋砂泥
12　10YR2/3 黒褐色砂泥（焼土含む）
13　2.5Y3/2 黒褐色泥砂【石室】
14-1　10YR4/4 褐色砂泥（炭多量に含む）
14-2　2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（20 ～ 30 ㎝大の礫多量に含む）　【SE12】
15-1　2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（10 ～ 20 ㎝大の礫多量に含む）
15-2　10YR5/1 褐灰色砂礫
16　2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥【整地層】
17　2.5Y4/1 黄灰色砂泥【土坑】
18　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂（粗砂～ 3 ㎝大の礫含む）【固く締まる整地層】
19　2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂
（1 ～ 3 ㎝大礫含む，東側は 5 ～ 10 ㎝大の礫多量に含む）
20　2.5Y4/1 黄灰色泥砂（炭・焼土含む）【SX5】
21　2.5Y5/4 黄褐色粘質土＋泥砂（2 ～ 5 ㎝大の礫含む）【整地層】
22　2.5Y3/2 黒褐色泥砂【整地層】
23　10YR4/2 灰黄褐色泥砂（1 ～ 5 ㎝大の礫含む）【整地層】
24　2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（5 ～ 10 ㎝大の礫含む）
25　2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥＋粘質土（1 ～ 5 ㎝大の礫含む）
26　7.5YR4/6 褐色砂泥（焼土多量に含む）
27　2.5Y5/4 黄褐色粘質土（砂混じる）【SX18】
28　10YR3/2 黒褐色泥砂
29　7.5YR5/8 明褐色粘質土＋粗砂～小礫
30　7.5YR5/8 明褐色粘質土
31　7.5YR5/8 明褐色粘土＋砂礫
32　10YR3/3 暗褐色砂泥
33　2.5Y3/1 黒褐色砂泥＋3 ㎝厚炭層
34　10YR3/2 黒褐色泥砂
35　10YR4/1 褐灰色砂泥
36　10YR3/1 黒褐色泥砂（1 ～ 5 ㎝大の礫含む）　【SD15】
37　10YR3/3 暗褐色泥砂（1 ～ 10 ㎝大の礫含む）【SD17】
38-1　10YR5/2 灰黄褐色砂礫（かなり固く締まる）
38-2　10YR4/1 褐灰色砂礫
39-1　10YR3/3 暗褐色砂泥（5 ～ 10 ㎝大の礫含む）
39-2　10YR3/2 黒褐色砂泥（5 ～ 10 ㎝大の礫含む）
39　10YR4/1 褐灰色砂礫（固く締まる）
40　10YR3/2 黒褐色泥砂（5 ～ 10 ㎝大の礫・地山ブロック含む）
41　10YR3/2 黒褐色泥砂（1 ～ 10 ㎝大の礫多量に含む）
42　10YR3/3 暗褐色砂礫
43　10YR3/2 黒褐色泥砂（5 ～ 10 ㎝大の礫多量に含む）
44　2.5Y4/1 黄灰色砂礫（シルト混じる，鉄分沈着）
45　2.5Y3/1 黒褐色砂泥
（シルト混じる，5 ～ 10 ㎝大の礫含む）
46　7.5GY4/1 暗緑灰色砂泥
47　2.5Y4/4 オリーブ褐色砂礫
48　5BG5/1 青灰色砂礫
49　5Y4/2 灰オリーブ色砂礫（1 ～ 10 ㎝大の礫含む）
50　N4/　灰色シルト
51　5BG4/1 暗青灰色砂礫【地山】
【SD18】

GL-1.4ｍ～-4.6ｍまでは濠埋土，-4.6ｍで暗青灰色砂礫の地山を部分的に確認した。

周辺の調査事例ではT.P.45m～46mの間で地山や中世の包含層が確認される事が多い。今回の調査ではT.P. 46m以下は旧二条城の濠によって攪乱されていたため，室町時代後期以前の地層については不明である。整地層中から須恵器，緑釉陶器，中世前期の土師器皿などが出土しており，旧二条城の造営以前には各時代の遺構面があったものと推測される。

（2）遺構（図11～17・表2）

今回の調査で最も古い時期の遺構は旧二条城跡の濠である。調査地の全てが濠内に該当するため断面観察を主眼とした調査を行い，必要に応じて追加の確認トレンチを入れた。平面調査は濠埋め立て後の面を2面調査した。



1-1　5YR4/8 赤褐色焼土・瓦
1-2　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂（5～10㎝大の礫含む）
1-3　7.5YR3/1 黒褐色砂泥（焼土・炭含む）
1-4　7.5YR4/6 褐色焼土・瓦
2-1　10YR3/2 黒褐色泥砂（炭・焼土・瓦含む）
2-2　10YR5/1 褐灰色砂礫
3　7.5YR4/6 褐色泥砂（焼土含む）
4　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂（5～10㎝大の礫含む）
5　2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
6　2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫
7　2.5Y4/1 黄灰色泥砂（2～5㎝大礫含）
8　10YR3/3 暗褐色泥砂（焼土含む）
9　7.5YR3/1 黒褐色泥砂（焼土含む）
10　7.5YR3/2 黒褐色砂泥（焼土含む）
11　7.5YR3/1 黒褐色泥砂（焼土・炭含む）
12　2.5Y4/1 黄灰色泥砂（5～10㎝大の礫含む）
13　10YR3/2 黒褐色泥砂（5～10㎝大の礫含む）
14　7.5YR3/1 黒褐色砂泥（焼土・炭含む）
15　10YR5/2 灰黄褐色瓦＋泥砂【瓦溜り】
16　10YR3/2 黒褐色砂泥
17　5YR4/6 赤褐色焼土（砂・炭含む）
18　7.5YR3/3 暗褐色泥砂（焼土多量に含む）
19　7.5YR3/1 黒褐色泥砂（焼土多量に含む）
20　7.5YR3/3 暗褐色泥砂（焼土多量に含む）
21　7.5YR4/4 褐色泥砂＋焼土
22　7.5YR4/4 褐色焼土＋瓦
23　10YR3/1 黒褐色泥砂（5～10㎝大の礫含む）
24　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂（5～10㎝大の礫含む）
25-1　2.5Y4/1 黄灰色泥砂（5～10㎝大の礫含む）
25-2　2.5Y5/6 黄褐色粘質土（砂，2～3㎝大の礫含む）
25-3　2.5Y3/2 黒褐色砂礫（炭含む）
25-4　2.5Y4/1 黄灰色泥砂（5～15㎝大の礫多量に含む）　【SK6】
26　2.5Y5/6 黄褐色粘質土（砂，2～3㎝大の礫含む）
27　5YR4/6 赤褐色焼土，砂
28　10YR4/2 灰黄褐色砂礫
29　10YR3/3 暗褐色泥砂（焼土，2～3㎝大の礫含む）
30　10YR4/1 褐灰色泥砂（5～10㎝大礫含む）
31　2.5Y3/2 黒褐色砂礫（炭含む）
32　2.5Y4/1 黄灰色泥砂（5～10㎝大礫含む）
33　2.5Y4/1 黄灰色泥砂（5～10㎝大礫含む）
34　2.5Y5/4 黄褐色粘土＋泥砂（１～5㎝大の礫含む）【整地層】
35　10YR4/2 灰黄褐色泥砂（1～5㎝大の礫多量に含む）【整地層】
36　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂＋2.5Y6/6　明黄褐色　粘質土【整地層】
37-1　10YR3/1 黒褐色砂泥（1～5㎝大の礫多量に含む）
37-2　10YR3/1 黒褐色砂泥（5～20㎝大の石多量に含む）
37-3　10YR3/1 黒褐色砂泥（粘土ブロック含む，5～10㎝大の礫多量に含む）　【SD15】
37-4　10YR3/2 黒褐色泥砂（5～10㎝大の礫含む）
38-1　10YR3/1 黒褐色泥砂（１～15㎝大の礫多量に含む）
38-2　10YR3/1 黒褐色泥砂（１～15㎝大の礫多量に含む）
39　10YR3/2 黒褐色泥砂（１～10㎝大の礫含む）【SD17】
40　10YR5/2 灰黄褐色砂礫（かなり固く締まる）
41　10YR4/1 褐灰色砂礫　【SD18】
42　10YR3/2 黒褐色泥砂（5～10㎝大の礫，地山ブロック含む）

図10　南壁断面図（１：100）

表2　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
室町時代 〉 安土桃山時代	濠，溝，土坑	
江戸時代	礎石建物，井戸，土坑	

室町時代

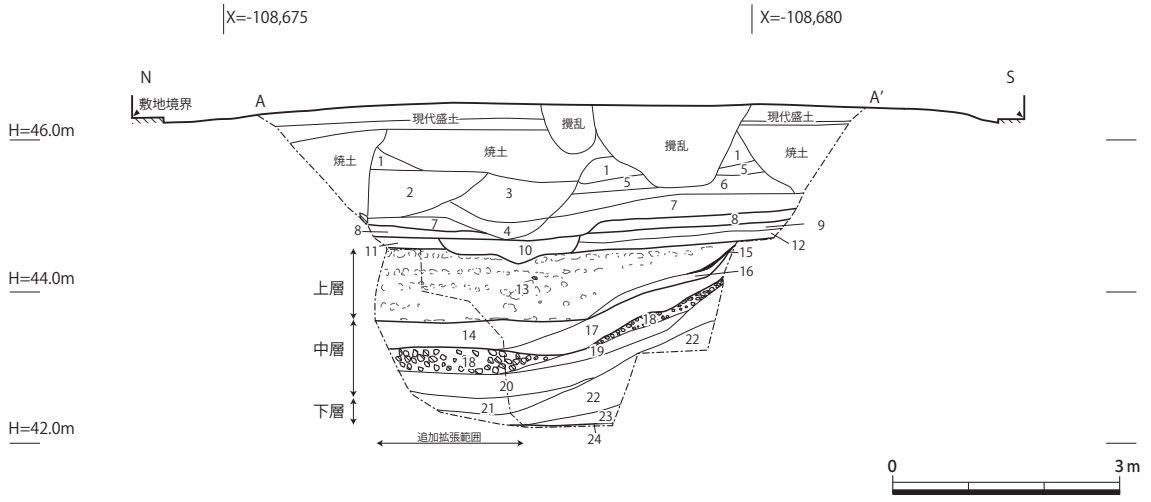
当該敷地は南北幅約12ｍ，東西幅約31ｍの東西に長い土地区画を呈している。烏丸線に伴う調査で検出された内濠北辺の幅は14.3ｍで当該敷地全域がその延長線上に収まる。敷地全体が濠である可能性が高く，まずは直交断面を確認するため調査区の東端にトレンチ（A-A’断面）をいれた。またこれまでの復元図では室町通を突き抜けず東辺に沿って南へ曲がると推測されていたため，これを検証する目的で室町通に近い場所に東西方向のトレンチ（B-B’）をいれた。

SD18（濠）当該敷地の幅を超えているため，幅は確認できなかった。深さはGL-4.6ｍ，当時の面からの深さは3mで狭小な範囲しか確認できなかったが底部は箱掘りである。トレンチ内の全ての壁面が，近似した堆積層および整地層であったことから敷地全体が濠跡であると判断した。埋土は，機能時堆積層（下層），埋土（中層），丁寧な埋め戻し土（上層）の三層に大きく分かれた。また上層の上位で凹みをならした整地層（図11層８・９・11・12）を検出した。

下層は層厚40～60㎝で４層（図11層21～24）に細分した。有機物を含む水成堆積で堆積状況から水堀であったと考えられる。層21は粗砂とシルトの互層，層24はシルトをやや含む砂礫で堆積層の一部である。

中層は層厚約100㎝で３～６層（図11層14～20）に細分した。砂礫を多量に含む黒褐色砂泥及び砂礫からなる埋め立て土である。

上層は黄褐色粘土と黒褐色泥砂の互層で，層厚約10㎝の細かい単位が観察された。丁寧に固く叩きしめられていた。



1　2.5Y5/1 黄灰色砂礫【整地層】
2　2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫
3　5YR4/3 にぶい赤褐色焼土＋泥砂
4　2.5Y4/1 黄灰色泥砂
5　2.5Y5/3 黄褐色粘土＋泥砂【整地層】
6　2.5Y5/1 黄灰色泥砂（2～3㎝大の礫多量に含む）【整地層】
7　2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫【整地層】
8　2.5Y4/1 黄灰色泥砂【整地層】
9　2.5Y3/1 黒褐色砂泥【整地層】
10　5Y5/1 灰色砂礫【土坑】
11　2.5Y5/6 黄褐色粘土＋2.5Y4/1 黄灰色泥砂（固く締まる）【整地層】
12　2.5Y4/1 黄灰色泥砂＋2.5Y5/6 黄褐色粘土（1～5㎝大の礫含む）【整地層】
13　2.5Y5/6 黄褐色粘土＋2.5Y3/1 黒褐色泥砂の互層（固く締まる）【濠埋土】
14　2.5Y4/1 黄灰色砂泥（黄褐色粘土ブロック，礫多量に含む）
15　5Y3/1 オリーブ黒色砂泥
16　2.5Y3/1 黒褐色砂泥
17　2.5Y3/1 黒褐色砂泥（5～10㎝大の礫含む）
18　2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫
19　2.5Y3/2 黒褐色砂泥（5～10㎝大の礫，炭含む）
20　2.5Y3/2 黒褐色泥砂（1～10㎝大の礫含む）
21　2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂とシルトの互層
22　2.5Y3/1 黒褐色砂泥（シルト混じる，5～10㎝大の礫含む）
23　5BG5/1 青灰色砂礫（ややシルト含む）
24　5Y4/2 灰オリーブ色砂礫（1～10㎝大の礫含む，ややシルト含む）
【SD18】

図11　A-A'壁面（SD18）　断面図（１：100）

濠からはほとんど遺物が出土しなかったが，北壁層46（図９）から，土師器皿が３点出土した。細片のため詳細な時期は不明だが10B～10C段階の特徴を持ち，機能時期は旧二条城跡の年代観と矛盾しない。

埋め戻された時期を検討するため，中・上層掘削時に注意深く遺物を集めたが，図化できるような破片はほとんど出土しなかった。細片のため詳細な時期は不明だが，やはり10B～10C段階の特徴を持つ。断定はできないが現段階では濠は室町時代末～安土桃山時代に埋められたと考えられる。

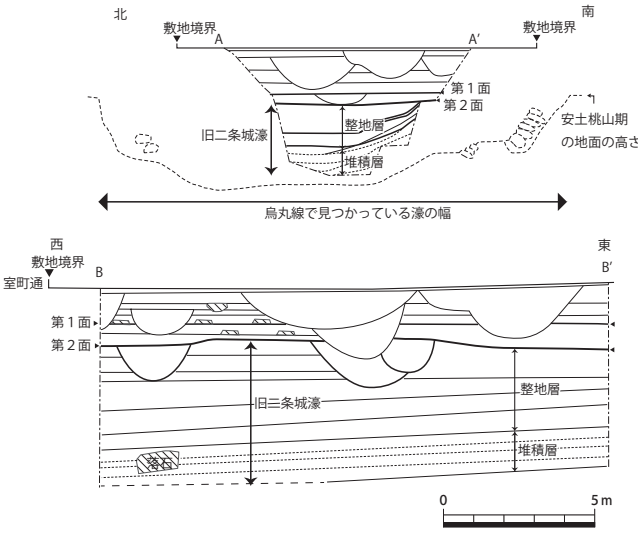


図12　直交・平行断面　模式図（１：250）

濠が曲がるかを検証するため二方向の断面を確認した。直交方向の断面であるA-A’では，濠の堆積層は南が高く北へ下がる斜め堆積になっていた。これに対して濠と平行方向の断面であるB-B’は濠の堆積層および整地土は概ね水平であった。B-B’断面の掘削底で１辺約１mの大きな落石を検出したが，石垣は確認できなかった。室町通より東で曲がる場合には，濠の西壁が検出されるはずだが検出されず，西へ水平に堆積する地層を確認したのみである。濠は南に曲がらず室町通を突き抜けている可能性が高い。

安土桃山時代～江戸時代初頭

濠埋め立て後の上面（第２面）で南北方向の溝（SD15・17），土坑（SK13～15)を検出した。

SD15は少なくとも１度掘り直されている。断面の観察から三本に分けて報告する。

SD15-1　調査区中央部で検出した溝で幅2.5m深さ0.7m，北と南に延びる。南半は東に蛇行す

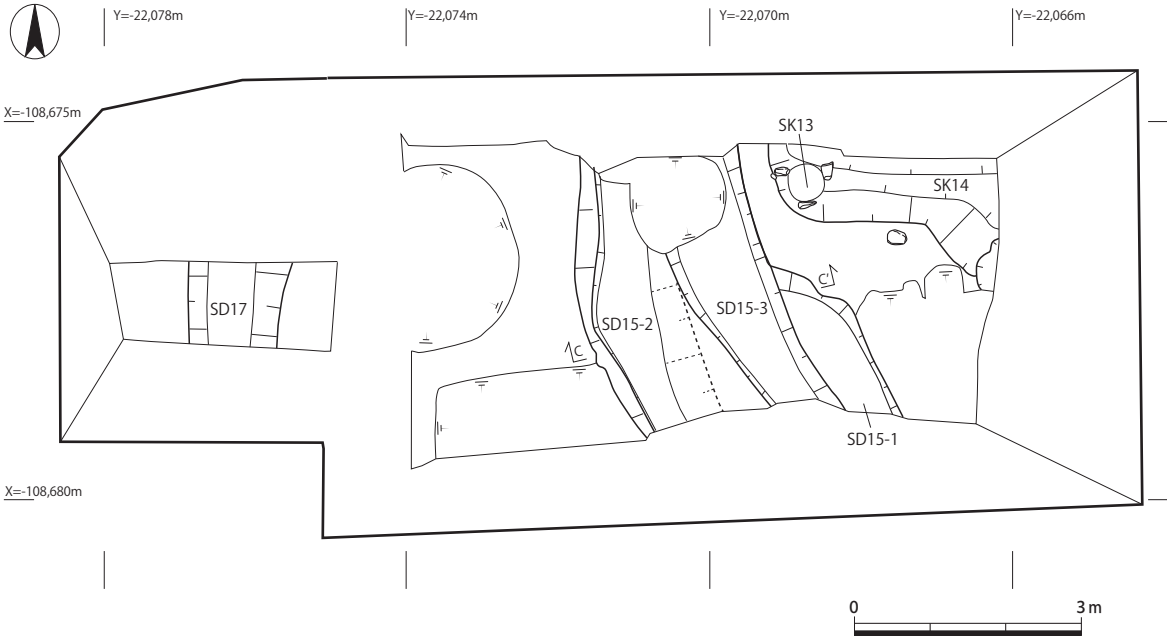


図13　第２面　平面図（１：100）

る。SD15-2・3に切られる。埋土は大きく2層に分かれ，上層（層６）は暗灰色泥砂からなる。礫を含み固く締まる。下層（層７）は黒褐色泥砂からなる。層８は黒褐色泥砂で，溝の掘削時に崩れた土と推測する。

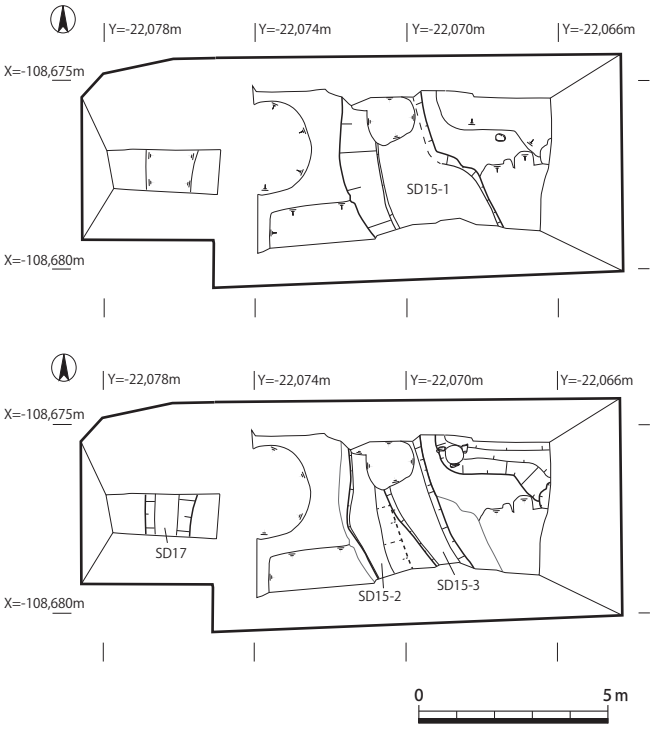


図14　SD15・17　変遷図（１：200）

SD15-2　SD15-1の東側で検出した溝で幅1.4ｍ深さ0.6ｍであった。断面ではSD15-3に切られているが併存していた可能性もある。東肩は平面では検出できていない。埋土（層４）は黒褐色砂泥で礫と粘質土ブロックを含む。層５はSD15に伴う土の可能性もあるが層７を切っていたためSD15-2の一連と解釈した。

SD15-3　SD15-2の西側で検出した溝でSD15の切り合い関係では最も新しい。幅1.1ｍ深さ1.0ｍ，埋土は礫を含む黒褐色砂泥で上下に分かれ（層3-1，3-2）層３-１は固く締まっていた。規模と形状から拡張区で検出したSD17と対になる可能性がある。

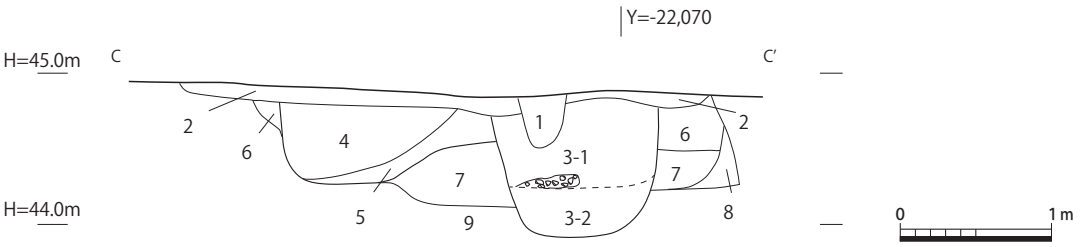
SD15の最上層は一連の凹みを埋めた整地層（層２）で層厚10㎝，暗灰黄色泥砂と明黄褐色粘質土からなり固く締まる。

SD15からは少数だが16世紀後葉～17世紀初頭の遺物が出土した。

SD17　西側の拡張区で検出した南北方向の溝で，幅1.2ｍ深さ0.9ｍで埋土は暗褐色砂泥である。

SK13　調査区の北西部で検出した土坑で南北１ｍ以上，東西１ｍ，深さ0.1ｍの楕円形を呈している。SK14と一連で検出した。掘り下げると長辺約0.2ｍの石が三石配されており，その間から銅銭と土師器皿が出土した。

SK14　調査区の北西端で検出した土坑状の凹みで，東西２ｍ以上南北1.4ｍ以上を測る。深さは



1　10YR3/3 暗褐色砂泥 【ピット】
2　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂＋ 2.5Y6/6 明黄褐色粘質土 【整地層】
3-1　10YR3/1 黒褐色砂泥（1～5㎝大の礫多量に含む，固く締まる）
3-2　10YR3/1 黒褐色砂泥（1～5㎝大の礫多量に含む）　【SD15-3】
4　10YR3/1 黒褐色砂泥（5～10㎝大の礫多量に含む，粘質土含む）
5　10YR4/2 灰黄褐色泥砂（粗砂多量に含む，1～5㎝大の礫含む）　【SD15-2】
6　10YR3/3 暗褐色泥砂（1～5㎝大の礫多量に含む，固く締まる）
7　10YR3/2 黒褐色泥砂（5～10㎝大の礫含む）
8　10YR3/3 暗褐色泥砂（1～5㎝大の礫含む）　【SD15-1】
9　10YR3/4 暗褐色泥砂（5～10㎝大の礫含む）　【SD18】

図15　SD15　断面図（１：50）

0.4ｍで埋土は大きく２層に分かれ下層は黒褐色泥砂と層厚３㎝の炭層，上層は明褐色粘質土と砂礫の整地層であった。

SK13・14からは江戸時代初頭の遺物が出土した。

江戸時代

第２面の直上にある整地層は２層に細分された。上層の整地層（北壁21，南壁31・34）は概ね調査区全体に広がり，これを第１面として江戸時代前期の礎石建物，土坑，江戸時代中期の井戸・土坑を検出した。また下層の整地層（北壁層23，25南壁32・35）上面で部分的ではあるが柱列を検出した。

柱列Ａ　下層の整地層上面で検出した礎石列で，南北２間を確認した。近世中・後期の土坑などで攪乱されているため，東西の柱列は検出できなかったが建物の可能性もある。

建物Ｂ　調査区の西半で検出した礎石建物で東西２間南北２間以上ある。礎石は人頭大で，柱間は東西2.1m，南北1.1ｍである。建物の東辺下は，拳大の礫を多く入れてあり，溝状に南に延びる。それを地業とすれば地覆長押などがあった可能性もある。

SP2　調査区の北西で検出した小穴で，径0.5ｍの不整円形を呈す。拳大の多量の礫で埋まっており，深さは約0.２ｍである。

SP11　調査区の北東で検出した小穴で，径0.5ｍの楕円形を呈す。深さは0.2ｍ，黄褐色砂礫で埋まっていた。

SK6（南壁層25）　調査区の東側では土坑を多数検出した。SK６は調査区の南端で検出した土坑で調査区の外に続いている。また西半を近世後期の焼け瓦を含む土坑に切られている。東西１ｍ以上，南北１ｍ以上，深さ１ｍで埋土は三層に分かれる。最下層は黄灰色泥砂で礫を多量に含む。中層は黒褐色砂礫で炭を含む。上層は黄褐色粘質土でやや固く締まる。江戸時代前期の遺物が出土し

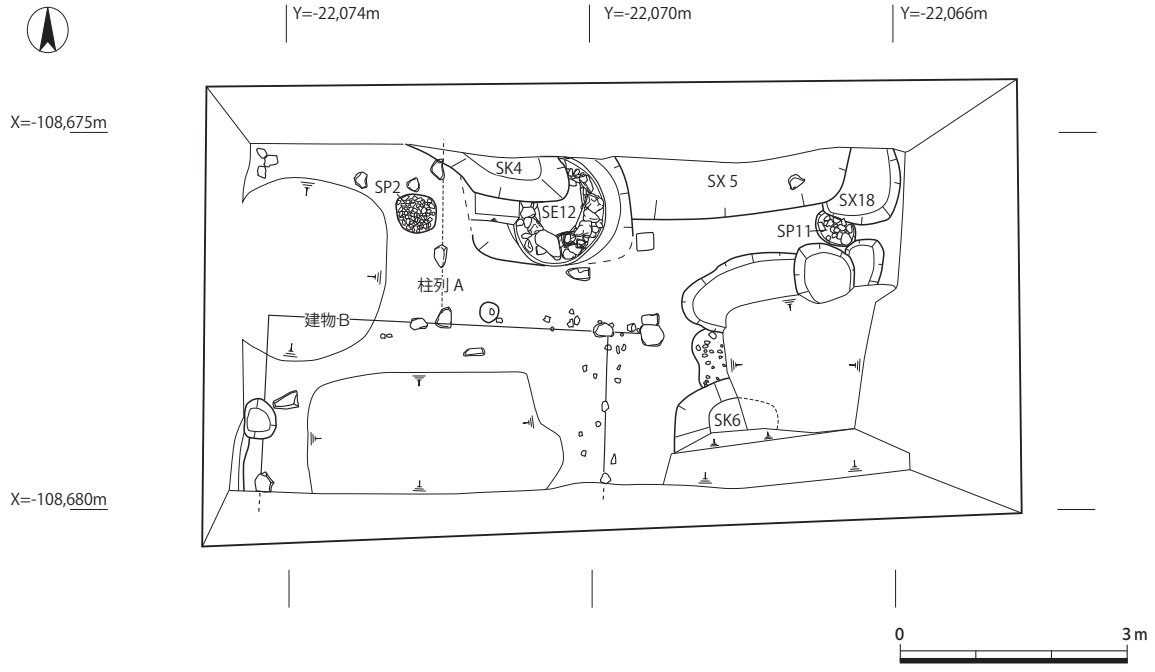


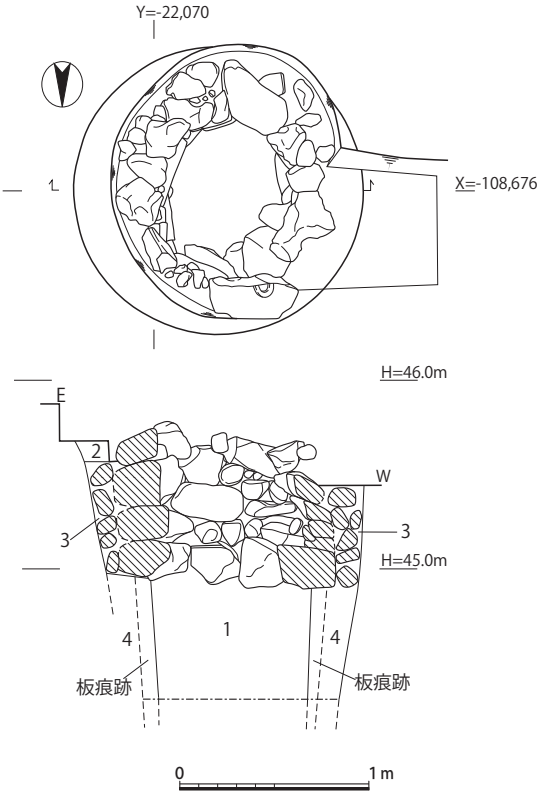
図16　第１面　平面図（１：100）

た。

SX5　調査区の北東端で検出した落ち込みで，西をSE12に切られており，SX18を切っている。東西4ｍ，南北0.8ｍを検出した。北に続いている。深さは0.1ｍで埋土は黄灰色泥砂であった。江戸時代前期の遺物が出土した。

SE12（図17）　調査区の中央北側で検出した井戸である。径約1.4ｍの円形で上部は石組み，下部は木枠であった。木材は残っていないが断面で板痕跡が観察された。深さ1.4ｍ以上で，井戸枠内は炭・焼土を多量に含む黒褐色泥砂で埋まっていた。上段石組みの掘方には拳大の礫が多量に入っていた。木枠部分の掘方は暗褐色泥砂であった。江戸時代中期の遺物が出土した。

SK4　SE12の北で検出した土坑で，掘り込み面は近世後期の整地層である。断面で確認した径は2.2ｍ不正円形を呈すると考えられる。深さは1.5ｍ以上あり多量の拳大の礫で埋まっていた。



1　10YR3/1 黒褐色泥砂（炭・焼土多量に含む）
2　10YR4/2 灰黄褐色砂泥（2～3㎝大の礫多量に含む）
3　10YR3/3 暗褐色泥砂（拳大礫を多量に含む）【裏込め】
4　10YR3/3 暗褐色泥砂（2～5㎝大礫多量に含む）

図17　SE12　平面図・断面図（１：40）

第１面で検出した建物は室町通に近い側に配置されており，通りから見て奥側には多数の土坑が成立していた。このような遺構の分布状況は江戸時代の京都における町屋の典型的な配置と言え，江戸時代前期以降は，旧二条城の跡地ではなく，一般的な街区の一部として利用されたと考えられる。

4．遺　物（図18・19・表3）

遺物は整理箱に５箱出土した。細片が多く図化できたものは少ない。

SD18（濠）

層46　土師器皿１～３が出土した。１は皿N，２・３は皿Sで２は口径10.8㎝，３は11.0㎝であった。底部内面の立ち上がり部にナデ痕が明瞭に残るが，まだ成形痕跡の範疇で所謂圏線では無

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代～安土桃山時代	土師器		土師器11点		
江戸時代	土師器，施釉陶器，焼締陶器，染付，輸入陶磁器，銭，砥石		土師器27点，施釉陶器10点，焼締陶器5点，染付２点，輸入陶磁器３点，銭3点，砥石1点		
合　計		5箱	61点（１箱）	1箱	3箱

い。口縁端部のナデは丁寧である。器壁は薄く皿形を呈す。以上の特徴は10B～10C段階（1530-1590）のもので旧二条城の年代観とも矛盾しない。

整地層　整地層からは小片の遺物しか出土せず図化できたのは４～11であった。いずれも土師器皿で４・５は皿N，6～11は皿Sである。皿Sで口径の分かるものは３点で６は10.9㎝，７は12.0㎝，８は13.2㎝であった。小片のため詳細な時期は不明だが10B～10C段階の特徴を持つ。

SD15　土師器皿12～15，瀬戸美濃焼灰釉椀16・褐釉茶碗17，備前焼擂鉢19，信楽焼擂鉢20，輸入陶磁器白磁皿18が出土した。17の褐釉はよく溶けて透明度が高い。体部外面の下部には縦方向にヘラで削った痕跡がある。土師器皿が小片のため詳細な時期は不明だが，これらの遺物は１６世紀末～17世紀初頭に廃棄されたものと考える。

SK14　土師器皿S21，瀬戸美濃焼灰釉皿22，褐釉丸椀23，褐釉天目椀24，鞘鉢25，輸入陶磁器染付碗26，李朝白磁皿27が出土した。23の高台外面は十字の刻みが付く。27は内外面に重ね焼きの目痕が残る。

SK13　土師器皿28～30と銭31～33が出土した。17世紀前葉のものと考える。銭は劣化が著しく，表面は摩滅していた。31は「洪武通宝」で後の２枚は判読不能であった。

SK5　土師器皿34～46，土師器ミニチュア鉢47・48，黄瀬戸皿49が出土した。34は皿N，35

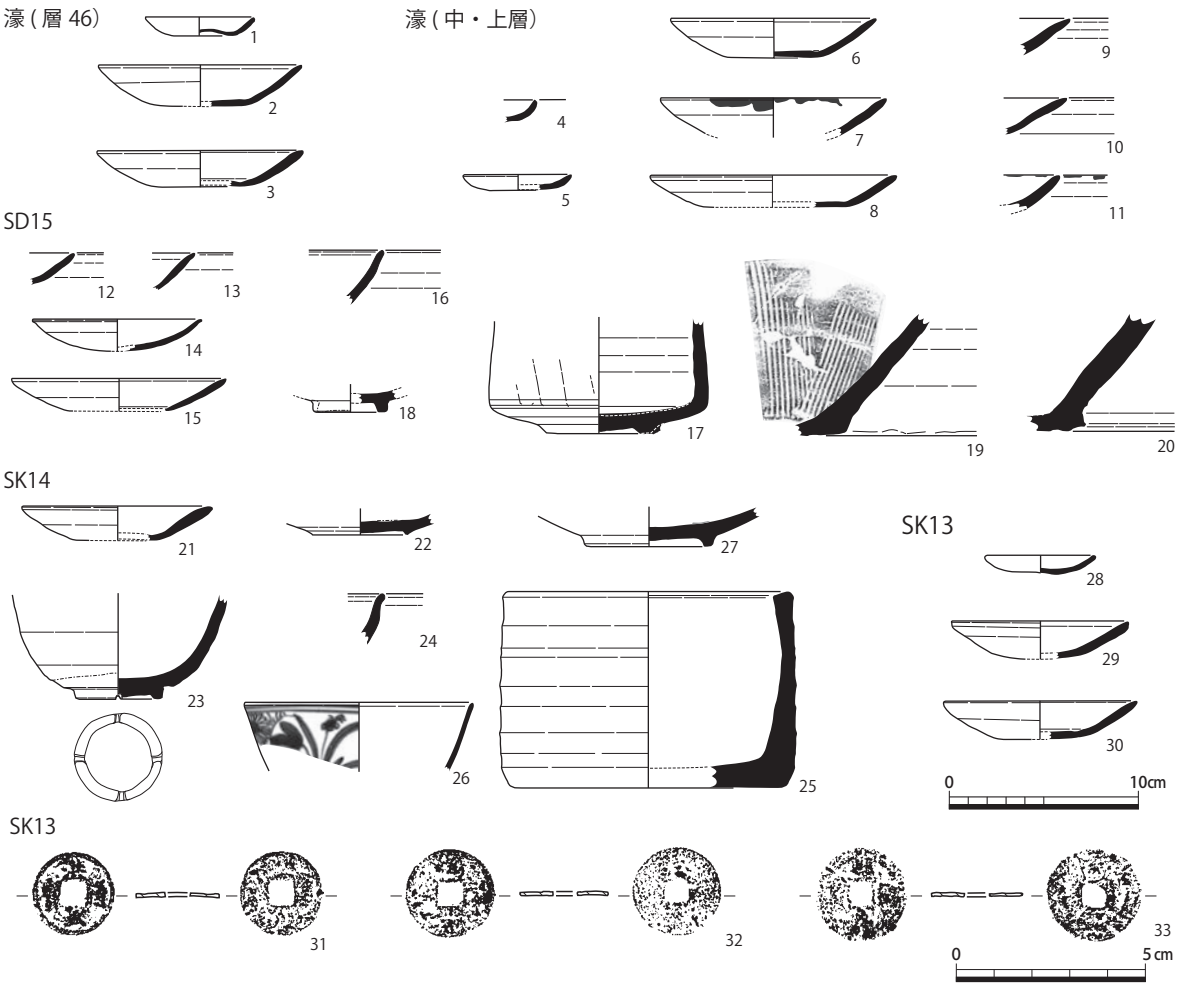


図18　出土遺物実測図１（土器１：4，金属１：2）

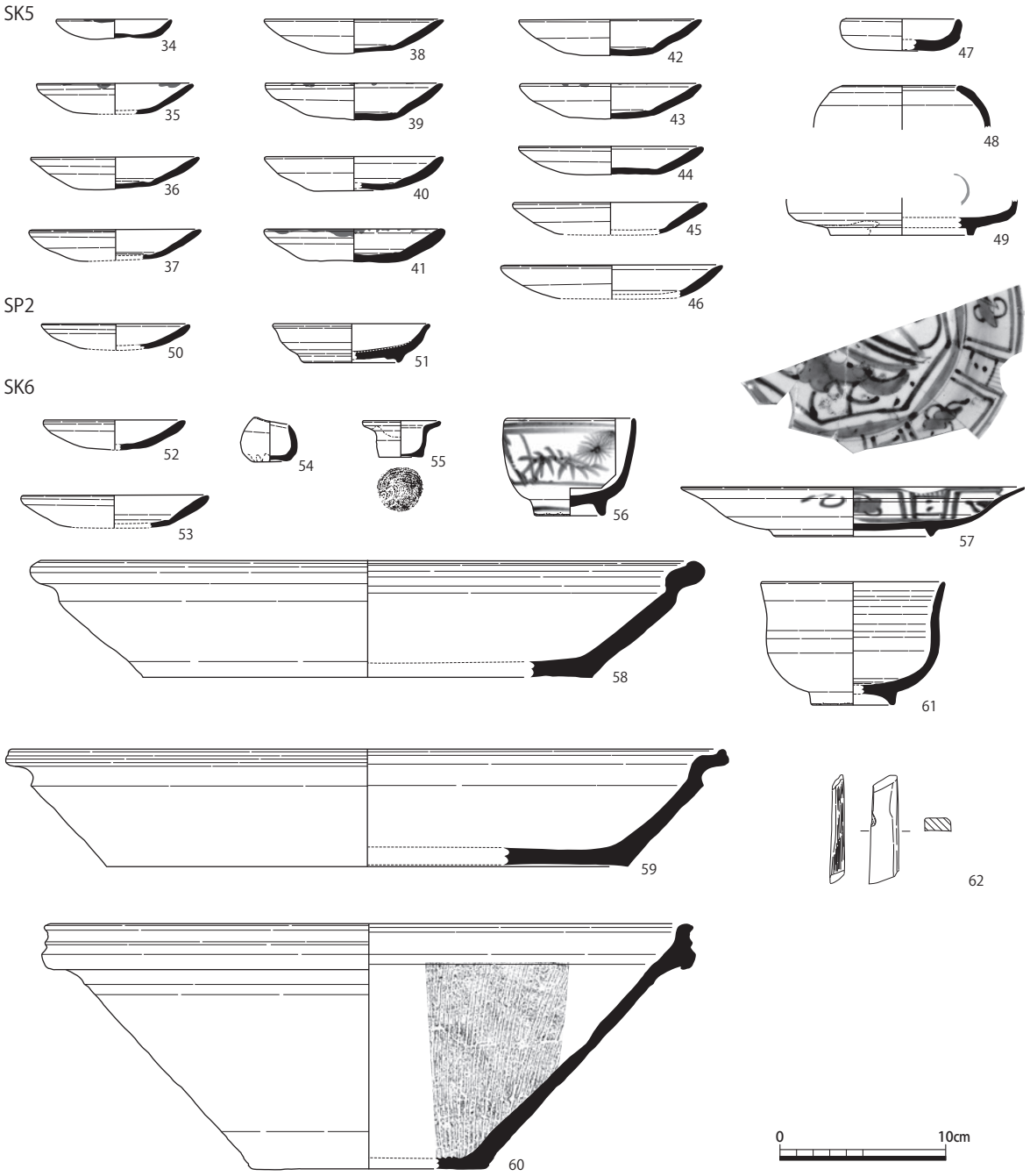


図19　出土遺物実測図２（１：４）

は皿Sb，36～46は皿Sである。

SP2　土師器皿S50，瀬戸美濃焼灰釉皿51が出土した。

SK6　土師器皿Sb52・皿S53・ミニチュア小壺（つぼつぼ）54，瀬戸美濃焼蓋55，肥前磁器染付椀56・皿57，信楽焼鉢58・59・擂鉢60，李朝白磁椀61，砥石62が出土した。55は褐釉がかかる。土師器皿の年代観は11B段階でこれらは　江戸時代前期の遺物だと考えられる。

5．小　結

今回の調査成果は以下の６点である。

・旧二条城北内濠はこれまでの推定線上に延びていることが証明された。濠幅は当該敷地（南北

幅11.8ｍ）よりも広いことは確実で，地下鉄烏丸線に伴う調査で検出した約14ｍと同規模と推測される。

・水堀である[2)]。

・濠は室町通りを突き抜けている。

・濠が埋められた時期は室町時代末～安土桃山時代である。（ただし遺物は少数で不確定。）

・埋められた後に，新たに幅１ｍ以上ある南北方向の溝が掘られた。

・現在につながるような町屋としての土地利用が始まったのは江戸時代の前期である。

このうち第２面で検出した南北方向の溝（SD15）と同規模でよく似た特徴の溝（堀150）が，平成12年に調査地の北側で行われた発掘調査（00H120）でも見つかっており，桃山時代の堀と評価されている[3)]。SD15と堀150は東西方向のズレがあるが特徴を考えれば繋がる可能性もある。一連と仮定すれば60ｍ以上の延長距離があり，深さも１ｍ以上あるため堀と表現する方が妥当だろう。少なくとも江戸時代前期には，SD15を覆う整地層と礎石建物が成立していることから，SD15・17は安土桃山時代から江戸時代初頭で防御用の堀が必要な時期に機能していた可能性が高い。

これらの状況証拠および少数の出土遺物から推測するならば，旧二条城跡の濠は16世紀後半のある時期，積極的に見れば信長期にある程度埋められたと考えても矛盾は無い。

ところで，旧二条城北内濠はこれまでの推定のように室町通りの西側で曲がらず，室町通りを突き抜けていることがわかった。新たに推定線を描くとすれば内郭が全体的に東に広がる復元図と北辺が西に出隅になる復元図が想定される。これについては，烏丸線で見つかった北辺の濠に伴う南石垣の東端が屈曲している（図６）ことから入隅状になっていたと考えられること，当該地より約100ｍ南の室町通り西側で行われた立会調査で地山を確認していること，元興寺文化財研究所の坂本俊氏を代表とする城郭石垣診断法の開発研究チーム[4)]が旧二条城跡範囲で行った表面波探査で出隅や折れを推定していることから出隅の復元案を採る。表面波探査の成果および成果に基づく内郭復元案については代表して京都府教育庁文化財保護課の古川氏にご寄稿を賜った。

旧二条城跡の濠はこれまで点的に確認されていたが，40年を経て今回初めて情報が線になった。京都の街中に造られた平城で，石垣を持ち，幅14m・深さ３ｍの堂々たる箱堀の水堀で，出隅を持つという城のあり方が明らかになったことは城郭史上重要な成果と言えるだろう。

末尾ではあるが当該調査にあたっては，古代文化調査会の家崎孝治氏・小松武彦氏・水谷明子氏に多数御教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

（赤松 佳奈）

註

１）『天下人の城』附第34 回京都市指定・登録文化財　京都市文化財ブックス第31 集，京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課，2017年。

２）地下鉄烏丸線開発時の調査でも水堀と推定されていた。

３）『平安京左京一条三坊十一町跡発掘調査終了報告書』古代文化調査会，2001年。

４）古川　匠・釜井俊孝・坂本　俊・中塚　良「中近世城郭研究における表面波探査法の活用―京都府聚楽第跡を対象に―」『日本考古学』第45号，2018年。

6．附　節　旧二条城跡内堀の表面波探査

京都府教育庁文化財保護課　古川　匠

本報告で記述されているとおり，令和２年（2020）に実施された調査で，以前の地下鉄烏丸線建設工事に伴う発掘調査で検出された旧二条城跡北内堀の西の延長が確認された。これまで旧二条城跡の堀は個別の調査地点でしか確認されていなかったが，地下鉄烏丸線に係る発掘調査から40年以上を経て，ようやく「点」が「線」として結べることとなった。これまでの地道な努力の積み重ねの賜物である。

ただし，旧二条城跡の堀に関して発掘調査で得られた情報は未だ断片的である。旧二条城は高名な城郭であるため，実態を解明することは中近世城郭研究に大いに寄与することとなるが，開発行為に伴う発掘調査だけでは，研究の進展はしばらくは望めない。

筆者を含む研究チーム（代表：坂本　俊（元興寺文化財研究所））は，京都大学防災研究所の平成30・令和元年度一般共同研究事業（課題番号30G-08 「城郭石垣診断法の開発―物理探査にもとづく石垣の変形・崩落要因の構造解析―」）で旧二条城跡の表面波探査を実施し，縄張りの復元研究を行った。復元にあたり，京都市文化財保護課の協力を得て既往の発掘調査データを活用した。

本稿では，旧二条城跡の探査の主担当であった筆者が，本報告と関連する内堀部分の表面波探査結果を公開し，内郭の復元案も提示する。

（１）表面波探査法について

表面波探査法は，地震波―実体波と表面波―のうち表面波の特性を利用する手法である。表面波の速度は波の周期によって異なり（波の分散性），「波長＝周期×波の速度」となる。端的に表すと短周期の表面波は浅い部分を，長周期の表面波は深い部分を通過するため，観測された表面波の周期と速度の関係を知れば，その関係を満たす波の速度構造，すなわち波が通過した地点の地盤の硬軟の構造を推定することが可能である。この性質を用いて表層付近の地盤の構造を推定する表面波探査法は，地盤の硬軟の構造に大きな差異のある濠の位置を推定するためにも有効で，織豊城郭の「聚楽第」の探査などで成果が上がっている[1)]。

（２）探査の手法

令和２年（2020）１月から２月にかけて，旧二条城の範囲にあたる公道上と京都御苑内で表面波探査を実施した。表面波は，重さ約10kgの木製ハンマーで人力起震し，１m間隔で一列に配置した24個の振動センサー（ジオフォン）で観測した。測定は，アンプやA/D等の測定系回路を同一筐体に一体化した24チャンネルの地震探査装置（応用地質(株)製McSEIS-SW）で行った。

発掘調査成果が蓄積されている烏丸通以西については，長い測線を効率よく探査するため，センサーを一帯として運搬する装置（ランドストリーマー）を自作し，センサーアレイを２m移動させ

る毎に起震した。

そして，発掘調査成果がほとんど存在しない京都御苑内については，データの精度を高めるため，起震を１m間隔で実施した。また，砂利舗装または未舗装の場所が対象となるため，センサーの設置についてはランドストリーマーを用いず，センサーを地表に直に置くか，ピンで地面に固定する手法を採用した。この手法は移動の手間がかかるが，ランドストリーマーよりは探査精度が高くなる利点がある。

測定データは，応用地質(株)が提供する波形処理ソフトウェアSeisImagerによって解析した。まず，波形セットのジオメトリーを決定し，２m間隔に設定した共通中間点（CMP点）毎に分散曲線を求めた[2)]。次に，これらの分散曲線毎にS波構造を求め，それらを応用地質社の図化ソフトウェアGeoplotを使用して２次元速度構造図を作成した。

表面波探査は，人家や民間の敷地内では実施できないため，既往の発掘調査成果とボーリング調査成果を照合することで，復元案の精度を高めた。各調査地点の位置は図20のとおりである

（３）内堀の探査（図21）

内堀と関連する表面波探査測線は，室2，室3，下２，下３，椹3，御6，御７である。発掘調査は地下鉄烏丸線建設工事に伴うE4，E5，さらに本報告のE7などで，堀跡が５箇所確認されており，他の堀より情報が多い。

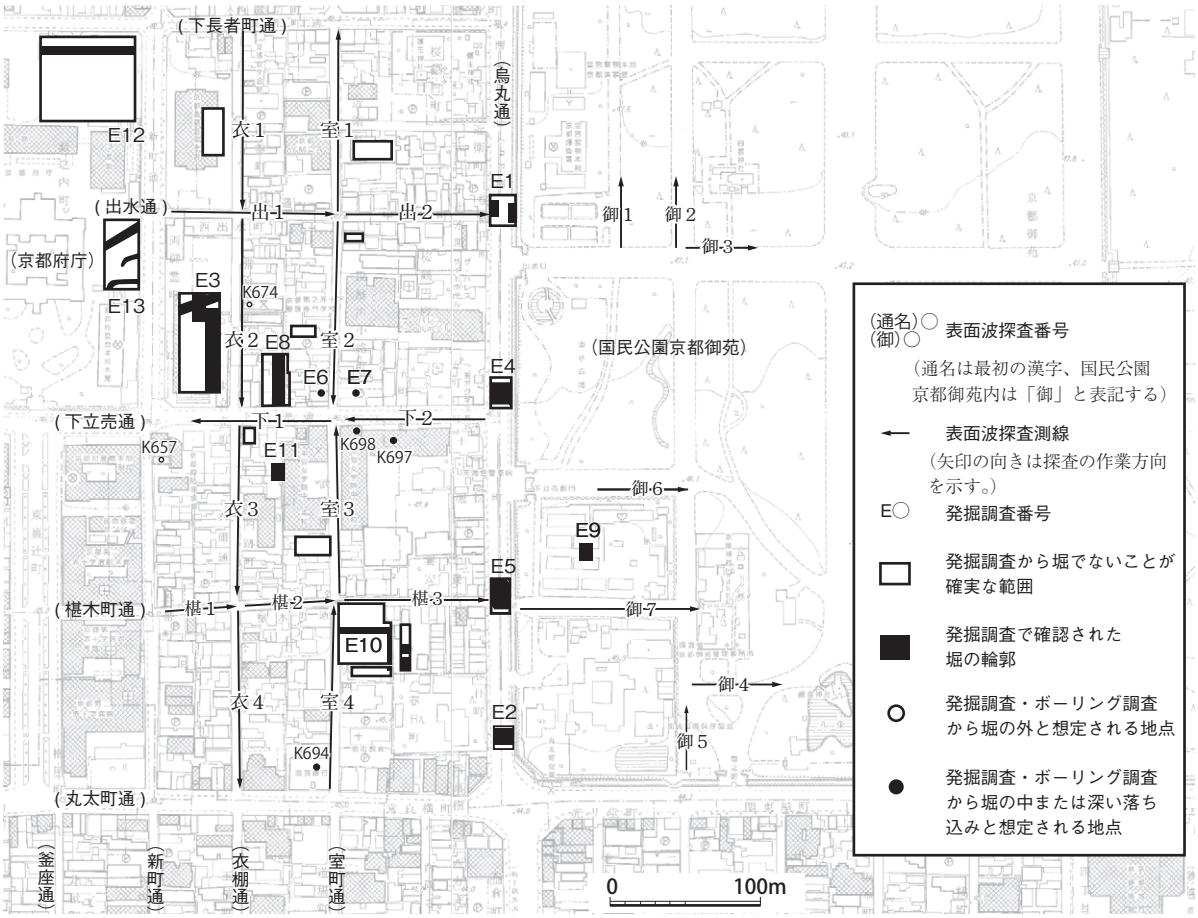


図20　表面波探査実施地点　過去の発掘・ボーリング調査地点（京都市都市計画地図「御所・聚楽廻」）

下２では，室町通交差点から西に0-20ｍの地点（図21①）で，西内堀と考えられる柔らかい堆積が検出された。

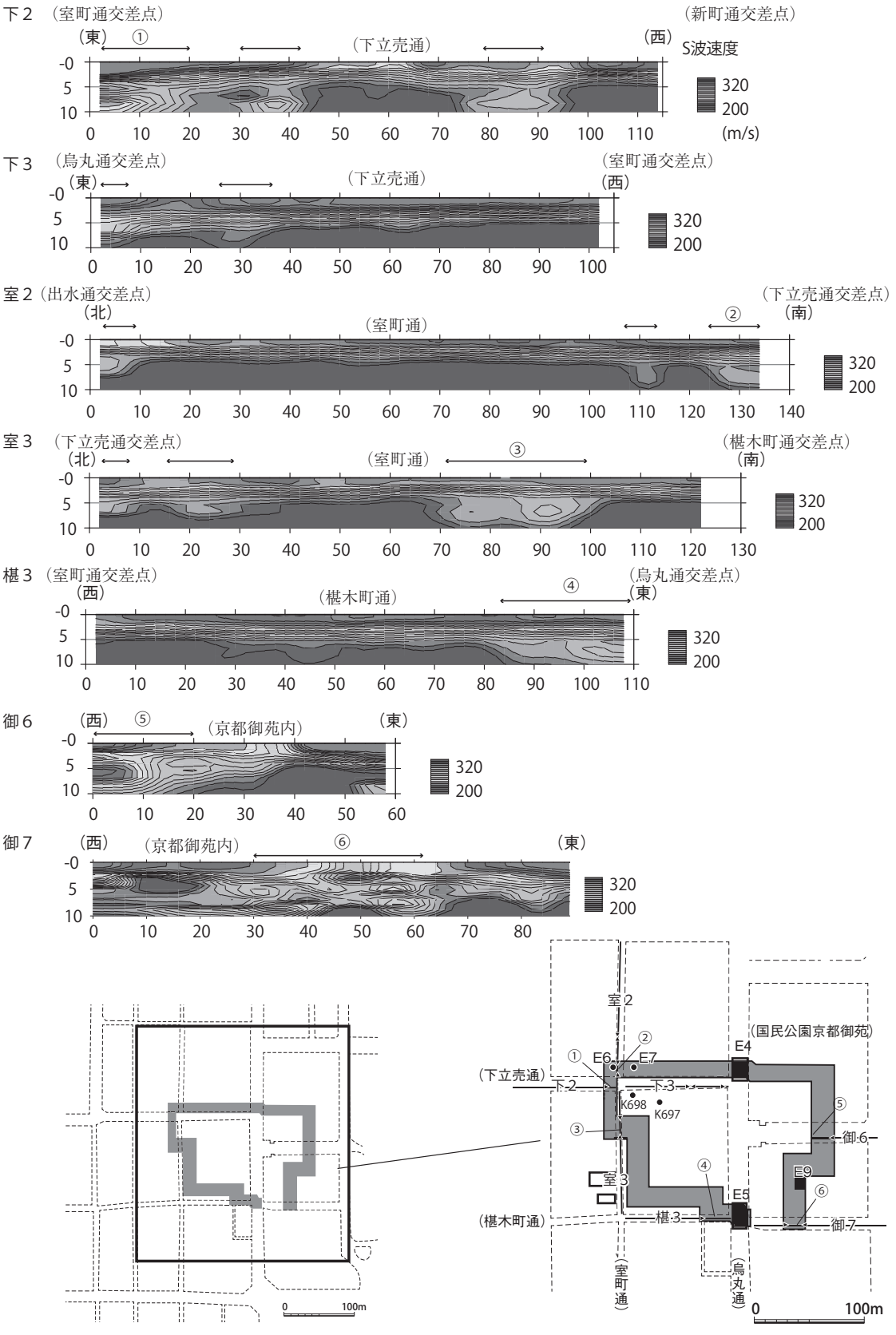


図21　旧二条城跡内堀の表面波探査と推定復元

室２では，出水通交差点から南に約130m，下立売通交差点付近の地点（第21図②）で北内堀と考えられる柔らかい堆積が検出された。

下３では烏丸通交差点から東に0-10ｍ，30ｍ地点付近で柔らかい堆積を検出した。堀が検出された他の調査地点から延長するとは考えにくい位置であるが，すぐ南のボーリング調査K697，K698地点の堆積とつながる可能性はある。その場合，拡張前の義昭期の旧二条城内堀か，義輝期の武衛陣堀である可能性がある。

室３では，下立売通交差点から南に70-100ｍの地点（第21図③）で，西内堀と考えられる柔らかい堆積が検出された。

椹３では，室町通交差点から東に80－100ｍ地点（第21図④）の烏丸通付近で柔らかい堆積が検出された。南内堀と考えられる。

御６では，0-20ｍ地点（第21図⑤）で柔らかい堆積を検出した。東内堀と考えられる。

御７では，全般にノイズが多いものの，30-60ｍ地点（第21図⑥）で柔らかい堆積を検出した。このデータ単体では判断が付きづらいが，御７から約30ｍ北のE9地点の発掘調査で時期不明の堀が検出されていることから，合わせて東内堀と判断した。

筆者らが表面波探査を実施した後，本報告のとおり，内堀北西角付近と想定される下立売通室町交差点北側のE7の発掘調査では，幅11.8ｍ以上，地表からの深度が約４ｍに達する大規模な遺構が検出された。東西方向の遺構であることが確認され，室町通りをはさんだE6の発掘調査結果も参照すると，北内堀は室町通をまたいで西に延びることが確実となった。さらに，筆者らの表面波探査の成果を加えると，下２測線のとおり，室町通を越えてすぐ西で南に屈曲して西内堀となり，室３測線のとおり，70ｍ南で東に屈曲することが推定された。南内堀，東内堀の探査成果も加えて内堀の形状を推定復元したのが，第21図下段である。

本丸北西隅は，出隅となる。旧二条城の天主は坤（南西）の三重櫓とされるが，本丸の北西にも櫓が存在したのかもしれない。もしくは，外枡形虎口であろう。これまで，旧二条城の形態は，織豊城郭と将軍御所の融合と考えられており，内側は室町時代以来の長方形プランの武家屋敷に準じるものと推定されてきたが，今回の遺構検出により，本丸も織豊城郭に則った，実戦的な形状であった可能性が高まった。あるいは，当初は長方形プランであったが，その後の改造によってこのような形状に変化したのかもしれない。

本稿では内堀に関する成果だけを公表したが，外堀及び中堀についても表面波探査を実施し，新たな知見が得られている。その内容は改めて別途公表する予定である。

註

１）　古川　匠・釜井俊孝・坂本　俊・中塚　良「中近世城郭研究における表面波探査法の活用―京都府聚楽第跡を対象に―」『日本考古学』第45号，2018年。

２）　K. Hayashi and H. Suzuki 'CMP cross-correlation analysis of multi-channel surface-wave data' "Exploration Geophysics" 35，2004。

7．総　括　旧二条城跡の都市史及び城郭史上の特徴

今回の発掘調査と表面波探査の両方で，旧二条城跡の内郭北堀が室町小路を横断することが判明した。このことは京都の都市史上大きな意味をもつ。また，40年以上前の地下鉄烏丸線敷設工事に伴う発掘調査の成果が点から線になった意味は大きい。ここでは，主に都市史上の観点と，城郭史上の観点から旧二条城跡の特徴を見ていきたい。

（1）都市史上の特徴（図21）

室町小路（室町通）を横断する意味

室町小路は，道路幅4丈（約12ｍ）の平安京開設以来の道路で，洛中を構成した二つの都市「上京」と「下京」を結ぶ幹線道路として機能していた。室町幕府の呼称は，永和4年（1378）に足利義満が東を烏丸小路北，西を室町小路北，北を持明院大路，南を北小路に限られる地に新第を造営したことに始まる[1)]。室町殿は，この新第の正門が室町小路北に面して開かれていることにちなんだ呼称である。室町殿は足利義持，義教，義政などの歴代将軍の御所としても用いられていた[2)]。

上京における立売室町（立売通と室町小路北【室町通】の交差点）は上京で最も繁栄した場所であり，下京の四条室町（四条大路と室町小路の交差点）もまた道路沿いに酒屋・土倉・油屋などの富商が軒を連ねていた洛中の中心部であった。室町小路は両京の中心地を結ぶ道路でもあった。「町田本」や「上杉本」の洛中洛外図屏風には，上京や下京を囲繞する土塀や堀，出入口に木戸門・釘貫等の関連防御施設が描かれており，構内部への出入りは規制されていた[3)]。つまり，上京，下京とも出入りを規制する防御施設が室町小路に通ずる出入口に存在しており，旧二条城跡の内郭北堀が室町小路を遮断することと何が異なるのであろうか。大きな違いは，上京・下京の防御施設は，都市機能を果たすために日常的に都市民が「出入り可能」であったのに対し，旧二条城の内郭は恒常的に閉鎖空間であり，上京と下京を往来する際には，旧二条城の内郭を避けるために室町小路と異なる道を通行しなければならなかった。

（2）城郭史上の特徴（図21）

出隅・入隅，三重櫓

京都市内の城館跡では，16世紀代の室町殿の北東角（鬼門）が入隅になっていたことが発掘調査成果から判明している[4)]。また，天文元年（1532）に焼き討ちされた山科本願寺は「御本寺」「内寺内」「外寺内」の三つの郭で構成され，出隅・入隅を多用した複雑な折れをもつ堀と土塁で囲繞された城郭機能を有しており[5)]，内寺内に現存する土塁の北東隅部分は入隅を確認できる。

これまでの調査成果と表面波探査から，旧二条城もまた複雑な出隅・入隅を有する城郭であることがわかった。『言継卿記』永禄12年4月2日条の「南巽（南東）之だしの磊，東之だし」や，同永禄13年7月22日条には「坤角（南西角）三重櫓」などの記述があり，角にあたる部分に「櫓」や「だし」（郭の外側に張り出した部分もしくは，主要な郭の外部に築かれた出郭）を有していた[6)]

ことがわかっており，今回の調査成果は「だし」を遺構として確認したことになる。

石垣を有する堀

今回発掘された堀は，烏丸線で検出された内郭北堀の延長部分であり，敷地内で堀の端部を確認できなかったことから，烏丸線の成果通り幅約14ｍの石垣を有する堀であったと推定できる。この堀幅は，『延喜式』の京程に規定された小路側溝の幅「三尺(約0.9ｍ)」を大きく超え，同じく京程の道路幅４丈（約12ｍ）をも上回るものである。この堀の特徴を烏丸線の調査成果[7]から見ていくことにする（図12)。この堀は，最深部は素掘りであり，堀の南北両肩部分に石垣はない。その最深部の両肩口に幅１ｍ前後の犬走があり，犬走の端部に高さ約0.5ｍで石材を３～４段積んだ石垣がある。この石垣の底部には不同沈下を抑えるための胴木が据えられている。さらに，この石垣の上端にも幅１ｍ前後の犬走があり，残存高1.5ｍ程度，６段程度に積まれた石垣がある。この石垣にも不同沈下を防ぐための胴木が据えられている。石垣の石材は，自然石に石塔や石仏などの転用石を加えたものであり，長径が0.3～0.5ｍ程度，裏込めが少なく，掘方の幅も石面から0.6ｍ程度と薄いことから高石垣を築く技術には至っていないことがわかる。石垣を伴う堀を有する旧二条城は，京内の城館として画期的であるとともに，石垣技術の初期段階を示す重要な成果である。

旧二条城は条坊に規制されるのか

旧二条城跡は，条坊制に基づいて造られた平安京の北東部分に築かれている（図１)。かつての平安京内に築かれた城館や構えは数多くあるが，それらの多くは条坊制に基づく大路・小路に規制されていたことが，これまでの発掘調査成果から明らかとなっている[8]。室町殿や武衛陣もまた，条坊に規制されていた。室町殿は京外に位置するが，京内から発する烏丸小路北（烏丸小路の延長道路）を東端に，同じく室町小路北（室町小路の延長道路）を西端にする居館であり，平安京以来の条坊道路の延長によって規制されていた。足利義輝の御所である武衛陣は，当初は北を勘解由小路（現：下立売通)，東を烏丸小路，南を中御門大路（現：椹木町通)，西を室町小路に囲まれた平安京の条坊に規制された居館であった。これが拡張されたのちも北は近衛大路（現：出水通)，東は東洞院大路に規制されており，条坊地割を逸脱することはなかった[9]。

一方で，条坊地割に規制されない堀（濠）は少数ではあるが，検出されている。旧二条城跡の外郭の西側では，町尻小路（現：新町通）を斜めに横断する16世紀前半の堀が３条検出されている[10]。同じく町尻小路を斜めに横断する堀が平安京左京三条三坊二町と七町で検出されている[11]。また，五条坊門小路（現：仏光寺通）を斜めに横断する堀も平安京左京五条四坊二町で検出されている[12]。

旧二条城跡の場合，内郭北限は勘解由小路，内郭南限は中御門大路，内郭西限は出隅の部分を除き，大半が室町小路に囲まれた範囲内であるが，東限については，発掘調査成果で確認された四本の堀はいずれも烏丸小路を横断している。外郭では北を近衛大路，東を東洞院大路に規制されているが，南の春日小路（現：丸太町通）と西の町尻小路に並行する堀は存在するものの，両小路から離れた場所に築かれており，平安京の条坊に厳密に従っているわけではない[13]。

外郭東側が東洞院大路に規制されることについては，平安京造営以来，この大路の中央部分に「東洞院川」[14] と呼ばれる南北水路が造られていたことと関係している。平安京左京四条三坊十五町で検出された東洞院川は，室町時代後半に幅3.0ｍ以上（復元幅5.8ｍ），深さ1.8ｍ以上と堀化しており[15]，旧二条城の築城以前に堀として機能していたものを活用したのであろう。

（3）まとめ

旧二条城跡は，都市史上そして城郭史上も極めて重要な意味をもつ。都市史の上では，日本最大の巨大都市であった「上京」と「下京」という二つの都市を結ぶ最重要幹線道路である室町小路を遮断していたことや，足利義輝の居館を踏襲したとはいえ，「室町殿」や「三条御所」と異なり，上京と下京の両京から離れた場所に立地していたことがあげられる（図１）。城郭史上では出隅・入隅を複雑に組み合わせた城館として始めて京内に築かれたことがある。内堀，外堀に加え，中堀の存在，なにより石垣を有する幅10ｍを超える大規模な堀が築かれた点も重要である。さらに，内郭，外郭とも平安京の条坊に大枠で規制されながらも，烏丸小路を分断し，春日小路や町尻小路の側溝を堀として活用せずに新たに堀を築いている点なども従来の京内に築かれた城郭と異なり画期的である。

（馬瀬 智光）

註

1） この新邸は，創建当初「北小路亭」とも呼ばれ，崇光上皇の院御所が火災後放置されていたものに，隣接する前右大将今出川公直と菊亭の跡地を付け足した敷地に造営されている（『後愚昧記』永和4年３月10日条）。

2） 足利義教は室町殿に御會所を新造し（『満濟准后日記』永享元年11月13日条），足利義政も室町殿に會所を新造している（『康冨記』宝徳元年3月16日条）。

3） 室町小路は中世の上京と下京を結ぶ主要幹線道路であり，上京と下京の総構えには防御施設等が存在していた（高橋康夫『京都中世都市史研究』同朋舎，1983年）。

4） 鋤柄俊夫・松田　度・渡辺悦子・松本裕世他『学生会館・寒梅館地点発掘調査報告書―室町殿と近世西立売町の調査―』同志社大学歴史資料館，2005年。

5） 福島克彦「城郭研究からみた山科寺内町」『戦国の寺・城・まち―山科本願寺と寺内町―』山科本願寺・寺内町研究会編，法蔵館，1998年。柏田有香「山科本願寺の造営と堂舎配置～最新の調査成果より～」『京都府下の重要遺跡の再検討３』京都府埋蔵文化財研究会，2014年。草野顕之「創建時山科本願寺の堂舎と土塁について」『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館，2002年。

6） 馬瀬智光「『言継卿記』・『信長公記』から見た京都の城」『金沢大学考古学紀要』第36号，金沢大学人文学類考古学研究室，2015年。

7） 「覆工板下の調査Ｘ－１」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ　1976年度』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会，1980年。

8） 洛中の堀を集成，分析した結果，平安京左京九条三坊十二町にあった「城興寺城」，同左京五条三坊五町にあった「御影堂新善光寺」など多くの例で平安京の条坊に堀（濠）が規制されていることがわ

かる（馬瀬智光「室町から戦国時代京都の様相―洛中の堀を中心に―」『京都府中世城館跡調査報告書第４冊―山城編２－』京都府教育委員会，2015年）。

9）「義輝二条城の規模」の復元案を参考にした（黒嶋　敏『天下人と二人の将軍　信長と足利義輝・義昭』平凡社，2020年（45～49頁））。

10）「平安京跡（左京一条三坊三町）現地説明会資料」（京埋セ現地説明会資料1-6）（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター，2020年2月15日。

11）上村憲章『平安京左京三条三坊二町・烏丸御池遺跡―東三条殿―』古代文化調査会，2009年，家﨑孝治『妙覚寺城跡―平安京左京三条三坊七町・烏丸御池遺跡―』古代文化調査会，2013年。

12）長戸満男・山本雅和・近藤知子・鈴木廣司「平安京左京五条四坊」『平成４年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1995年。

13）馬瀬智光・新田和央『天下人の城』（『京都市文化財ブックス』第31集）京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課，2017年。

14）東洞院川については，「東洞院川　東洞院大路ニアリ。一條ヨリ大炊御門ニ至リ。西流シテ烏丸ニ至リ。南流シテ冷泉ニ至リ又西折シテ室町ニ至リ。又南流シテ四條ニ至リ。西注シテ西洞院川ニ号ス。中世烏丸川。室町川ト稱スルモノト共ニ水源ヲ賀茂川ニ發ス。」とされる。（『京都坊目誌（一）』（『新修京都叢書』第17巻）臨川書店，1967年（24頁））。

15）小松武彦『平安京左京四条三坊十五町・烏丸御池遺跡―御射山町の調査―』古代文化調査会，2015年。

Ⅱ　西寺跡（38次）・
平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡

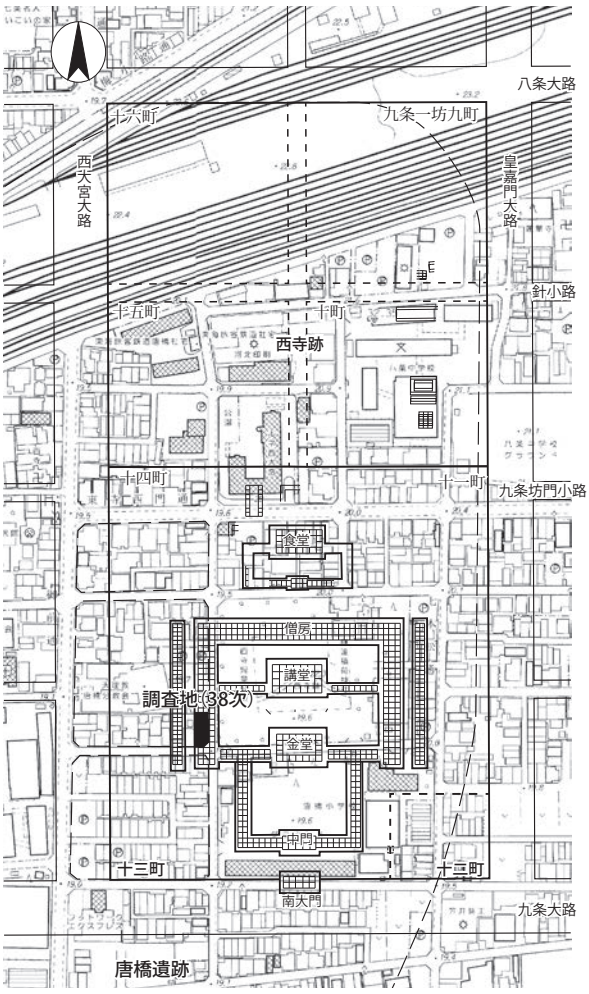


図1　調査位置図（1：5,000）

1．調査経過

（1）調査に至る経緯

調査地は京都市南区唐橋西寺町17にあたり，周知の埋蔵文化財包蔵地である，西寺跡（平安京右京九条一坊十三町跡）及び唐橋遺跡に該当する。ここに個人住宅建設が計画され，令和２年４月３日に文化財保護法第93条第１項に基づく届出が行われた。これに対し文化財保護課は，計画敷地が西寺西僧房の推定地にあたることから，遺構の遺存状況を把握する必要があると判断し，国庫補助による発掘調査を指導した。

（2）調査の経緯

調査区は計画建物に合わせて敷地の南側に東西約７m，南北約14mを設定した。調査は令和２年６月１日から開始し，重機を用いた現代盛土等の除去後，人力による遺構検出を実施した。その結果，調査区のほぼ全域で西僧房に伴う整地土を確認した。その後，一部拡張を行い，整地土の展開状況を把握するに至った。６月22日までに埋め戻し，６月26日に調査を終えた。調査面積は約75㎡である。

2．遺　跡

（1）歴史的環境

西寺は延暦13年（794）に平安京遷都に伴って，平安京右京九条一坊九町から十六町に建立された官寺である。おおよそ南半４町に伽藍の中心堂塔が配され，北半４町には寺院経営を支える家政機関が置かれたとされている[1)]。創建に関する史料は乏しく造営経過は明確ではないが，延暦16年

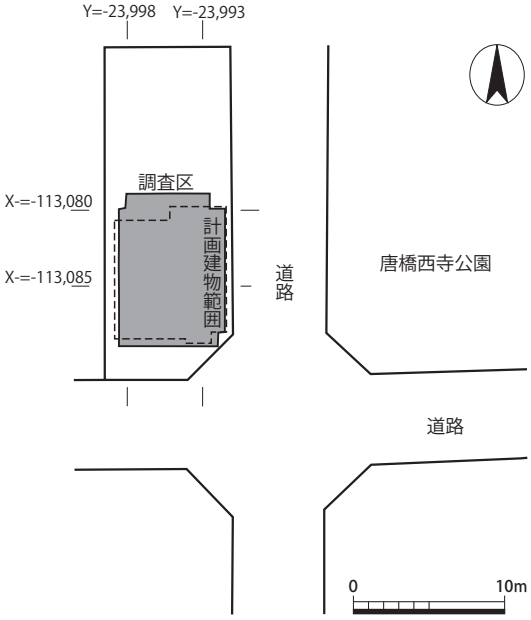


図２　調査区配置図（１：500）

（797）に藤原緒嗣が「造西寺長官」，笠人朝臣江人が「造西寺次官」に任命されていることから，平安京遷都から間もなくして造寺に着手したことが分かる[2)]。弘仁３年（812）に，屏風一帖・障子四十六枚が施入され，東大寺の官家功徳の封二千戸が東西二寺へ移譲されている[3)]。翌年（813）には，諸大寺に準じる布施を得て西寺と東寺で「坐夏」を行うことが定められており[4)]，法要の実施を確認できることから，この頃には寺院の中心である金堂は完成していた可能性が高い。講堂は造営開始からやや遅れた天長９年（832）に供養され[5)]，この頃に寺観が整ったと推測できる。また，天長元年（824）に大僧都勤操が北院で死去したとの記録があり[6)]，主要堂塔以外の施設も完成していたようである。貞観６年（864）に僧綱所が薬師寺から西寺へと移管され，西寺において僧尼名籍と寺院資財の管理などが行われる[7)]。塔の造営は最も遅れていたようで，元慶６年（882）に「塔料及び三宝布施料として稲6,000束，穀250石を充てる」とあり，この頃までには造営が開始したと考えられている[8)]。寺院整備が徐々に進む中にあって，正暦元年（990）に主要堂塔が焼失する[9)]。詳細な被害状況は不明であるが，金堂・講堂・僧房などは廻廊によって繋がっていることから，主要堂舎の多くが焼失したと推測できる。このことは，西寺で執り


図３　調査前全景（南東から）


図４　作業風景（北から）


図５　埋戻し状況（南から）


図６　埋戻し終了状況（南から）

行われていた国忌が伽藍の再建までの間，東寺へ移されていることからも伺える。その後，再び西寺において国忌が執り行われていることから，ある程度の再建がなされたと推測されている[10]。しかし，仁平元年（1151）には，「西寺荒廃」を理由に僧綱の儀式が東寺で行われるようになり[11]，建久年間（1190～1199）に文覚によって西寺の塔が修理されるものの，天福元年（1233）に焼失，以後再建されることがなかった[12]。

（2）伽藍地と付属地（図７）

西寺は九条大路に面して南大門を開き，中軸線上に中門・金堂・講堂・僧房・食堂が建ち並び，伽藍地の南西隅に塔が配された。僧房は講堂の北・東・西の三面に配す「三面僧房」で東西僧房の外側には小子房が置かれる。金堂及び講堂は軒廊によって僧房と繋がり，金堂軒廊が廻廊によって中門と接続することで中門・金堂・講堂・僧房が一体となる。また，食堂の前面に八脚門が置かれ，廻廊が巡ることによって院を形成する。伽藍地の南東隅には築地によって囲われた空間があり，御霊堂の推定地となっているが実態は明らかではない。主要堂塔が配された「伽藍地」と家政機関が置かれた「付属地」との境には，東寺と同様に東西方向の塀が巡る（中仕切り築地塀）。「付属地」には，桁行15間以上，梁間３間の北庇付き掘立柱建物や桁行５間，梁間２間の四面庇の掘建柱建物等が確認されており，法隆寺や興福寺，大安寺などの資材帳に記録されている建物規模に類似することから，「花園院」・「大衆院」・「倉垣院」・「政所院」に比定されている。

（3）既住の調査（図７・表１）

これまでに実施された西寺跡発掘調査の主だった成果については表１にまとめた。本節では僧房に関わる調査事例について確認する。

僧房跡は唐橋西寺公園内で初めて実施された発掘調査によって確認された（１次調査）。１次調査では桁行５間以上，梁間３間の礎石建物を確認し，調査位置が講堂東側に位置することから東僧房跡に比定している。その後，唐橋小学校内で行われた3-6次調査で，東僧房の東側石組雨落溝・南側石組雨落溝などを検出し，東僧房基壇南端と東端が確定した。東僧房の西側柱列から２次調査で明らかにされた推定伽藍中軸線までの距離が55.7ｍを計り，これを伽藍中軸線から折り返した位置が西僧房東柱列にあたると想定し，3-7次調査では唐橋西寺公園の東側道路部分の調査を実施した。調査では想定位置で南北方向に並ぶ数基の礎石抜取穴を検出し，礎石抜取穴の間隔が東僧房南北柱間と等しいことから西僧房の東側柱列と推定している。これらの調査によって，僧房の東西規模が３間で柱間寸法が東より3.4ｍ（11尺），4.2ｍ（14尺），3.4ｍ（11尺）と中央間が広い構造であったことが明らかになるとともに，僧房が対称的に東西二面に配されたことが明確となった。一方，北僧房の確認を目的とした3-8次・9次調査では，東西方向に３箇所の礎石抜取穴を検出し，北僧房の梁間寸法が約3.72ｍ（12.27尺）であることが明らかになった。北僧房の柱間規模が東西僧房と異なるが各僧房の規模がほぼ確定すると共に，三面僧房であったことが明確になった。その後，（財）京都市埋蔵文化財研究所が実施した10次調査で東僧房の礎石据付穴と基壇西縁

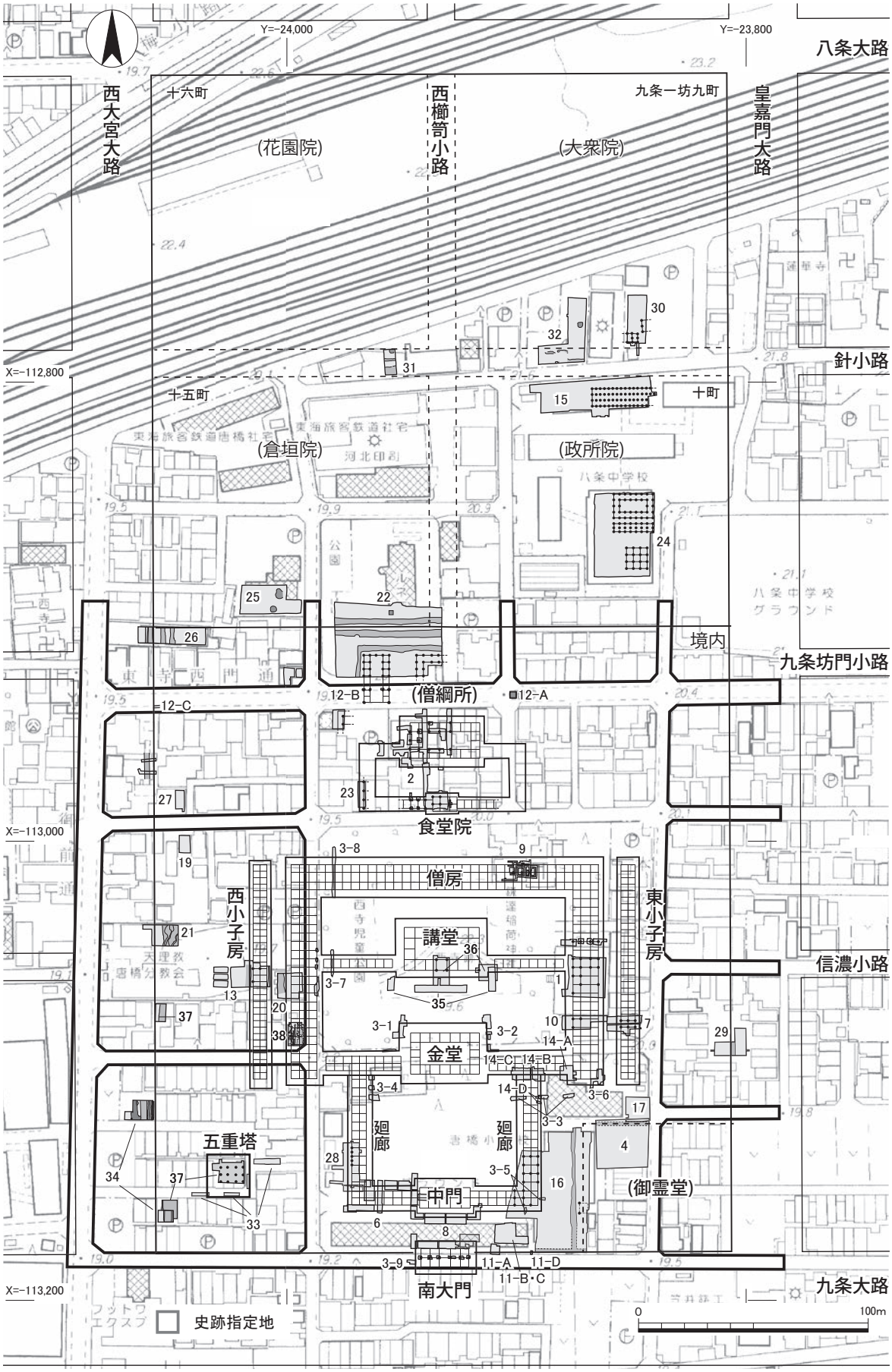


図７　周辺調査位置図及び伽藍復元図（１：2,500）

表１　西寺跡発掘調査一覧表

調査次数	推定地	調査地	調査期間	調査機関（担当者）	主要遺構	文献
1	東僧坊	西寺町（唐橋西寺公園プール）	1959/6/18～26	京都府・奈文研（杉山信三）	基壇土と15箇所で礎石・礎石抜取痕跡を確認。	1・2・3
2	食堂院	南区西寺町	1962/2/19～3/12	京都府・奈文研（杉山）	食堂院を確認。 食堂：基壇・基壇土上面の15箇所で礎石または抜取穴を確認。 廻廊：15箇所で礎石または礎石抜取穴を確認。 南門：５箇所で礎石抜取穴を確認。	1・2・3・5
3-1	金堂・東西軒廊	西寺町（下水工事等）	1962/2/9～12月	京都府・奈文研（杉山）	金堂と東軒廊の入隅の延石を確認。工事中に西軒廊基壇北縁を確認。	1・2・4
3-2	金堂	唐橋西寺公園	同上	同上	金堂西北隅の地覆石と延石を確認（７枚分）。北東隅で雨落溝を確認。	1
3-3	東廻廊	唐橋小学校（北校舎と南校舎）	同上	同上	基壇東縁凝灰岩（南北方向）。西縁据付痕跡を確認。	同上
3-4	西廻廊	唐橋小学校北西隅	同上	同上	西廻廊基壇東縁地覆石を確認。	同上
3-5	東廻廊・南廻廊	唐橋小学校講堂	同上	同上	東廻廊：基壇東側凝灰岩を確認。 南廻廊：凝灰岩を確認。	同上
3-6	東僧房	唐橋小学校（給食調理室）	同上	同上	基壇土・東縁雨落溝・南縁雨落溝底・礎石抜取穴を確認。	同上
3-7	西僧房	唐橋西寺公園西側	同上	同上	東より第１列の礎石抜取穴（５～６箇所）を確認。	同上
3-8	北僧房	唐橋西寺公園	同上	同上	４箇所で礫を固めた場所を確認。（北から２列目の礎石の据付け位置と推測）	同上
3-9	南大門	唐橋小学校南側道路	同上	同上	南大門の中央柱通りの礎石据付穴を確認。	同上
4	国忌堂（御霊堂）	唐橋西寺町65（唐橋小学校プール）	1970/7/14～8/8	市教委・平博(伊藤玄三)	築地基底部（幅約３mで東西方向に展開する小砂礫敷き）と築地北側に緩い凹凸のある大溝を確認。	1
5	大炊殿	唐橋西寺町40	1972/11/2～12/5	市文化財・鳥羽研（杉山・浪貝毅・峰巍）	礎石・根石を確認（１箇所）。	1・6
6	中門・西廻廊・南廻廊	唐橋西寺町65（唐橋小学校グラウンド）	1973/7/25～8/20	市教委・鳥羽研（杉山）	南廻廊：北縁雨落溝・基壇南北縁凝灰岩を確認（西廻廊と南廻廊の入隅部分）。 西回廊：西廻廊を横断する暗渠。中門：中門基壇南北縁凝灰岩片を確認。	1
7	東小子房	唐橋西寺町64（ガレージ）	1973/9/20～10/10	市文化財（浪貝・玉村登志夫）	東小子房の柱掘形を５箇所で確認。このうち４箇所は根石が残る。東側で南北溝を確認。	1・7
8	中門・南廻廊・南大門	唐橋西寺町65（唐橋小学校グラウンド南端）	1974/5/3～6/15	市教育・鳥羽研（杉山）	中門：基壇南東隅延石と階段部分を確認。中門・南廻廊：中門南東隅と南廻廊の入隅部の延石を確認。 南廻廊：基壇地業を確認。	1
9	北僧房	唐橋西寺町57-1（鎌達稲荷神社社務所）	1974/6/25～7月	市文化財（梶川敏夫）	北僧房の東西に並ぶ礎石抜取穴を確認。	1・8
10	東僧房	唐橋西寺町65（公園チビッコプール）	1977/5/16～6/4	埋文研（長宗繁一・吉川義彦）	東僧房の礎石据付穴３基，西側雨落溝（幅0.5 m，深さ0.2 m），基壇東辺を確認。	9a・10a
11-A・D	南面築地	唐橋西寺町65（唐橋小学校南校舎）	1977/8/1～23	埋文研（本弥八郎）	南面築地（九条大路北側築地）・内溝（幅1.6 m，深さ約0.3 m）を確認。	10b
11-B・C					柱穴群を確認。	
12-A	食堂北東部	唐橋西寺町86	1977/9/1～10/31	埋文研（鈴木廣司・長宗）	食堂北東部で井戸（方形木組，一辺3.5 m）を確認。	9b・10c
12-B	大炊殿				礎石据付穴を６箇所で確認。東西約2.7 m，南北約5.4 m。	
12-C	西面築地				東西方向の凝灰岩の石列（北側2.9 m，南側3.3 m，南北間隔約0.4 m）を確認。	
13	西小子房	唐橋西寺町27（天理教唐橋分教会）	1977/11/7～30	埋文研（鈴木廣）	西小子房基壇土（幅8.5 m，残存高0.3 m），礎石据付け穴５基（方形で一辺1.3 m，深さ0.2 m），西側雨落溝（幅0.8～1 m，深さ約0.2 m）を確認。	10d

調査次数	推定地	調査地	調査期間	調査機関（担当者）	西寺関連主要遺構	文献
14- A	東僧坊	唐橋西寺町65（唐橋小学校グラウンド）	1978/8/24～31	埋文研（百瀬正恒）	東僧房の礎石据付穴２基（径 1.2 m，深さ約 0.1 m，根石を持つ），西側雨落溝（幅 1.8 m，深さ 0.3 m）を確認。	11・12b
14- C	金堂東軒廊				金堂東軒廊南縁延石（凝灰岩，幅 0.35 m，厚さ 0.1 m）と掘方（幅 1.4 m，深さ 0.2 m）・礎石を確認。	
14- D	東廻廊				東廻廊東縁延石を確認。	
15	付属地	唐橋門脇町35（八条中学校）	1978/11/21～79/3/6	埋文研（平方幸雄）	桁行 15 間以上，梁間３間の総柱掘立建物（東西棟）を確認。身舎の柱穴は一辺１mの方形，庇（北側）は長形 0.4 ～ 0.5 mの円形に近い隅丸方形。建物北側で東西溝を確認。	12a
16	東廻廊・南廻廊・国忌堂	唐橋西寺町65（唐橋小学校体育館・給食室）	1979/1/27～3/31	埋文研（堀内明博）	**東・南廻廊**：基壇土，礎石据付穴（一辺約１mの隅丸方形，深さ約 0.3 m），基壇外装（延石：幅 0.3 m，長さ 0.5 ～ 1 m。地覆石（幅 0.3 m，厚さ 0.16 ～ 0.2 m，長さ 0.6 ～ 1 m）を確認。 **（国忌堂）**：南北方向の築地基底部を確認。築地の西側で南北溝。門跡（凝灰岩方形礎石・小礎石の据付穴２基）を確認。	12C
17	伽藍地南東部	唐橋西寺町65（唐橋小学校）	1979/6/1～21	埋文研（磯部勝・辻純一）	炭・土師器を多量に含む土坑，瓦溜りを確認。	13
18	伽藍地北西部	唐橋門脇町２（個人住宅）	1980/5/16～5/25	埋文研（鈴木廣）	創建期の整地層と平安時代後期の整地層。井戸（南北約 2.75 m，東西 2.5 m以上の方形掘形）を確認。	14a・15b
19	伽藍地北西部	唐橋西寺町33-3（個人住宅）	1980/6/23～7/5	埋文研（堀内）	西小子房北西部。西寺関連の整地層を確認。	14b・15b
20	西僧坊	唐橋西寺町30（天理教会ガレージ）	1980/8/1～13	埋文研（長宗）	基壇土，柱穴２基，ピットを確認。	14C・15C
21	西面築地	唐橋西寺町30（天理教会）	1981/2/3～20	埋文研（平尾政幸）	西寺西面築地（西大宮大路東築地）基壇，築地内溝を確認。	14d・15d
22	中仕切築地塀・大炊殿	唐橋門脇町29他（共同住宅）	1986/6/2～10/6	埋文研（磯部・鈴木久男・堀内）	**礎石建物**：桁行７間，梁間２間の東西庇付礎石建物（南北棟）。桁行７間，梁間２間の四面庇付礎石建物（東西棟）。**溝**：礎石建物を取り囲む溝（幅 1.5 ～ 2.3 m，深さ 0.2 m）。 **中仕切築地塀**：築地南北側溝（幅 2.3 ～ 2.6 m，深さ 0.15 ～ 0.3 m）を確認。幅約 2.6 mの東西方向の築地跡。	17a
23	食堂院	唐橋西寺町55-2（個人住宅）	1986/11/5～19	埋文研（堀内）	食堂院西廻廊基壇，西側柱列礎石抜取穴４基（径 1.4 m前後，深さ 0.4 m）。基壇西側に南北溝（幅 2.2 m以上，深さ約 0.3 m）。廻廊基壇土の下層でピットと土坑を確認。	16・17b
24	付属地	唐橋門脇町35（八条中学体育館）	1988/9/8～12/28	埋文研（菅田薫）	東西５間，南北２間の四面庇掘立柱建物（一辺約 0.8 mの方形の掘方）・東西７間，南北２間掘立柱建物（径 0.3 mの掘方）。礎石建物：３間３間の総柱礎石建物（掘方 0.9 ～ 1.2 mの円形）井戸・土坑を確認。	18a
25	付属地	唐橋門脇町6・7	1989/1/17～3/15	埋文研（菅田）	平安時代の土坑や井戸を確認。	18b
26	中仕切り築地塀西面築地	唐橋門脇町4-1	1990/11/8～12/20	関西文化（吉川・鎌田博子）	**中仕切り築地塀**：溝と整地層を確認。 **西面築地**：西面築地に伴う溝を確認。	未報告
27	西面築地	唐橋西寺町35-12	2007/2/16～3/2	埋文研（能芝妙子）	湿地状の落込み，柱穴３，土坑３基を確認。	19
28	西廻廊	唐橋西寺町69（唐橋小学校児童館）	2007/7/23～8/20	埋文研（柏田有香）	西廻廊基壇整地土，柱穴４基（一辺 0.65 ～ 0.7 m，深さ約 0.22 mの隅丸方形），溝を確認。	20
29	東面築地	唐橋花園町9-8・9・11	2013/11/8～12/10	埋文研（東洋一）	東面築地基底部（幅約 2.1 m，），内溝（幅 1.5 m，深さ 0.35 m），落込みを確認。	21
30	付属地	唐橋門脇町23	2016/5/9～6/17	埋文研（李銀眞）	桁行２間以上，梁間２間の掘立柱建物を確認。桁行 2.2 ～ 2.4 m，梁間 1.8 mで，柱穴掘方は一辺 0.3 ～ 0.4 mの隅丸方形である。桁行１間以上，梁間２間の掘立柱建物。梁間が約 2.4 m，柱穴掘方は一辺 0.5 ～ 0.9 m以上の隅丸方形。柱穴列（柱穴掘方一辺 0.15 ～ 0.3 mの隅丸方形）。	22
31	付属地	唐橋門脇町17	2016/10/13～21	埋文研（近藤奈央）	井戸（掘方は一辺約２m，一辺 0.85 mの縦板横桟組），溝（幅 0.8 ～ 1.1 m，深さ 0.2 ～ 0.4 m）。造寺に関わる土取坑を確認。	23

調査次数	推定地	調査地	調査期間	調査機関（担当者）	西寺関連主要遺構	文献
32	付属地	唐橋門脇町 21・22	2017/5/22 ～ 6/29	埋文研（鈴木康高・木下保明）	井戸（掘方一辺 2.2 m，深さ約 1.6 m，井籠組），区画溝（幅 1.15 ～ 1.5 m，深さ 0.3 m，東西方向）を確認。	24
33	五重塔	唐橋西寺町 10	2017/10/31 ～ 12/08	市文化財（鈴木久史）	瓦溜り，落込みを確認。	25
34	西面築地	唐橋西寺町 10	2018/10/1 ～ 11/8	市文化財（鈴木久史）	西大宮大路と西寺西面築地内溝，鋳造関連遺構を確認。	26
35	講堂	唐橋西寺町（唐橋西寺公園）	2018/10/2 ～ 11/2	市文化財（西森正晃）	講堂階段抜取溝，整地層などを確認。	27
36	講堂	唐橋西寺町（唐橋西寺公園）	2019/9/30 ～ 11/2	市文化財（西森）	講堂の礎石 1 基及び抜取穴 4 基，基壇盛土，南・東縁及び講堂東軒廊基壇盛土を確認。	28
37	五重塔・西面築地	唐橋西寺町 10	2019/9/30 ～ 11/15	市文化財（鈴木久史）	壷堀地業 12 基，西寺西限内溝等を確認。	29
38	西僧房	唐橋西寺町 17	2020/6/1 ～ 26	市文化財（鈴木久史）	西僧房の整地土を確認。	本報告

＊1 調査機関　鳥羽研：鳥羽離宮跡研究所，奈文研：奈良文化財研究所，京都府：京都府教育委員会，市教委：京都市教育委員会，市文化財：京都市文化財保護課，埋文研：（公財）京都市埋蔵文化財研究所，関西文化：関西文化財調査会，平博：平安博物館

＊2 推定地　推定地や名称については，文献 1 ・註 2 を参考にした。

文献（表 1 西寺跡関係発掘調査一覧表の文献番号に対応）

1　杉山信三『史跡　西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所，1979 年。

2　杉山信三「西寺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会，1964 年。

3　杉山信三「西寺跡発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報 1962』奈良国立文化財研究所，1962 年。

4　杉山信三「西寺跡第 3 次発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報 1963』奈良国立文化財研究所，1963 年。

5　杉山信三「29 西寺食堂跡」『東海道幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』日本国有鉄道，1965 年。

6　杉山信三・井上満郎・木村捷三郎・浪貝毅「史跡西寺跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告 1972』鳥羽離宮跡調査研究所，1974 年。

7　浪貝毅・玉村登志夫「西寺跡発掘調査概要」『史跡　西寺跡・鳥羽離宮跡　京都市埋蔵文化財年次報告 1973－Ⅱ』京都市文化観光局文化財保護課，1975 年。

8　梶川敏夫「史跡 西寺跡―北僧房跡発掘調査概要―」『鳥羽離宮跡・史跡西寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告　1974－Ⅳ』京都市文化観光局文化財保護課，1975 年。

9 a　長宗繁一・鈴木久男「西寺東僧房跡」『平安京跡発掘調査概報』（『京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978-Ⅱ』）（財）京都市埋蔵文化財研究所，1978 年。

b　長宗繁一・鈴木久男「西寺井戸跡」同上

10 a「平安京右京九条一坊，西寺跡 1 」『昭和 52 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，2011 年。

b「平安京右京九条一坊，西寺跡 2 」同上

c「平安京右京九条一坊，西寺跡 3 」同上

d「平安京右京九条一坊，西寺跡 4 」同上

11　百瀬正恒「平安京西寺跡」『平安京跡発掘調査概要』（『京都市埋蔵文化財研究所概要集 1978』）京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所，1979 年。

12 a「平安京右京九条一坊十町」『昭和 53 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，2011 年。

b「平安京右京九条一坊・西寺跡１」同上
c「平安京右京九条一坊，西寺跡２」同上
13　「平安京右京九条一坊十二町・西寺跡」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，2012年。
14 a 鈴木廣司「西寺跡発掘調査　第17次発掘調査」『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター，1981年。
b 堀内明博「西寺跡発掘調査　第18次発掘調査」同上
c 長宗繁一「西寺跡発掘調査　第19次発掘調査」同上
d 平尾政幸「西寺跡発掘調査　第20次発掘調査」同上
15 a「平安京右京九条一坊，西寺跡１」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，2011年。
b「平安京右京九条一坊，西寺跡２」同上
c「平安京右京九条一坊，西寺跡３」同上
d「平安京右京九条一坊，西寺跡４」同上
16　堀内明博「西寺跡第13次調査」『平安京跡発掘調査概報　昭和61年度』京都市文化観光局，1987年。
17 a 磯部勝・鈴木久男・堀内明博「平安京右京九条一坊１」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1989年。
b 堀内明博「平安京右京九条一坊２」同上
18 a 菅田薫「平安京右京九条一坊１」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1993年。
b 菅田薫「平安京右京九条一坊２」同上
19　能芝妙子「平安京西寺跡・唐橋遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局，2008年。
20　柏田有香『平安京跡・史跡西寺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-4』）（財）京都市埋蔵文化財研究所，2007年。
21　東洋一「平安京右京九条一坊十二町・西寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局，2014年。
22　李銀眞『平安京右京九条一坊九町跡・唐橋遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-4』）（公財）京都市埋蔵文化財研究所，2016年。
23　近藤奈央『平安京右京九条一坊十五町・十六町跡（西寺跡）・唐橋遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016‐6』）（公財）京都市埋蔵文化財研究所，2017年。
24　鈴木康高・木下保明『平安京右京九条一坊九町跡（西寺跡）・唐橋遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017‐6』）（公財）京都市埋蔵文化財研究所，2017年。
25　鈴木久史『平安京右京九条一坊九町跡・西寺跡・唐橋遺跡』（『京都市内遺跡発掘調査報告平成29年度』）京都市文化市民局，2018年。
26　鈴木久史『平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡』（『京都市内遺跡発掘調査報告平成30年度』）京都市文化市民局，2019年。
27　西森正晃『平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡』（『京都市内遺跡発掘調査報告 平成30年度』）京都市文化市民局，2019年。
28　西森正晃『平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（36次）・唐橋遺跡』（『京都市内遺跡発掘調査報告 令和元年度』）京都市文化市民局，2020年。
29　鈴木久史『平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（37次）・唐橋遺跡』（『京都市内遺跡発掘調査報告 令和元年度』）京都市文化市民局，2020年。

雨落溝を検出し，上述した復元案を追認している。一方，西僧房は20次調査で西僧房の基壇土（整地土）と基壇西縁雨落溝を確認しているものの，礎石や礎石抜取穴などは削平されており柱間寸法など検討することが出来ていない。このような中，昨年度に西僧房南端と金堂西軒廊との入隅を確認し，20次調査成果と合わせて基壇東西幅が約16.5ｍであったと想定している[13)]。

3．遺　構

（1）基本層序（図８）

基本層序は調査区南壁を代表として述べる。現代盛土直下GL-0.04ｍで西寺整地土（１・２層），-0.24ｍで古墳時代の遺物を僅かに含む浅黄色シルト（３層），-0.5ｍで微砂を含む黄灰色シルト（４層），-0.64ｍで砂礫が混じる黄灰色シルト（５層），-0.78ｍで灰色シルト（層）-1.0ｍで灰色細砂～砂礫（７層）となる。なお，浅黄色シルト（３層）は調査区の南側のみに堆積し，中央から北側にかけては灰オリーブ色泥砂（西壁５層）や灰色粗砂～砂礫（西壁７層）となる。また，本調査で確認した４～７層に遺物の混在は認められないが，周辺調査で確認している弥生～古墳時代の遺物を含む堆積土と類似しており確実な無遺物層とは断定できない。なお，本調査では西寺整地土直上を平安時代の基盤層と認識し遺構検出を行った。遺構検出面の標高値は18.94ｍである。

（2）遺構（図８・９・表２）

調査区のほぼ全域で西僧房の整地土を確認した。

整地土　近・現代の撹乱によって一部削平されているが，調査区のほぼ全域で整地土を検出した。整地土は大きく２層に分層でき（図８南壁１・２層），古墳時代の土師器細片が混在するが，砂や礫はほとんど認められない。また，非常に硬く締まっていることから基壇土の可能性も考えたが，以下の理由から整地土と判断した。

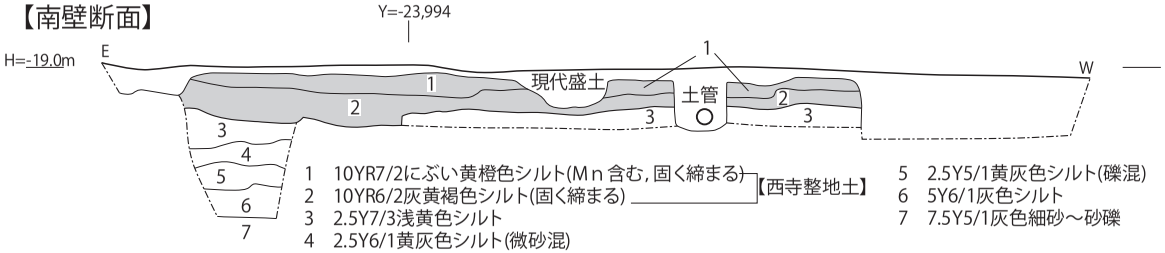
本調査で整地土と判断した土層は18.94ｍで検出した。これに対し当該地の南東敷地（図11令和元年度試掘調査地）で確認した金堂軒廊延石の裏込め土の検出標高値は19.0ｍである。延石は基壇外装の最下部にあたり基壇土もしくは，基壇土構築面の直下を掘り込んで据える。したがって，延石裏込め土より下位にあたる土層は基壇ではなく整地土となる。勿論，僧房基壇と金堂軒廊基壇の高さに差があった可能性はあるが，調査地が隣接していること，軒廊と僧房が接続していることから，基壇土成立面に大きな差はないと考えられる。

なお，整地土は調査区の南東側に向かって緩やかに厚くなり，後述する溝14を含めると調査区の南東隅地の層厚が0.32ｍとなる。一方，調査区の中央部は上層が削平されているが層厚が約

表２　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
平安時代	整地土，土坑３，溝14	西寺関連遺構

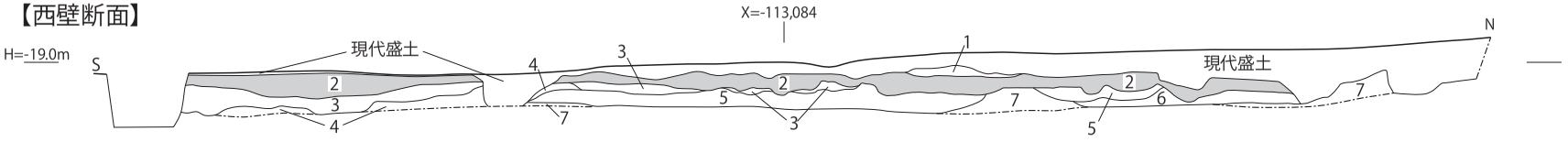
【南壁断面】



1 10YR7/2にぶい黄橙色シルト(Mn含む, 固く締まる)
2 10YR6/2灰黄褐色シルト(固く締まる) 【西寺整地土】
3 2.5Y7/3浅黄色シルト
4 2.5Y6/1黄灰色シルト(微砂混)
5 2.5Y5/1黄灰色シルト(礫混)
6 5Y6/1灰色シルト
7 7.5Y5/1灰色細砂～砂礫

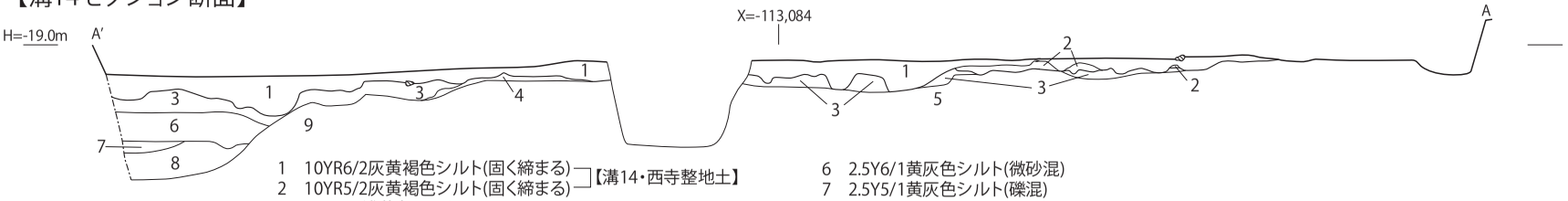


【西壁断面】

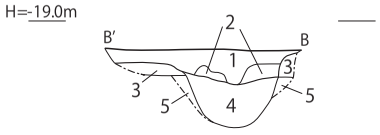


1 5Y8/1灰白色泥砂【西寺整地土土壌化】
2 10YR7/2にぶい黄橙色シルト【西寺整地土】
3 2.5Y7/3浅黄色シルト
4 2.5Y6/1黄灰色泥砂
5 5Y5/2灰オリーブ色砂泥
6 7.5Y4/2灰褐色泥砂～シルト
7 5Y5/1灰色粗砂～砂礫

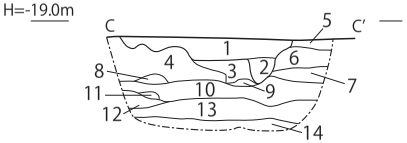
【溝14セクション断面】



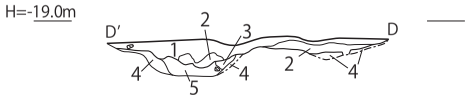
1 10YR6/2灰黄褐色シルト(固く締まる) 【溝14・西寺整地土】
2 10YR5/2灰黄褐色シルト(固く締まる)
3 2.5Y7/3浅黄色シルト
4 10YR6/3にぶい黄橙色に10YR8/1灰白色粗砂が混じる
5 10YR6/3にぶい黄橙色砂泥～シルト
6 2.5Y6/1黄灰色シルト(微砂混)
7 2.5Y5/1黄灰色シルト(礫混)
8 5Y6/1灰色シルト
9 7.5Y5/1灰色細砂～礫



1 10YR7/2にぶい黄橙色シルト(Mn含む, 固く締まる) 【溝14・西寺整地土】
2 10YR6/2灰黄褐色シルト(固く締まる)
3 2.5Y7/3浅黄色シルト
4 2.5Y6/1黄灰色シルト(微砂混)
5 7.5Y5/1灰色細砂～礫



1 10YR8/2灰白色泥砂(固く締まる) 【溝14・西寺整地土】
2 7.5YR8/2灰白色砂泥(固く締まる)
3 5Y8/1灰白色粗砂(固く締まる)
4 7.5Y7/1灰白色粗砂～細砂
5 10YR7/1灰白色粗砂(礫混)
6 10YR7/2にぶい黄橙色粗砂
7 10YR6/1褐灰色粗砂
8 2.5Y6/2灰黄色粗砂
9 5Y7/1灰白色細砂
10 N8/ 灰白色粗砂～細砂
11 7.5Y6/1灰色シルト(ブロック状に含む)
12 10YR6/3にぶい黄橙色粗砂
13 N8/ 灰白色粗砂
14 2.5Y7/2灰黄色細砂



1 10YR7/2にぶい黄橙色シルト(Mn含む, 固く締まる) 【溝14・西寺整地土】
2 10YR6/2灰黄褐色シルト(固く締まる)
3 10YR7/3にぶい黄橙色泥砂
4 10YR6/3にぶい黄橙色砂泥～シルト
5 10YR6/1褐灰色砂泥

図８　調査区及びセクション断面図（1：50）

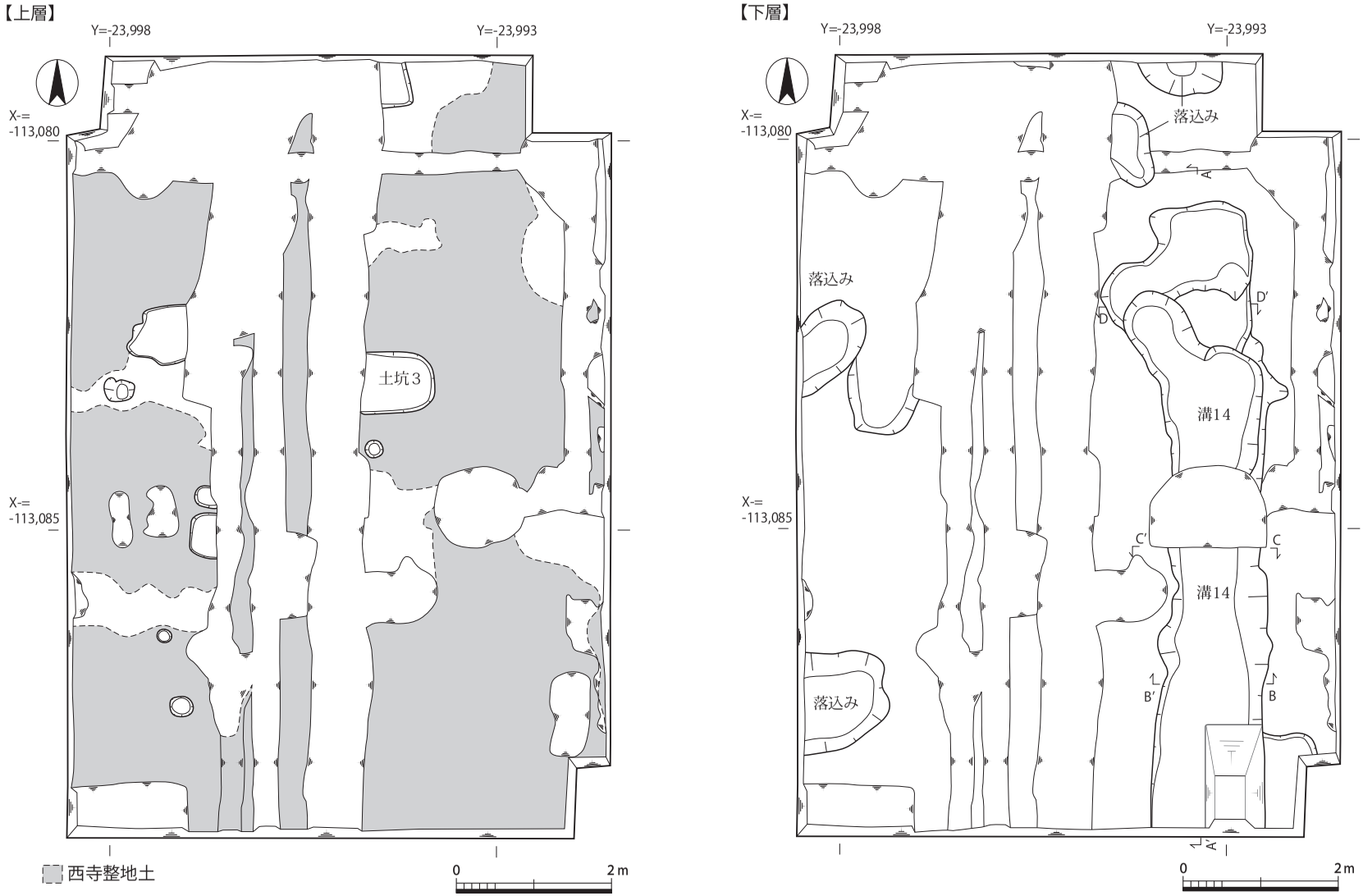


図9　調査区平面図（1：80）

0.02ｍと非常に薄く，整地土は基盤層が高くなる調査区北側に向かって徐々に薄くなる。

土坑３　調査区の中央で検出した土坑である。検出面で長辺0.9ｍ以上，短辺0.8ｍ，深さ約0.1ｍで，西側が削平されている。平安時代の土師器細片が出土した。



図10　溝14断面（北から）

溝14（図10）　基盤層直上で確認した南北方向の溝である。調査区の東側に位置する。北側では溝肩が不明慮となり落込みの連続ともとらえることができるが，中央から南側にかけて明瞭に肩が認められたことにより人為的に開削した溝と判断した。幅は11.4～19.4ｍ，深さ約0.03～0.29ｍで，溝底に凹凸が認められる。北側に向かって深度が浅くなる。柱筋下部の地業の可能性も考慮して堆積状況を確認したが版築などは認められず，大きく２回に分けて整地土で埋め戻している。埋土から古墳時代・平安時代の土師器細片が出土した。

落込み　基盤層直上の数か所で落込みを検出した。場所によって規模が異なるが，幅約１～1.3ｍ，深さ約0.1～0.4ｍある。

４．遺　物

（１）遺物の概要（表３）

出土した遺物は整理箱にして２箱である。内訳は古墳時代の土師器・須恵器，平安時代の土師器・瓦類などである。すべて細片であり図化することができなかった。また，当該地周辺の調査に比べて瓦類の出土量が少なく，上層が削平されていることが伺える。

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
古墳時代	土師器，須恵器				
平安時代	土師器，須恵器，瓦類				
合　計		２箱			２箱

５．まとめ（図11）

本調査によって西僧房の整地の施工状況が明らかになるとともに，西寺造営以前の地形復原の手がかりを得ることができた。最後に周辺の調査成果を含めてまとめとする。

西僧房　西寺の伽藍を復元した杉山信三氏によれば，西僧房東側柱列及び東僧房西側柱列が伽藍中心線から約55.7ｍの場所に位置していたとする。講堂は伽藍の中心に配されていることから，講堂中軸線と伽藍中軸線がほぼ同じとなり，発掘調査によって伽藍中軸線がY=-23,931.3ｍである

ことが判明している。したがって，西僧房東側柱列はY=-23,987ｍに位置していたこととなる。さらに，昨年度の金堂西軒廊・西僧房・西廻廊の取り付き部分の試掘調査において，Ｌ字の溝を検出し西軒廊基壇南縁と西僧房基壇東縁の入隅及び西僧房基壇南東隅にあたるとし，基壇規模を復元している。これらの調査成果を合わせた復原案が図11である。ただし，杉山氏による東僧房の南縁が金堂東軒廊の入隅から南に約４ｍであるのに対して，昨年度確認した西僧房南縁が金堂西軒廊の入隅から南へ３ｍとなり約１ｍの差が生じている。したがって，西僧房南側柱列が図に示した復元柱位置よりも南へ約１ｍずれる可能性がある。土坑３は想定礎石据え付けに当たらないが，１ｍのずれを勘案すれば南端から７列目の柱筋上付近に位置するところとなり，礎石抜取り穴の可能性が

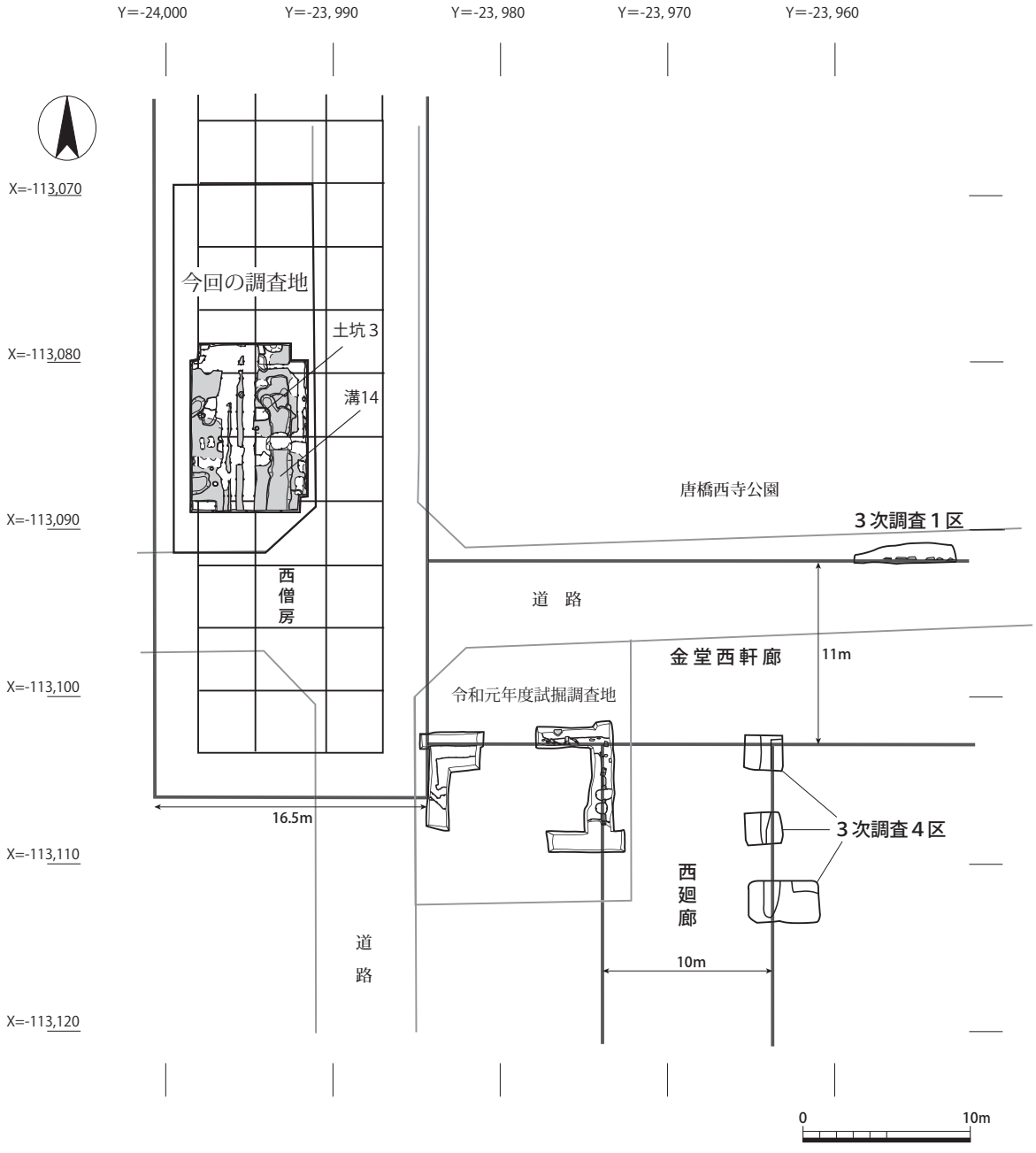


図11　西僧房復元図（1:400）

ある。ただし，本調査ではその他に対応する礎石や土坑を確認することが出来なかったことからその可能性を指摘するに留める。

西僧房整地土　本調査によって西僧房の造営時に整地を行っていることが明らかになった。これまでの発掘・試掘調査では，古墳時代の遺物を含む黄褐色泥砂土や褐色粘土によって形成された高まりを確認し基壇土と判断している（3-7・20次調査・試掘調査[14]）。しかし，基盤土の標高値が本調査区とほぼ同じでありながら，推定基壇土の標高（H=18.7ｍ）が，今回検出した整地土の標高（H=18.94ｍ）より20㎝も低い。通常，基壇土は基盤層の直上に構築されることから，基壇土と判断していた高まりは西僧房に伴う整地土であったと考えられ，西僧房の建立にあたって広範囲に整地が行われたと想定できる。このことは，西僧房が位置する基盤層には起伏（落込み）が多く認められ，さらに南側に向かって急激に落込むなど安定した地盤でないことも傍証となる。

また，整地土に利用しているシルトには礫や砂などが含まれておらず，砂礫が主体となる当該地周辺の基盤層には由来しない。したがって，他所から整地を目的に運び込んだ土と推測できる。西寺では伽藍地西面築地内溝が幅広く開削されていることから，溝の開削と同時に土取りを行った可能性を指摘した[15]。理化学的な分析が実施できていないため直接的な関係性は示せないが，今後の調査では，大規模な寺院造営に必要とされる土がどのようにして確保されていたのかに留意しながら調査を進めるべきであろう。

溝14　溝14は長軸が正方位を向き整地土によって埋め戻されていることから，西寺造営に関わる溝と推測できる。しかし，北側の発掘調査（20次）では確認されておらず，現段階の成果のみでは遺構の性格については明らかにすることができない。そこで以下の２通りの可能性の指摘にとどめ，結論は資料の増加を待ちたい。

①基礎地業（布地業）　溝14が整地土の厚い調査区南東側に開削されていることから，部分的な基礎地業（布地業）の可能性が考えられる。

②西僧房造営基準線　溝14の位置は西僧房のほぼ中央に位置していることから，予め西僧房の計画位置を溝で明示していた可能性が考えられる。１次調査でも南北溝を確認しており東西の配置の基準を示していた可能性がある。

ただし，いずれも以下の課題が残されている。

①は推定復元図（図11）に従うのであれば最も建物の荷重がかかる柱筋上に施行されておらず，今後の調査で礎石の位置が確定した後に改めて検討する必要がある。

②は20次調査では同様の南北溝を確認できておらず，西僧房全域で施工されていない可能性が高い。なぜ，当該地のみに造営配置を明示する必要があったのかは明らかでない。

以上の通り，全ての可能性に解決すべき課題が残されており，さらなる検討が必要とされる。

（鈴木 久史）

註

1） 西寺には講堂北側に東西方向の築地が巡り（中仕切り築地塀），南側と北側の空間を区別している。杉山氏は八町すべてを指し示す用語として「寺域」を用い，南側は仏と直接それに関わる僧侶の場所（聖域）とし，北側は寺院経営するのに必要な事務管理を行う場所（俗域）であったとする。さらに南都諸寺の資財帳や発掘調査成果から，北側には大衆院・政所院・花園院・倉垣院があったとする（「東寺と西寺」『平安京提要』㈱角川書店　1994年）。一方，古代寺院では，外周の区画内を「寺院地」とし，南大門からの区画内を「伽藍地」，寺院地から伽藍地を除いた空間を「付属地」と称することがある（山路直充「寺の空間構成と国分寺―寺院地・伽藍地・付属地」『国分寺の創建思想・制度編』，吉川弘文館，2011年）。杉山氏が比定した院については，再検討する余地があると考えるため，本報告では個別具体的な堂塔を示さない限り，中仕切り築地塀から南側を伽藍地，北側を付属地と称す。また，とくに断りのない限り，伽藍配置及び堂塔の復元は，杉山信三「東寺と西寺」『平安京提要』，㈱角川書店，1994年に拠る。

2） 『続日本後紀』巻十三承和十年七月廿三日条，『類聚国史』巻一〇七 左右京職 延暦十八年四月四日条。

3） 鈴木嘉吉「三．寺宝概説（建築）」『新東宝記』，真言宗総本山東寺，1995年。

4） 『日本後紀』弘仁四年一月十九日条。

5） 『日本紀略』天長九年七月五日条。

6） 『元亨釈書』巻二慧解一。

7） 『日本三代実録』貞観六年二月十六日条。

8） 追塩千尋「西寺の沿革とその特質」『北海学園大学人文論集』第23・24号，北海学園大学人文学会，2003年。

9） 『日本紀略』正暦元年二月二日条，同年八月二十六日条。

10） 杉山信三『史跡　西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所，1979年。

11） 註8に同じ。

12） 『明恵上人行状（漢文行状）』巻中，『百錬抄』天福元年十二月四日条，『明月記』天福元年十二月二十五日条。

13） 西森正晃「Ⅲ　史跡西寺跡・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡」『令和元年度京都市内遺跡試掘調査報告』京都市文化市民局，2020年。

14） 長谷川行孝「Ⅴ　西寺跡　№52，53」『平成９年度京都市内遺跡試掘調査概報』京都市文化市民局，1998年。

15） 鈴木久史「Ⅰ平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡」『平成30年度京都市内発掘調査報告』京都市文化市民局，2019年。

Ⅲ　特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）

1．はじめに（図1・2）

鹿苑寺は，元仁元年（1224）に西園寺公経が建立した西園寺並びに北山第を，応永4年（1397）に足利義満が西園寺家から譲り受けて「北山殿」を営み，応永27年（1420）にこれを足利義持が夢窓疎石を勧請開山として禅寺に改めたものである。大正14年（1925）10月8日，内務省告示第170号で史跡・名勝 鹿苑寺として指定され，昭和27年（1952）10月11日に史跡・名勝 鹿苑寺庭園に名称変更された。昭和31年（1956）7月19日には文化財保護委員会告示第49号で，特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園に指定されている。指定時の説明には，「本園は足利義満が応永4年（1397）西園寺家の山荘を得て，更にその規模を大にせるものにして同15年（1408）義満は後小松天皇の聖駕を迎えて宴を開くこと数日，世に北山殿行幸といひ，今なおその盛を称す。義満死後遺命により山荘を寺となし鹿苑寺と号すると共にその庭園となれり。庭中有名なる金閣あり，築山林泉あり。近く衣笠山を望み幽雅清邃にして豪宕の景趣を兼ぬ。室町時代の全盛期を代表する名園なり。」とある。

この鹿苑寺庭園で，平成25年（2013）から平成28年（2016）に行われた現状変更は文化庁の許可の範囲を越えて違法行為が為されたものである，とする行政手続法に基づく申出が令和2年



図1　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園位置図（国土地理院『京都西北部』，1：25,000）

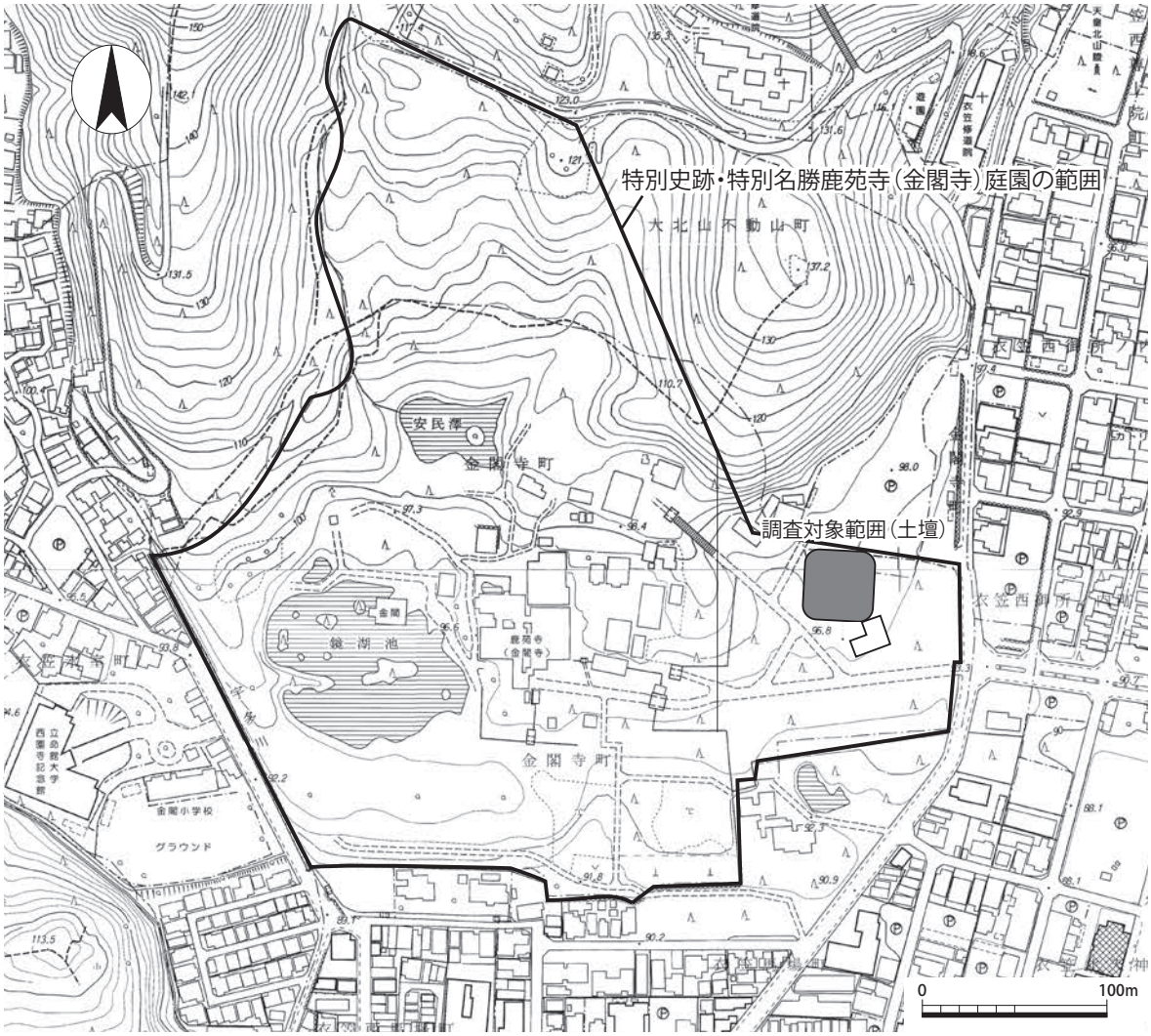


図２　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園指定範囲（京都市都市計画地図『原谷』・『衣笠山』，１：4,000）

（2020）６月29日に文化庁に対してなされた。具体的には，「北山大塔の基壇と推定されている方形の高まり（築山）において，①石垣の築造，②通路の設置，③既存園路，既存広場等の造成等の現状変更は，いずれも文化財保護法にもとづく許可を受けずに，あるいは許可条件に違反して行われた違法な現状変更であるから，速やかに原状回復をはかるなど，必要な是正措置を講ずるよう」，求めたものであった。この申出を受けた文化庁の指導・助言を受けて，京都府教育庁指導部文化財保護課と京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課は協議の結果，事実関係の確認のために調査を実施することになった。調査は，相互に点検が可能な体制を築くこととし，これまで鹿苑寺の現状変更に携わった担当者とは異なるものを調査担当者に指名して合同で行うこととした。

調査の目的は，申出にある「方形の高まり（築山）」を「土壇」と呼称したうえで，①土壇南東部盛土上の貼石（申出書では「石垣」）が土壇そのものを損壊して施工されたのか，②土壇上に施工された仮設通路（申出書では「通路」）が現状変更許可範囲を越えて土壇を損壊しているのか，③「既存園路，既存広場」と呼称される土壇上の通路等がどの段階で成立したのか，の３点の確認である。

調査の手法として，①，②については検証のための発掘調査により明らかにすることとし，③については発掘調査開始前に詳細な地形測量を実施し，過去の測量図及び発掘調査の成果と照合し

て，土壇地形が近現代にどのような変遷をたどったのかを検討することにした。

地形測量は，令和２年８月31日から９月３日まで実施した。検証発掘調査は令和２年８月18日付けで文化庁から現状変更許可を受け，令和２年９月７日から10月21日まで実施し，10月６日に報道発表，10月７日には発掘調査箇所の一般公開を行った。発掘調査の面積は，第１トレンチ30.7㎡（ａ区25.6㎡，ｂ区5.1㎡），第２トレンチ3.5㎡である。

調査期間中，９月17日に独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部の箱崎和久部長，９月18日に京都府立大学文学部の菱田哲郎教授による調査現場の確認及び指導を受けるとともに，文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門の近江俊秀主任調査官，同名勝部門の青木達司調査官の臨検と指導を受けている。

《調査組織》

調査主体	京都府教育委員会・京都市文化市民局
調査指導	文化庁
学識経験者	菱田 哲郎（京都府立大学文学部教授）
	箱崎 和久（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部長）
現地調査責任者	京都府教育庁指導部文化財保護課記念物係　主幹兼係長　石崎 善久
	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課　課長補佐兼埋蔵文化財係長 馬瀬 智光
調査担当者	京都府教育庁指導部文化財保護課記念物係　副主査　古川 匠
	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課埋蔵文化財係　技師　熊井 亮介
調査事務局	京都府教育庁指導部文化財保護課
	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
調査協力	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・宗教法人鹿苑寺

（石崎 善久・馬瀬 智光）

２．位置と環境（図３・表１）

（１）歴史的環境

鹿苑寺は京都盆地の北西縁辺部の段丘上，北山を構成する左大文字山の南麓に所在しており，東には深い河谷を形成する紙屋川が南北に流れる。

鹿苑寺は足利義満によって建立された御堂御所である北山殿が前身となっており，義満の死後に禅宗寺院鹿苑寺に改められたものである。義満の北山殿の範囲は，北は大北山，東は紙屋川，西は衣笠山，南は一条大路に四至があったとされる[1)]。

この範囲は，「北山野」と呼ばれていたようで平安時代前期には皇室御料地であったと想定され

る。『政治要略』には「北山野」の北限には霊厳寺があったとされ，この所在地については明らかではないが鹿苑寺の近くに所在していたものと考えられる[2)]。また，北山周辺には平安時代後半以降の天皇陵や火葬塚が確認できることから，この地が葬送地と認識されていたことがわかる。さらに『増鏡』の「内野の雪」には，田畑が多く「ゐ中めきたり」という表現が見られることを総合すると，畑や荒地が広がり，その中に塚や寺院などが点在するような，それほど土地利用が活発ではない状況が想像される[3)]。

この「北山野」は平安時代末には神祇伯家の領地となったものの，承久の乱以降は権勢をふるった西園寺公経の所領となり，西園寺が建立された。文献によると，本堂である「西園寺」，「せむしやく院」，「功徳蔵院」，「妙音堂」，「不動尊」，「五たい堂」，「成就心院」，「ほす院」，「けす院」，「無量光院」，「北の寝殿」といった多くの建築物が存在したことが知られ，その様相は法成寺よりも優れていたとされる[4)]。

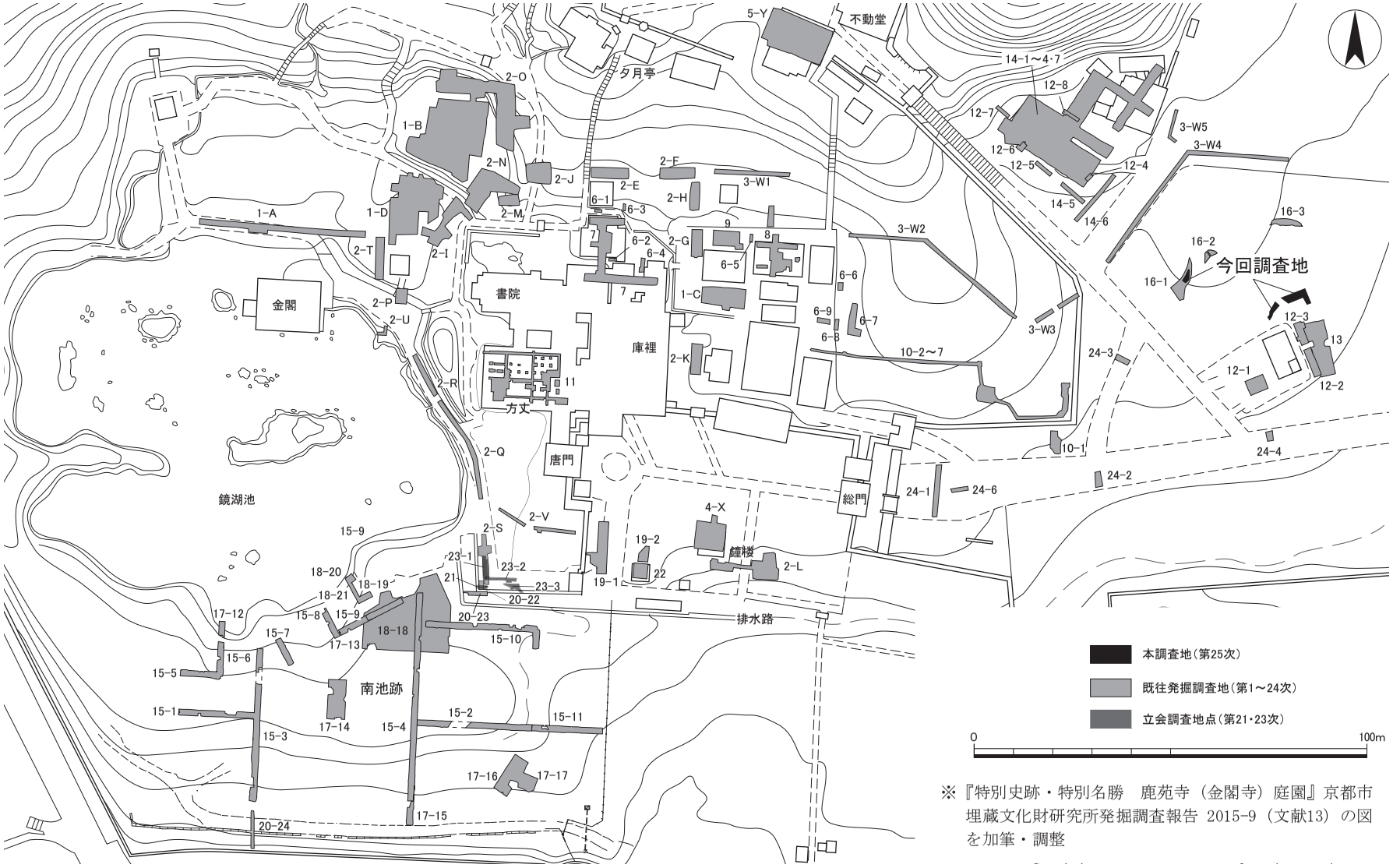
室町時代に入ると，西園寺家より足利義満がこの地を譲り受け，応永４年（1397）に北山殿を造営する。この際，西園寺伝来の堂舎の幾つかが引き継がれている。文献からは，金閣や護摩堂，懺法堂，紫宸殿，天鏡閣，仏殿，泉殿，書院などがあったことが知られている[5)]。

義満が応永15年（1408）に没したのち，菩提を弔うために夢窓疎石が開山となり禅宗の鹿苑寺が創建され，以降は寺院として今日まで存続している。しかし義満の死後，応永26年（1419）に義満の夫人であった日野康子（北山院）も亡くなると，義持は北山殿の建物の一部を取り壊して南禅寺や建仁寺に寄進しており，わずかに残った金閣と護摩堂が鹿苑寺に引き継がれた。また，応仁の乱では兵火を受け一部の建物が焼失し，その後に再建・新築がなされている。また，乱の兵火を免れた金閣も昭和25年（1950）に焼失している。

本調査地は鹿苑寺境内の東部にあたり，黒門の北西約70mに所在する一辺40m四方の土壇状の高まりである。近世以降，鹿苑寺の境内を描いた絵図がいくつか確認できるが，いずれもこの土壇付近は林もしくは何の表記もなく特段の注意は払われていなかったようである。しかし，この土壇は，後述する周辺調査事例より北山大塔の遺構の可能性が指摘されている[6)]。北山大塔については，『看聞日記』や『醍醐寺文書』などに記述が見られ，応永23年（1416）に開眼供養直前に落雷によって焼失した記録が見られるものの，位置や規模などに関する詳細な情報はほとんどなく，その実態を考える上での課題は多い[7)]。この土壇状遺構は北山殿の一部とも言える「八町柳町」を南北に貫く道祖大路の延長線上を中軸線として，金閣とほぼ左右対称の位置にあることが指摘されている点は注目される[8)]。

（２）周辺調査事例

特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園では，これまでに本調査を含め25次に及ぶ考古学的調査が実施されている。おおよそ南北300ｍ，東西250mの範囲で調査が実施されており，各調査地によって確認された遺構・遺物が多岐にわたることから，ここでは本調査地近辺の調査事例についてのみ取り上げる。



※『特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-9（文献13）の図を加筆・調整

図3　周辺調査事例（1：1,500）

表１　周辺調査事例一覧（図３に対応）

次数	種別	面積	調査期間	調 査 概 要	文献
1次	発掘	600㎡	1988.10.25 ～1989.04.03	室町時代の建物・廊・池・石組・溝・土坑，江戸時代の溝。	1・6
2次	発掘 立会	722㎡	1989.07.04 ～1990.03.13	平安時代の築地・建物，鎌倉時代の石組，室町時代の建物・石組・石列・溝。	2・6
3次	発掘	148㎡	1990.05.24 ～1990.07.31	平安時代の土師器皿埋納，室町時代の建物・池。	3・6
4次	発掘	57㎡	1992.11.25 ～1992.12.18	平安時代中期の土坑・遺物包含層，室町時代の溝，江戸時代の溝・土坑。	4・6
5次	発掘	200㎡	1994.08.23 ～1994.10.21	室町時代の建物・柵列，桃山時代の整地層，江戸時代の石組溝・集石・落込み。	5・6
6次	試掘	42㎡	1997.11.07 ～1997.12.27	室町時代の井戸・池・整地層，江戸時代以降の整地層。鎌倉時代の土師器・瓦，	7
7次	発掘	115㎡	1999.03.03 ～1999.04.05	室町時代の礎石建物・溝・池，江戸時代の礎石建物・井戸・溝・暗渠。	8
8次	発掘	64㎡	2001.04.23 ～2001.05.24	室町時代の柱列・柱穴・溝・土坑・堀，江戸時代以降の肥溜め・薬研堀・土塁。	9
9次	発掘	21㎡	2002.01.25 ～2002.02.05	室町時代の土坑，江戸時代以降の柱穴・溝・土蔵基礎・廃棄土坑。	10
10次	発掘	246㎡	2003.08.18 ～2003.10.10	平安時代の柱穴，鎌倉時代の柱穴・集石・溝・整地層，室町時代の礎石建物・柱穴・土坑・溝・整地層，江戸時代以降の溝。	11
11次	発掘	300㎡	2005.08.03 ～2006.02.27	鎌倉時代の整地面，室町時代の礎石建物・柱穴・溝・集石・埋納土坑・整地面，江戸時代の礎石建物・蹲踞・石列・溝・集石・土坑・土器埋納・化粧面・整地面。	12
12次	発掘	64㎡	2012.12.17 ～2013.02.01	平安時代から室町時代の整地層，室町時代の井戸・土坑，江戸時代の道路状高まり。	13
13次	発掘	65㎡	2013.08.01 ～2013.09.07	平安時代の溝・土坑・ピット，鎌倉時代から室町時代の整地層，江戸時代の土坑。	13
14次	発掘	447㎡	2015.04.01 ～2015.07.21	平安時代の土坑群，鎌倉時代の基壇状高まり・落込み，室町時代の高まり・池・瓦窯。	13
15次	発掘	352㎡	2016.06.01 ～2016.12.09	中世の整地層・礎石・溝・瓦溜・島状高まり・堤構築土・造成土。	－
16次	発掘	37㎡	2016.11.01 ～2016.11.21	鎌倉・室町時代の被熱層（被熱面）・造成土・整地層。	14
17次	発掘	134㎡	2017.05.08 ～2017.07.06	中世の堤構築土・造成土，近世の護岸石・溝・水門跡。	－
18次	発掘	36㎡	2017. 09.25 ～2018.03.30	中世の堤構築土・造成土・礎石建物・硬化面・たたき，近世の護岸・土坑・水門跡・堤構築土。	－
19次	発掘	48㎡	2018. 02.14 ～2018.03.12	室町時代の落込み・整地層，江戸時代の路面・整地層，明治以降の土塀。	15
20次	発掘	15㎡	2018. 06.04 ～2018.08.03	室町時代の礎石建物，江戸後期の土塀。	－
21次	立会	—	2019. 07.23 ～2019.07.24	近現代の土塀。	－
22次	発掘	15㎡	2019. 10.02 ～2019.10.17	近世後期の土壇・石組基壇。	－
23次	立会	—	2019.10.11 ～2019.10.16	室町時代の景石。	－
24次	発掘	38㎡	2020.06.22 ～2020.08.04	室町時代の整地層，江戸時代の路面・整地層。	－
25次	測量 発掘	34㎡	2020.08.31 ～2020.10.21	本報告	本書

※『特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-9（文献13）の表１を加筆・調整

文献一覧（表１の文献番号と一致）

1　前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1993年。

2　前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1994年。

3　前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成２年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1994年。

4　前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成４年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1995年。

5　前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1996年。

6　前田義明ほか『特別史跡特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園　防災防犯施設工事に伴う発掘調査報告書』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1997年。

7　東　洋一「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1999年。

8　南　孝雄「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2000年。

9　東　洋一「第８次調査」『特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001－9，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2003年。

10　鈴木久男「第９次調査」『特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001－9，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2003年。

11　高橋　潔『特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003－6，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2003年。

12　小檜山一良『特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005－17，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2006年。

13　丸川義広ほか『特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015－9，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2016年。

14　布川豊治『特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016－13，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2017年。

15　鈴木康高『特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017－11，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2018年。

※第15・17・18・20～24次調査については，令和３年に報告書刊行予定。

第３次調査では，土壇の北側と西側で５箇所の調査区が設けられている。このうちW-２区の東半部からW-４区の西半部にかけて池状遺構を確認している。W-４区では攪乱のため肩口を確認することができなかったものの，W-２区では池の西肩口を確認しており，肩部には摩耗した石英の玉石を敷き州浜を形成している。また，池の底には白色粘土が貼られていたと報告されているが，池の堆積を示すような腐植土層は確認されていない。また，W-２～４区では，池の下層で平安時代中～

後期のピットと包含層を確認している。W-４区の屈折部付近では，室町時代の建物23を確認している。ただし，調査区の規模や埋設管などにより，確認できたのは礎石２基のみで建物の規模や性格については不明である。この建物23のすぐ東側では同じく室町時代の池28が確認されている。確認できる東西長は10mほどで，州浜や護岸の施設は確認されていないが，東肩口ではチャートの景石らしき石材が確認されている。埋土からは多量の瓦が出土しており，瓦で池を埋めたような状態と報告されている。なお，出土した瓦には被熱痕跡は確認されていない。

第10次調査では厚い整地層が堆積していることが確認されており，これらは西園寺期や義満期の造成に伴う可能性が想定される。また，この調査成果より境内の東半には鹿苑寺以前の遺構が良好に遺存していることが明らかとなった。

第12・13次調査は，土壇の南側で実施された。江戸時代のものと思われる道路状の高まりや室町時代以降の土坑の他，義満期と考えられる室町時代の造成土と西園寺期と考えられる鎌倉時代の造成土を確認している。また，これらの造成土の下の地山上面では平安時代中期から後期にかけて形成されたと推定されるピットや土坑が確認されている。

第14次調査は土壇の北側，第３次調査区よりも更に北側に調査区が設けられた。室町時代の基壇状の高まりや池，溝，瓦窯などが確認されている。特に溝３から大型の金銅製塔宝輪の破片が出土している点は注目される。

第16次調査では，部分的にではあるが今回の対象である土壇の上面で発掘調査が実施されている。調査の結果，被熱面と造成土を確認した。造成土からは，鎌倉時代から室町時代にかけての遺物が少量ながら出土しており，この土壇は室町時代以降に構築されたものと推測されている。

第24次調査は土壇の南側の現参道部分で発掘調査が実施された。調査の結果，江戸時代の路面と室町時代の整地層を確認しており，現参道が江戸時代に成立したことが明らかとなった。

鹿苑寺（金閣寺）庭園では1988年に発掘調査が開始されて以来，調査成果が蓄積され境内東半にも室町時代の遺構が展開することが確認されている。しかしながら，その実態は必ずしも明らかではなく課題も多く残されている。

（熊井 亮介）

３．地形測量

（１）新規に実施した地形測量

調査にあたっては，最初に調査対象地である土壇とその周辺の詳細な地形測量を新規に実施した（図４，「測量図A」とする）。測量図Aの作成にあたっては，客観的なデータを取得するために光波測距儀を用いて無作為に地表面を細かく計測し，各測点の座標値から，コンピューターで地形の起伏を計算し図化した。土壇上面は凹凸があり，凹んだ地形の上面は通路（園路）及び広場として近年まで使用され，砂利が敷かれた状態である。地表には樹木が散在し，部分的に苔が生えているが，それ以外の箇所は表土がほとんど形成されていない。全般に中世以降の地形改変が進んでいるが，

平面形態はほぼ整美な正方形で，規模は，仮に北辺を等高線の97.5m，南辺97.0ｍ，東辺96.9ｍ，西辺97.1mラインとすると一辺約40ｍの正方形となり，主軸は座標北からわずかに東に振る。丁寧な測量と設計の元で施工された土壇と考えられる。また，現況の土壇最上面の標高は約99.0ｍである。土壇裾をどの等高線と捉えるかで高低差は変動するが，現況地形では概ね２m程度の高さがある。

なお，地形測量の段階では，土壇南辺東部には近年施工された貼石があった。そしてその南に隣接して売店・トイレ棟（以下，「黒門便所・休憩所」とする）が建てられている。

図５には調査トレンチの位置も併せて記載している。貼石及び黒門便所・休憩所工事による土壇地形への影響を検討するため土壇南東部斜面に設定したのが第１トレンチ，土壇上の「仮設通路」の工事による土壇への影響を確認するために土壇上面に設定したのが第２トレンチである。



図４　鹿苑寺（金閣寺）庭園　土壇測量図Ａ（京都府・京都市作図・電子測量，１：400 ）

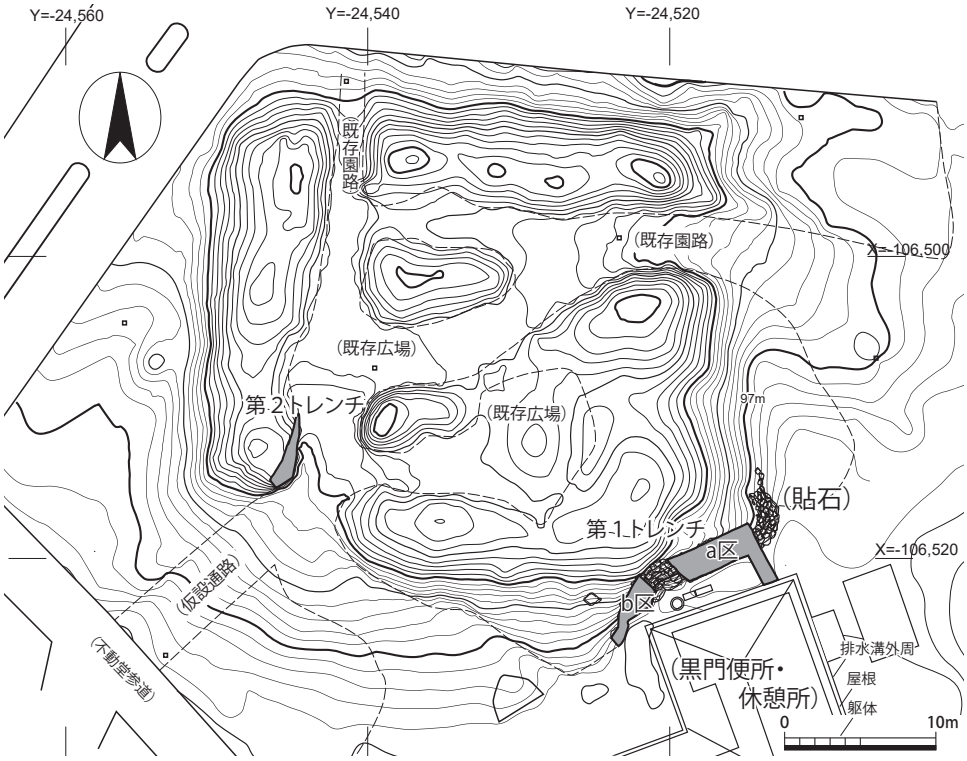


図５　測量図Ａ　トレンチ設定位置図(1：500)

（２）過去の地形測量図

①測量図Ｂ

土壇の地形を表現した図面は，今回新たに作図した測量図Ａ以外に，二種類の地形測量図が過去に製作された。このうちの一つが，金閣寺が測量会社に委託して作図した「鹿苑寺（金閣寺）現況平面図」（図6,「測量図Ｂ」とする）で，昭和63年12月に測量，平成元年１月に作図された地形図である。0.5ｍ間隔の等高線で土壇の地形を表現しており，従来の発掘調査報告書や研究論文等でたびたび引用されてきた測量図である。

②測量図Ｃ

もう一つが，作図者不詳の，京都府文化財保護課が所蔵する測量図（図7,「測量図Ｃ」とする）で，これまで公開されていなかった資料である。美濃紙にインクで清書されているが，美濃紙は経年のため変色し劣化しており，作図から相当期間を経ている。作図年代が古いため，当然，測量精度は近年作図された測量図Ａ，Ｂよりは粗い。ただし，土壇地形を含む鹿苑寺境内の地形の特徴が丁寧かつ克明に表現されているのが特徴である。

測量図Ｃは一部が彩色されるが，完成途上のようにも見受けられる。図左上の表が未記入で，さらに，左端の題名欄と思われる箇所も空白であるためである。また，右側のスケールバーの数値も記載されていない。

測量図Ｃのスケールバーの全長は18.0cmで，幅1.8cmの大目盛りで十等分され，さらに大目盛りは幅0.18cmの小目盛りで十等分されている。測量図Ｃと測量図Ｂ（図６）の参道の長さを比較したところ，測量図Ｃの縮尺は1,000分の１と推定された。その場合，スケールバーの全長がメート



図６　鹿苑寺（金閣寺）庭園　土壇測量図Ｂ（部分）（原図縮尺１：200，鹿苑寺所蔵）

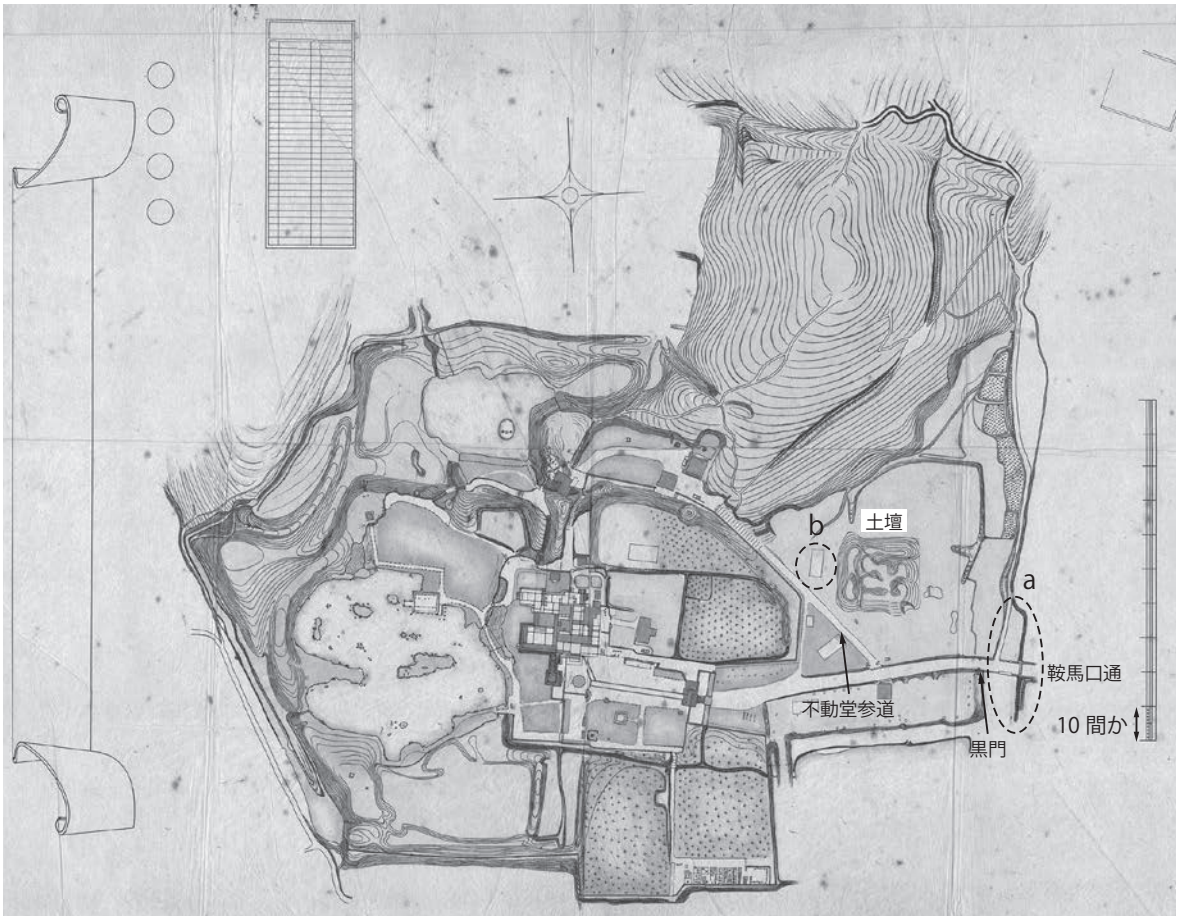
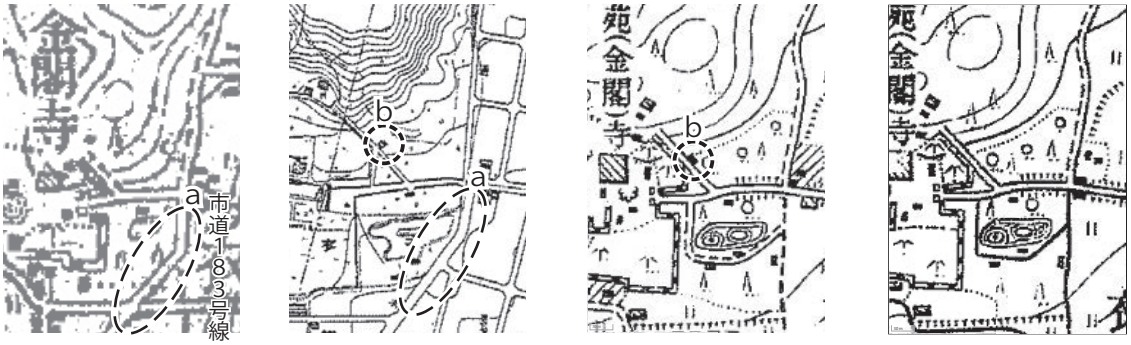


図７　鹿苑寺（金閣寺）庭園　土壇測量図Ｃ（原図縮尺１：1,000，京都府所蔵）



①昭和25年（1950）　②昭和10年（1935）　③昭和５年（1930）　④大正11年（1922）

図８　昭和25・昭和10・昭和５・大正11年地図
（①・③・④「京都西北部」国土地理院・大日本帝国陸地測量部・②「船岡山」京都市都市計画図）

ル法換算で約180ｍ，大目盛りが約18ｍ，小目盛りが約1.8ｍという半端な数値となる。しかし，大目盛りの幅を10間（約18.18ｍ），最小の目盛りを１間（約1.818ｍ）と仮定すると，スケールバーの全長が100間となり，目盛りが全て整数値となる。したがって，本図はメートル法ではなく，尺貫法で作図されたと判断される[9]。

測量図Ｃの正確な作図年代は不明であるが，年代を推定するため，戦前から戦後の地図（図８）と測量図Ｃ（図7）を比較すると，図７ａ地点では鹿苑寺（金閣寺）の黒門から発して東に延びる太い道路（鞍馬口通）と，北に延びる細い道路だけが表現される。図８の昭和25年（1950）地図及び昭和10年（1935）地図にある，南に延びる市道183号衣笠宇多野線（同図ａ地点）はまだ開通していない。したがって，測量図Ｃの年代が昭和10年（1935）以前であることは確実であろう。

また，図７ｂ地点には，土壇と西側の不動堂参道の間に建物が描かれる。図８の昭和10年（1935）地図，昭和５年（1930）地図には，この建物と同一と考えられる建物が，不動堂参道の東に隣接して描かれる（同図ｂ地点）が，大正11年（1922）地図には無い。したがって，測量図Ｃの作図年代は，大正11年（1922）から昭和５年（1930）の間に限定することも十分に可能である。鹿苑寺庭園が国指定文化財となったのが大正14年（1925）であることも考慮すると，測量図Ｃは文化財指定を契機にした詳細測量によって，大正末期から昭和初期の間に作成されたものと判断する。

（古川 匠）

４．第１トレンチの調査

調査着手前は，黒門便所・休憩所の北に隣接する土壇の南東隅部に貼石が施工された状態であった（図９・10）[10]。検証のために貼石を一部残し，東にａ区，西にｂ区を設定し（図11），黒門便所・休憩所建設工事及び貼石工事に伴って土壇が削られていないか確認するために調査を実施した。

なお，事前の測量調査では，黒門便所・休憩所の屋根軒先ライン，躯体の位置を測量し，当該建物の建設に伴って事前に調査された第12・13次調査トレンチの位置と照合した（図11）。調査の対象となったのは，新規建築範囲である建物東半部であるが，躯体の位置は両トレンチの位置とほぼ合致しており，発掘調査後の現状変更許可範囲外での設計変更等は為されていないと判断され

る。また，第１トレンチａ区の北側斜面上には小規模な平坦面が存在し，過去の地形改変が想定される。

（１）トレンチ調査

①a区（図12・13）

調査前は貼石が斜面を覆う状態であった（図９）。貼石を除去し，貼石の裏に堆積する柔らかい表土（図13東壁第１～３層・北壁第１層・西壁第１～３層）を除去したところ，少量のビニール片やガラス片及び木片を含む現代盛土層（図13東壁第９～21層，北壁第２’～７’層・第２～17層，西壁第４～10層）を検出した。現代盛土層の層厚は約0.6～1.0ｍである。

現代盛土層の一部を検証のためにトレンチ中央部のみ残して除去したところ，トレンチ南端で東西方向の埋設塩ビ管掘方SX101を検出した（図13東壁第８層・西壁第11層）。SX101の中心には直径0.08ｍの塩ビ管が通り，掘方の幅は約0.4ｍ，掘削深度は約0.4ｍ，トレンチ内で検出した長さは約5.0ｍである。SX101の掘削に伴い，中世盛土層の南裾部と中世整地層が掘削されている。また，SX101と重複する位置で，塩ビ管の敷設以前の撹乱SX102を検出した（図13北壁第18層）。

さらに，土壇を形成する中世盛土層（図13北壁第８'・21・22層，西壁第12層・東壁22層）及び中世整地層（図13北壁第23～25層，西壁第13～18層）を検出した。中世整地層の土質および上面の標高は，南に隣接する第12・13次調査で，室町時代とされる整地層と一致する。また，中世盛土層は中世整地層の直上に形成され，土質も中世整地層と近似する。したがって，中世整地層と中世盛土層は一連の作業工程の中で形成された可能性が高い。

なお，中世盛土層が形成する土壇は建物基壇の可能性があるため，基壇外装施設や外周の雨落ち溝の検出を目的としてトレンチ南東部を南に拡張したが，消火施設等に伴う電気設備を含む地下埋設管掘方SX103を検出しただけで，中世に遡る遺構は確認されなかった。



図９　第１トレンチa区　調査着手前（南東から・令和２年（2020）８月26日）



図10　第１トレンチb区　調査着手前（東から・令和２年（2020）９月23日）

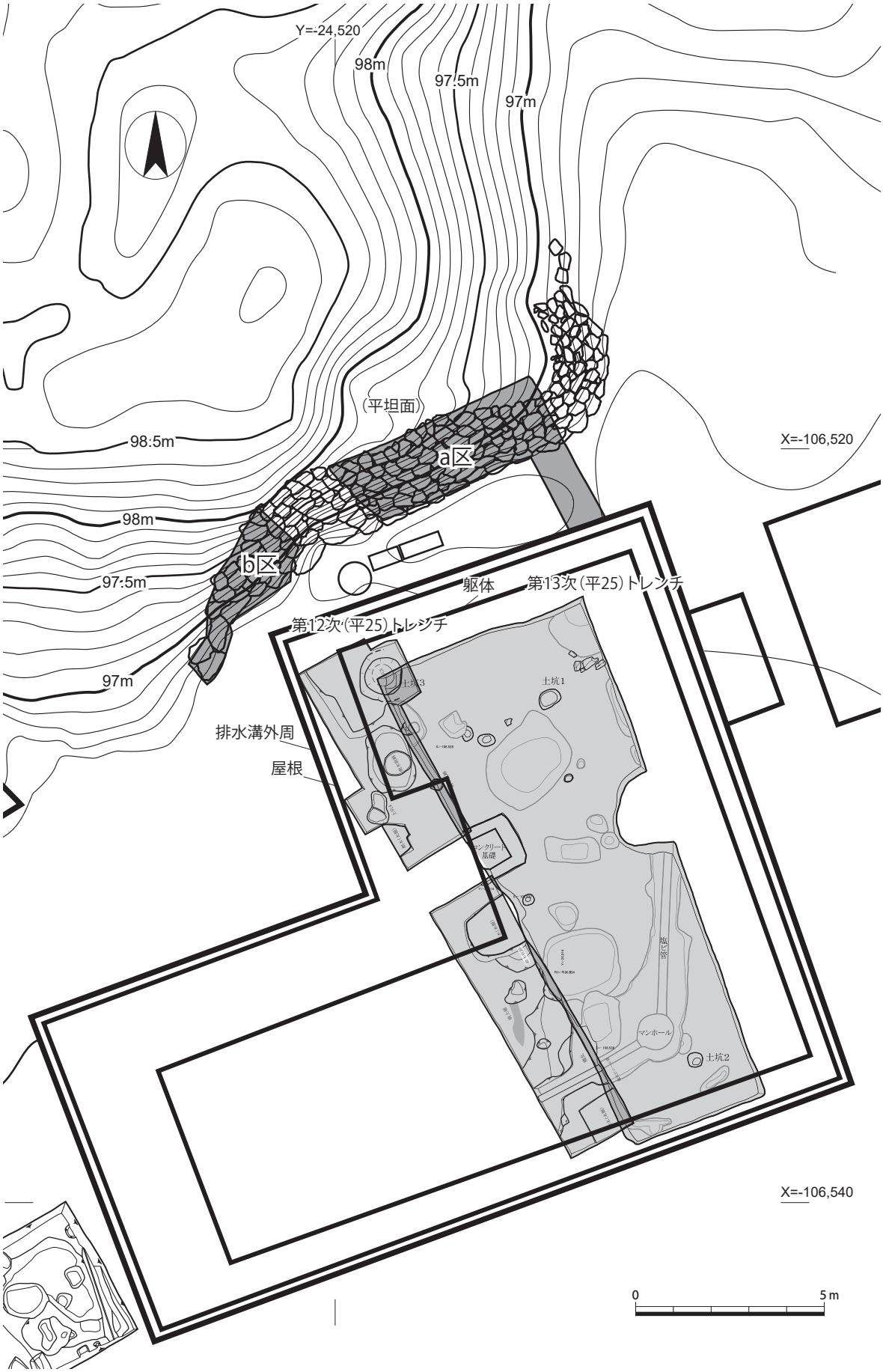


図11　令和２年度　鹿苑寺（金閣寺）庭園　（25次）第１トレンチ位置図（1：150）

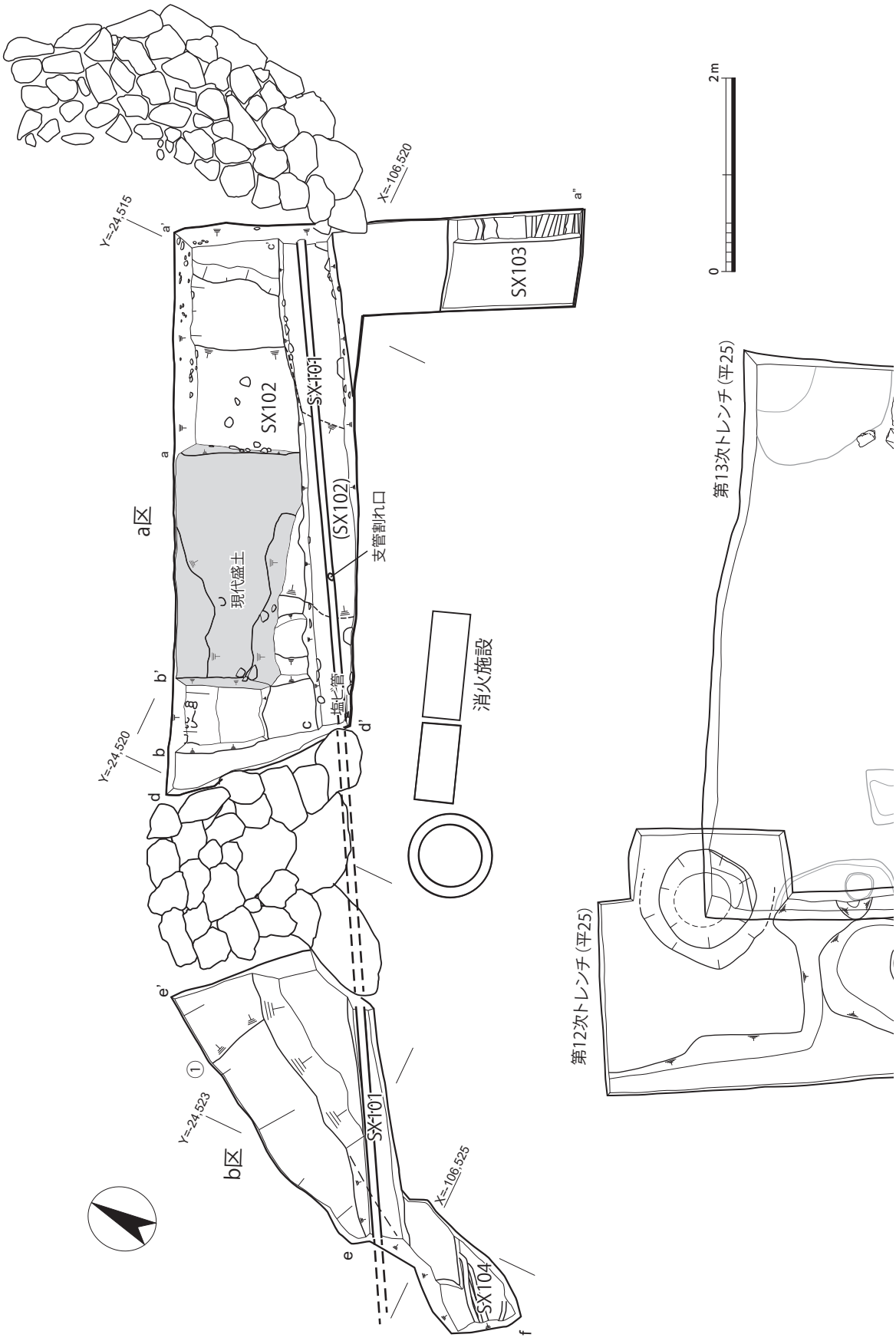
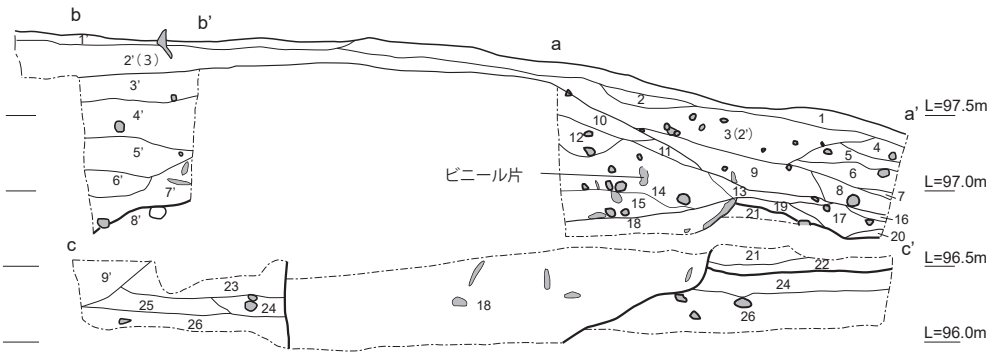


図12　令和２年度　鹿苑寺（金閣寺）庭園　（25次）第１トレンチ平面図（1：60）

【北壁】



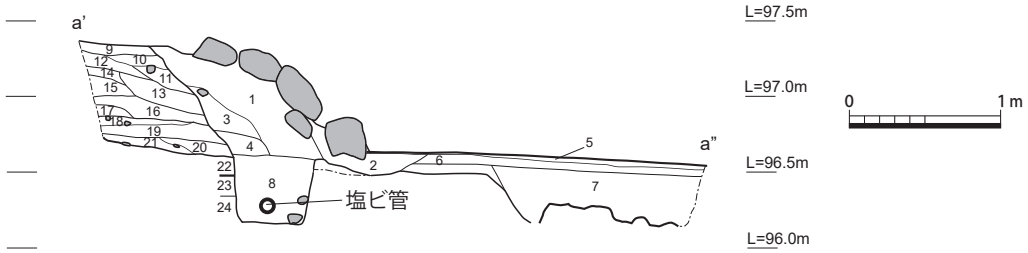
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色礫まじり砂質シルト
2. 10YR7/3 にぶい黄橙色粘質シルト
3. 2.5Y6/4 にぶい黄色礫まじりシルト
4. 10YR6/8 暗黄褐色シルト質粘土
5. 10YR6/4 にぶい黄橙色礫まじり粘質シルト
6. 10YR6/4 にぶい黄橙色礫まじりシルト
7. 10YR6/4 にぶい黄橙色礫まじりシルト
8. 10YR6/6 明黄褐色シルト質粘土
9. 2.5Y5/3 黄褐色礫まじり砂質シルト
10. 2.5Y5/1 黄灰色礫まじり砂質シルト
11. 10YR6/2 灰黄褐色シルト
12. 2.5Y6/3 にぶい黄色礫まじりシルト
13. N5/ 灰色粘質シルト
14. 2.5Y6/3 にぶい黄色礫まじりシルト
15. 2.5Y5/3 黄褐色礫まじりシルト
16. 5PB5/1 青灰色砂質シルト（ビリ砂利）
17. 5PB5/1 青灰色シルト質粘土
18. 2.5Y5/4 黄褐色粘質シルト
19. 2.5Y6/2 灰黄色シルト
20. 10YR7/1 灰白色礫まじり砂質シルト
21. 7.5YR7/8 黄橙色礫まじり粘質シルト
22. 2.5Y7/8 黄色シルト（粘土ブロック混じり）
23. 7.5YR6/6 橙色礫まじり粘質シルト
24. 10YR5/6 黄褐色礫まじり粘質シルト
25. 10YR6/1 褐灰色礫まじりシルト質粘土（締まり弱い）
26. 10YR6/6 明黄褐色礫まじり粘質シルト

※1～17：【現代盛土層】
※18：【SX102埋土】
※19・20：【現代盛土施工時の表土層か】
※21・22：【中世土壇盛土層】
※23～26：【中世整地層】

1′. 2.5Y4/1 黄灰色シルト
2′. 2.5Y6/4 にぶい黄色礫まじりシルト
3′. 2.5Y5/1 黄灰色礫まじり砂質シルト
4′. 2.5Y6/3 にぶい黄色礫まじりシルト
5′. 2.5Y6/3 にぶい黄色礫まじりシルト
6′. 2.5Y6/4 にぶい黄色礫まじりシルト
7′. 2.5Y5/3 黄褐色礫まじり粘質シルト
8′. 5YR6/8 橙色粘質シルト（灰白色、白色角礫をやや多く含む。土壇盛土）
9′.10YR6/1 褐灰色礫まじりシルト質粘土（締まり弱い）

※1′～7′：【現代盛土層】
※8′・・・【中世土壇盛土層】
※9′・・・【中世整地層】

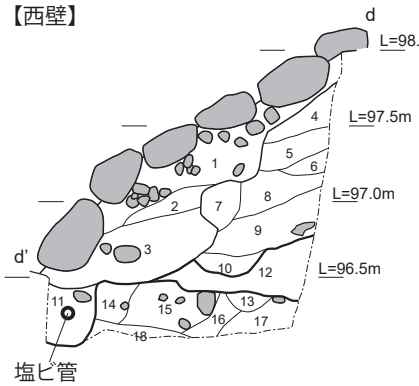
【東壁】



1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色礫まじり砂質シルト（密度が低い）
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
4. 2.5Y6/2 灰黄色礫まじり粘土
5. 5PB5/1 青灰色砂質シルト
6. 10YR4/4 褐色粘質シルト（固く締まる）
7. 10YR5/4 にぶい黄褐色ブロック質粘土
8. 2.5Y5/3 黄褐色ブロック質粘土
9. 北壁第１層と同一層
10. 10YR7/3 にぶい黄橙色礫まじりシルト質粘土
11. 10YR6/6 明黄褐色礫まじりシルト質粘土
12. 北壁第４層と同一層
13. 10YR7/3 にぶい黄橙色礫まじり粘質シルト
14. 北壁第５層と同一層
15. 北壁第６層と同一層
16. 北壁第７層と同一層
17. 北壁第８層と同一層
18. 北壁第16層と同一層（ビリ砂利）
19. 北壁第17層と同一層
20. 2.5Y7/4 浅黄色シルト
21. 北壁第20層と同一層
22. 北壁第22層と同一層
23. 北壁第24層と同一層
24. 北壁第26層と同一層

※1～4：【表土】
※5：【ビリ砂利舗装】
※7：【SX103埋土】
※8：【SX101埋土】
※9～19：【現代盛土層】
※20・21：【現代盛土施工時の表土層か】
※22：【中世土壇盛土層】
※23～24：【中世整地層】

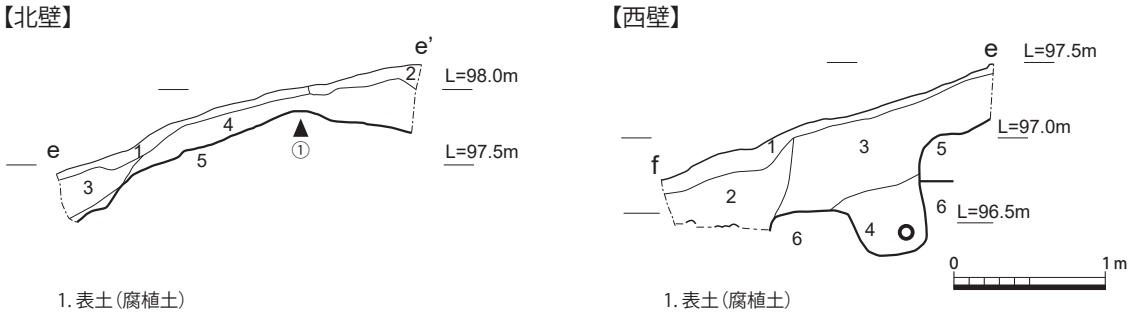
【西壁】



1. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質極細砂（締まり弱く，密度が低い）
2. 10YR8/3 浅黄橙色礫まじり粘土
3. 10YR6/2 灰黄褐色シルト質細砂（締まり弱く，密度が低い）
4. 10YR8/3 浅黄橙色礫まじりシルト質粘土
5. 2.5Y6/1 黄灰色礫まじり砂質シルト（炭化物をやや多く含む）
6. 10YR7/2 にぶい黄橙色礫まじり砂質シルト
7. 10YR8/3 浅黄橙色礫まじりシルト質粘土
8. 10YR7/4 にぶい黄橙色礫まじりシルト
9. 10YR7/2 にぶい黄橙色礫まじり砂質シルト（粘土ブロック含む）
10. 10YR6/2 灰黄褐色シルト
11. 2.5Y6/3 にぶい黄色ブロック質粘土
12. 5YR6/8 橙色粘質シルト（灰白色，白色角礫をやや多く含む）
13. 10YR7/1 灰白色砂質シルト
14. 10YR6/1 褐灰色礫まじりシルト質粘土（締まり弱い）
15. 10YR6/2 灰黄褐色礫まじりシルト質極細砂
16. 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト質粘土
17. 10YR6/3 にぶい黄橙色礫まじり砂質シルト
18. 10YR6/6 明黄褐色礫まじり粘質シルト

※1～3：【表土】
※4～10：【現代盛土層】
※11：【SX101埋土】
※12：【中世土壇盛土層】
※13～18：【中世整地層】

図13　第１トレンチａ区土層断面図（1：50）



1. 表土（腐植土）
2. 2.5Y4/1 黄灰色シルト（貼石と同時に施工された層）【表土】
3. 2.5Y4/1 黄灰色シルト【現代盛土層】
4. 2.5Y6/4 にぶい黄色礫まじりシルト【現代盛土層】
5. 7.5YR7/8 黄橙色礫まじり粘質シルト【中世土壇盛土層】

1. 表土（腐植土）
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色ブロック質粘土【SX201埋土】
3. 2.5Y4/1 黄灰色シルト【現代盛土層】
4. 2.5Y6/3 にぶい黄色ブロック質粘土【SX101埋土】
5. 7.5YR7/8 黄橙色礫まじり粘質シルト【中世土壇盛土層】
6. 7.5YR6/6 橙色礫まじり粘質シルト【中世整地層】

図14　第１トレンチｂ区土層断面図（１：50）

②b区（図12・14）

斜面表面の貼石を除去したところ，ａ区と同様に，ビニール片やガラス片等を包含する現代盛土層を検出した（図14北壁第３・４層，西壁第３層）。現代盛土層の層厚は約0.1～0.5ｍで，ａ区よりも全体的に薄い。また，西端では盛土施工後の地下埋設管掘方SX201（図14西壁第２層）を検出した。

さらに盛土を除去したところ，ａ区で検出された塩ビ管SX101の延長と，土壇を形成する中世盛土層（図14北・西壁第５層）・中世整地層（図14西壁第６層）を検出した。塩ビ管掘方SX101の規模はａ区と同様に，幅0.4ｍ，深さ0.4ｍの線掘が検出された。トレンチ内の長さは2.4ｍで，さらに西に延びる。SX101は中世盛土層と整地層を削平して施工される。特に，トレンチ南西部では中世盛土層の南裾が長さ約１ｍ，幅最大0.4ｍ，高さ0.4ｍの範囲で削られていた。

中世盛土層の検出標高はａ区よりも高いが，図14北壁①地点を頂点として，東側と南西側に傾斜が下がる。南西に向かって傾斜が下がるのは，土壇地形の本来の形状の反映と考えられるが，東側のａ区にかけても傾斜が下がるのは不自然である。したがって，中世から現在までのいずれかの段階で，ｂ区からａ区にかけて中世盛土層が削られていると考えられる。

（２）過去の写真・図面記録との照合

中世盛土が削られた時期や，塩ビ管の敷設，現代盛土の施工時期といった土地改変履歴の詳細を検討するため，過去の写真・図面記録等と照合することとした。

図15は，平成25年８月に撮影された，鹿苑寺（金閣寺）庭園第13次調査トレンチの作業風景である。第13次調査トレンチは本報告第１トレンチから数メートル南に位置する。奥に写る土壇斜面の下半部が第１トレンチ設定地点である。この写真には，第13次調査終了後の黒門便所・休憩所建設工事に伴って伐採され現在は存在しないクスノキが中央奥にある。また，第１トレンチの調査で検出された現代盛土層は確認されず，盛土工事以前の撮影と考えられる。

中央奥のクスノキの根元は，向かって左の西側が斜面に埋没し，そして，根の生え方が西から東に向かって下がることから，西から東にかけての下り勾配であったと考えられる。また，樹木の東側には発掘道具類が置かれる平坦面が斜面中腹に存在している。樹木の東側は西側よりも地形改変

を受け，標高が低くなっていたようである。

なお，図15で道具が置かれている平坦面は，令和２年に作図した測量図Aの等高線分布から，第１トレンチa区の北隣に位置する平坦面（図11）と同一と考えられる。第１トレンチ設定地点は，この写真では伐採された木が積まれており，道具が置かれる平坦面よりさらに一段低くなっていたことが分かる。

図16は，平成25年12月13日に撮影された，埋設塩ビ管SX101の掘削開始直前の状況である[11]。施工業者への聞き取りによると，塩ビ管の埋設は同日中に終了したという。写真中央部の白線が塩ビ管埋設予定箇所で，左側に写る根が，図15のクスノキの根に該当する。この段階でクスノキは伐採されている。この写真は第１トレンチａ区と同一地点を撮影しているが，右側の重機の位置と比較すると，左側の中世土壇の地形は令和２年現在の現況よりもかなり低い。そして，削られた斜面には太い樹木が生え，地表面には木の根が張り苔も生えていることから，地形改変から数十年以



図15　第13次調査トレンチ（南から・平成25年（2013）８月）



図16　第１トレンチa区塩ビ管SX101掘削開始（西から・平成25年（2013）12月13日）

上の年月を経ていることがわかる。

この地形改変の時期を検討するため，第１トレンチの周辺について，測量図Ａ，Ｂ，Ｃの位置を合わせて合成したのが図17である。昭和63年作図の測量図Ｂ（赤色）の等高線97ｍラインは，第１トレンチ付近で現況の測量図Ａよりも大きく南東に張り出している。この描画表現だけを見れば，昭和63年から平成25年の間に土壇が削られたとする解釈も可能である。

しかしその一方で，大正末期から昭和初期の作図である測量図Ｃ（灰色）には，第１トレンチ設定地点に，横穴状の凹みと思われる表現がある。この凹みは昭和63年に作図された測量図Ｂの等高線98mライン（赤色）でも表現されている。令和２年作図の測量図Ａ（黒色）では，現代盛土と貼石によって埋まっているが，貼石の位置と等高線の形状を見ると，測量図Ｃの凹み中央部に重複する位置で，土壇内側に向かってわずかに屈曲している。測量図Ａの段階の地形にも，凹みの痕跡が反映されているようである。

第１トレンチの位置と照合すると，凹み西肩の位置は，ｂ区中央部東寄りに該当する。ｂ区の調

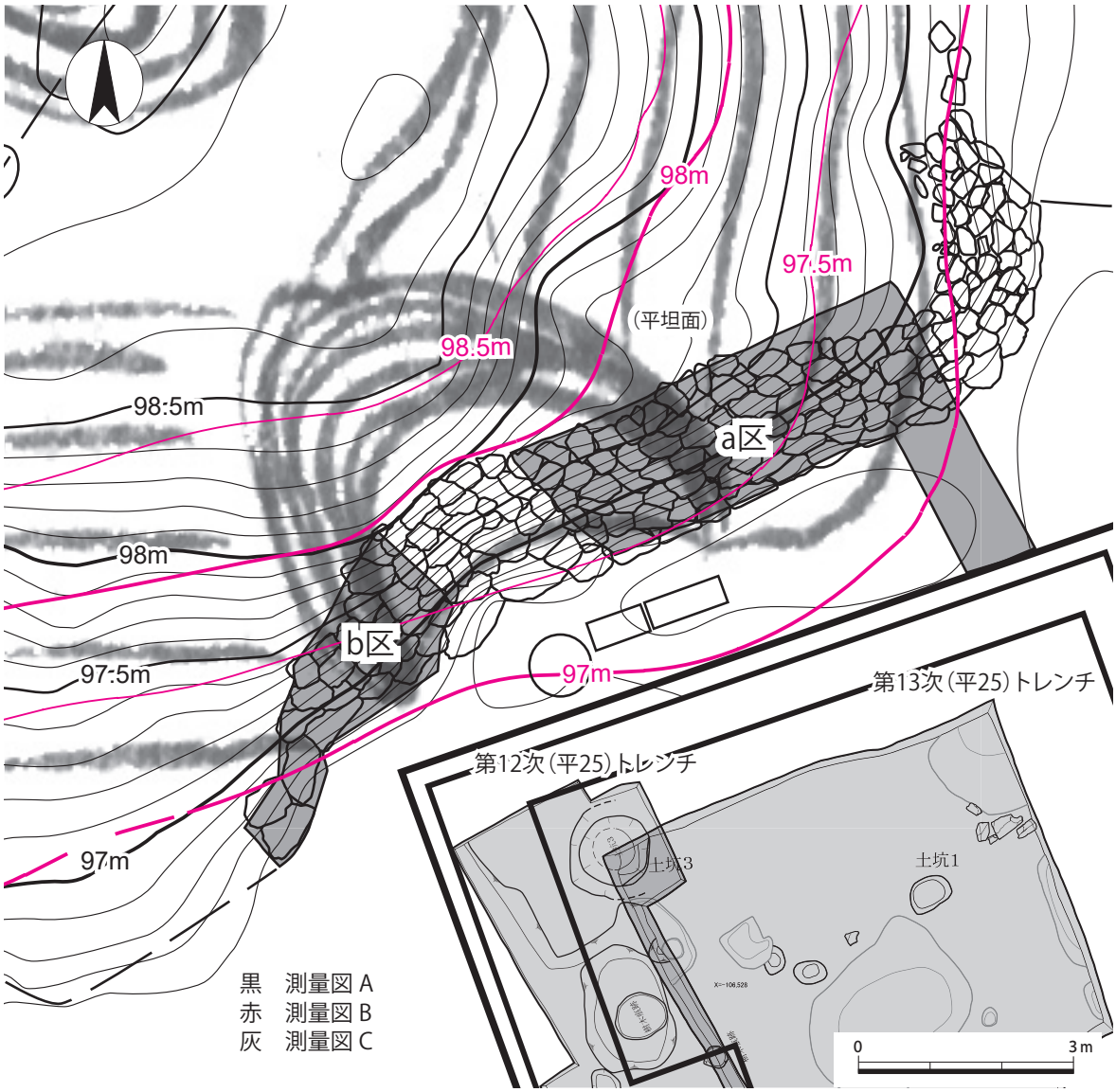


図17　測量図Ａ・Ｂ・Ｃ　第１トレンチ周辺（１：100）



図18　第1トレンチ該当部遠景（南西から・平成26年（2014）1月16日）



図19　第1トレンチ該当部近景（南西から・平成26年（2014）1月22日）



図20　第1トレンチ設定地点（東から・平成27年（2015）1月30日）

査では，中世盛土層が図14北壁①地点を頂点として東に向かって傾斜が下がると想定したが，測量図Cに表現される凹みの中央部に向かって傾斜が下がる状況を示すとすれば，発掘調査成果と新旧の測量成果を整合的に理解できる。平成25年に撮影された図15・16が示す土壇地形の残りの悪さも，この凹みを反映するのであろう。

図18は，平成26年1月16日に撮影された，土壇南隣の黒門便所・休憩所建設工事風景である。写真奥の，工事排土の置き場が第1トレンチ設定地点である。

図19は，その6日後の平成26年1月22日に撮影された写真で，図18より近い地点から撮影されている。垂直に立ち上がる塩ビ管支管が写っている（同図a）。この位置が図12の塩ビ管支管割れ口に該当する。

図20は，黒門便所・休憩所北側に消火施設が設置された，平成27年1月30日に撮影された写真である。斜面に置かれた排土は，平成26年1月段階よりも斜面にすりつけられた状態になっている。塩ビ管支管も確認できる（同図b）。

図18～20とa，b区のトレンチ調査成果から，平成25年12月または平成26年1月に開始された黒門便所・休憩所建設工事に伴って土壇に置かれた排土は，第1トレンチa，b区の「現代盛土層」と同一と考えられる。

その後，図9・10のように，図20の現代盛土の上に貼石が施された。正確な貼石の施工日は不明であるが，盛土の流出を防ぐために為されたとすれば，平成27年中に施工されたと考えられる。

（3）小結

トレンチ調査及び過去の写真と新旧の測量図の照会から可能な範囲で，中世から現代までの第1トレンチの地形改変の履歴を復元する。

まず，中世の段階に，整地及び盛土によって土壇とその周辺の地形が形成された。土師器の小片が盛土から出土しているが，詳細な時期は不明である。近世及び近代の堆積層の形成は確認されなかった。

そして，近世以降に土壇斜面が横穴状に開削される。この横穴状の凹みは，大正末期から昭和初期に作図された測量図Cに描写され，測量図Bが作図された昭和63年の段階と，図9・10が撮影された平成25年の段階にもその痕跡は地表に残っていたようである。この横穴状の凹みは明らかに人工的に掘削されたものだが，掘削の目的は不明である。形成年代も不明だが，少なくとも鹿苑寺（金閣寺）庭園の文化財指定段階には既に存在していたようである。

平成25年12月に土壇裾付近に塩ビ管SX101が埋設され，施工の際に土壇裾が一部削られた。また，塩ビ管設置以前に撹乱SX102が掘削されている。SX102の詳細な形成時期は不明であるが，上述の横穴状の凹みの残欠か，平成25年段階に生えていたクスノキの根痕と考えられる。

平成25年12月または翌平成26年1月に土壇南隣で黒門便所・休憩所の建設工事が開始され，工事の排土が斜面凹みに置かれた。平成27年1月に土壇と黒門便所・休憩所の間に消火設備が設置され，その際にSX103，104が掘削され，地下埋設管が設置された。土壇斜面に置かれていた排

土はそのまま固定され，おそらく平成27年中に，さらにその上に土が置かれ，斜面地表には貼石が施された。

（古川 匠）

5．第２トレンチの調査

土壇上の南東部の仮設通路の脇の高まりに設定したトレンチである（図5）。仮設通路工事の事前に実施された平成28年度の第16次1区調査では中世土壇盛土層及び土壇上面の被熱面が検出され，この遺構を保護することを前提に設計を変更して工事が実施されている。第16次調査第1区の範囲内の高まりに本調査の第２トレンチを設定し，平成28年度に保存の対象とした遺構がその後，適切に保存されているかを確認することを主目的に調査を実施した（図21）。

調査着手前の第２トレンチ設定地点は，上面が苔で覆われ，側面は堰板で土留めが施された状態であった（図22）。

（１）トレンチ調査

地表面の苔と側面の堰板を除去したところ，盛土と真砂土で遺構面が覆われ，保護された状況を確認した（図23）。

さらに，真砂土層の直下で中世の被熱面，土壇盛土層を検出した（図24）。中世の被熱面及び土壇盛土層は平成28年度第16次調査段階の記録と同一の状態である。

被熱面は硬化し，色調は赤褐色に変色している。火災時の地表面と考えられ，かなりの長時間にわたって火災に伴う高熱を直に受けたようである。被熱が顕著であることから，大規模建造物の火災と考えて矛盾はないであろう。

中世土壇盛土層は，盛土が細かい単位で密に施工されている。現在の盛土層は脆く軟質になっているが，この地点の盛土層断面は土壇上面の地形改変によって長期間露出した状態であったと考えられる。堅固に突き固められた基壇遺構であっても，保存状態が良好でなければ盛土が軟化する事例があるため，第２トレンチ盛土層が現状で軟質であっても，施工された段階には堅固な堆積層であった可能性はある[12)]。

（２）過去の写真記録との照合

第２トレンチの現在の状況と，平成28年度第16次調査が終了し，被熱層を真砂土で被覆する作業中であった平成28年11月19日撮影の図25と現在の状態には，違いが認められない。したがって，第16次調査が終了した段階の状態のまま，遺構は保護されていると考えられる。

（３）小結

第２トレンチの調査の結果，平成28年度第16次調査が終了した段階の状態を保ち，遺構は保護されていたことを確認した。

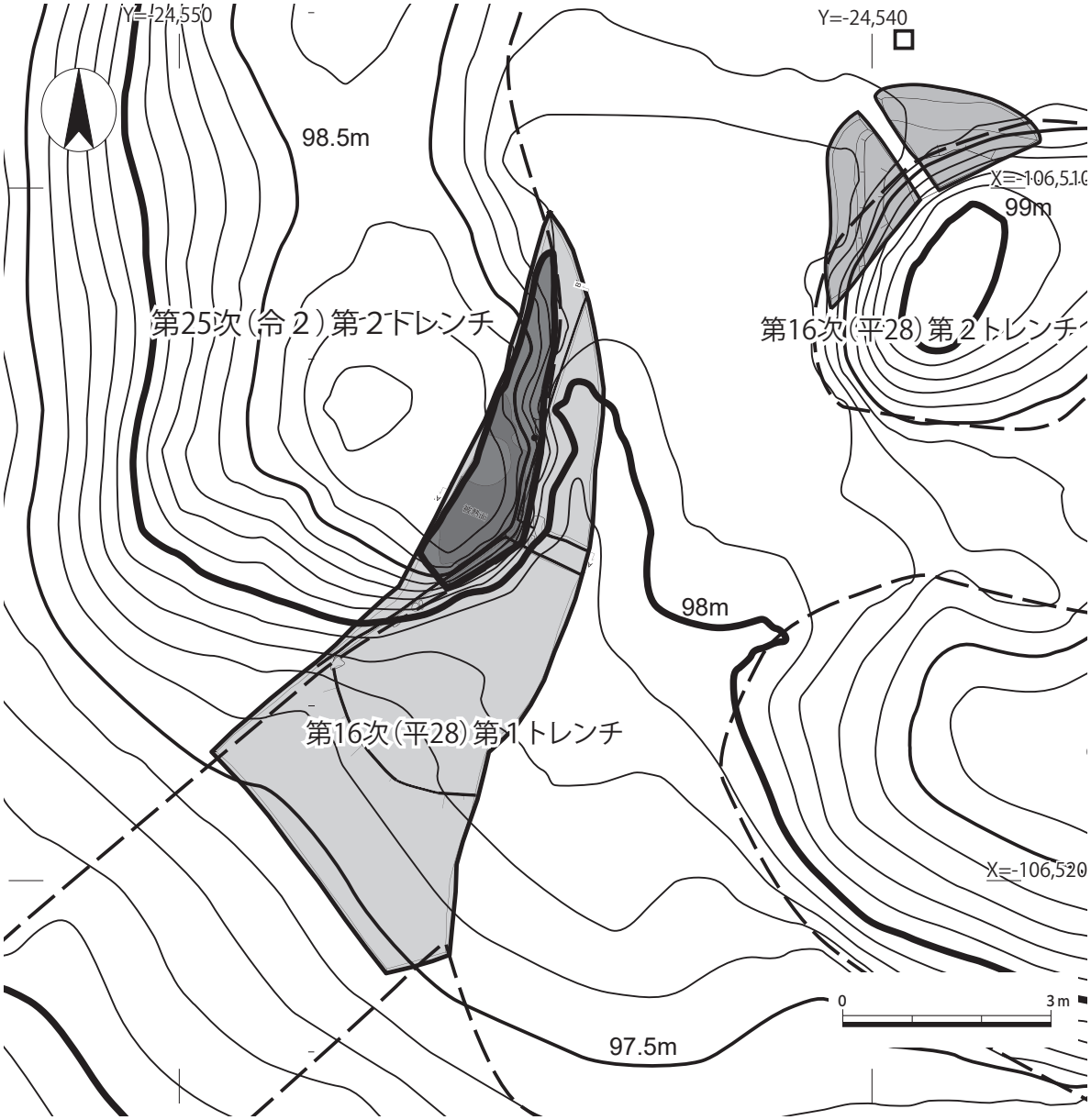


図21　令和２年度　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）第２トレンチ位置図（１：100）



図22　第２トレンチ地点　調査着手前
（北東から・令和２年（2020）８月25日）



図23　第２トレンチ地点　苔・堰板除去状況
（南東から・令和２年（2020）９月14日）

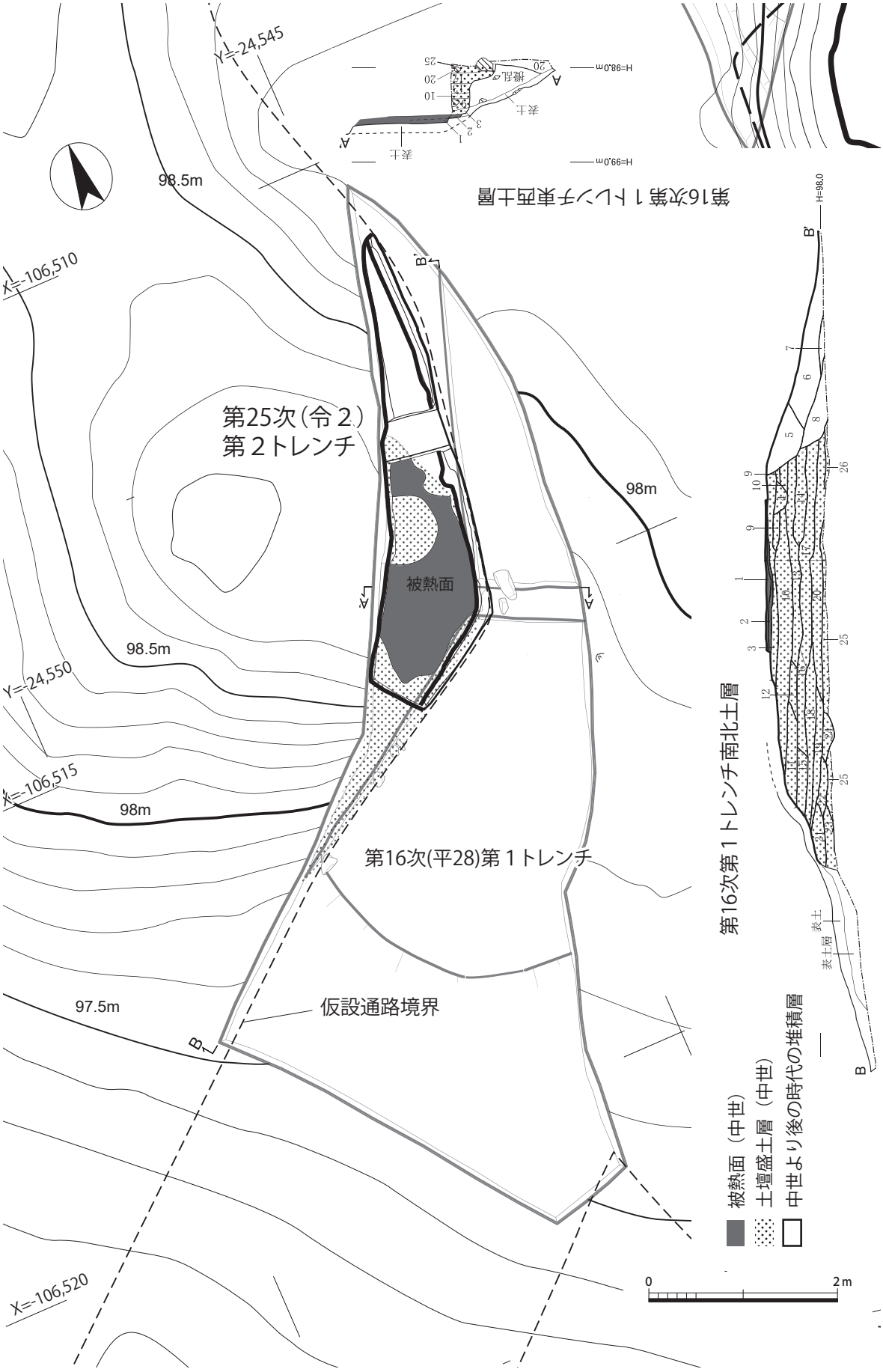


図24　　第２トレンチ平面図・土層断面図（１：60）

また，土壇盛土の堆積状況について，外部有識者を含めて検討した。第16次調査報告書[13]では，堆積が密ではなく軟質であること等から，「大重量を支える基壇とは考えにくい」と評価されているが，本調査での再検討の結果，堆積はむしろ密で，土質の柔らかさは後世の風化によるものと判断された。



（古川 匠） 図25　第２トレンチ地点　平成28年度調査終了状況（北東から・平成28年（2016）11月19日）

６．土壇地形の改変

先述のとおり，今回の調査対象となる土壇の測量図は，A（令和２年作図），B（昭和63年作図），C（大正末～昭和初期作図）の三種類が存在する。土壇上面の「既存園路・既存広場」と呼称される通路等がどの段階で成立しているかを検証するため三種類の図面を比較し，近代以降の土壇地形の改変履歴の復元を試みる。

（１）測量図Ａ・Ｂの比較（図26・27）

測量図Ｂ（図26）は，0.5m間隔の等高線で作図されている。土壇上面の標高は最も高い等高線が99.0mであるが，中央部西寄りには98.5mの等高線があり，測量図Ｂ作図段階には凹みが存在したようである。この凹みについては，明治時代に考古学者某が発掘した痕跡であるという[14]。

測量図Ａと測量図Ｂを合成し比較する（図27）と，測量図Ａの等高線が0.1m間隔であるのに対し，測量図Ｂは0.5m間隔であるため，測量図Ａに表現される土壇上面南東部の起伏は測量図Ｂでは表現されていない。測量図Ａでは土壇上面北西部に北に抜ける通路が確認されるが，測量図Ｂには存在しない。測量図Ａと測量図Ｂの等高線は概ね同じ場所に位置するが，土壇南東部に限り，測量図Ｂは測量図Ａよりも明らかに南に張り出している。第１トレンチの発掘調査及び過去の写真記録等の照会から，土壇南東隅の実際の裾の位置は，測量図Ｂの97ｍラインより北側であったと考えられる。

（２）測量図Ａ・Ｃの比較（図28・29）

測量図Ｃ（図28）は，測量精度は低く，標高の表示も無いが，土壇地形の起伏と形状を詳細に表現しており，作図者が地形を丁寧に観察していたことが伺い知れる。

測量図Ａと比較すると（図29），測量図Ｃは，外形を正方形に表現していることが測量図Ａと共通する。測量図Ｃは上面の起伏を丁寧に描写しているが，起伏の位置は測量図Ａとほぼ合致する。測量図Ｂでは表現されなかった土壇上面北西部の南北方向の凹みは，測量図Ｃには表現されてい

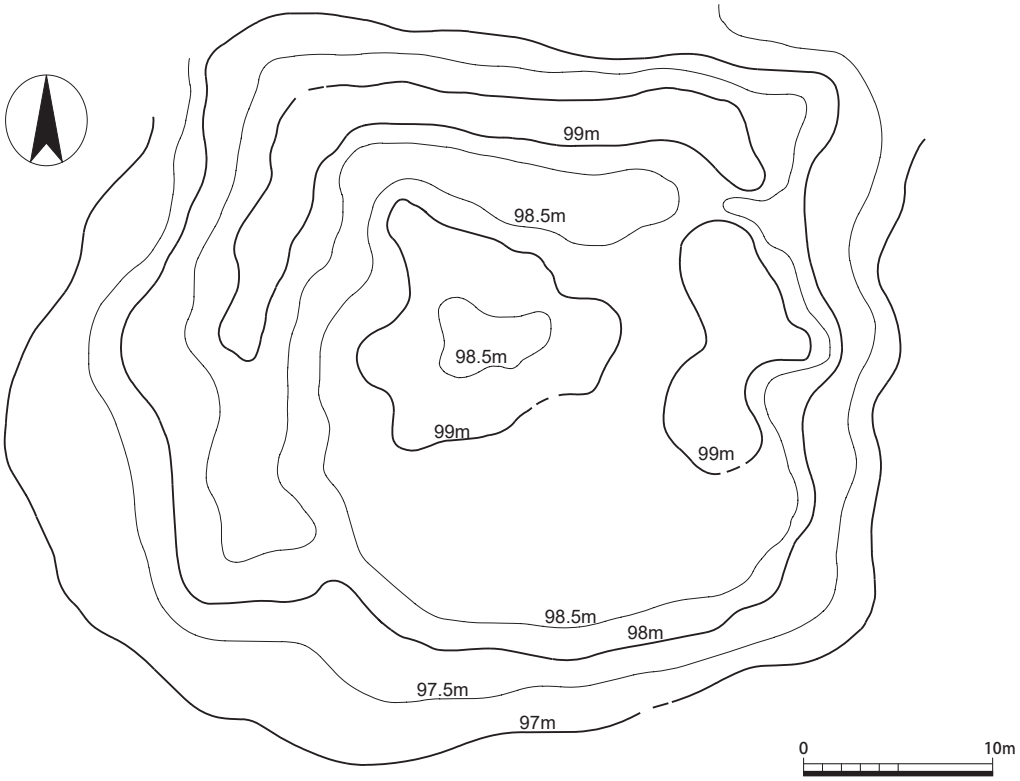


図26　測量図B　土壇部分（1：400）

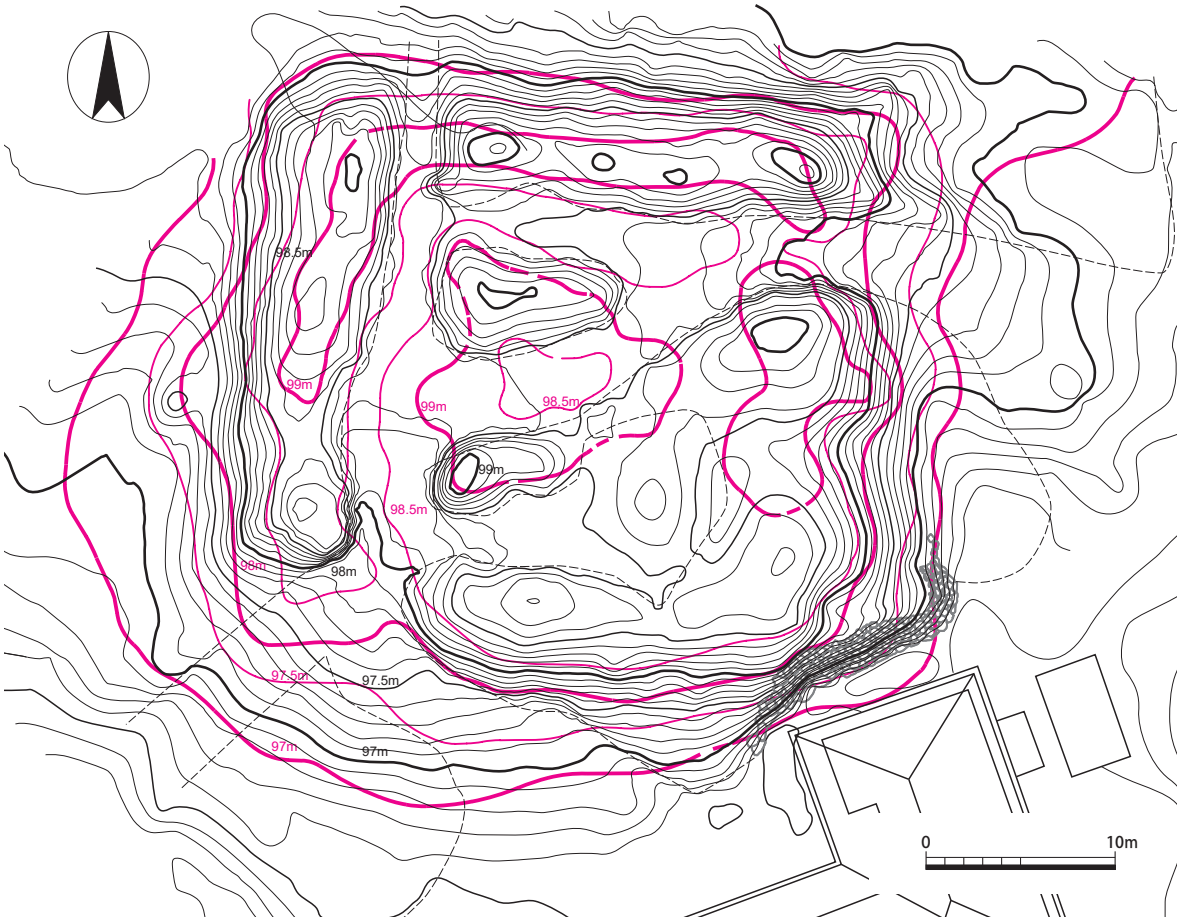
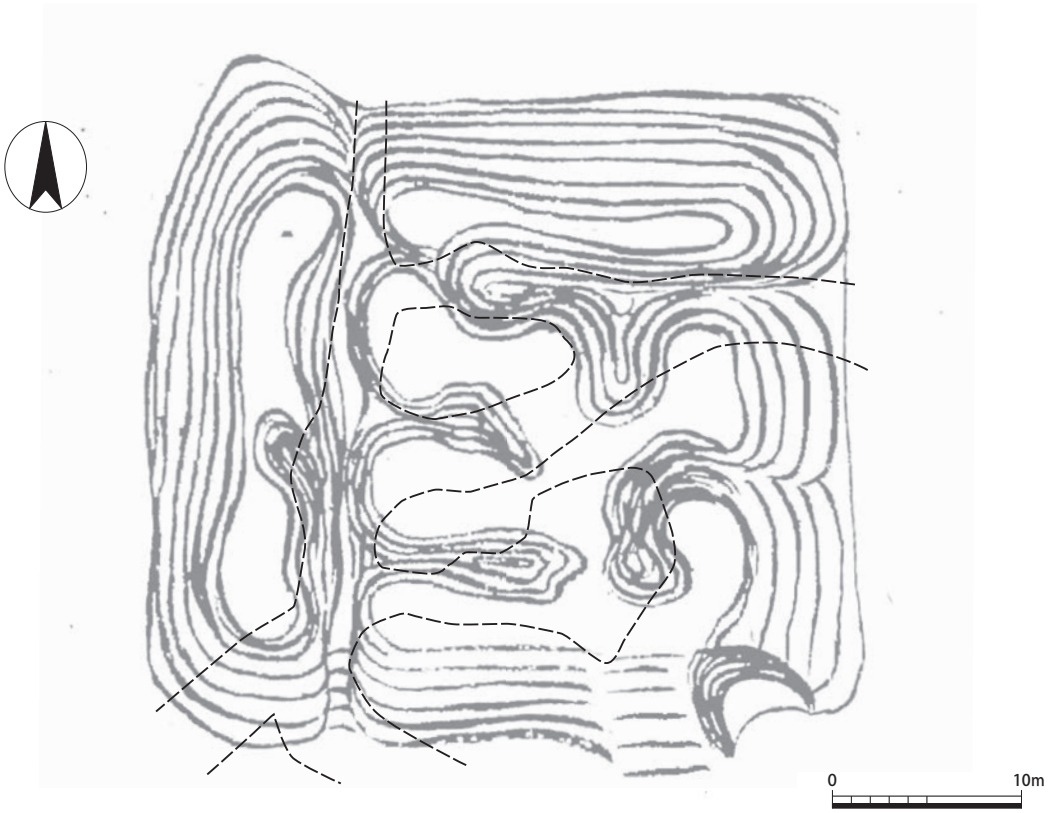


図27　測量図A・B　合成（黒・測量図A　赤・測量図B，1：400）



点線・・・現在の園路

図28　測量図C　土壇部分（1：400）

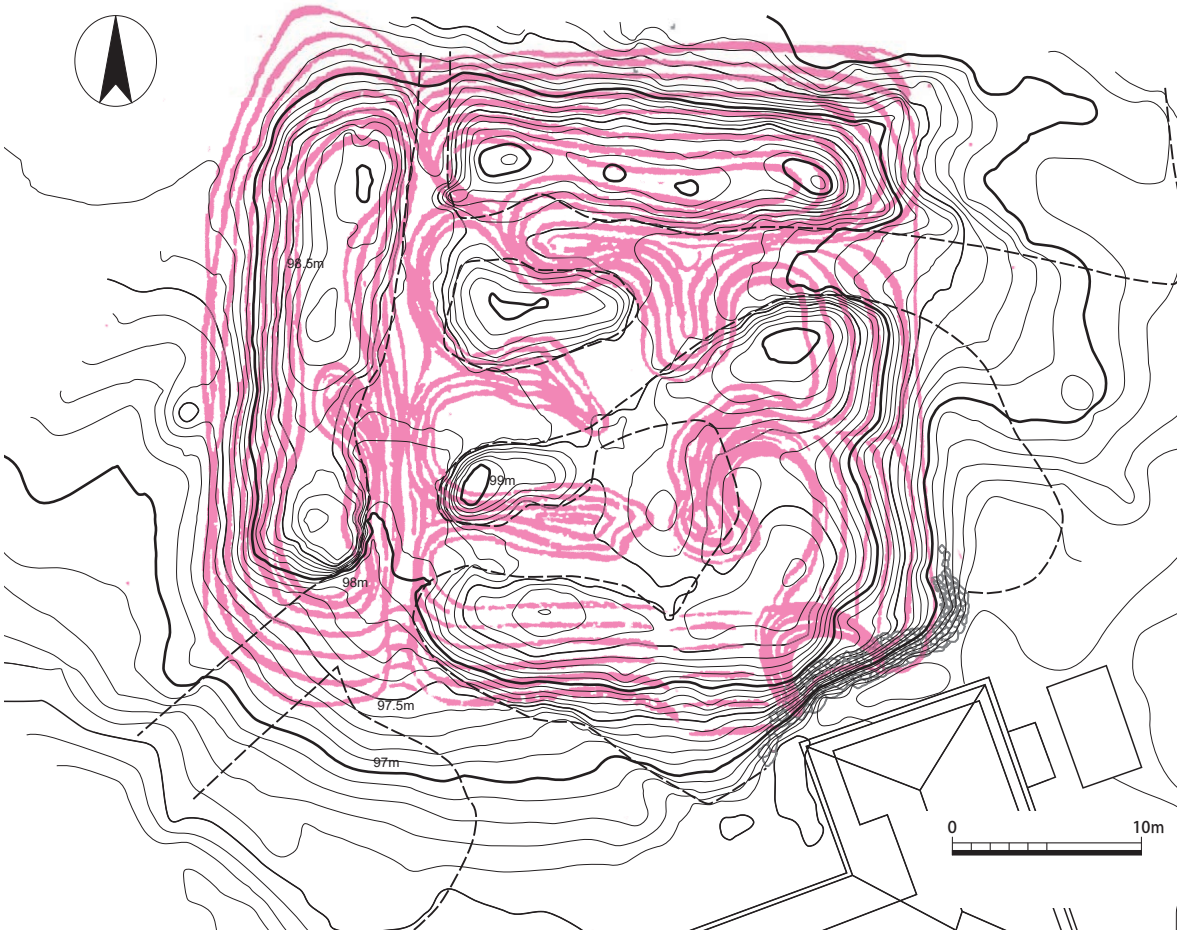


図29　測量図A・C　合成（黒・測量図A　赤・測量図C，1：400）

る。また，測量図A，Cの比較から，土壇上面に現存する通路や広場の位置は測量図Cの段階に既に存在した起伏の凹部に形成されたことも看取される。さらに，測量図Cは南東隅部に横穴状の凹みを表現するが，第1トレンチの発掘調査と写真記録から，この凹みが実在したことが判明している。

測量図Cの作成年代は測量図Aよりも90年以上遡るが，光波測距儀による電子測量から作図した測量図Aに表現される微地形を正確に捉えて作図している。

（3）小結

上記の検討から，測量図Aと測量図Cは微細な地形を捉え，地形表現がほぼ合致するのに対し，測量図Bは境内の建物や通路は詳細かつ正確に描写するものの，土壇の地形把握はやや粗く，微細な地形が表現されていない箇所があると考えられる。

測量図Cの土壇上面には複数の起伏が存在し，起伏の形状は令和２年作図の測量図Aと近似した地形であったことが判明した。測量図Cが作図された段階で，すでに土壇上面は大規模な改変を受けていたと考えられる。測量図Cから測量図Aまで90年以上の年代差があるため，その間，自然崩落等により起伏が変形している可能性はあるが，土壇上面の通路，広場は，基本的に土壇上面の起伏を利用して作られており，顕著な地形改変は受けていないようである。

（古川 匠）

7．遺　物

（1）遺物の概要（表２）

本調査では検証発掘という性格を踏まえ，調査中の出土品については時期や遺存状態などによる選別等はせず，そのまま取り上げて遺物として保管することとした。前章の通り，本調査では現代盛土や撹乱の直下で土壇構築土層を確認している。また，土壇構築土については保存を前提として部分的な断割りしか実施していない。そのため，本調査で確認した出土品にはごく少数のみ中世の遺物が含まれるが，それ以外の大半は現代を中心とした時期に属する。

出土量は合計でコンテナ１箱分あり，種類としては土師器・須恵器・瓦のほか，コンクリート・スレート・ガラス・塩化ビニール管・プラスチックなどがある。

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
鎌倉～室町時代	土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦		土師器2点・須恵器3点 灰釉陶器1点・軒丸瓦1点 中世瓦9点		
近現代以降	コンクリート・スレート・ガラス 塩化ビニール管・陶磁器・瓦等		計121点		
合　計		１箱	計137点（１箱）	０箱	０箱

（2）出土遺物（図30）

第1トレンチ

本調査の出土品の大多数が第1トレンチより出土した。ほぼ全てが現代盛土や撹乱，埋設管掘方などから出土したものである。これらの中には中世に遡る遺物も一部含まれているものの，図化に耐えうるのは図30の3点程度しか認められない。なお，小片のため器形・時期などは断定できないが，中世に遡る可能性がある土師器片が第1トレンチa区の西端に設けた断割りの土壇構築土層より1片のみ出土している。以下，実測した遺物について述べる。

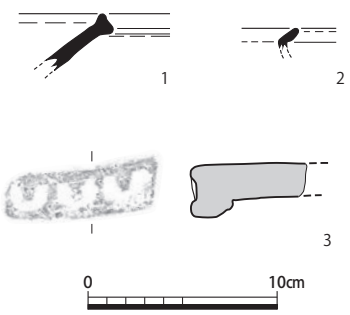


図30　出土遺物実測図（1：4）

1は東播系須恵器の鉢の口縁部である。小片のため径等は復元できない。第1トレンチa区の現代盛土層より出土した。2は灰釉陶器の口縁部である。小片のため器形を断定できないが，器壁が薄いことから小型壺などと考えられる。第1トレンチa区北壁19層より出土した。3は折曲技法で成形された剣頭文軒平瓦である。瓦当面の半分程度が遺存している。鎌倉時代のものと考えられる。第1トレンチb区の埋設管掘方SX101より出土した。

第2トレンチ

平成28年の発掘調査後の埋戻し土や，それ以降の盛土層より染付などが少量出土したのみである。

（熊井 亮介）

8．まとめ

（1）課題となった現状変更について

文化庁からの指導・助言により，金閣寺境内の東部に位置する土壇に影響を与えたとされる3つの行為について，今回の検証発掘調査の成果から結論を述べる。

①石垣の築造

石垣の築造とされた行為は，土壇南東部分にある高さ約2m，延長約16mの範囲にわたって一抱えほどの石を敷き並べた行為である（図11）。本来，石垣とは不同沈下を防ぐために基底部を揃え，崩壊しないように荷重のバランスを考えて石材を据え付け，積み上げていくものであり，石材の後方には排水や崩落防止のために裏込めを，石材相互の隙間には間詰石を詰めていく。しかしながら，今回指摘された行為は，基底部の不同沈下対策工事がされているわけでもなく，荷重を考えて石材が据えられているわけでもなく，裏込めと呼べるほどのものも詰められておらず，後述する盛土の流出を抑えるために盛土の表面に石を貼り並べたものであり（図13），土壇を削って据えたものではないことが明らかとなった。

②通路の設置

土壇に設置された通路については，当時施行中であった黒門便所・休憩所の工期短縮と参拝者への安全対策の必要性により，迂回路として計画されたものであり，平成28年6月29日付けで宗教法人鹿苑寺代表役員から，通路面積約202.65㎡，竹柵約130ｍ，盛土の最大厚約0.4ｍで申請され，京都市が許可している。しかし，平成28年10月18日付けで土壇上にある既設通路の幅が狭く，参拝者の安全確保が難しく，車いすが通れないことから，勾配を１／15以下，幅を５m以上確保する計画がなされた。その際，盛土だけによる施工はできないため，土壇の一部で切土（10.57㎡）が発生せざるを得なくなり，文化庁の承認を得るために計画変更書が提出されたものである。この現状変更に伴う発掘調査により，被熱面と土壇状の盛土が確認されたことから，被熱面を保護するために通路幅を５ｍから3.8ｍに縮小された上で施工されている（図22）。

今回の検証発掘調査により，発掘調査終了時と全く同じ状況であり（図23），発掘調査終了後の仮設通路設置に伴い計画以上に土壇が破壊されていないことがわかった。

③既存園路

既存園路は，平成28年の現状変更申請時に土壇上に存在した「既存広場」「既存通路」「既存園路」をまとめた申請図面上の呼称である。問題はこれが無許可で土壇を削って造られたものなのかどうかであるが，少なくとも昭和10年（1935）以前で，大正11年（1922）から昭和5年（1930）の間におおむね限定することが可能である測量図Ｃに描かれた土壇部分の等高線の谷部分と，これらの施設の位置が概ね一致すること（図28）から，測量図Ｃ時点の旧地形を利用して園路の体裁が整えられたものと考えられる。

（２）土壇に影響を与えた現状変更について

①埋設管による現状変更

今回の発掘調査により，現状変更許可申請がなされていなかった排水管敷設工事を確認した。この未申請の現状変更は，平成25年9月10日付けで宗教法人鹿苑寺代表役員から申請された建物の付帯工事に伴うものであった。この現状変更許可申請は，同日付けで申請された黒門便所・休憩所の建替えに伴い，施設の閉鎖が長期間に及ぶことから，参拝者の利便性を図るために必要最小限の簡単な仮設建物を計画したものであった。仮設建物の構造は，木造・平屋建て・切妻造りで，建築面積は9.9㎡であった。本来であれば，この仮設建物に伴う電気・ガス・上下水道等の埋設管の管路図等も提出されるべきものであるが，失念していたものである。埋設管敷設時の施工写真によると，土壇裾部を避けるように経路設定がなされているように見えるが，実際は，土壇の一部を削って設置されており（図12・14），現状変更申請が適切に行われていれば京都市文化財保護技師が立会調査時に確認できていたと考えられる。

なお，今回の調査区内で確認した排水管は，埋め戻し時に除去した。

②黒門便所に伴う盛土による現状変更

また，平成25年9月10日付けで宗教法人鹿苑寺代表役員から申請された黒門便所・休憩所の建

替えに伴う現状変更申請では，計画に先立ち２回に分けて行われた事前発掘調査成果に伴い遺構の保存を前提としたものであり，次の４つの現状変更が含まれていた。

・既存便所・休憩所の除却（木造平屋建て，建築面積53.94㎡）

・黒門便所・休憩所の新築（木造平屋建て，建築面積168.57㎡）

・樹木の伐採・移植

・電気系統配管埋設

この現状変更，特に新築工事時の基礎掘削，移植時の根株保護のための掘削，埋設管の掘削によって生じる排出土を場外搬出するのではなく，北側の土壇の元々低平になっていた部分に盛土するという工事が行われていたことを確認した（図12・13）。この盛土の強度は弱く，黒門便所・休憩所と土壇の間には鹿苑寺境内の防災設備が設置されたことからも，修景と防災設備及び黒門便所・休憩所への盛土流出防止も兼ねて貼石がなされた可能性が高い。この行為は直接土壇を破壊する行為ではないものの，土壇の景観に影響を与えており，今後，土壇の保存方法を考えていく必要がある。

（３）検証発掘調査成果について

以上，今回の検証発掘調査により，申し立てされた①石垣の築造，②通路の設置，③既存園路の三つについて，現状変更許可申請の範囲を超えて土壇に影響を及ぼしていないことを確認した。一方で，現状変更許可申請がなされずに工事が行われた結果，土壇の一部が削られていたこと，平成25年以前にあった土壇の景観に影響を与える盛土がなされていたことを確認した。

今後は，所有者だけでなく維持管理に携わる様々な事業者に対して，史跡・名勝の重要性と現状変更に必要な手続き等の周知をしていかなければならない。

（石崎 善久・馬瀬 智光）

註

１）　山田邦和「中世都市京都の変容」『京都都市史の研究』吉川弘文館，2009年。

２）　『政治要略』弘仁五年十月十日条には，北山野の四至は「東限園地司東大道，南限宮城以北，西限野寺東，北限霊源寺」とある。

３）　『増鏡』「第五 内野の雪（仁治三年）」（『國史体系』第二十一巻下）。

４）　３）とおなじ。

５）　『臥雲日件録抜尤』文安五年八月十九日条。

６）　東　洋一「西園寺四十五尺瀑布瀧と北山大塔・上」『研究紀要』第７号，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2001年。

７）　北山大塔については『大乗院日記目録』応永十一年四月三日や『看聞日記』応永二十三年正月九日条，『醍醐寺文書』二百一函，『満済准后日記』応永二十三年正月九日条などに記述がみられる。なお，北山七重大塔の造営過程については，早島大祐『室町幕府論』講談社2010年で触れられている。

８）　丸川義広ほか『特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告

2015-9，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2016年。

9） 測量図Cの大目盛りは，現地公開資料では「５丈」と記述したが，その後の再検討の結果，本文の記述のとおり，「10間」が妥当と見解を改めた。また，現地公開資料では調査次数を「第21次」と表記しているが，その後の調査次数の再整理により，「第25次」となった。

10） 通常，石材を積み上げて築造した工作物を「石積」あるいは「石垣」と称する（文化庁文化財部記念物課2014）が，土壇南東部の構造物は，石材が積まれるのではなく，斜面に敷き並べられる構造であった。したがって，上記の「石積」，「石垣」の定義には該当しないと判断される。むしろ，弥生時代の「貼石墓」と近い構造であるため，本稿ではこの遺構を「貼石」と称する。

11） この図16は，塩ビ管施工の詳細を調べるため，施工業者から提供を受けた写真である。

12） 中世盛土層の堆積状況の評価については，外部有識者の菱田 哲郎氏（京都府立大学文学部教授），箱崎 和久氏（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部長）から御教示を得た。

13） 布川豊治『特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016－13，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2017年。

14） 東　洋一「北山七重大塔の所在地について（上）」『洛史　研究紀要』第11号，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2017年。

参考文献

東　洋一「西園寺四十五尺瀑布瀧と北山大塔・上」『研究紀要』第７号，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2001年。

東　洋一「北山七重大塔の所在地について（上）」『洛史　研究紀要』第11号，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2017年。

文化庁文化財部記念物課『石垣整備のてびき』，2014年。

※なお，本報告掲載の写真等の転載については京都市文化財保護課に問い合わせ，許可を得ること。ただし，京都市に著作権が属さないものは許可しない場合がある。

Ⅳ　植物園北遺跡

１．調査経過

調査地は，左京区松ヶ崎芝本町に所在し，周知の埋蔵文化財包蔵地「植物園北遺跡」に該当する。当地において個人事業主による小規模共同住宅の建設が計画され，令和元年12月11日に文化財保護法第93条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。当該地の周辺では，南東敷地で平成18年に立会調査によって，弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴建物が６棟密集する状況を確認し，東隣接地でも平成19年の発掘調査によって，古墳時代から奈良時代の竪穴建物４棟を検出するなど，極めて密に遺跡が展開することが判明している。当課はこれらの調査成果から，当該地にも重要遺構が広がる可能性が高く，記録保存のための発掘調査が必要であると判断し，国庫補助による発掘調査を実施することとなった。発掘調査は令和２年４月27日に開始し，令和２年５月19日に現地での全ての作業を完了した。調査途中，検出した掘立柱建物の全体を確認するため，調査区の拡張をおこなった。実働は16日間で，最終的な調査面積は73㎡である。

２．遺　跡

（１）立地と歴史的環境

植物園北遺跡は，京都盆地北部に位置し，賀茂川扇状地上に広がる集落遺跡である。東西約２km，南北約1.5kmにわたる大規模遺跡であるが，この範囲内には複数の異なる時期の集落遺跡を

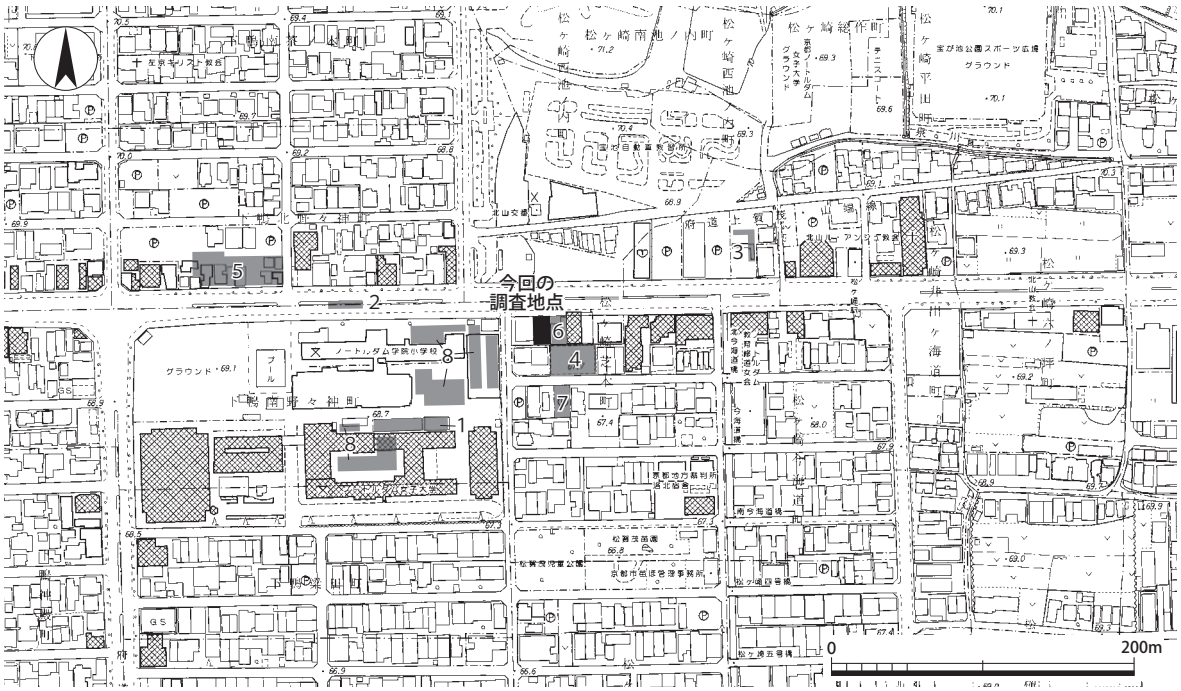


図１　調査地と周辺調査位置図（1：5,000）



図２　調査前全景（北から）



図３　作業風景（北西から）

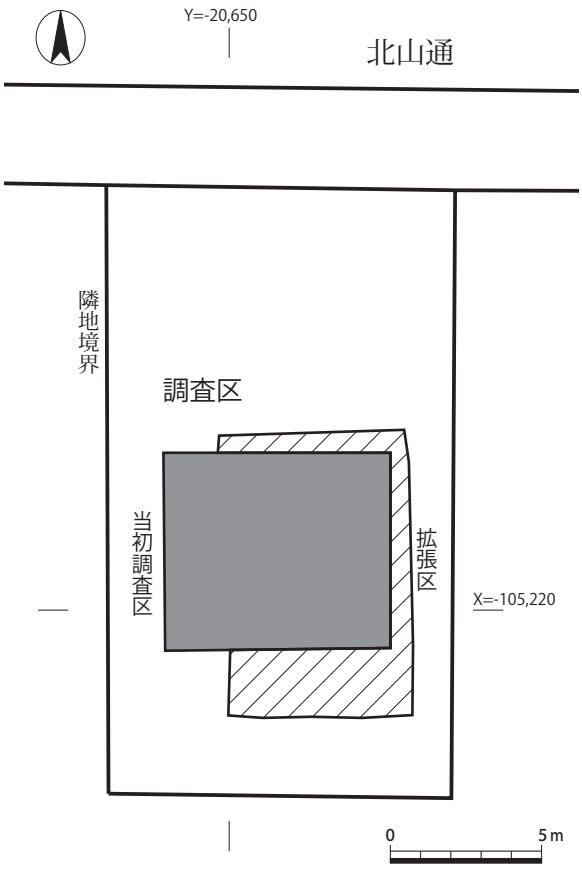


図４　調査区配置図（1：250）

含み込む。遺跡台帳には弥生時代～古墳時代，平安時代の遺跡として登録しており，これらが遺跡の中心的な時期ではあるが，これまでの調査で縄文時代から室町時代までの各時代の遺構・遺物を確認している。特に古墳時代前期の遺跡は今回の調査地を含む遺跡南東部一帯と上賀茂蝉ヶ垣内町など遺跡中部から北西部にかけての一帯に密に広がり，遺跡全体で100棟以上の竪穴建物が確認されてきた。地下鉄北山駅の南側，下鴨半木町一帯では相対的に奈良時代から平安時代の遺構密度が高く，上賀茂神社南東に位置する上賀茂小学校一帯では，上賀茂神社に関連する社家町と見られる鎌倉時代から室町時代ごろの遺構も確認している。また，周辺には西山古墳群などの群集墳や，芝本瓦窯跡，深泥池窯跡など，奈良時代から平安時代の生産遺跡が展開し，植物園北遺跡との関連が窺われる。

（２）周辺の調査（図１・５）

今回の調査地南東の敷地で，平成18年度に実施した立会調査に際し，古墳時代前期の竪穴建物を６棟検出している（図１-４）。これにより，周辺に古墳時代の遺構群が密に展開し，かつそれらが良好に遺存していることが判明し，比較的小規模な建築計画においても発掘調査を実施している。調査地の東隣接地では，平成19年に発掘調査を実施し，古墳時代の竪穴建物３棟及び飛鳥時代から奈良時代の竪穴建物１棟を検出している（同６）。また，地点４の南側では平成23年に発掘

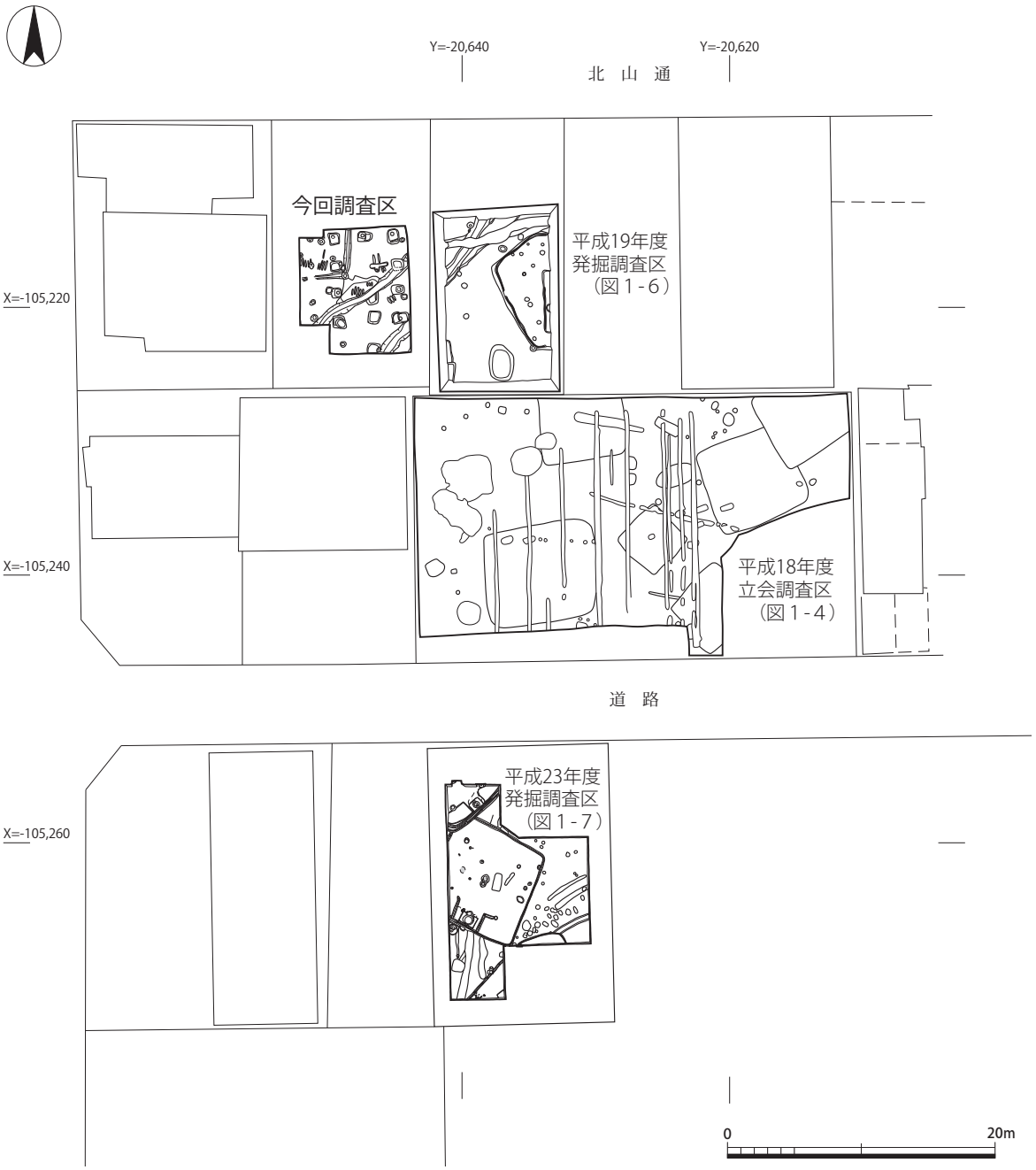


図５　今回調査区と周辺調査区（１：500）

調査を実施し，古墳時代の竪穴建物を４棟検出している（同７）。西側に目を転じると，ノートルダム学院構内でも古墳時代の竪穴建物，掘立柱建物を多数検出している（同１・８）。奈良時代以降の遺構は多くないが，今回の調査地に近い敷地北東部では奈良時代の掘立柱建物を検出している。柱掘方は0.6～0.9ｍを測り，ほぼ正方位の並びで東西１間分，南北２間分を検出している。柱列は調査区外の西側へさらに続くことから東西棟であると推定できる。

以上のように，周辺では古墳時代前期を中心として極めて高い密度で竪穴建物を検出しており，同時期がこの一帯の集落の盛期であったことが分かる。また，奈良時代以降は全体としては遺構密度が希薄になりながらも，大型の掘方を有する掘立柱建物を検出していることは注目に値する。

3．遺　構

（1）基本層序（図6）

調査前の現地表面はおおむね平坦で，標高68.0～68.1ｍであった。調査区全体として，建物解体時の攪乱の影響により，本来の層序が遺存する地点はわずかである。最も攪乱の影響の少ない地点では，現代盛土が約0.2ｍ，旧耕土と床土が約0.05ｍ前後ずつ，標高67.7～67.8ｍほどで基盤層に至る。基盤層はにぶい黄橙色シルトあるいはにぶい黄褐色砂礫で後者が前者の上に堆積する。にぶい黄褐色砂礫層が堆積していない範囲もあり，遺構検出面では砂礫とシルトが併存する。なお，図6は調査区拡張前段階の北壁・東壁の状況である。

（2）遺構（図7・表1）

遺構は総計29基を検出した。なお，遺構番号を付けたものの，遺構認定を改めたものについては欠番とし，番号を付け直してはいないため，遺構番号の最大数（37）と遺構数は一致しない。ま

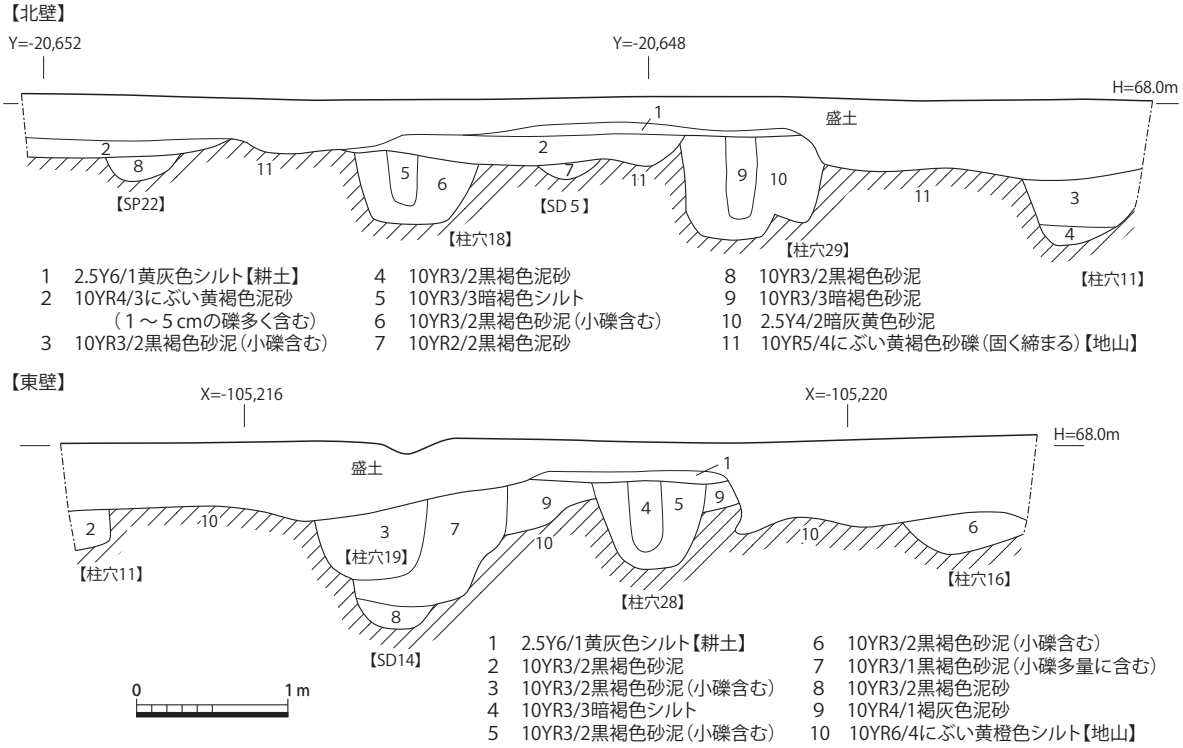


図6　調査区（拡張前）北壁・東壁断面（1：50）

表1　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
古墳時代	溝	
飛鳥時代	溝, 竪穴建物, 柱穴	
奈良時代～平安時代	掘立柱建物, 柱穴	

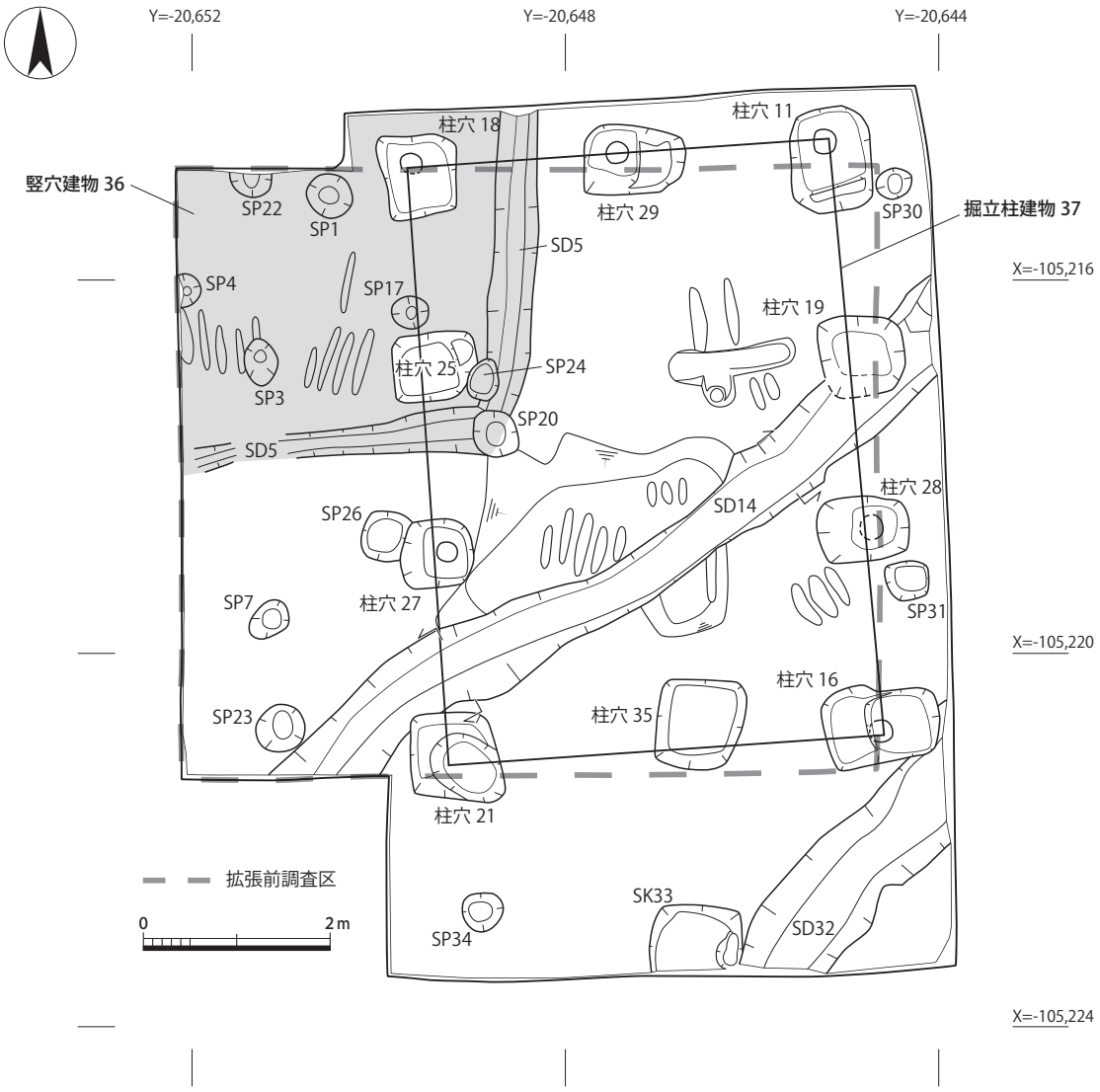


図７　調査区平面図（１：80）

た，複数の遺構が１つの遺構を構成する竪穴建物と掘立柱建物が１棟ずつ存在し，これらには整理作業段階で遺構番号36，37を付した。検出遺構はおおむね古墳時代から平安時代に属する。以下，主要なものについて報告する。

竪穴建物36（図８）

調査区北西部で検出した。南辺と東辺の溝（SD５）を検出し，これらが壁溝に当たると推定したことから，竪穴建物の可能性が高いと判断した。南辺，東辺の遺存部から，東西3.9ｍ以上，南北3.6ｍ以上の規模となる。床面は削平されているが，壁溝は底部付近が残存しており，比較的残りの良い東辺では深さ0.2ｍ程度であった。南辺は撹乱の影響もあり，一部が途切れている。SP１・３・４・17は埋土の土質がほぼ同じであり，これらが竪穴建物に伴う柱穴の可能性があるが，断定できない。

掘立柱建物37（図９）

調査区のほぼ全体にわたって検出した南北３間，東西２間の掘立柱建物で，東西南北の全辺を確認した。柱当たり中央間で測定し，南北約6.4ｍ，東西約4.4ｍの規模である。柱間は約2.2ｍであ

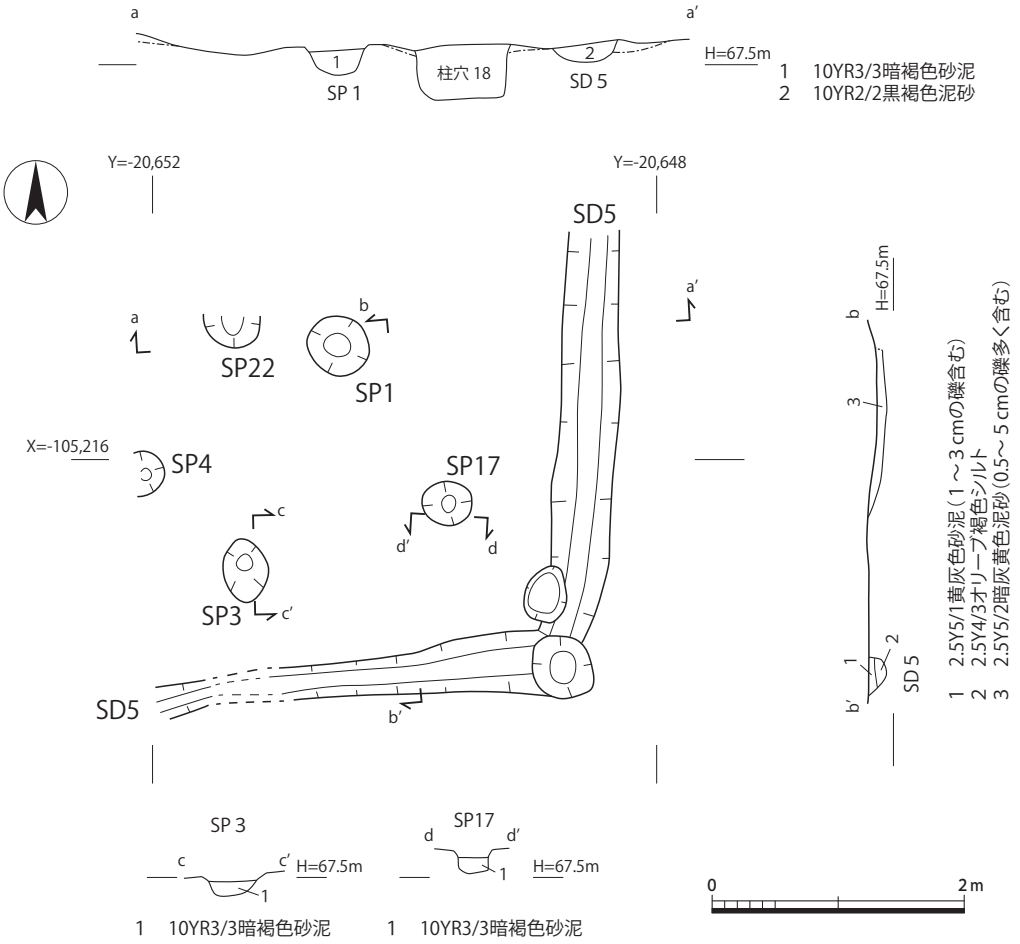


図８　竪穴建物36平面図・断面図（１：60）

るが，東西両辺の中央２基の柱穴間がやや狭く，約２ｍである。主軸は北で西に３°程度傾く。

柱穴はそれぞれ１辺0.7～1.0ｍ程度の隅丸方形で，深さ0.4～0.6ｍ程度であるが，南辺中央の柱穴35のみ浅く，0.2ｍ弱であった。柱当たりは柱穴18，29，11，27，28，16で検出している。いずれも直径0.2～0.25ｍ程度である。柱当たり下端までを，小礫を含んだ土で固め，それより上部は単一の土で埋め戻したもの（11，28，16）と土質の異なる複数種の土を重ねるように埋め戻したもの（29，27）を確認した。柱の抜き取り痕跡は確認できなかった。各柱穴の埋土出土遺物は多くないが，最も新しいものは平安時代前期に属する。

SD14（図10）

調査区東辺中央部から南西隅方向へと伸びる溝で，西側で蛇行しながら調査区外へと連続する。断面は底部が平坦な逆台形状を呈し，最も残りの良い箇所で深さ約0.8ｍ，幅約0.9ｍであった。埋土は西側セクション，東側セクションともに３層に分層でき，わずかながら西に向けて傾斜する。埋土からの遺物は多くないが，古墳時代前期や飛鳥時代の土師器などが出土した。平成19年度調査（図1-6）で検出した溝39と，検出位置や断面形状，出土遺物の年代などが一致しており，連続する遺構である可能性が極めて高い。

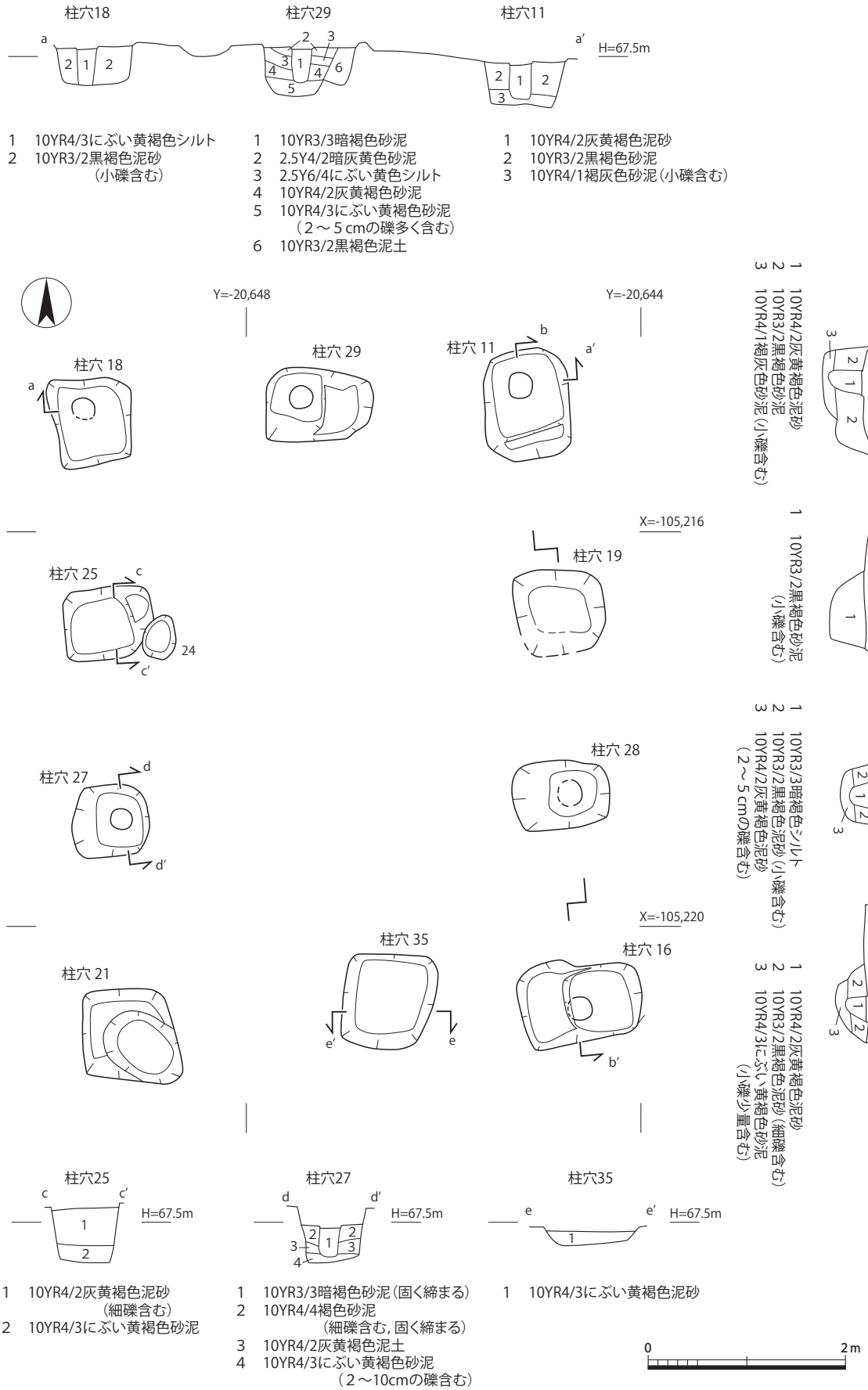


図９　掘立柱建物37平面図・断面図（１：60）

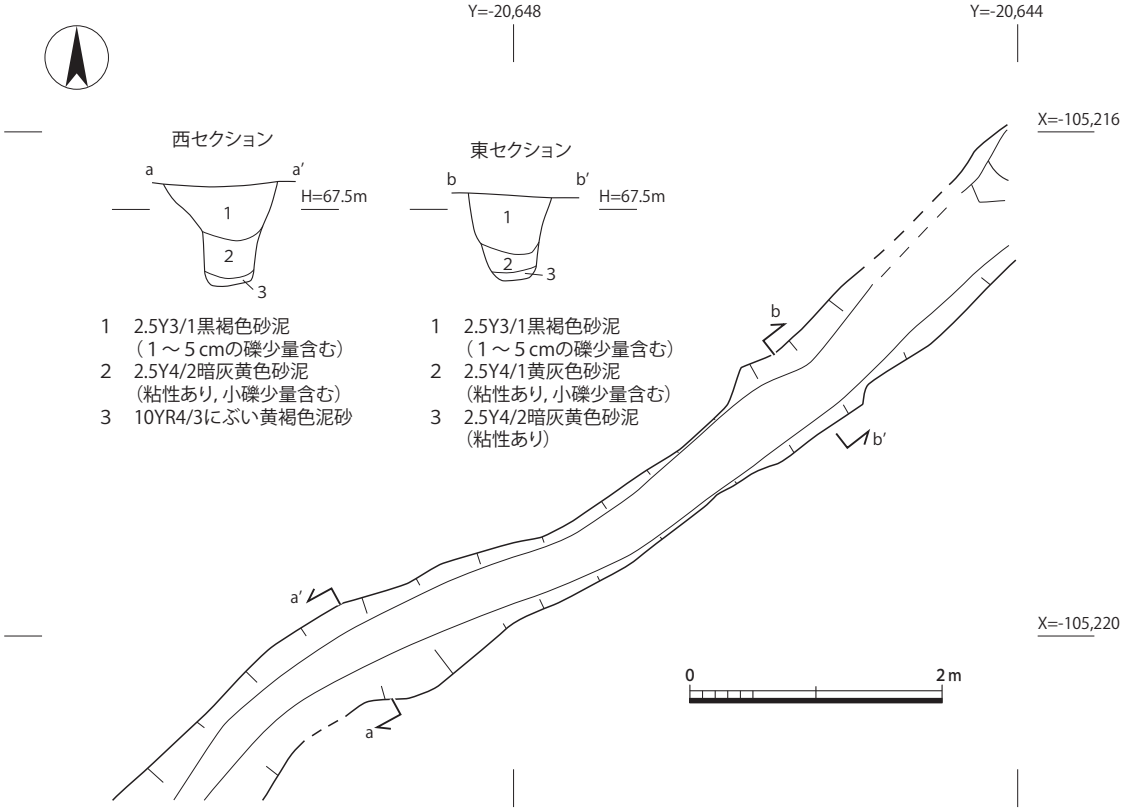


図10　SD14平面図・断面図（1：60）

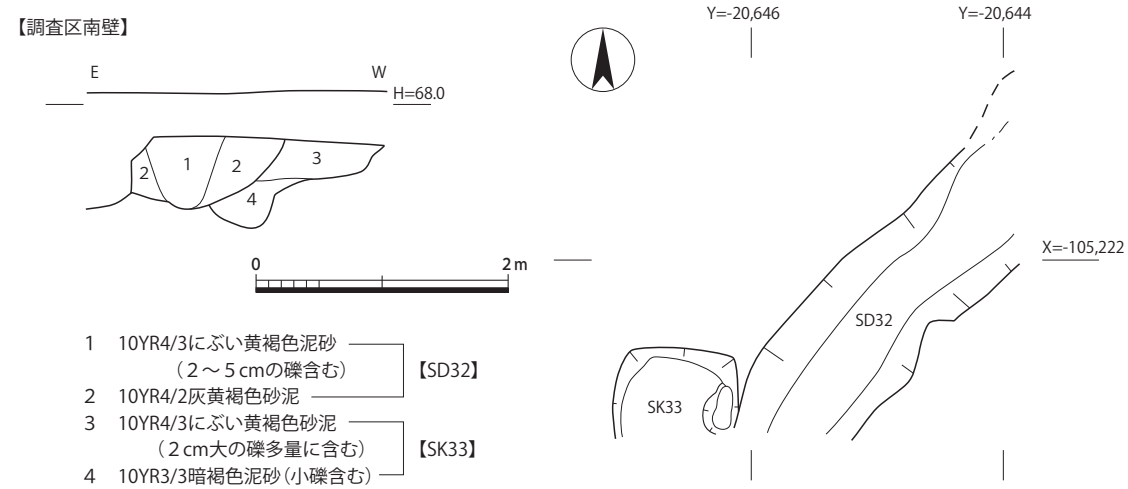


図11　SD32・SK33平面図・断面図（1：60）

SD32（図11）

調査区南東隅で検出した溝で，北東調査区外から南西調査区外へと連続する。断面形状は上辺の広いU字状で，上端の幅が約1.0m，深さ約0.55mである。検出位置，断面形状から平成19年度調査で検出した溝38と連続する可能性が極めて高い。平成19年度調査では庄内式併行期の遺物が出土したため，古墳時代前期の遺構として報告されている。今回，飛鳥時代の須恵器杯Hが出土しており（図12-1），最終的な埋没がこの時期まで降る可能性がある。

4．遺　物（図12・13・表2）

コンテナ２箱の遺物が出土した。細片が多く，図化に耐えうる資料は少ない。以下，図化できた資料を中心に出土遺物の概要を報告する。

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器		土師器３点		
飛鳥時代	土師器, 須恵器		土師器１点, 須恵器１点		
奈良時代～平安時代	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 瓦		土師器３点, 須恵器２点, 灰釉陶器１点, 平瓦１点, 不明品１点		
合　計		２箱	13点（１箱）	０箱	１箱

SD32　１は須恵器杯Ｈである。飛鳥時代に帰属する。

SD14　２は土師器甕である。外面にタタキ痕が残る３は土師器高杯である。筒状の脚部上端に粘土を詰め，杯部の底部とする。軟質である。４は土師器長胴甕である。外面は縦方向のハケメで，口縁部はわずかに内湾し，内端部に面を持つ。２・３は古墳時代前期，４は飛鳥時代の所産であろう。

柱穴29　５は土師器で，鍋・甑等の鍔部であろうか。体部に張り付いた突出部が緩やかに弧を描き，鍔になると想定している。内面調整等は確認できない。時期の絞り込みは難しく，飛鳥時代から奈良時代としたい。６は土師器杯Ｂの底部か。残存部が小さく，形態や時期について断定は難しい。

柱穴11　７は土師器皿Ａである。器表は摩耗しており，調整等は不明である。口縁内端部がわずかながら肥厚する。帰属時期は平安時代前期の可能性が高い。８は土師器小型器台である。脚部に３方向の透孔がある。古墳時代前期に属するか。

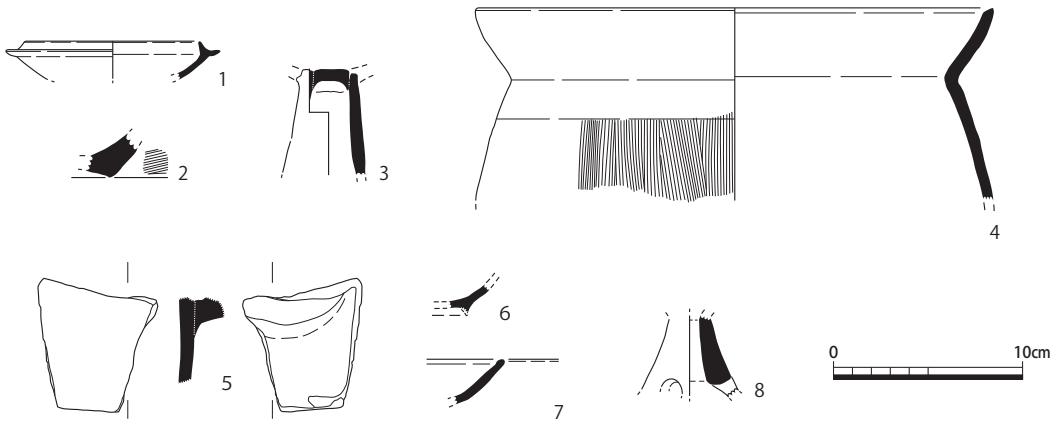


図12　出土遺物実測図１（１：４）

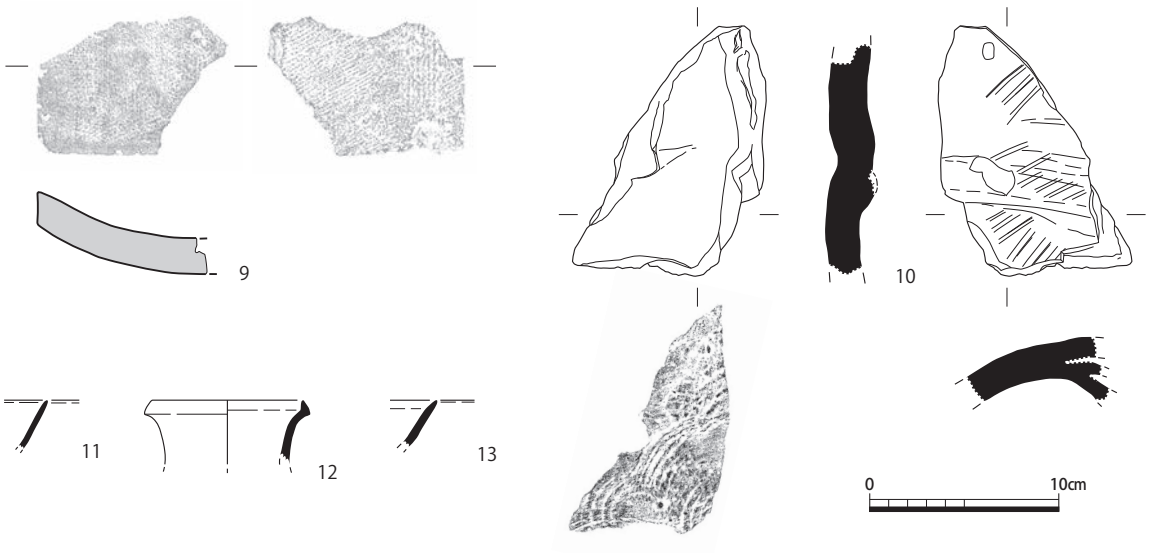


図13　出土遺物実測図２（１：４）

柱穴25　９は平瓦である。柱穴25の最上層から出土したため，掘立柱建物の廃絶後の遺物の可能性もある。凹面は布目圧痕，凸面はタタキ痕が視認でき，焼成は堅緻である。

柱穴21　10は器種器形不明製品である。硬質で灰色を呈し，須恵質である。また，外面にタタキ痕，内面に同心円の当て具痕が残ることから，本来は須恵器の甕であった可能性が高い。焼成時に粘土内部の空気が膨張し，破裂したものと見ている。調査地の北側には芝本瓦窯跡が所在しており，それらの生産遺跡との関連でとらえるべき遺物か。11は須恵器杯の口縁部である。内外面とも横方向のナデ調整で，灰白色を呈する。時期の絞り込みは難しいが，奈良時代から平安時代前期か。12は灰釉陶器壺の口縁部である。内外両面に灰釉が施釉されている。平安時代前期の所産である。

柱穴16　13は須恵器皿ないし杯の口縁部である。器表が摩耗しているが，内外面とも横方向のナデ調整か。時期の絞り込みは難しいが，奈良時代から平安時代前期の所産であろう。

５．まとめ（図14）

今回の調査では，建物跡や溝など複数の遺構を検出した。改めて，検出遺構から当地の変遷を追っておきたい。

今回の調査区内では弥生時代に属する遺構や遺物は確認できていない。また，周辺の調査で確認している古墳時代前期の竪穴建物も今回の調査地点では検出していない。古墳時代前期ごろと想定するSD32が平成19年度調査区から連続しており，この溝が南西敷地で展開する竪穴建物分布の境になる可能性があろう。ただし，掘立柱建物の柱穴や，飛鳥時代の溝から，古墳時代前期ごろと推定できる遺物が出土しており，本来は何らかの遺構が存在していた可能性もあろう。

次に飛鳥時代には，SD14が同じく平成19年度発掘調査区から連続している。竪穴建物36は方位と切り合い関係から飛鳥時代から奈良時代のものである可能性が高く，当該期に集落における

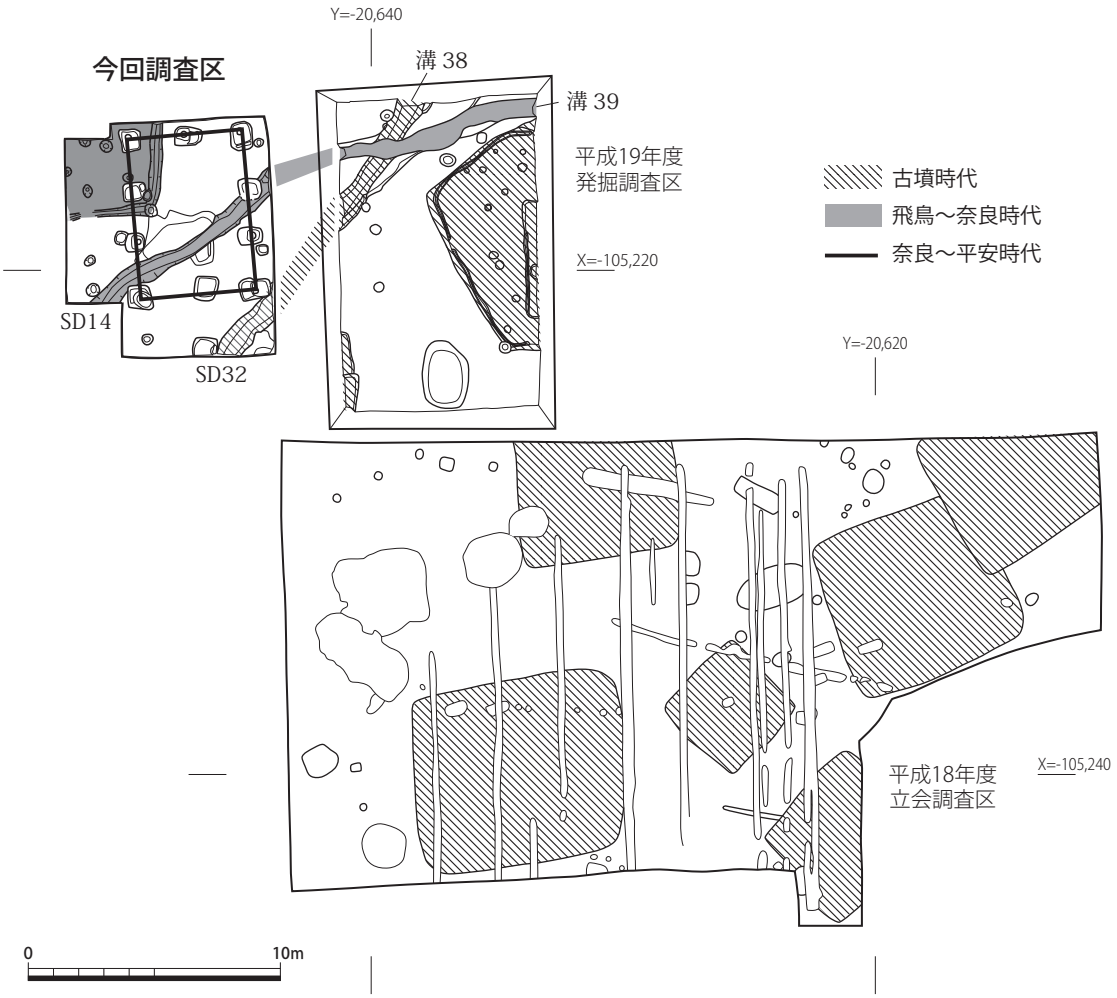


図14　近接調査区の遺構展開（1：300）

建物の分布範囲がやや北に広がるかもしれない。

続く奈良時代から平安時代には掘立柱建物37が築造される。一辺0.7～1.0ｍ程度の掘方を備えた柱は通常の集落の掘立柱建物とするには大きい。ノートルダム学院北東部で検出されている掘立柱建物と合わせ，現在の北山通付近に掘立柱建物群が展開していた可能性もあろう。柱穴からの出土遺物は平安時代前期のものが目立つため，少なくとも平安時代前期が存続期間の一端であることは間違いない。

これまでの周辺の調査によって，植物園北遺跡南東部に古墳時代集落が展開していたことは判明していたが，今回の調査によって，奈良時代から平安時代には中心を北側に移動させていく様相が明らかとなった。今後の調査で，時期による集落域の変化をより詳細に追えるようになるであろう。

（新田 和央）

周辺調査に係る文献一覧（番号は図１の調査位置番号に対応）

1　長谷川行孝『ノートルダム女子大学構内遺跡発掘調査報告―植物園北遺跡―』ノートルダム女子大学，1991年。

2　高橋潔・高正龍「植物園北遺跡」『平成４年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1995年。

3　久世康博「植物園北遺跡」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1997年。

4　吉崎伸「植物園北遺跡」『京都市内遺跡立会調査報告　平成18年度』京都市文化市民局，2007年。

5　平田泰・モンペティ恭代『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-1，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2007年。

6　山本雅和「植物園北遺跡１」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成19年度』京都市文化市民局，2008年

7　吉崎伸「植物園北遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成24年』京都市文化市民局，2013年。

8　柏田有香・加納敬二・田中利津子・モンペティ恭代『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-12，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2013年。

Ⅴ　北白川廃寺・上終町遺跡Ⅰ

1．調査経過

調査地は，京都市左京区北白川東瀬ノ内町25－1に所在し，周知の埋蔵文化財包蔵地である「北白川廃寺」・「上終町遺跡」に該当する。当地において個人住宅の建設が計画され，令和元年11月22日付で文化財保護法93条第1項に基づく届出が提出された。近隣の調査（図4-調査2）で検出された北白川廃寺に関わる溝が当該地に連続することが予測されたため，国庫補助事業として発掘調査を実施することとなった。

調査区は，敷地中央部に南北8m，東西9mで設定した。計画された住宅基礎との兼ね合いから調査はKBM-0.65mの深さまでとした。調査の結果，東西方向の溝3条などを検出し，一部は溝底を確認するため埋土の掘削を行った。加えて，東壁沿いで断割りを行い，縄文時代の遺跡である上終町遺跡に関連する遺構の確認を行ったが，遺構・遺物ともに確認できなかった。

調査は令和2年4月6日から開始し，断割り部の地盤改良を含めた埋戻しを行った後，4月22日に現地での全ての作業を終了した。一部拡張を行ったため，最終的な調査面積は78㎡である。

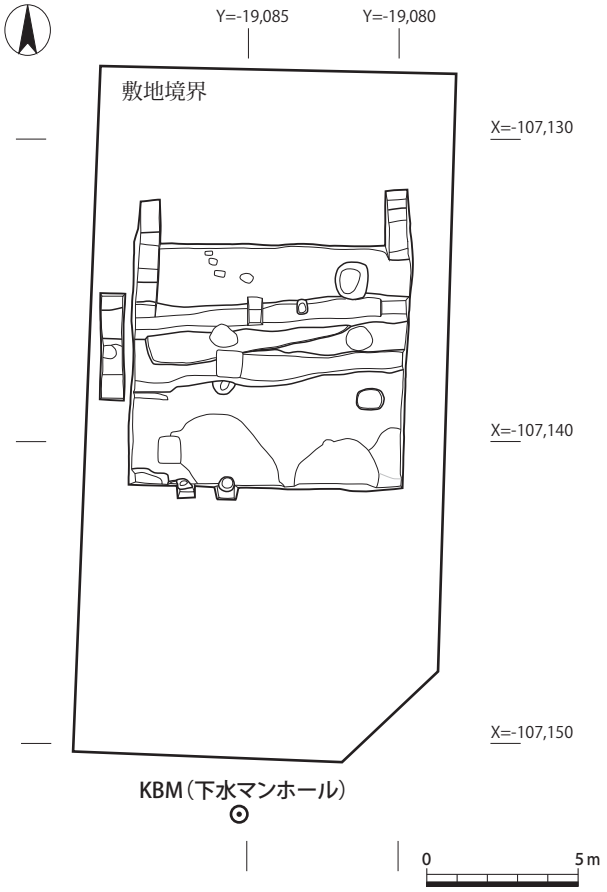


図1　調査区配置図（1：250）



図2　調査前全景（南から）



図3　作業風景（南西から）

2．遺　跡

（1）位置と環境

北白川廃寺は，京都盆地の北東部，瓜生山の南西麓に広がる白川の扇状地上に位置する。今回の調査地は，推定寺域の北西部にあたり，塔基壇から北西約50mに位置する。北と西に向かって緩やかに下がっており，標高は調査地の南側道路のマンホール天端（KBM）で75.11mである。



図４　調査地と周辺調査位置図（１：2,500）

表１　近隣調査事例一覧（図４に対応）

※全て京都市左京区

番号	所在地	期間	面積㎡	調査内容	文献
1	北白川東瀬ノ内町43	1981.08.05～1981.08.23	200㎡	縄文時代の包含層，奈良時代の柱穴・溝・土坑，平安時代の溝，室町時代の溝・柱穴	『北白川廃寺跡発掘調査概要』昭和56年度　文観局・埋文研　1982年
2	北白川山田町１・他	1990.12.03～1991.04.09	730㎡	縄文時代の竪穴住居・集石・土坑，飛鳥時代の掘立柱建物，奈良～平安時代の東西掘立柱塀・溝・土坑・掘立柱建物	『平成２年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 埋文研　1994年
3	北白川東瀬ノ内町50-1	1995.05.10～1995.09.20	413㎡	縄文時代の包含層，飛鳥時代の溝，白鳳時代～平安時代の土坑，塔基壇（瓦積から石積へ改修	『京都市内遺跡発掘調査概報』平成７年度　市民局　1996年
4	北白川東瀬ノ内町４	1974.10.01～1974.10.20	53㎡	塔跡の南西部	『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』調査団・文観局　1976年
5	北白川東瀬ノ内町４	1975.6.28～1975.07.16	150㎡	塔跡基壇（１辺約14m）	『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』調査団・文観局　1976年
6	北白川東瀬ノ内町４	1975.03.25～1975.05.11	90㎡	塔跡基壇の南東隅	『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』調査団・文観局　1976年
7	北白川大堂町４	1991.07.01～1991.08.05	175㎡	奈良時代～平安時代の瓦溜・溝・土坑・柱穴	『平成３年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 埋文研　1997年
8	北白川大堂町56	1990.07.16～1990.08.17	106㎡	縄文時代の包含層，白鳳時代の小鍛冶遺構，白鳳～平安時代の基壇状遺構・溝	『北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概報』平成２年度　文観局　1991年
9	北白川大堂町55，55-1	1980.06.03～1980.07.06	200㎡	奈良時代前期（白鳳）の基壇（金堂と西面回廊），溝，掘立柱建物	『北白川廃寺跡発掘調査概報』昭和55年度　センター・埋文研　1981年
10	北白川大堂町	1934.11		金堂基壇（東西119尺 (約36m)，南北75尺５寸 (約23m) の瓦積基壇）	『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』第19冊 京都府 1939年
11	北白川大堂町55-1･2	2005.11.09～2005.12.08	108㎡	飛鳥・奈良時代の西面・南面回廊跡・内溝・東西溝・瓦溜，平安時代の落込・溝	『京都市内遺跡発掘調査報告』平成17年度　市民局　2006年
12	北白川大堂町61-1	1987.11.18～1987.11.24	48㎡	弥生時代の土坑，平安時代の溝・柵	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度　1988年
13	北白川大堂町62	1999.10.14	43㎡	白鳳期の溝，近世の溝	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成11年度　市民局　2000年
14	北白川上別当町18・大堂町47-3	1986.06.04～1986.06.05	50㎡	白鳳期の溝，平安時代の溝	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度　文観局・埋文研　1987年
15	北白川堂ノ前町36	2008.02.01～2008.03.07	83㎡	中世の谷状遺構	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成20年度　市民局　2008年
16	北白川上別当町29，25	1996.08.02	21㎡	焼土を含む土坑	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成８年度　文観局　1997年
17	北白川上別当町26-1	2006.06.19～2006.07.06	73㎡	飛鳥時代の湿地状堆積（飛鳥時代に整地，底は未確認），近代？ピット	『京都市内遺跡発掘調査報告』平成18年度　市民局　2007年
18	北白川上別当町10 北白川小学校	1982.03.01～1982.04.17	150㎡	縄文時代の包含層・河川，７世紀前半の竪穴住居・柱穴・掘立柱建物，近世の溝，柱穴	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』 埋文研　1983年
19	北白川上別当町70 北白川小学校	1984.10.08～1984.10.20	100㎡	飛鳥時代の竪穴住居，落込・溝	『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 埋文研　1987年
20	北白川上別当町70 北白川小学校	1994.09.22～1994.12.28	700㎡	飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物・柱列・土坑・柱穴・ピット，平安中期の溝，中世～近世の溝，土坑など	『平成６年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 埋文研　1996年
21	北白川上別当町70 北白川小学校	1994.11.21～1994.12.16	260㎡	古墳時代の溝・包含層，飛鳥・奈良時代の土坑・柱穴，平安時代中期～鎌倉時代の溝，室町時代後半の濠，近世の暗渠など	『平成６年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 埋文研　1996年

調査主体：埋文研 → 財団法人京都市埋蔵文化財研究所，センター → 京都市埋蔵文化財調査センター，文観局 → 京都市文化観光局，市民局 →京都市文化市民局，調査団 → 北白川廃寺発掘調査団

「北白川廃寺」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成20年度掲載の図24・表４を元に追加・調整。

（２）周辺の調査（図４・表１）

図４は，北白川廃寺とその南に隣接する小倉町別当町遺跡を対象とした調査のうち，主要な発掘調査等を示したものである。北白川廃寺では，白川通を挟んで東側に「東方基壇」（推定金堂），西側に塔基壇が存在する[1)]。東方基壇は昭和９年（1934）に発見され，瓦積基壇であること，東西約36m・南北約23mの大規模な建物であることが判明した（調査10）。その後，基壇の西側で南北方向の回廊基壇が検出され（調査９），東方基壇の周囲に回廊がめぐらされていたことが明らかになった。また，この西面回廊に直行する東西方向の溝が検出されたことで（調査11），南面回廊が接続することが推定でき，回廊に囲まれた院を形成していたことが確定的となった。一方，塔基壇については調査３～６によって，一辺13.8mの正方形の基壇であること，当初の瓦積基壇から乱石積基壇に改修されたことなどが判明した。塔周辺の様相については，塔の北側で実施された調査２で，東西方向の柵列と２条の溝が検出された[2)]。今回の調査地は，調査２で検出された溝の西延長線上に位置する。

なお，北白川廃寺の南側に，北白川廃寺と密接な関係にあるとされる集落として小倉町別当町遺跡がある。調査18～20では，飛鳥時代後半期の竪穴住居や掘立柱建物が検出されている。古墳時代後期から続く小倉町別当町遺跡だが，出土遺物量では北白川廃寺の造営時期に重なる飛鳥時代後半期のものが圧倒的に多く，当該期に最も隆盛したと考えられている[3)]。また，無文銀銭・瓦塔・唐三彩のほか，北白川廃寺の所用瓦も出土している。

３．遺　構

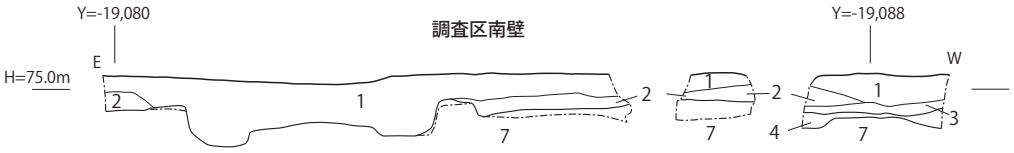
今回は掘削深度に制限があったため，完掘していない箇所があり，下層の確認も部分的な断割りに留めた。以下，主要遺構について報告する。なお，遺構番号は調査段階の番号をそのまま用いた。

（１）層序（図５）

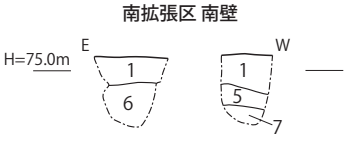
層序は，西壁において，GL-0.05mで暗灰黄色泥砂の耕土，-0.3mで黄褐色砂泥の基盤層（遺構検出面）である。調査区北側では基盤層が低くなり，SD５以北には暗褐色泥砂～黒褐色砂泥の整地土が堆積し，層厚は最大0.4ｍである。SD５の北肩とSD８はこの整地土上面で検出した。一方，東壁では断割りを行い，基盤層の下層の状況を確認した。基盤層の黄褐色砂泥層は約0.6m堆積し，以下GL-0.9mで黒褐色泥砂（東壁13層），-1.2mで黒褐色泥砂（東壁21・22層），-1.5mで黄褐色粗砂～砂礫（東壁23層）となる。また，３節で後述するが，GL-1.8～2.65mでいわゆる白川砂を確認した（図７）。

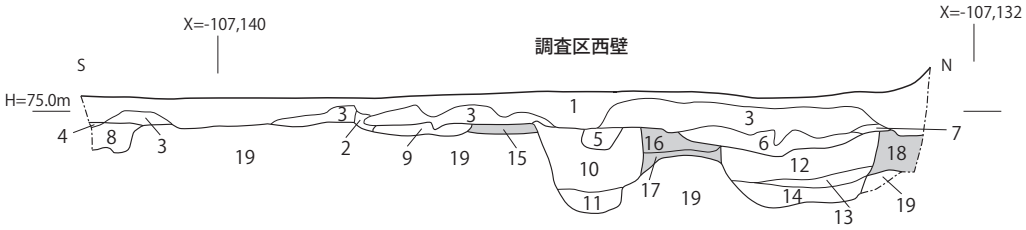
表２　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
７世紀中葉	SD５・６・８	
７世紀後半以降	SP１, SK７・12	

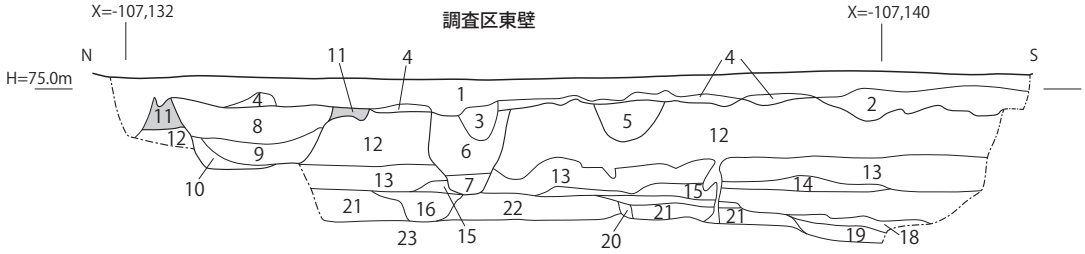


1　盛土・撹乱
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土【近現代盛土】
3　10YR2/3 黒褐色泥砂（粗砂混）
4　2.5Y3/1 黒褐色砂泥（6層がブロック状に混じる）【SK７】
5　2.5Y3/1 黒褐色砂泥【SK12】
6　10YR2/2 黒褐色砂泥【SP11】
7　2.5Y5/6 黄褐色砂泥【基盤層】

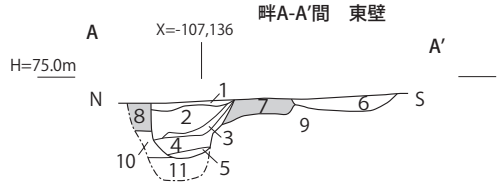




1　盛土・撹乱
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂【耕作溝】
3　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂【耕土】
4　10YR2/3 黒褐色泥砂（粗砂混）
5　10YR3/4 暗褐色砂質土
6　10YR2/2 黒褐色砂泥（３層がブロック状に混じる）
7　7.5YR4/2 灰褐色砂泥
8　2.5Y3/1 黒褐色砂泥（19層がブロック状に混じる）【SK７】
9　10YR3/2 黒褐色砂泥(礫混)【SD６】
10　10YR3/1 黒褐色泥砂【SD５】
11　10YR3/4 暗褐色泥砂（19層がブロック状に混じる）【SD５】
12　10YR2/1 黒色泥砂（最下層に19層がブロック状に混じる）
13　2.5Y3/2 黒褐色砂泥　【SD８】
14　2.5Y3/1 黒褐色砂泥
15　2.5Y3/2 黒褐色泥砂（９層がブロック状に混じる）
16　2.5Y3/1 黒褐色砂泥（19層がブロック状に混じる）
17　10YR3/3 暗褐色砂泥　【整地土】
18　10YR2/2 黒褐色砂泥
19　2.5Y5/6 黄褐色砂泥【基盤層】



1　盛土・撹乱
2　5Y4/2 灰オリーブ褐色泥砂（近現代盛土）
3　2.5YR5/2 暗灰黄色泥砂（木の根か）
4　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
5　10YR3/2 黒褐色砂泥(礫混)【SD６】
6　10YR2/1 黒色泥砂(12層ブロック状にわずかに混じる)　【SD５】
7　10YR2/3 黒褐色泥砂(12層がブロック状に多く混じる)
8　10YR2/1 黒色泥砂
9　10YR2/2 黒褐色泥砂(12層がブロック状に多く混じる)　【SD８】
10　2.5Y3/1 黒褐色泥砂
11　10YR3/3 暗褐色泥砂(12層がブロック状に多く混じる)【整地土】
12　2.5Y5/6 黄褐色砂泥【基盤層】
13　2.5Y3/2 黒褐色泥砂(粗砂混じり)
14　2.5Y5/3 黄褐色砂質シルド
15　2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂～砂質シルド
16　2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
17　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂～粗砂
18　2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂～粗砂
19　2.5Y5/3 黄褐色粗砂
20　2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂
21　2.5Y3/2 黒褐色泥砂
22　2.5Y3/1 黒褐色泥砂(粗砂混)
23　2.5Y5/6 黄褐色粗砂～礫





1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（粗砂混じり）
2　10YR2/2 黒褐色砂泥
3　10YR2/2 黒褐色砂泥
（９層がブロック状に混じる）　【SD５】
4　10YR2/3 黒褐色砂泥
5　10YR2/3 黒褐色砂泥
（９層がブロック状に混じる）
6　10YR2/3 黒褐色砂泥【SD６】
7　2.5Y3/2 黒褐色砂泥
8　2.5Y3/1 黒褐色砂泥　【整地土】
（９層がブロック状に混じる）
9　2.5Y5/6 黄褐色砂泥【基盤層】
10　10YR3/2 黒褐色砂泥
11　2.5Y3/2 黒褐色砂泥

図５　調査区断面図（１：80）

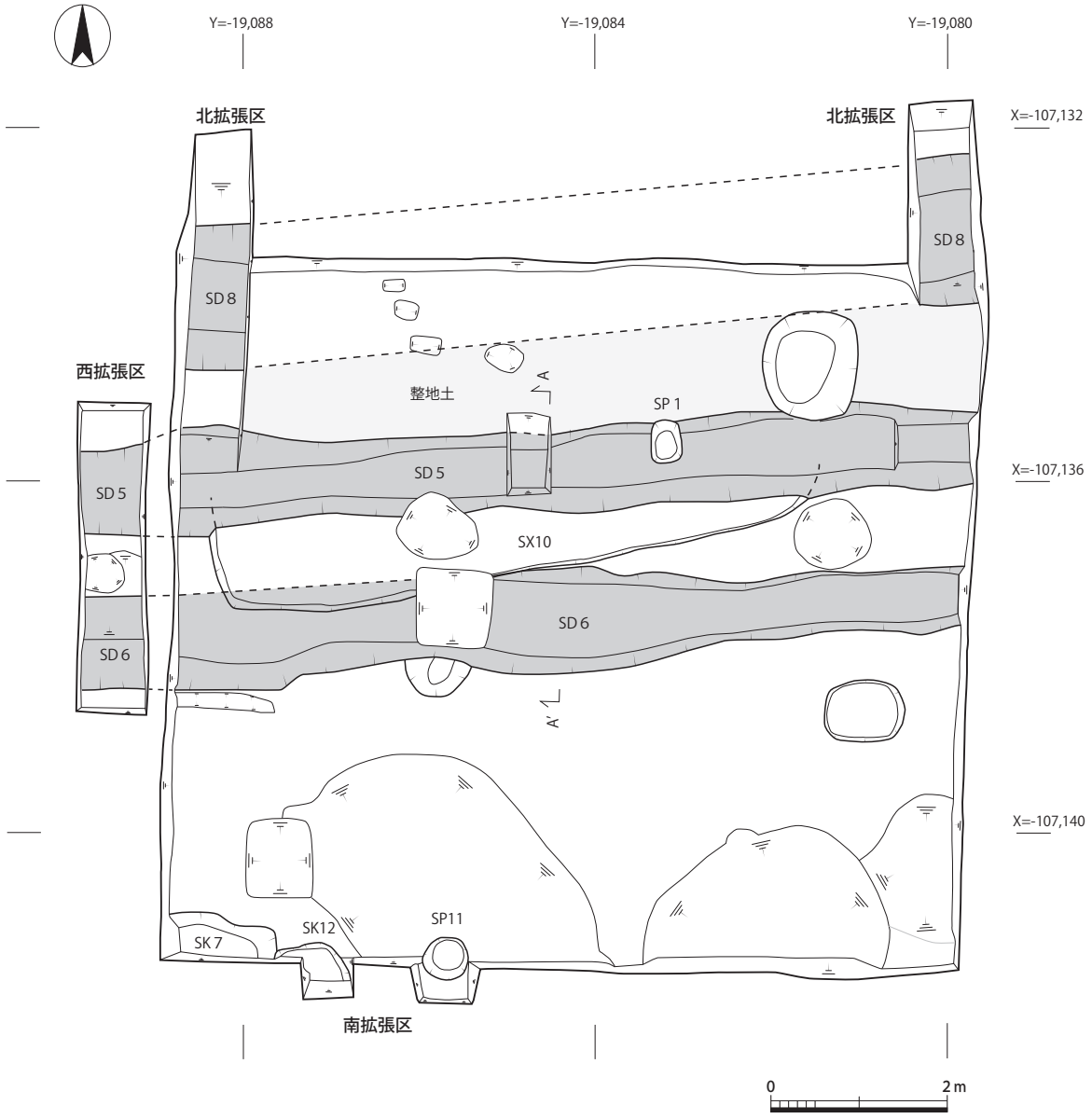


図６　遺構平面図（１：80）

（２）遺構（図６・表２）

SP１　調査区北側で検出した。長軸0.5m，短軸0.35mの楕円形で，深さは0.32mである。埋土は黒褐色泥砂。SD５を切って成立する。平瓦がまとまって出土した。

SD５・６・８　調査区北半で検出した。いずれも東西方向の溝である。SD５は東西10.2m以上，南北1.15m，深さは0.9mである。SD６は東西10m以上，南北1m，深さは0.12mである。SD８は東西8.8m以上，南北1.65m，深さは0.7mである。いずれも調査区外に続く。埋土は，SD５が暗褐色砂質土～黒褐色泥砂，SD６が黒褐色泥砂，SD８が黒色泥砂～黒褐色砂泥である。SD５・６は西に対して南へ３°，SD８は南へ５°振れる。遺物の大半が土師器と須恵器で，瓦はSD５・６で数点出土したに留まる。

SK７・12　調査区南西隅で検出した。調査区外に広がるため平面形は不明である。検出規模は，SK７が東西1.2m，南北0.6mで，深さは0.3m，SK12は東西0.8m，南北0.4mで，深さは0.2mで

ある。埋土はともに黒褐色砂泥で，一連の土坑の可能性がある。SK７からまとまって平瓦が出土した。

SX10　調査区中央部で検出した。東西6.6m，南北1.0m以上，深さは0.2m程度である。埋土は黒褐色砂泥。SD５・６に切られる。西に対して南へ９°振れる。平面形から隅丸方形の竪穴建物の可能性も考えられるが，壁溝や竈などは検出できなかった。掘削深度の制約上北側に続くかどうか確認できていない。土師器と須恵器が出土した。

SP11　調査区南端で検出した。径0.5mの円形で，深さは0.4mである。埋土は黒褐色泥砂で，遺物は出土していない。

整地土　SD５北肩以北で検出した。調査区北西端で約0.4mの厚さがある。黒褐色砂泥で，SD５・８の埋土と非常に近似している。軒丸瓦や須恵器などが出土した。

（３）断割り調査区（図７）

北白川廃寺に関する遺構面の調査後，調査区東端を幅1.5mほど断割り，縄文時代の遺跡である上終町遺跡に関する遺構の確認を行った。その結果，上終町遺跡に関する遺構・遺物は確認できなかった。

下層の確認はB-B'間で行った。その結果，GL-1.8m以下で，にぶい黄褐色～灰白色の微砂～粗砂のいわゆる白川砂を確認した。また，５層以下の地層が東から西に向かって緩やかに傾斜していることを確認した。５層上面は，縄文時代早期の遺構・遺物が確認された調査２の遺構面に相当すると考えられるが，関連する遺構・遺物は確認できなかった。

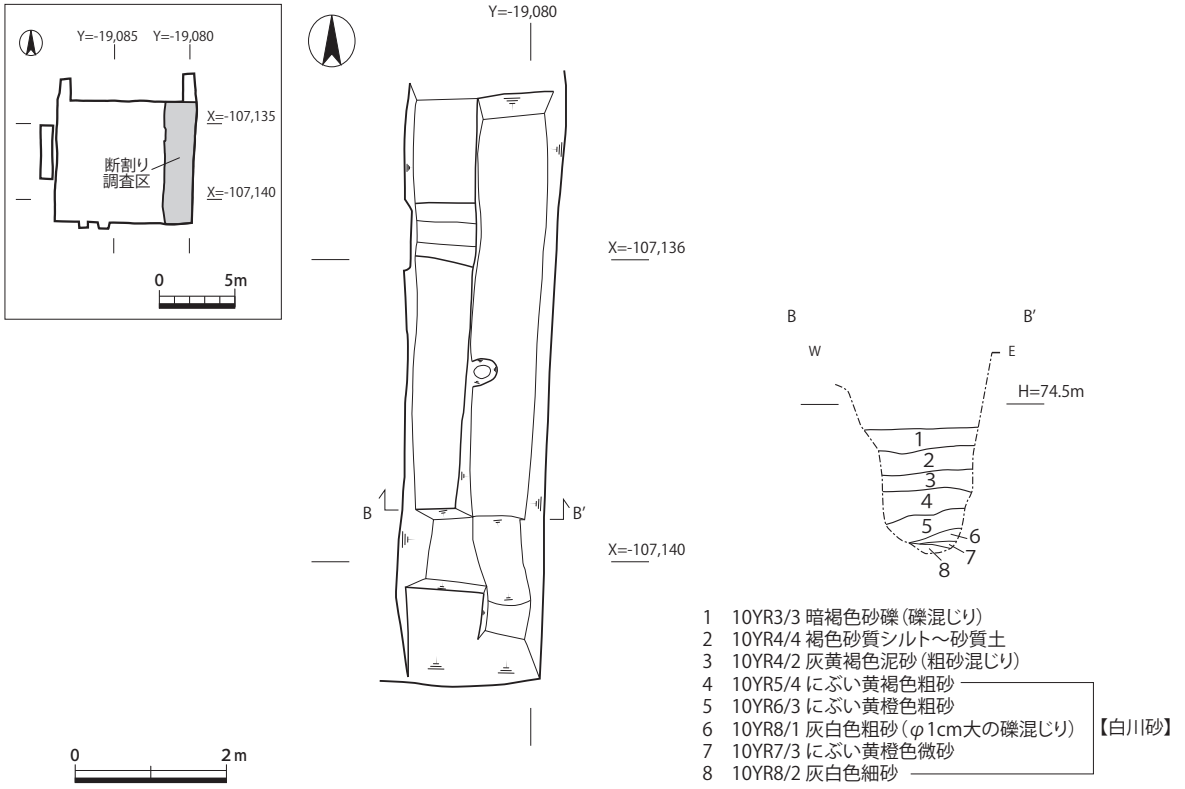


図７　断割り調査区平面図・B-B'間断面図（１：100）

4．遺　物

コンテナ２箱分の遺物が出土した。土器類の大半はSD６から出土し，瓦類はSP１・SK７からまとまって出土した。近隣の調査で確認されている縄文土器は確認できなかった。

（１）弥生土器（図８）

弥生土器が２点出土したが，小片で時期は明確でない。胎土に砂粒を多く含む。１は甕の口縁部，２は鉢の底部である。１はSD６から，２はSD５北側の整地土から出土した。

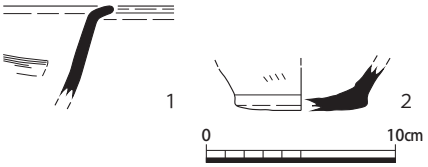


図８　出土土器実測図１（１：４）

（２）７世紀中葉の土器（図９）

土師器（３・４）と須恵器（５～15）がある。

土師器には，杯（３），甕（４）がある。３は杯Cで口径は8.8cmである。このほか小片のため図示していないが，主にSD６から外面にヘラミガキ，内面に螺旋状・放射線状の暗文を施した杯C片が４点出土した。４は甕の口縁部である。口縁部が内湾する近江・山背地域で特徴的な甕である。甕の体部も一定量出土しており，煤が付着するものが多い。

須恵器には，杯G（９～11）・同蓋（５～８）・鉢（12）・高杯（13）・壺（14）・甕（15）がある。全体に口径の分かる資料が少ないが，杯Gは10.4cm（９），同蓋で10.1cm（５）のものが出土した。杯Hや杯A・杯Bは確認できなかった。12の口径は14.0cmで，体部外面の３箇所に凹線が巡る。14は短頸壺で肩が張る。15の体部には波状文が二段に施される。

３・４・６・９・13・15がSD５から，７・10・11・12・14はSD６，５がSX10，８がSD８から出土した。出土点数は少ないが，飛鳥地域や難波地域の土器群と比較すると，飛鳥地域で土器が減少し，難波地域で出土量が増加する時期の土器群に類似することから，今回出土した土器群は７世紀中葉に帰属すると考えられる[4)]。

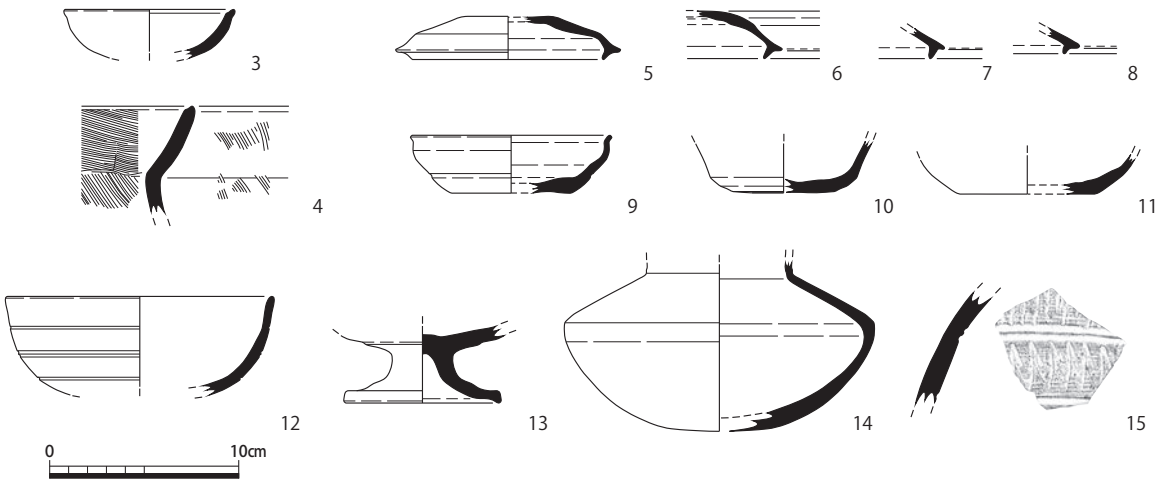


図９　出土土器実測図２（１：４）

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器２点		
飛鳥時代（７世紀中頃）	土師器・須恵器・瓦類		土師器２点，須恵器11点，軒丸瓦１点，平瓦12点，丸瓦2点		
合　計		３箱	30点（１箱）	１箱	１箱

※　コンテナ箱数の合計は，整理後，Aランクの遺物を抽出したため，出土時より１箱多くなっている。

（３）瓦類（図10・11）

全体で約30点ほど出土した。内訳は平瓦が大半を占める。

軒瓦は，軒丸瓦が１点出土した（図10-16）。SD５北側の整地土から出土。桜花状の素弁十葉蓮華文である。蓮弁のうち一葉のみ二重になっている箇所があるが，他の箇所では見られないことから，笵ズレなどではなく，笵自体がそうした状態であったと考えられる。瓦当径は約15.5cmで周縁はない。中房の直径は４.2cm，高さは1cmある。蓮子は笵によるものではなく，刺突によって表現されており，18個ほどの蓮子がランダムに配置されている。瓦当裏面上端に丸瓦を接合している。瓦当裏面はナデて平坦である。北白川廃寺では未確認の型式の軒丸瓦である[5)]。

丸瓦は２点出土した（図10-17・18）。いずれも凸面はナデ，凹面には布目が残る。17はSP１，18はSD６出土。

平瓦（図10・11）は，SK７・SP１からまとまって出土した。焼成不良の軟質のものが目立つ。凹面に模骨痕が残ること，粘土板の継ぎ目が確認できるもの（19・26）が確認できることから，桶巻き作りであることが分かる。北白川廃寺では一枚作りの凸面縄叩きの平瓦も出土するが，今回の調査では明確に一枚作りと判断できる平瓦は確認できていない。

北白川廃寺の塔跡周辺では，凸面に格子叩きや平行叩き，さらには幾何学文様の叩きなど特殊叩きを施す平瓦が顕著に出土することが指摘されている[6)]が，塔北西部にあたる今回の調査でも同様の傾向を確認した。図10-19～23，図11-24・25は凸面に格子叩きを施す平瓦である。19～23は一辺約１cmの正方形の格子叩き目，24は長方形の格子叩き目，25は斜格子叩き目が凸面に残る。一方，図11-26～30は平行叩き・特殊叩き・縄叩き目の平瓦である。26・27は平行叩き目，28は正格子叩き目と平行叩き目が重複する。29は幾何学文様叩き目，30は縄叩き目である。

19～22がSK７から，23・24・26～28がSP1から，25・29・30が重機掘削中に出土した。SK７・SP１出土平瓦は，平行叩きや格子叩きが主流であることが分かる。

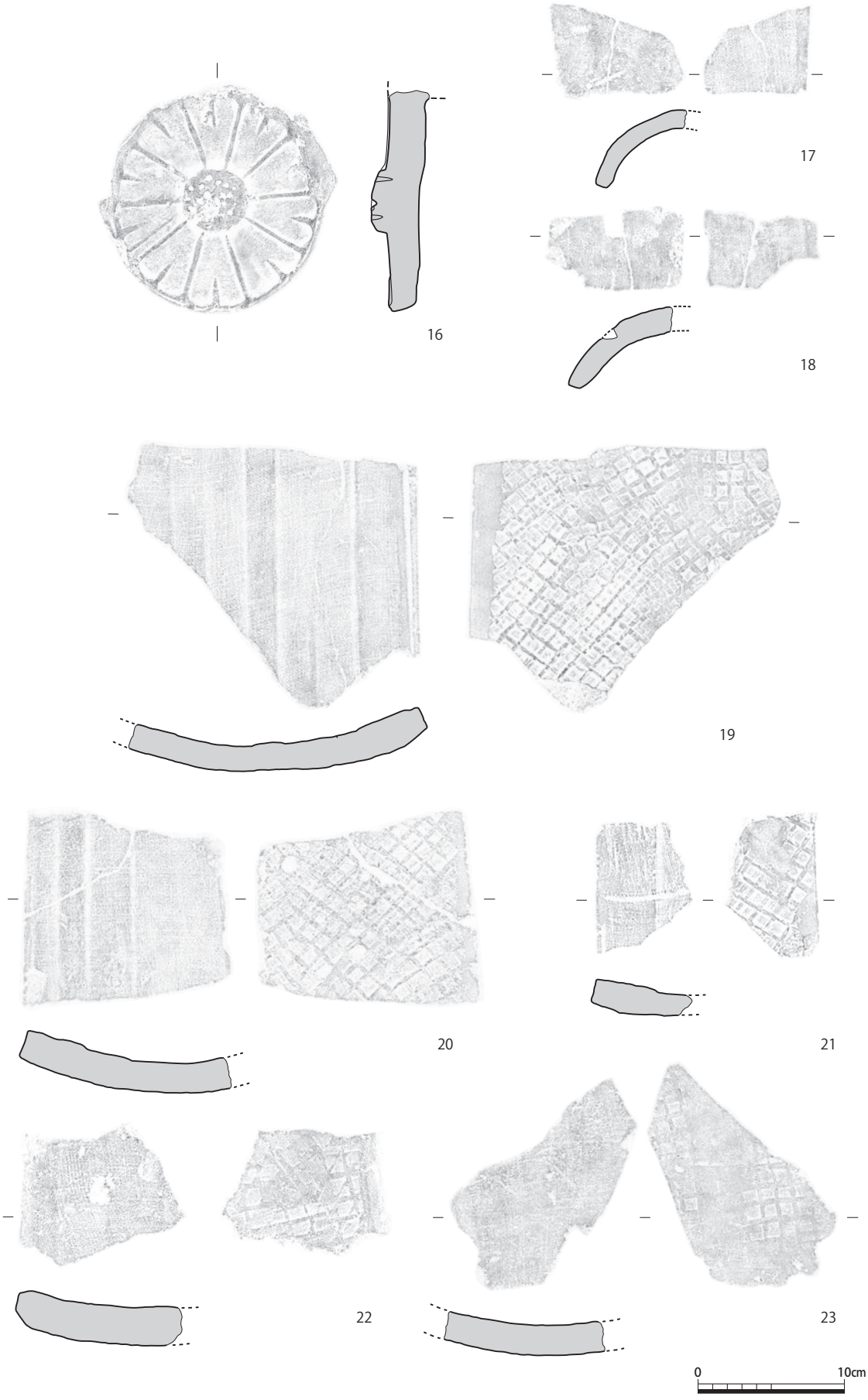


図10　出土瓦実測図１（１：４）

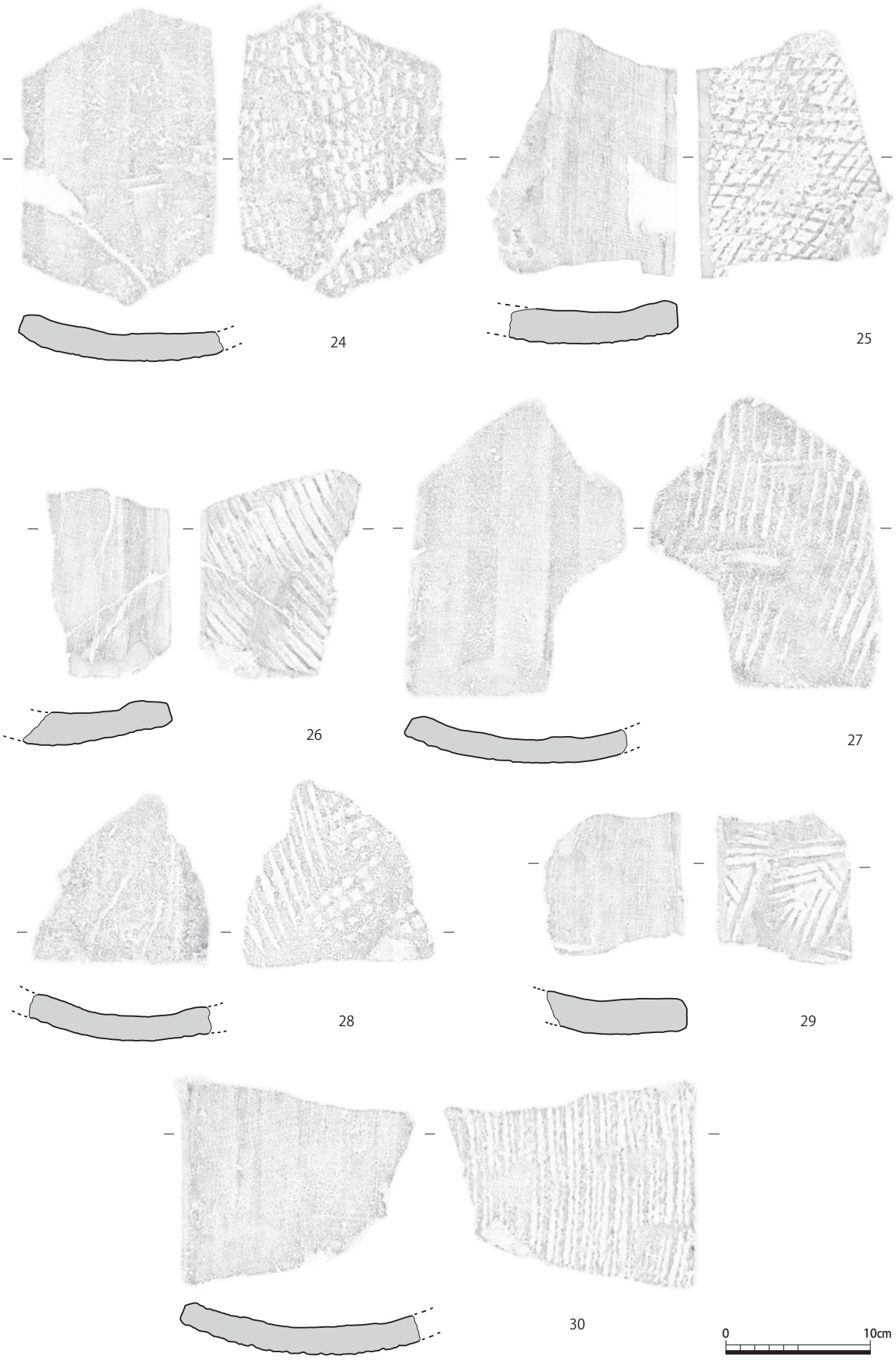


図11　出土瓦実測図２（１：４）

5．まとめ（図12）

今回の調査では，７世紀中葉の東西溝を３条検出した。また，これまでの北白川廃寺の調査では未確認の素弁蓮華文軒丸瓦が出土した。以下，まずは調査２を中心とした近隣調査事例との比較を通してこれら東西溝の性格を考え，次に素弁蓮華文軒丸瓦について述べてまとめとしたい。

（１）調査２との比較

調査２：東西方向の柱列が２条（SA９・10），東西溝が２条（SD７・８）検出された。柱列は，SA９は西に対して北に４°，SA10は北に１.8°ほど振れる。東西溝はいずれも深さは0.5mで，SD７が幅約２m，SD８が幅2.8m以上ある。SA９，SD７・８については，掘立柱塀とそれに伴う内外溝とされ，その性格について，塔を囲む塔院の塀が想定されている[7)]。SA10は北白川廃寺の伽藍造営軸と一致し，その後SA９が北へ大きく振れることから，造営基準が変化したことに対応すると考えられている[8)]。SD７・８からは瓦が多量に出土しており，平瓦だけで600点を超える。その内訳についてSD７では，一枚作りの平瓦が３割弱を占める[9)]。

今回の調査：調査２北溝の西延長線上で溝２条（SD５・６），その北側でさらに１条（SD８）を検出した。SD５・６は幅１m前後で，深さはSD５が0.9m，SD６は0.12m，SD８は幅1.65m，深

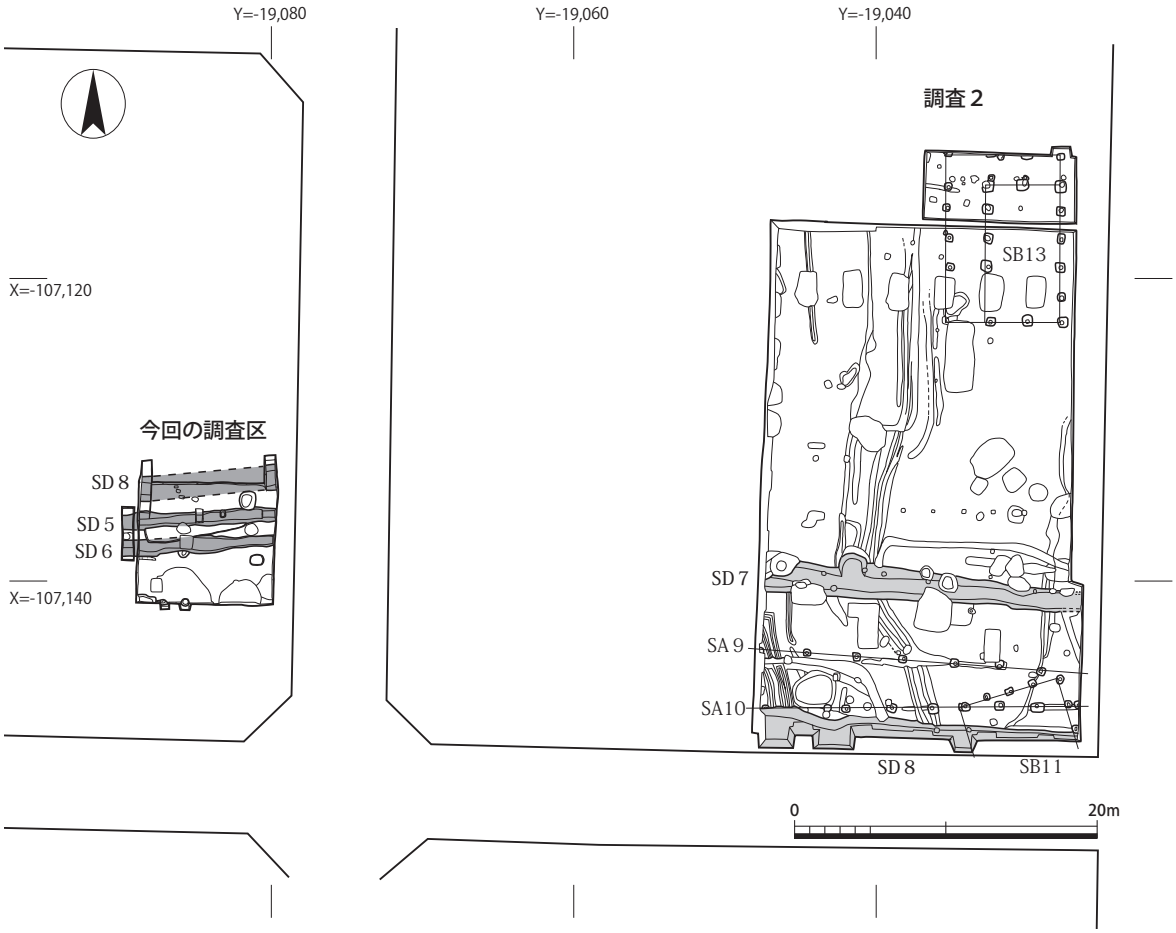


図12　今回の調査と調査２との遺構関係図（１：500）

さ0.7mである。溝はいずれも西に対して南に３～５°振れる。SD５・６・８の出土遺物に大きな時期差は無く，出土した土器から，飛鳥時代中葉（７世紀中葉）の遺構と考えられる。

調査２と今回の調査を比較すると，大きく３点異なる点を挙げることができる。まず，調査２で検出されたSD７・８と今回検出したSD５・６・８は，いずれも幅や深さなどが異なる。特に今回検出したSD５・８は，幅が半分ほどしかない一方，深度は深い。

次に，遺構の振れが異なる。今回検出したSD５・６・８は西に対して南に振れるが，調査２のSA９・10，SD７・８は北に振れる。これに対して，北白川廃寺の下層遺構は建物主軸が西に対して南に振れる傾向にある[10]。調査２では下層遺構として掘立柱建物（SB11）が検出されており，建物主軸は南に17°ほど振れる。さらに，北白川廃寺に南接する小倉町別当町遺跡でも，飛鳥時代中葉まで竪穴建物が西に対して南に振れる傾向にあることが判明しており，北白川廃寺造営直前の様相を示すと考えられている[11]。

最後に，出土遺物に関しても異なる。調査２のSD７では一枚作りの平瓦が一定数出土しており，塔に使用されたと考えられるが，今回検出したSD５・６・８で主体となる出土遺物は７世紀中葉の特徴をもつ。また，調査２では溝埋没時に塔所用瓦が大量に廃棄されたと考えられる一方，今回の調査では，溝内から出土する瓦は10点ほどに留まる。

以上の検討から，今回の調査で検出した東西溝は，調査２で確認されたSD７・８と一連の溝ではなく，時期の異なる別の溝と考えられる。遺構の振れに着目すると，今回検出した溝は，北白川廃寺下層遺構や小倉町別当町遺跡と共通性があることを指摘できる。ただし，今回の調査で検出した溝や，調査２で検出された溝がどのように展開するのか，現状では不明である。今後の調査事例の増加を待って検討したい。

（２）素弁十葉蓮華文軒丸瓦について

今回，北白川廃寺では新出型式の素弁十葉蓮華文軒丸瓦が出土した。北山背では北野廃寺[12]と，北野廃寺に瓦を供給していた北野廃寺瓦窯[13]，幡枝元稲荷窯[14]から同文の瓦が出土している。いずれの場所でも２種類（a，b類）が確認されている。これら北野廃寺に関連する素弁十葉蓮華文軒丸瓦は，飛鳥寺創建瓦を祖型にもつものの，中房の相対的な大型化などから型式的にやや遅れる段階のものとされる[15]。時期については７世紀前半代に比定されている[16]。

今回出土した軒丸瓦は，製作技法などからa類と同種のものと考えられる。ただし，中房が一段高く，蓮子を刺突により表現するなど，調整方法に他の箇所では見られない特徴がある。これまで北白川廃寺で確認されていた最も古い軒瓦は，山田寺式の単弁八葉蓮華文軒丸瓦で，７世紀第３四半期の製作と考えられていた[17]。しかし，今回素弁十葉蓮華文軒丸瓦が出土したことにより，７世紀前半代に瓦を使用した建物が存在した可能性が出てきた。ただし，１点のみの出土で，明確な遺構から出土したわけではないため，今後の調査でより詳細に検討ができるようになることを期待したい。

（熊谷 舞子）

註

1） 網　伸也「北白川廃寺の伽藍復元-最近の発掘調査成果による-」『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会，1993年。

2） 註１文献。

3） 長戸満男「無文銀銭試論」『研究紀要』第10号，（財）京都市埋蔵文化財研究所，2007年。

4） 難波編年の難波Ⅲ中段階に近似する時期と考えられる（佐藤隆「難波地域における７世紀の土器様相」『飛鳥時代の土器編年再考』2019年。）

5） 北白川廃寺の軒丸瓦については，A～E類の７類がこれまで確認されている（堀　大輔『飛鳥・白鳳の甍―京都市の古代寺院―』京都市文化財ブックス第24集，2010年）。

6） 網氏の平瓦の分類によれば，19～23はK-A(Ⅱ)型式，24はK-A(Ⅲ)型式，25はK-B型式に，26・27はH-A型式，28はK-A(Ⅱ)型式とH-Aの重複。29はT-D(Ⅰ)型式，30はN-A型式に該当する（網　伸也「北白川廃寺の造営過程―北山背古代寺院の考古学的考察―」『古代』97，1994年）。

7） 網　伸也「北白川廃寺２」『平成２年度　京都市埋蔵文化財調査概要』，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1994年

8） 註１文献。

9） 註７文献。

10） 註３文献。

11） 註３文献。

12） 網　伸也「北野廃寺・広隆寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅰ―飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで―』奈良国立文化財研究所，2000年。

13） 上村和直編「北野廃寺２」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，2012年。

14） 佐原　真「幡枝窯跡の瓦」『史林』第90巻第３号，2007年。

15） 菱田哲郎「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』第69巻第３号，1986年。

16） 註14文献。

17） 註５文献。A類が山田寺式軒丸瓦。

Ⅵ　北白川廃寺・上終町遺跡Ⅱ

1．調査経過

調査地は，左京区北白川東瀬ノ内町25－2に所在し，周知の埋蔵文化財包蔵地である「北白川廃寺」・「上終町遺跡」に該当する。当該地において個人住宅の建設が計画され，令和2年9月7日付で文化財保護法93条第1項に基づく届出が提出された。これに対し東側隣接地の調査（本書Ⅴ章調査地）で確認された溝が当該地において連続すると予測されたため，文化庁国庫補助事業による発掘調査を実施することとなった。

調査は令和2年10月7日から11月5日まで実施した。調査区は東西7m，南北9mの範囲で設定した。また，数箇所拡張をおこない，調査面積は85㎡となった。また，周辺調査事例については本書Ⅴ章の表1を参照とされたい。



図1　調査地位置図（1：2,500）



図2　調査前全景（南から）



図3　作業風景（南西から）

2．遺　構

（1）層序（図5）

層序は北壁において，GL-0.5mで暗灰黄色泥砂の耕土（D-D'1層），-0.7mで褐灰色泥砂の耕土（D-D'2層），-0.8mで黄褐色砂泥の基盤層（D-D'5層）である。

また，調査区南西の拡張区で断割りを行い，GL-1.5mで灰オリーブ色砂泥（A-A'17層），-1.9mで黄褐色粗砂（A-A'18層），-3.2mで中礫を多く含む黄褐色粗砂（A-A'19層）の地山を確認した。

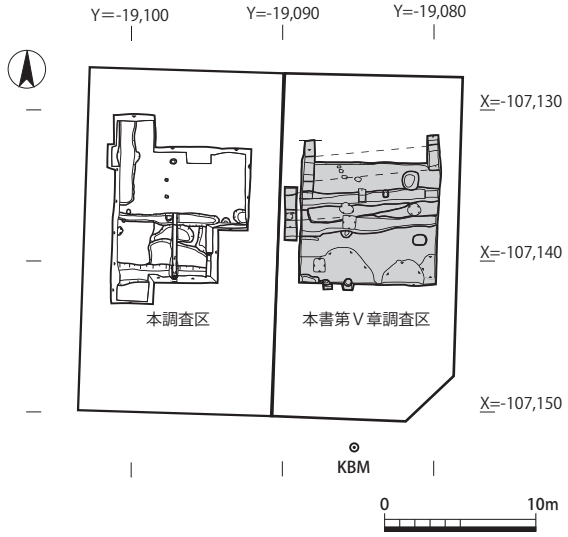


図4　調査区配置図（1：500）

（2）遺構（図5・6・表1）

SD1　調査区中央付近で検出した東西方向の溝である。整地層を切って成立する。幅0.4～0.7mで，長さは調査区西側に続き東西7m以上である。深さは東側で0.3m，西側で0.2mである。軸線は西に対して南へ約2°振れる。遺物は須恵器や瓦などが出土した。

SD2　調査区南端で検出した東西方向の溝である。整地面を切って成立する。幅1.5m，長さは7m以上である。深さは東壁付近は0.7m，西壁付近から南北セクションにかけては0.8mと東から西へ向かって傾斜している。軸線は西に対して南へ約4°振れる。埋土には平瓦がまとまって埋まっている層があり，廃棄している状況が確認できる。遺物は土師器や須恵器，軒丸瓦や平瓦などが多く出土した。

SD6　調査区北西で検出した南北方向の溝である。幅1.3m，検出長は5.5m以上で，深さは0.4mである。埋土は暗褐色泥砂と明黄褐色砂泥を含む暗褐色泥砂の2層に分けられる。遺物は平瓦や須恵器の蹄脚硯の脚部のほか，縄文土器の細片などが出土した。

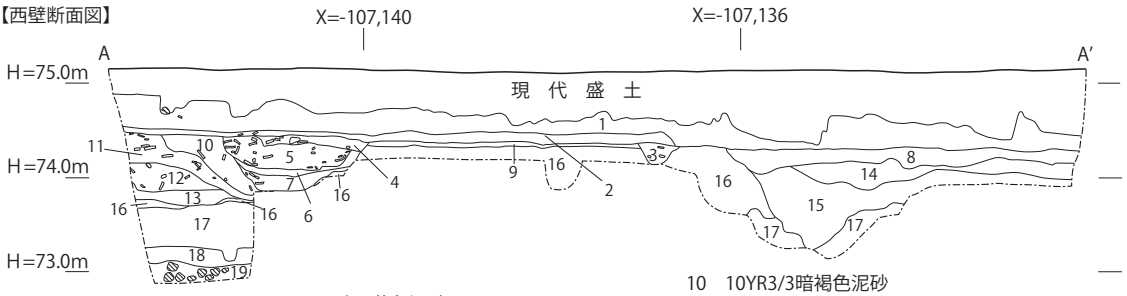
整地層　調査区南半で検出した。褐灰色泥砂である。耕土直下にあり，調査区南半全体に広がる。厚みは0.1mで，遺物は瓦などが出土した。

SK3　調査区南半で検出した楕円形の土坑である。基盤層上面で成立する。土坑の南半は調査区外へ続く。東西4.1m，南北2.6m以上で，深さは1.1m程度である。埋土は黒褐色泥砂・灰褐色泥砂・礫を少量含む灰黄褐色泥砂である。遺物は瓦が多量に出土したほか，須恵器の杯身，杯蓋，土師器の鍋などが出土した。

表1　遺構概要表

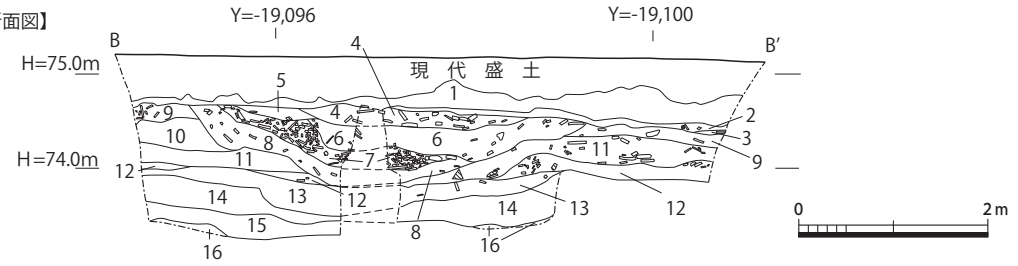
時　代	遺　構	備　考
飛鳥時代～奈良時代	SK3～5・7，SP8，整地層 SD1・2・6，SK9，SK10	

【西壁断面図】



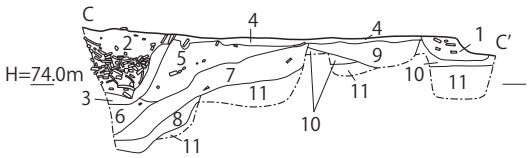
1 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂 ┐【耕土】
2 10YR4/1褐灰色泥砂 ┘
3 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂締まり悪い【SD1】
4 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂瓦多く含む ┐
5 10YR3/4暗褐色泥砂 │【SD2】
6 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 │
7 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 ┘
8 10YR3/3暗褐色泥砂【SD6】
9 10YR4/1褐灰色泥砂鉄分多く含む【整地層】
10 10YR3/3暗褐色泥砂
11 2.5Y2/1黒色泥砂
12 2.5Y2/1黒色泥砂
粒径10～20cmの礫少量含む
13 10YR7/6明黄褐色砂泥
14 2.5Y5/6黄褐色砂泥【基盤層】
15 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
16 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
17 5Y4/2灰オリーブ色砂泥
18 10YR5/6黄褐色粗砂
19 10YR5/6黄褐色粗砂10～20cmの礫多く含む【地山】

【南壁断面図】



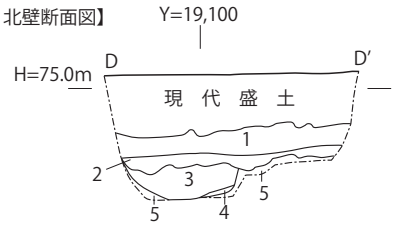
1 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂 ┐【耕土】
2 10YR4/1褐灰色泥砂 ┘
3 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂鉄分含む ┐
4 10YR5/2灰黄褐色泥砂 │
5 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 │
6 7.5YR4/2灰褐色泥砂粒径5mmほどの小礫少量混じる │【SD2】
瓦の細片混じる │
7 10YR5/1褐灰色泥砂粘質土含む,瓦多量に含む │
8 7.5YR4/2灰褐色泥砂16層ブロック少量混じる ┘
9 10YR3/4暗褐色泥砂粘質土少量含む ┐
10 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂炭化物含む締まり良い │【SD2】
11 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂16層ブロック含む │
12 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 ┘
13 10YR4/1褐灰色泥砂締まり良い ┐
14 10YR4/2灰黄褐色泥砂地山ブロック ┘【SK3】
粒径2～3cmの礫少量含む
15 2.5Y4/2暗灰黄色細砂～泥砂地山ブロック少量含む【SK５】
16 2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂【地山】

【南北セクション西壁断面図】



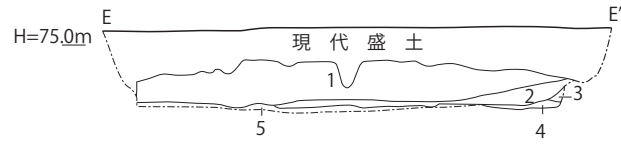
1 10YR4/4褐色泥砂粒径5mmほどの礫少量含む【SD1】
2 7.5YR4/2灰褐色泥砂粒径5mmほどの小礫少量混じる ┐【SD2】
瓦の細片混じる ┘
3 7.5YR4/2灰褐色泥砂地山ブロック少量混じる
4 10YR4/1褐灰色泥砂【整地層】
5 10YR3/2黒褐色泥砂 締まり良い ┐
6 10YR4/1褐灰色泥砂締まり良い ┘【SK3】
7 10YR4/2灰黄褐色泥砂粒径2～3cmの礫少量含む
8 2.5Y4/2暗灰黄色細砂に暗灰黄色砂泥のブロック少量含む【SK5】
9 10YR4/4褐色泥砂粒径5mmほどの礫少量含む【SK4】
10 2.5Y5/6黄褐色砂泥【基盤層】
11 10YR3/1黒褐色中砂～砂礫
粒径5mm～15cmほどの礫含み固く締まる

【北西部拡張区　北壁断面図】



1 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂 ┐【耕土】
2 10YR4/1褐灰色泥砂土師器細片含む ┘
3 10YR3/3暗褐色泥砂 ┐【SD6】
4 3層に5層がブロック状に混じる ┘
5 2.5Y5/6黄褐色砂泥【基盤層】

【北東部拡張区　東壁断面図】



1 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂 ┐【耕土】
2 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂土師器細片含む ┘
3 7.5YR3/3暗褐色泥砂 ┐【SK10】
4 10YR2/2黒褐色砂泥に５層を含む ┘
5 2.5Y5/6黄褐色砂泥【基盤層】

図５　調査区断面図（１：80）

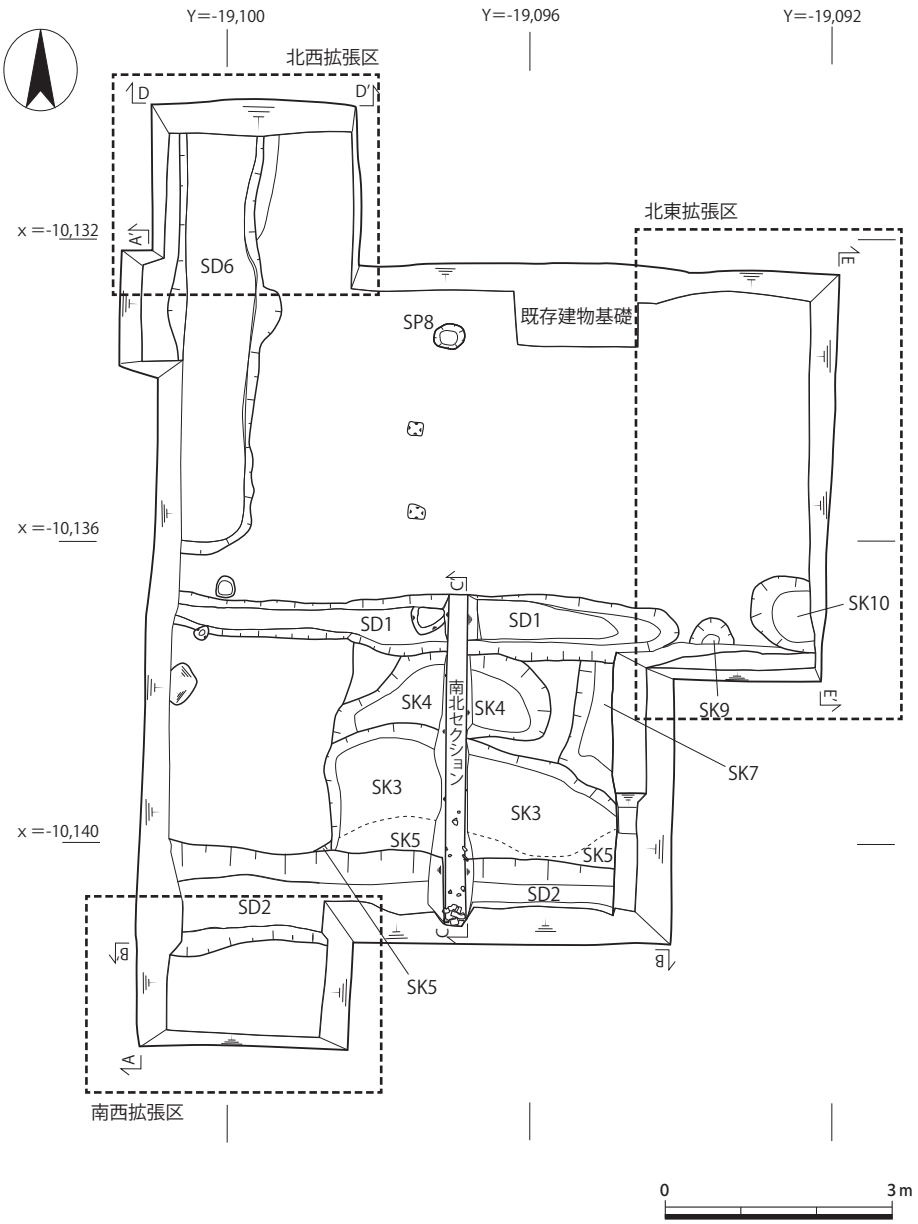


図6　遺構平面図（1：100）

SK4　調査区中央付近で検出した楕円形の土坑である。SK３に切られる。東西2.8ｍ，南北1.1ｍである。深さは0.3ｍである。埋土は褐色泥砂の単一層である。遺物は瓦が出土した。

SK5　調査区南半で検出した土坑である。基盤層上面で成立する。東西4.3ｍ，南北1.3ｍ以上，深さはSK３に切られており，0.1ｍである。埋土は暗灰黄色細砂である。土坑は調査区南端へ続く。遺物は平瓦が出土した。

SK7　調査区東寄りで検出した方形の土坑である。基盤層上面で成立する。東西0.7ｍ以上，南北1.9ｍで，深さ0.4ｍである。埋土は黒褐色砂質土の単一層である。遺物はほぼ完存する平瓦などが出土した。

SP8　調査区北側で検出したピットである。基盤層上面で成立する。直径0.4ｍで，深さ0.2ｍである。埋土はにぶい黄褐色泥砂の単一層である。遺物は土師器細片が出土した。

拡張区の遺構

当初設定していた調査区では，東隣接地で確認されたSD５の続きが検出できなかったため，北東拡張区を設けてその検証を行った。しかし，溝の確認にはいたらず，土坑を２基検出した。

SK９　拡張区南東で検出した円形の土坑である。東西0.6ｍ，南北0.3ｍで，深さ0.1ｍである。埋土はにぶい黄褐色泥砂単一層である。遺物は出土していない。

SK10　調査区東側で検出した円形の土坑である。東西0.7ｍ以上，南北１.0ｍで，深さ0.1ｍである。埋土は黒褐色砂質土の単一層である。遺物は出土していない。

３．遺　物（表２）

コンテナ28箱分の遺物が出土した。出土遺物には，土器・瓦類がある。大半がSD２から出土した奈良時代の遺物である。図化はしていないが，縄文土器の細片も出土した。

（１）土器（図７）

１は整地層，２はSK５，３～７はSK３，８はSD１，９はSD６，10～16はSD２から出土した。１・３～６・８～15が須恵器で２・７・16が土師器である。

１は杯Gの身である。２は皿Aである。ナデが強く外面にケズリが残り，内面には暗文を施す。３・４・８は杯Hの身である。５は杯Gの蓋で，中央に宝珠のつまみが付くものである。６は鉢で，

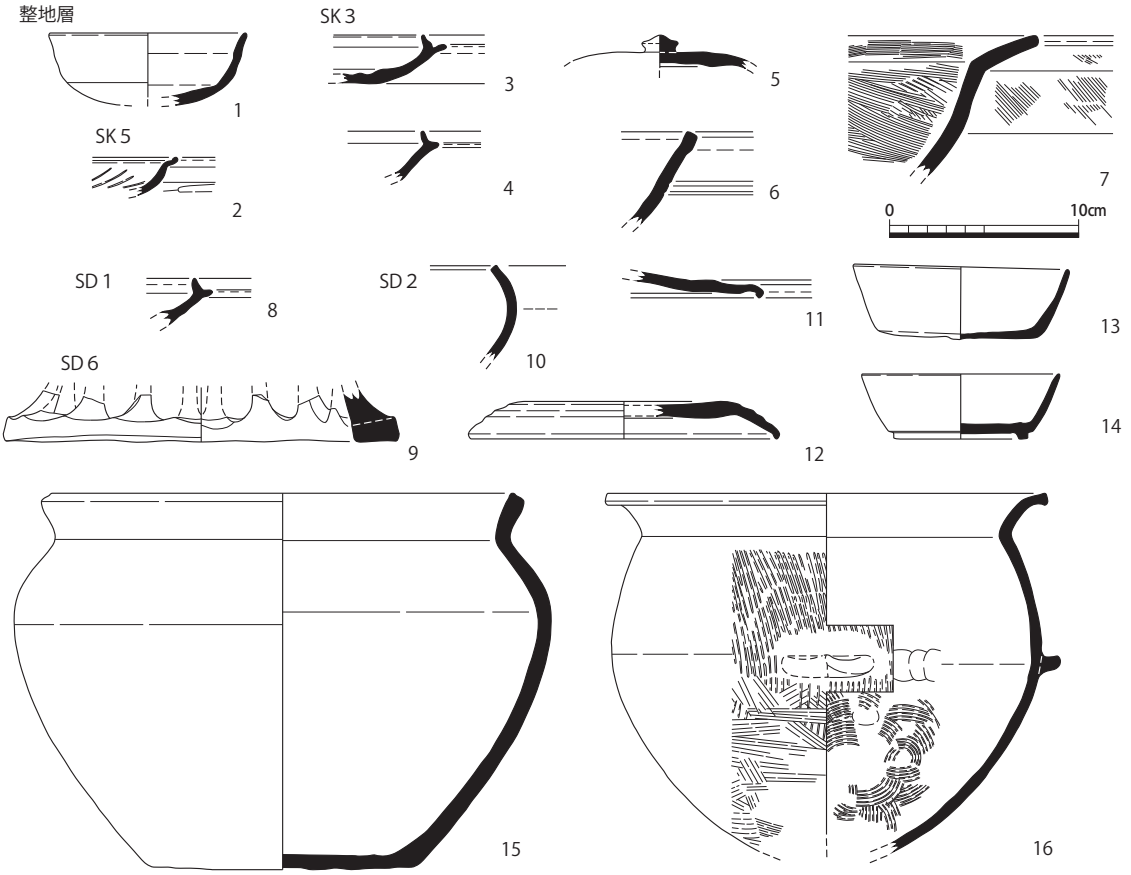


図７　出土土器実測図（１：４）

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器細片				
奈良時代	土師器, 須恵器, 瓦類		土師器３点, 須恵器13点, 軒丸瓦６点, 丸瓦２点, 平瓦18点 鴟尾１点, 磚１点		
平安時代	瓦		平瓦１点		
合　計		32箱	44点（４箱）	６箱	22箱

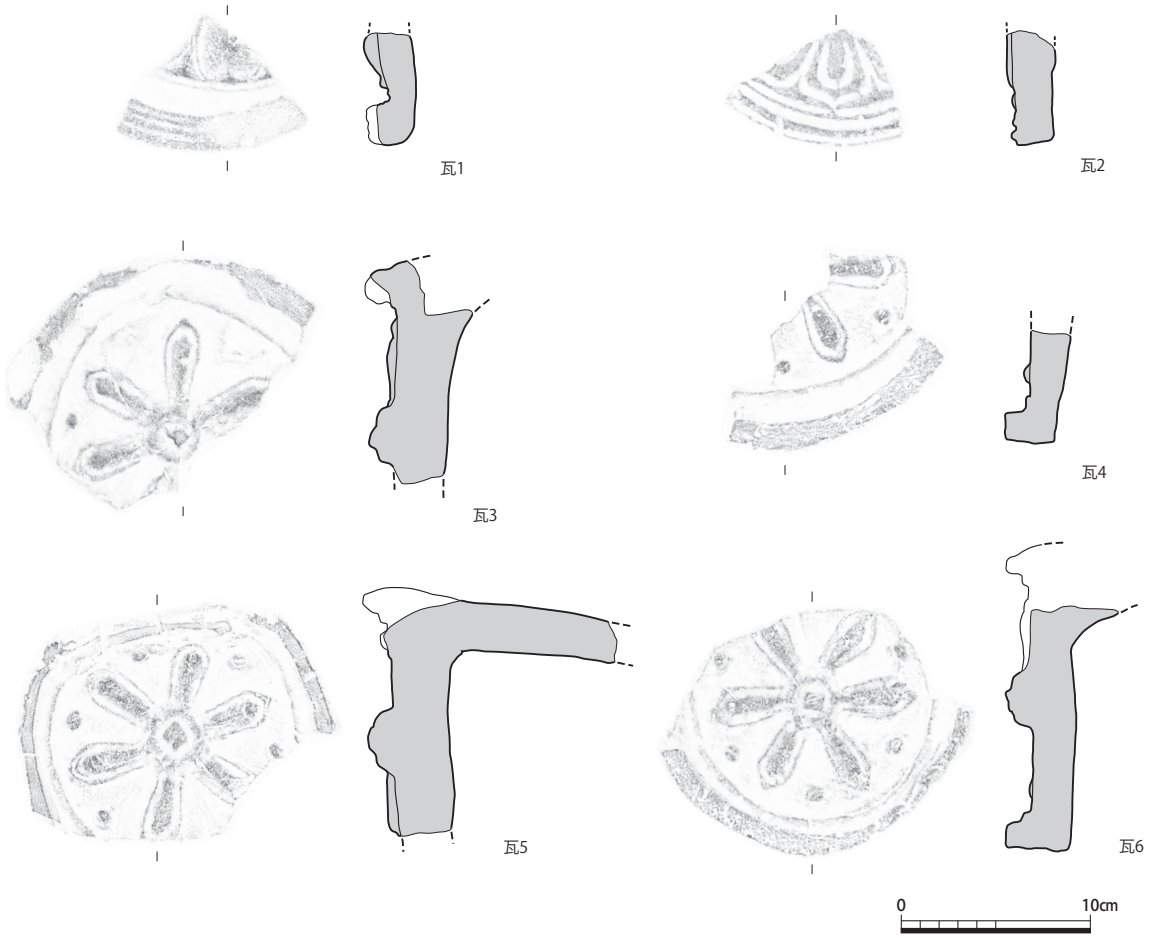


図８　出土瓦実測図１（１：４）

口縁端部は四角く成形されており，外面に沈線を施す。７は鍋Ａである。口縁部が直線的に外反し，調整は内外面ともハケ目を施す。９は蹄脚硯の脚部である。底径は20.6㎝で残高は2.7㎝である。10は鉄鉢である。口縁が内湾し，肩部がはる。11・12は杯蓋である。両方とも口縁端部を丸く収める。12の内面は平滑である。炭の付着はないが，転用硯として使用されていたと考えられる。13は杯Ａの身である。外反して立ち上がり，端部は丸くおさまる。14は杯Ｂの身である。体部は外反しながら立ち上がり，端部は丸くおさめる。貼り付け高台である。15は甕である。口縁は緩やかに「く」の字に曲がり，底部は平底である。外面はヘラケズリで，内面は強いナデを施す。16は

甕である。口縁は外反し，端部は四角く成形する。体部に取っ手がつく。調整は外面にタタキを施した後，ハケメを施す。内面は底部付近に青海波文が施される。時期は１～７は７世紀後半，８～16は８世紀中頃～後半に位置付けられる。

（２）瓦類（図８～15・表３）

SD２を中心として，軒丸瓦，平瓦，丸瓦，塼などが出土した。このうち軒丸瓦は７点，平瓦は575点，丸瓦は100点，鴟尾は１点，塼は１点ある。なお，瓦類の詳細については観察表（表３）にまとめる。

表３　出土瓦観察表

瓦番号	種類	文様・タタキ目の特徴	技法の特徴	図化出土遺構	総数	備考
瓦１	軒丸瓦	単弁八葉蓮華文。 周縁は三重圏文。	瓦当部側面・裏面はナデ。 胎土は少量の砂粒を含む。焼成は軟質。 色調は灰色。	SD ２	２点	
瓦２		単弁八葉蓮華文。 蓮弁は平坦である。弁区の外側に圏線が１条巡り，外線は低く太い圏線で表す。蓮弁の間に３箇所の笵傷が認められる。	瓦当部側面・裏面はナデ。 胎土は少量の砂粒を含む。焼成は軟質。 色調は黄橙色。	SD ２	１点	
瓦３		単弁六葉蓮華文。 中房は高く突出し，四角い蓮子があり，蓮弁は細く独立しており，蓮弁の間に珠文が巡る。	瓦当部側面・裏面はナデ。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は硬質。 色調は灰色。	SD ２	１点	
瓦４			瓦当部側面・裏面はナデ。 胎土は砂粒を少量含む。焼成は軟質。色調は黄橙色。	SD ２	１点	
瓦５			瓦当部側面・裏面はナデ，丸瓦部の凸面はケズリ，凹面に布目あり。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は硬質。 色調は灰色。	SD ２	１点	瓦当部上部をケズリ，楕円形を呈する。
瓦６			瓦当部側面・裏面はナデ。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は軟質。 色調は灰黄色。	SK ３	１点	
瓦７	平瓦	格子目（大）	桶巻作り。 凸面の端面付近はタタキ後ナデ。凹面に布目・模骨痕あり。側面・端面ともにナデ。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は軟質。 色調は淡黄色。	SD ２	90 点	
瓦８		格子目（小）	桶巻作り。 凹面に布の綴じ合わせ目や分割界線・模骨痕あり。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は軟質。 色調は淡灰色。	SD ２	116 点	
瓦９		斜格子目	桶巻作り。 凹面に布目あり。側面よりに分割界線あり。側面ナデ。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は硬質。 色調は灰白。	SD ２	45 点	
瓦 10		平行タタキ（太）	桶巻作り。 凹面に布目あり。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は軟質。 色調は淡黄色。	SD ２	30 点	
瓦 11		平行タタキ（細）	桶巻作り。 凹面に布目・模骨痕あり。 側面・広端面ともにケズリ。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は軟質。 色調は浅黄色。	SD ２	35 点	

瓦番号	種類	文様・タタキ目の特徴	技法の特徴	図化出土遺構	総数	備考
瓦 12	平瓦	特殊タタキ 幾何学 1	桶巻作り。 凸面の広端面付近はタタキ後ナデ。凹面に布目・模骨痕あり。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は軟質。色調は灰白色。	整地層	169 点	
瓦 13		特殊タタキ 幾何学 2	桶巻作り。 凸面の広端面付近に，叩き後ナデ。凹面に布目・模骨痕あり。側面ケズリ後ナデ。 胎土は砂粒を少量含む。焼成は硬質。色調は灰色。	SD 2	9 点	
瓦 14		特殊タタキ 幾何学 3	桶巻作り。凹面に布目・模骨痕あり。広端面・狭端面・側面ケズリ。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は硬質。色調は灰色。	SK 7	19 点	ほぼ完存。全長 46.9cm，幅 28.9cm。狭端面と広端面に法量の差はほぼなし。
瓦 15		特殊タタキ （日輪）	桶巻作り。凹面に布目・粘土のつなぎ目・模骨痕あり。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は硬質。色調は灰色。	SD 2	4 点	
瓦 16		特殊タタキ （波）	桶巻作り。 凹面に布目・模骨痕あり。広端面・側面ナデ。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は軟質。色調は灰色。	SK 3	10 点	
瓦 17		瓦 9 + 瓦 13 の要素がある複合タタキ	桶巻作り 凹面に布目･模骨痕･布のとじ合わせあり。側面ケズリ。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は硬質。色調は灰色。	SD 2	3 点	
瓦 18		縄目（細） 凸面斜め方向にタタキを施す。	桶巻作り。 凹面に布目あり。側面ケズリ。 胎土は砂粒を少量含む。焼成は軟質。色調は灰黒色。	SD 2	16 点	
瓦 19		縄目（太） 凸面縦方向にタタキを施す。	桶巻作り。 凹面に布目・模骨痕あり。側面ケズリ。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成軟質。色調は浅黄橙色。	SD 2	8 点	
瓦 20		縄目（細） 凸面縦方向にタタキを施す。	一枚作り。 凹面・側面に布目あり。狭端面はケズリ。側面から狭端面にかけて隅切りを行う。 胎土は 5 ㎜ほどの砂粒含む。焼成は軟質。色調は浅黄橙色。	SD 2	2 点	二次焼成あり。
瓦 21		縄目（細） 凸面斜め方向にタタキを施す。	一枚作り。凹面に布目あり。側面ケズリ。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は軟質。色調は灰白色。	SD 2	7 点	側面を斜めに切る。
瓦 22		縄目（太）1 凸面縦方向にタタキを施す。	一枚作り。凹面に布目あり。側面ケズリ。 胎土は砂粒を少量含む。焼成は軟質。色調は黄灰色。	SD 2	1 点	
瓦 23		縄目（太）2 凸面縦方向にタタキを施す。	一枚作り。凹面に布目あり。側面ケズリ。 胎土は砂粒 3 ㎜～ 2cm ほどの石を多く含む。焼成は軟質。色調は黒灰色。	SD 2	1 点	平安時代の瓦か。
瓦 24		ナデ 凸面横ナデで，タタキ目を完全に消す。	桶巻作り。凹面にわずかに布目あり。側面･広端面ケズリ。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は軟質。色調は浅黄橙色。	SK 5	10 点	凹面に摸骨痕が残るものも含む。
瓦 25	丸瓦	凸面に縄叩きを施した後，ナデ。	行基式。凹面に布目，布のとじ合わせ目あり。側面はケズリ。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は硬質。色調は灰色。	SK 3	99 点	
瓦 26		凸面胴部に縄タタキを施した後ナデ。	玉縁式。凹面に布目あり。側面はケズリ。 胎土は少量の砂粒を含む。焼成は軟質。色調はにぶい黄橙色。	SK 3	1 点	
瓦 27	鴟尾		鰭部。２段分の段を設ける。 胎土は砂粒をほぼ含まない。焼成は軟質。色調は灰白色。	SD 2	1 点	正段か逆段かは不明。
瓦 28	塼		表面・裏面・側面ケズリ。 胎土は少量の砂粒を含む。焼成は軟質。色調は灰白色。	SD 2	1 点	

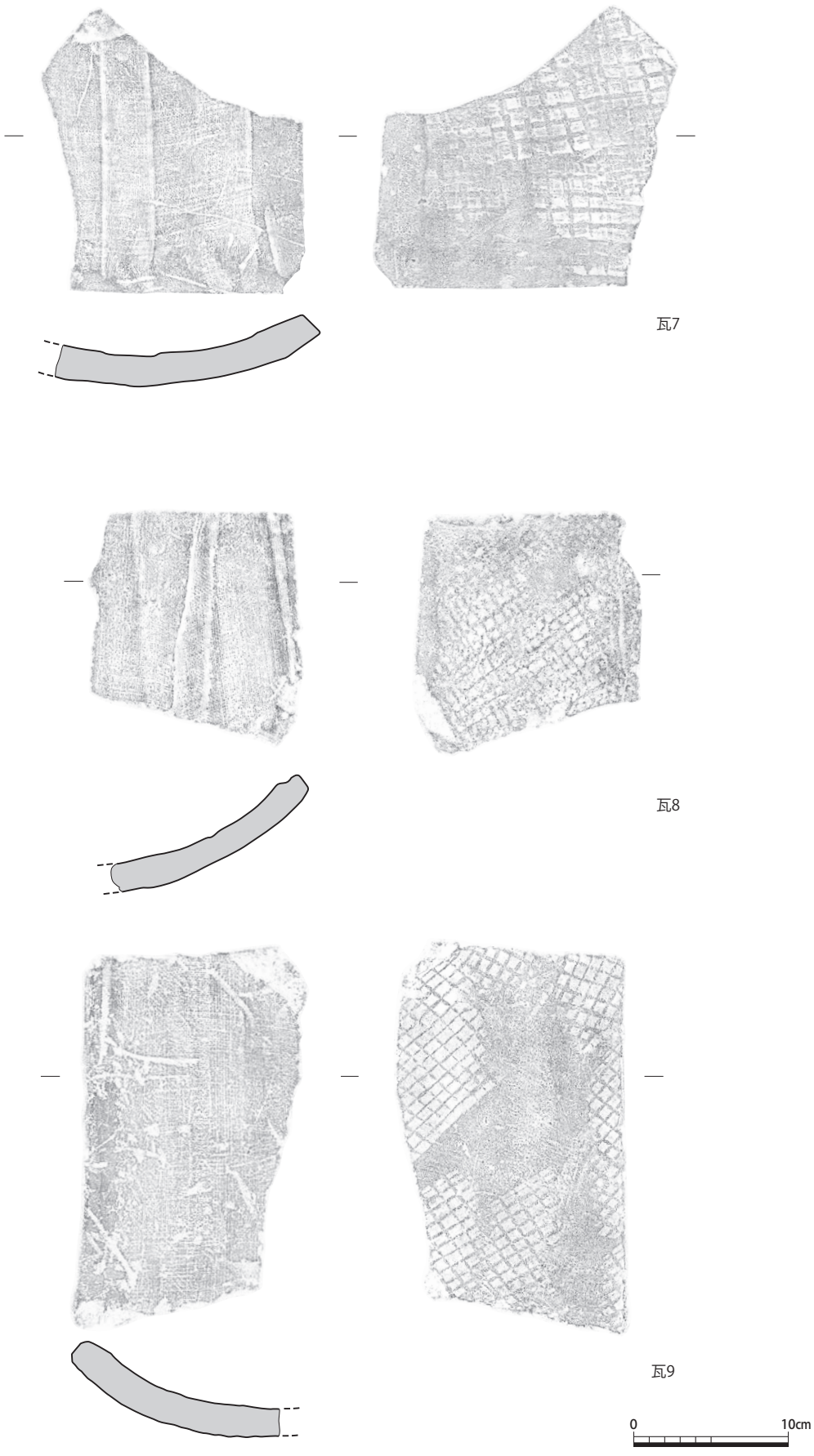


図９　出土瓦実測図２（１：４）

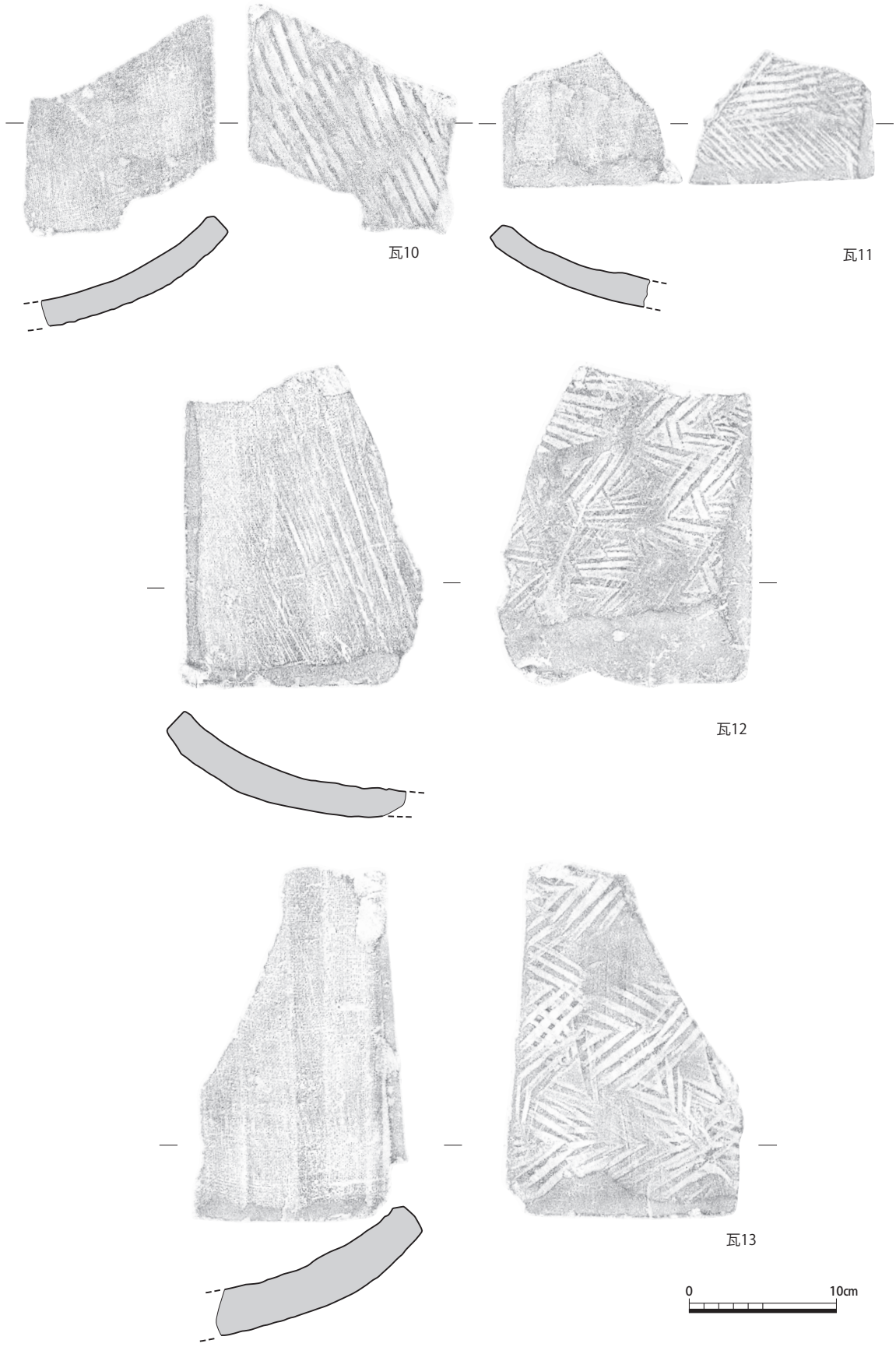


図10　出土瓦実測図３（１：４）

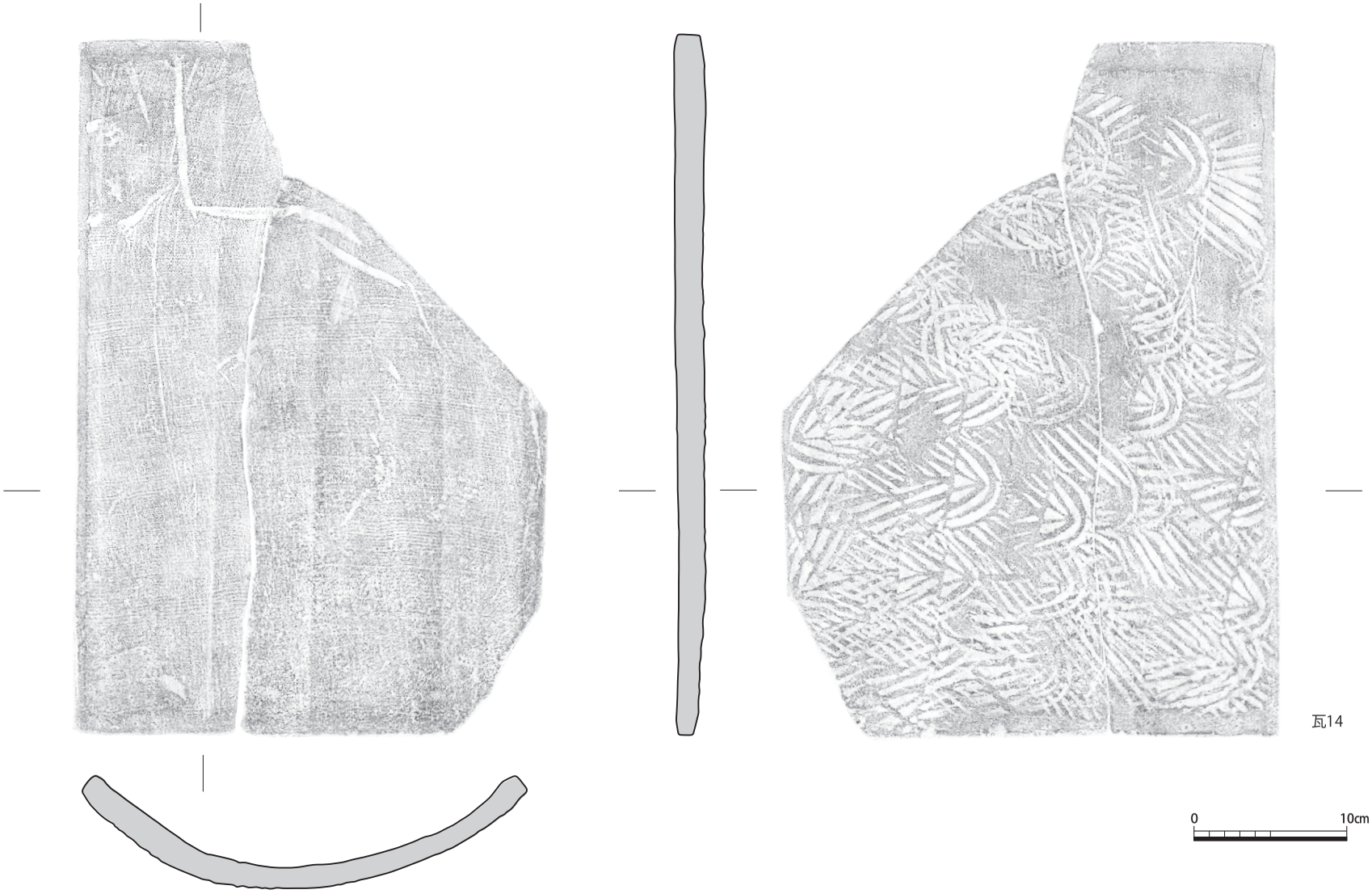


図11　出土瓦実測図４（１：４）

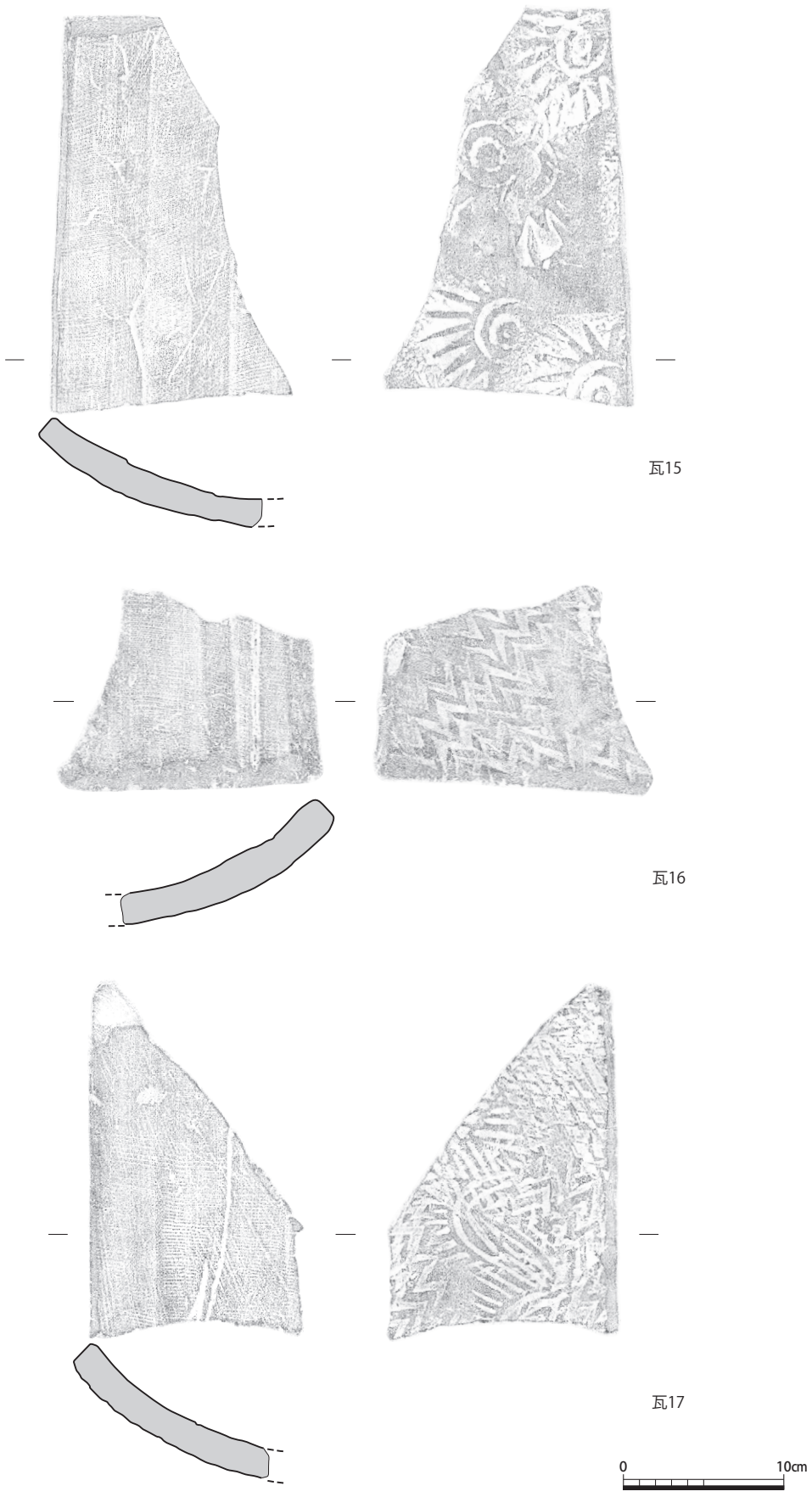


図12　出土瓦実測図５（１：４）

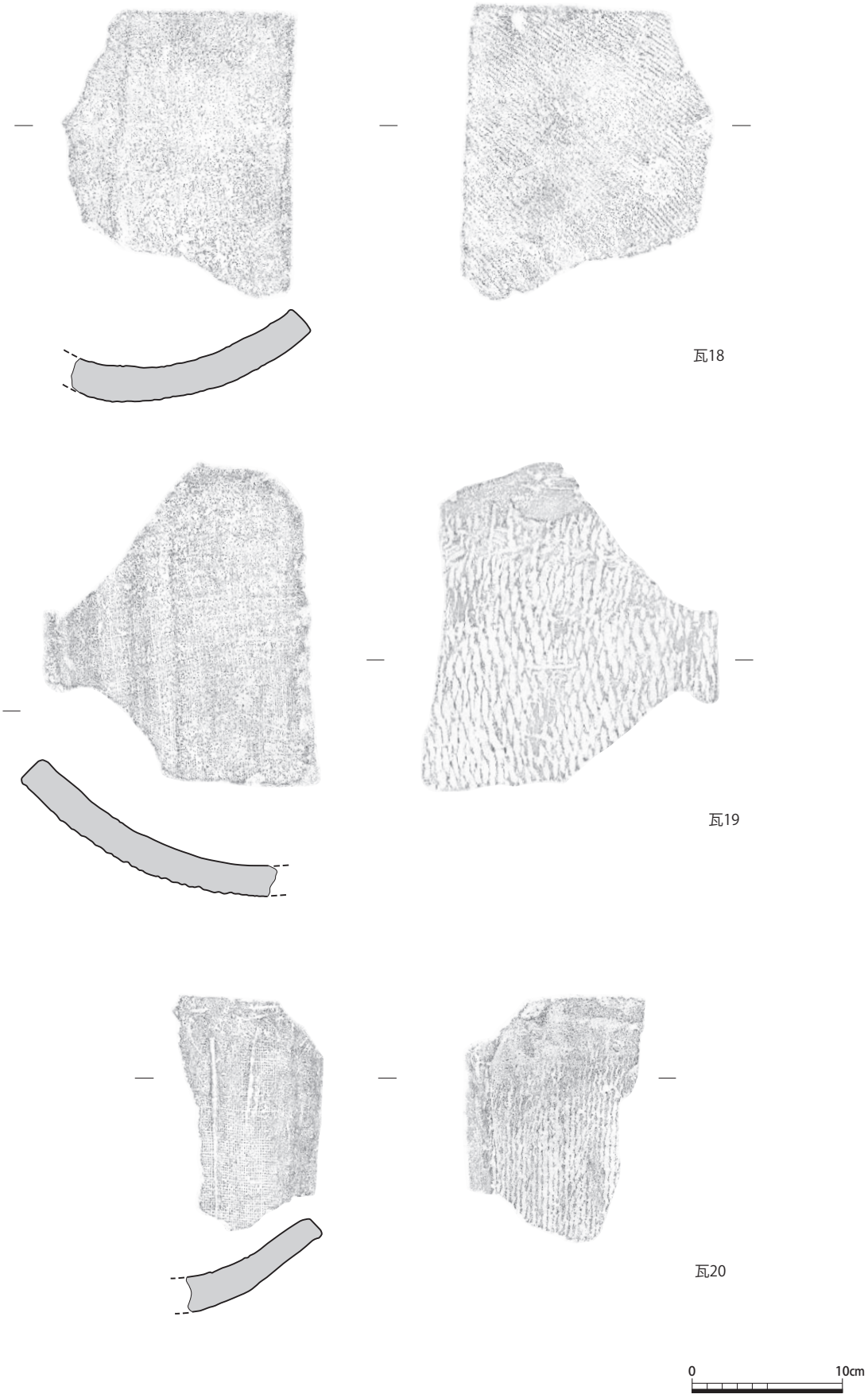


図13　出土瓦実測図６　（１：４）

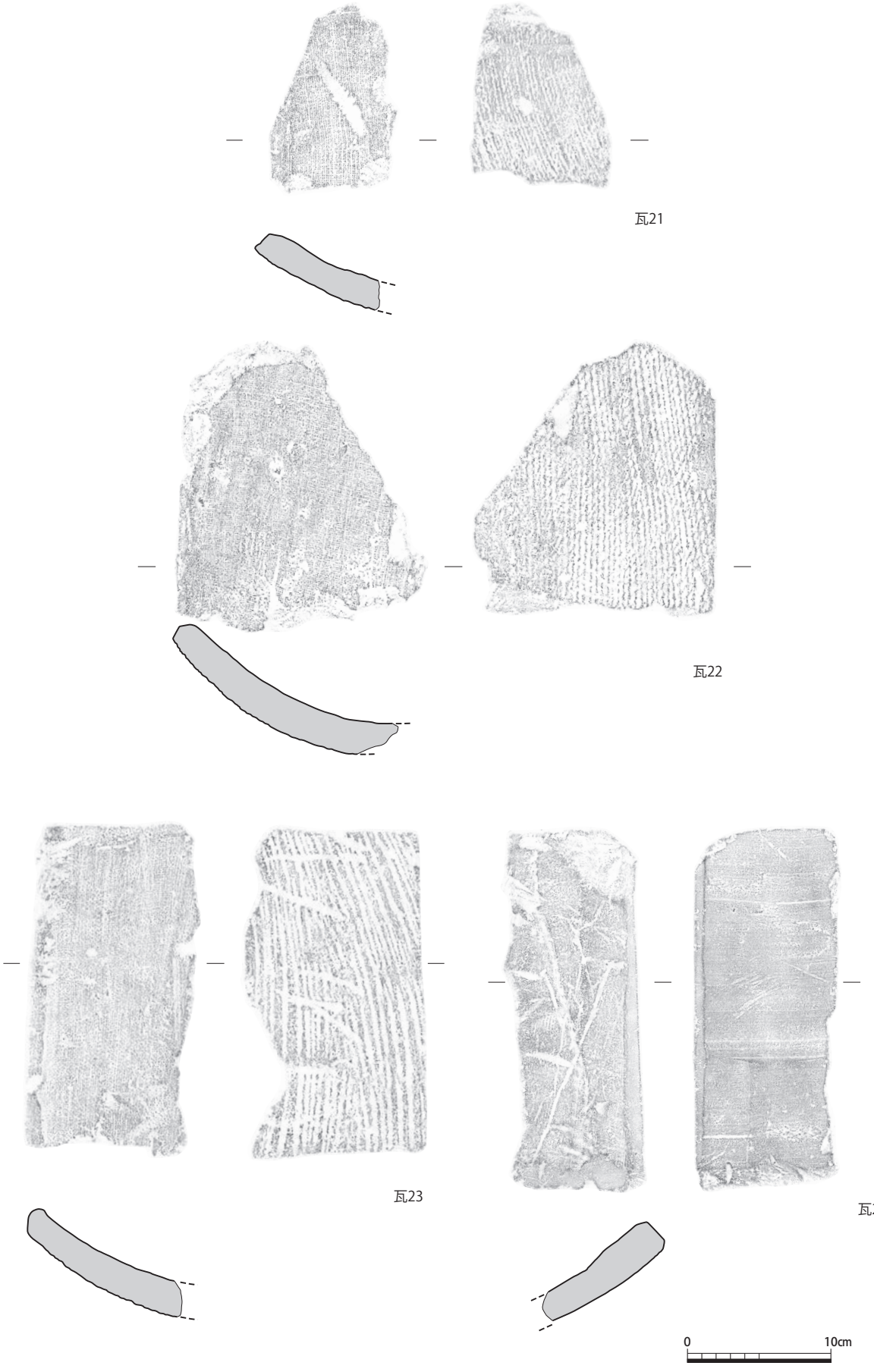


図14　出土瓦実測図7（1：4）

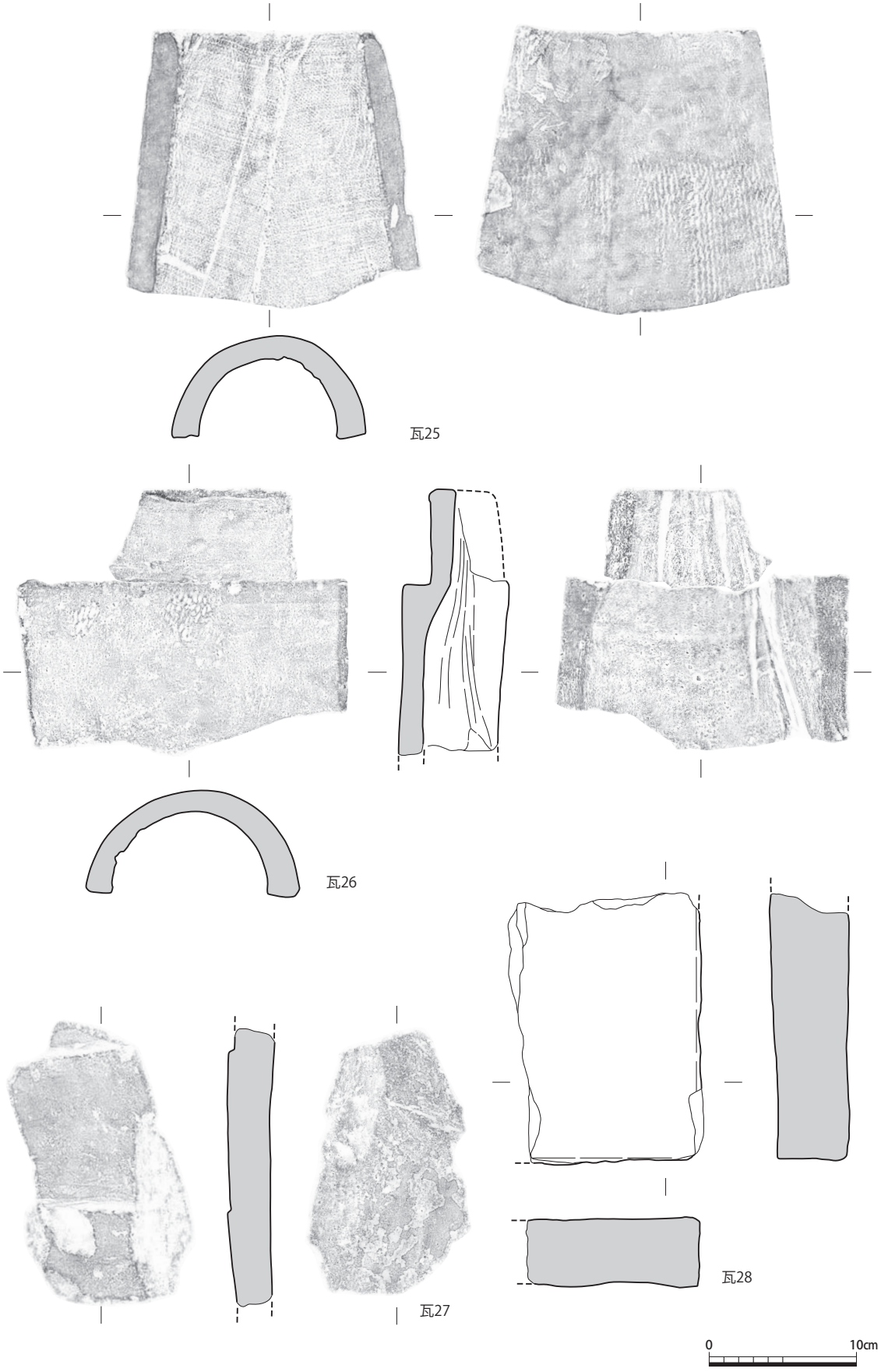


図15　出土瓦実測図８（１：４）

4．まとめ（図16・17・表4）

今回の調査は７世紀後半の土坑，８世紀中頃～後半の整地層，溝，土坑・ピットなどを確認した。今回の調査を考えるにあたり以下に，平成２年度調査[1)]・本書Ⅴ章の調査を比較し，まとめとする。以下，本調査を「調査①」，本章Ⅴ章の調査を「調査②」，平成２年の調査を「調査③」と表記する。

【調査①の概要】

遺構の時期は２時期あり，７世紀後半と８世紀中～後半に分けられる。

まず，７世紀後半の遺構として，SK３～５がある。SK３～５はいずれも幅2.8～4.1mの楕円形で，それぞれに切り合っている。塔造営に近い時期の遺構と考えられることから，造営に際して行われた土取りの痕跡の可能性が考えられる。

次に，８世紀中頃～後半の遺構として，SD１・２・６がある。SD１・２は東西方向，SD６は南北方向の溝である。SD１は幅0.4～0.7ｍで，深さ0.2～0.3ｍで調査区外に続く。SD２は幅1.5ｍで深さ0.7～0.8ｍの溝で調査区外に続く。SD６は幅1.3ｍ，深さ0.4ｍの溝である。出土遺物には大きな時期差はないと考えられる。主にSD２から瓦が多く出土している。塔跡周辺では格子叩きや特殊叩きが多く出土する傾向が指摘されているが[2)]，今回の調査でもその傾向を追認した。

【調査②の概要】

北溝の西延長線上で溝２条（SD５・６），その北側でさらに１条（SD８）を検出した。SD５・６は幅１ｍ前後で，深さはSD５が0.9m，SD６は0.12m，SD８は幅1.65m，深さ0.7mである。溝はいずれも西に対して南に３～５°振れる。SD５・６・８の出土遺物に大きな時期差は無く，出土した土器から，飛鳥時代中葉（７世紀中葉）の遺構と考えられる。

【調査③の概要】

東西方向の柱列が２条（SA９・10），東西溝が２条（SD７・８）検出された。柱列は，SA９は西に対して北に４°，SA10は北に１.8°ほど振れる。東西溝はいずれも深さは0.5mで，SD７が幅約2m，SD８が幅2.8m以上ある。SA９，SD７・８については，掘立柱塀とそれに伴う内外溝とされ，その性格について，塔を囲む塔院の塀が想定されている。SA10は北白川廃寺の伽藍造営軸と一致し，その後SA９が北へ大きく振れることから，造営基準が変化したことに対応すると考えられている。SD７・８からは瓦が多量に出土しており，平瓦だけで600点を超える。その内訳についてSD７では，一枚作りの平瓦が３割弱を占める[3)]。

【東西溝の比較】

調査①から③の比較から判明したことを以下に述べる。

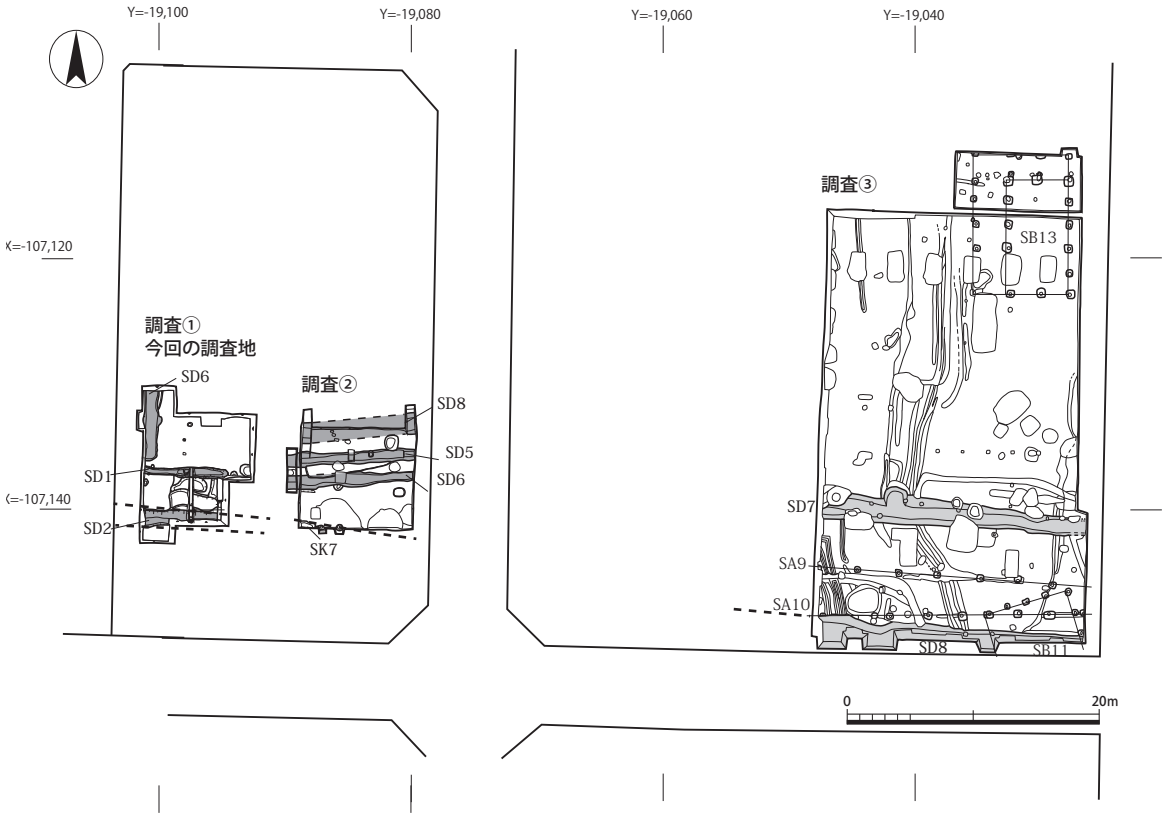


図16　調査①～③との遺構関係図（1：600）

表4　調査地別　溝の確認状況比較表

調査地	方位	遺物
調査①（本調査地）	西に対して南へ2～4°振る。	平瓦が575点以上出土。
調査②（本書Ⅴ章調査地）	西に対して北へ3～5°振る。	平瓦が約10点ほど出土。
調査③（平成2年度調査地）	西に対して南へ1.8°振る。	平瓦が600点以上出土。

・調査③のSD7・8，調査①のSD1・2は西に対して南に振れるが，調査②のSD5・8は北に振れる。
・調査③のSD7・8，調査①のSD1・2から塔所要と考えられる瓦が多量に出土したが，調査②の溝から瓦はほとんど出土していない。
・調査①・②は隣接する調査地だが，調査②のSD5・6・8の西延長部を調査①で確認することは出来なかった。また，調査②のSD6は溝の深さが西へ向かって浅くなるため，溝が途切れる可能性もある。
・調査③のSD7は，調査②・③のいずれでも西延長部を確認出来なかった。
・調査③のSD8は，調査②では西延長部を確認出来なかった。
・調査③のSD8と調査①のSD2は，溝の振れや出土遺物の様相が類似するが，両溝の間には約47ｍもの距離がある。
・調査②南西隅のSK7から，調査①のSD2と同様，塔所用瓦がまとまって出土しており，SD2の東延長部の可能性がある。その場合，土坑ではなく溝の北肩を検出したこととなる。

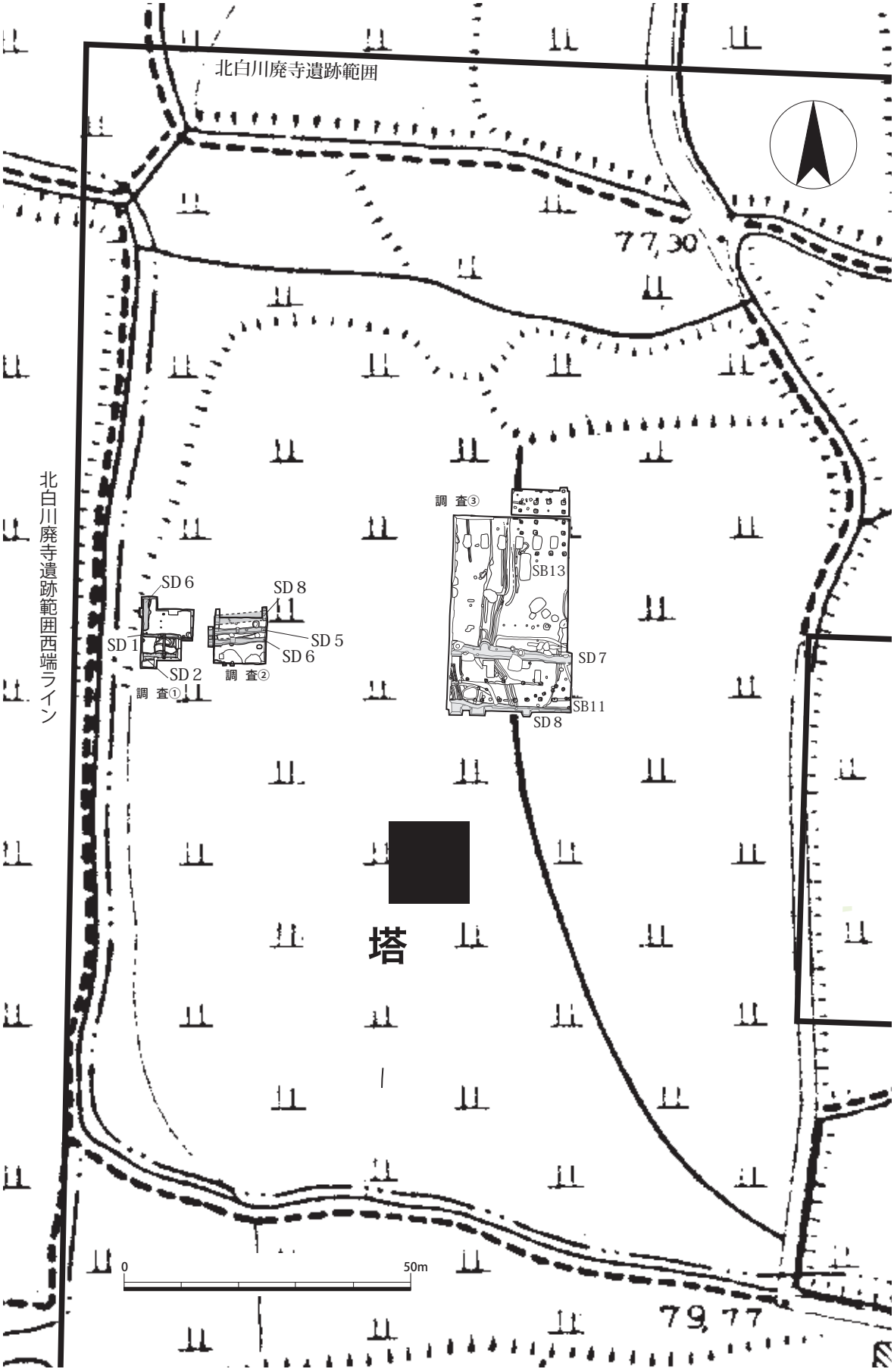


図17　調査①～③と塔との関係図（1：1,000）

以上のことより，まず今回の調査（調査①）で検出したSD２は調査③のSD８と類似する要素があものの，両溝の間には約50ｍほどの距離があり，一連の溝と考えるには調査データが不足している。次に，隣接した調査②のSD５・６・８は今回の調査区には続かない。そのため，溝が途切れるか，南北方向に曲がる可能性が指摘できる。また調査③のSD７も調査②には続かないことから，溝が途切れるか，南北方向に曲がる可能性がある。

【南北方向の溝】

今回の調査区北西で確認したSD６の性格を考えるにあたって，大正11年（1922）の都市計画図が参考になる（図17）[4)]。この地図では，塔基壇の周囲に道で囲まれた大きな長方形の区画が見られ，ある時期の寺域が地割として残っていた可能性が指摘されている[5)]。今回の調査区はこの長方形の区画の西端付近に位置しており，SD６は西端ラインとほぼ並行になる。寺域が地割として残っていたと積極的に解釈するならば，SD６は８世紀後半までの寺域の西限の溝の可能性がある。

以上，今回の調査と近隣調査の比較を通してまとめを述べた。当初連続すると想定していた溝が続かないなど課題が多く残る調査となったが，北白川廃寺に関する遺構・遺物が明確に残っていることが明らかになった。今後周辺で調査が行われる際には，今回の課題を含めて総合的な検討が必要となるであろう。

（清水 早織）

註

1）網　伸也「北白川廃寺２」『平成２年度京都市埋蔵文化財調査概要』，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1994年。

2）網　伸也「北白川廃寺の造営過程―北山背古代寺院の考古学的考察―」『古代』第97号，早稲田大学考古学会，1994年。

3）註２文献。

4）堀　大輔『飛鳥・白鳳の甍―京都市の古代寺院―』京都市文化財ブックス第24集，京都市文化市民局文化財保護課，2010年。図17は「新旧の地図上に復元した北白川廃寺の伽藍」を一部改変。

5）註４文献。

Ⅶ　山科本願寺跡（24・25次）

1．調査経過

24次調査は，山科区西野山階町36-2，38-1，51で実施した範囲確認調査である。平成22～26年・29年度にかけて行われた山科本願寺の中核となる御本寺内の調査（16～21・23次調査）の北側にあたり，「御本寺」の北辺にあたる。また南隣接地には，「京都を彩る建物や庭園」に認定（㊫1-047号）されている浄土真宗本願寺派西宗寺の檀家総代である奥田家の住宅が現存している。奥田家は敷地の北と西を土塁に囲まれており，土塁を取り込んだ主庭園と茅葺の主屋をはじめ上ノ蔵，下ノ蔵，正面には土塀を巡らせた重厚な長屋門を備えている（図13）。建物の主部の建築年代は元禄15年（1702）とされている。23次調査では現存する土塁の地形測量と断面観察を行い，土塁の現状記録と構築方法を確認した[1)]。今回の24次調査では，23次調査に引き続き土塁の様相を明らかにするため，土塁北側の裾及び外濠南肩の確認を想定し，調査区を設定した。なお，同調査地北隣接地で行われた試掘調査（表1-25）では，土塁外濠の北肩が確認されており，今回の調査成果とあわせて土塁の規模を明らかにできるものと想定した。調査は令和元年12月９日から19日まで実施し，調査面積は30㎡である。

25次調査は，同区西野山階町44で実施した範囲確認調査である。対象地は駐車場として利用されており，周囲の隣接道路より一段高い地形が残っている。この場所は，現在の御影堂推定地であ

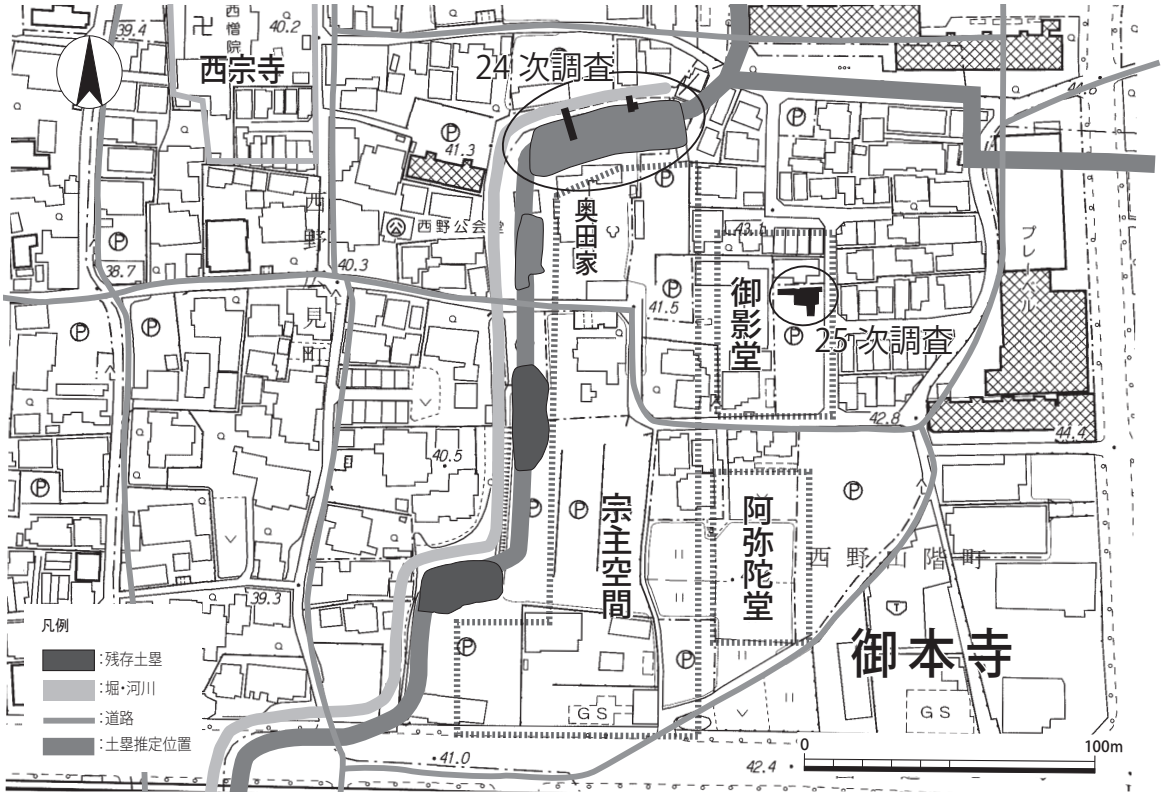


図1　各調査地位置図（1：5,000）

り[2]，この想定範囲での発掘調査は今回が初となる。調査は令和２年６月１日から30日まで実施し，調査面積は64㎡である。

なお両調査とも保存を前提とした確認調査であることから，遺構の掘削は埋没時期や性格を解明するための最低限度にとどめ，埋め戻しの際には土嚢や不織布などで遺構面を保護している。

２．遺　跡

（１）地理的環境と歴史的環境

山科本願寺跡は，山科盆地の中央やや西寄りに位置し，山科川，四ノ宮川，音羽川，安祥寺川などにより形成された扇状地の先端にあたり，周囲より標高が高く，比較的安定した地盤を形成している。遺跡の北側には京と東国を結ぶ旧東海道があり，また東海道から分岐する奈良街道や渋谷街道が通る交通の要衝であった。遺跡の東を限る山科川は醍醐，六地蔵を経て巨椋池に流れ込み，桂川・宇治川・木津川と合流し淀川となって大阪湾まで通じており，山科本願寺は，水運の面から見ても利便性の高い立地にあったと考えられる。

山科本願寺は，文明10年（1478）に浄土真宗中興の祖・蓮如上人によって造営が開始された寺院である。文明12年（1480）には「御影堂」の棟上，翌13年には「阿弥陀堂」の棟上が行われ，文明15年（1483）までに「向所」「寝殿」などを含めた主要堂舎が揃ったと考えられる。寺域は主要堂舎のある「御本寺」を中心に，有力末寺の坊舎が置かれた「内寺内」，門徒の居住区などがある「外寺内」が広がる３つの郭で構成され，要所には「折れ」を設け，それぞれの郭を土塁と濠で囲み，自然河川を利用して防御施設とした環濠城塞都市でもあった。その範囲は南北約１km，東西約0.8kmにおよぶ。また延徳元年（1489）には，山科本願寺から東へ約１kmの場所に蓮如の隠居所である山科本願寺南殿が造営された。蓮如は明応８年（1499）に南殿で没している。京が応仁の乱で荒廃し混乱が残るなか，山科本願寺は大いに繁栄するが，天文元年（1532），法華宗を中心として，管領細川晴元の配下，近江守護職六角定頼などの連合軍による攻撃により焼亡した。豊臣秀吉の命により山科に寺領を回復したが，本願寺が山科に戻ることはなかった。現在は遺跡の中心部を国道１号線と東海道新幹線が東西に通り，それに沿って市街地化が進んでおり，国道１号線を挟んだ北側と南側で土塁や濠の一部が山科本願寺の痕跡として，わずかに残るのみである。そのうち，山科中央公園内に残る「内寺内」と「外寺内」を限る土塁と南殿跡が平成14年に「山科本願寺南殿跡附山科本願寺土塁跡」として国史跡に指定されている。平成28年にはこれまでの発掘調査成果を基に，「御本寺」と呼ばれる本願寺の宗主空間の南側にあたる範囲を追加指定し，「山科本願寺跡及び南殿跡」に名称変更した。

（２）既往の調査（図９・表１）

山科本願寺跡では，今回の調査を含めて25次の発掘調査に加え，多数の試掘調査，立会調査が行われており，山科本願寺に関わる整地土や遺構が見つかっている（図12・表１）。



図２　24次　重機掘削風景（南西から）



図３　24次　埋め戻し風景（北から）



図４　24次　測量風景（東から）



図５　24次　写真撮影風景（北西から）



図６　25次　調査前風景（南から）



図７　25次　重機掘削風景（東から）



図８　25次　調査風景（南東から）



図９　25次　写真撮影風景（東から）



図10　25次　測量風景（南から）



図11　25次　埋め戻し風景（北東から）

今回の調査地周辺では，山科本願寺跡２・11～14・16～18・20・21次の調査が実施されている。２次調査では，石室や石組溝，礎石など，11・12次調査では宗主空間の南西部で南北方向の土塁基底部と石組暗渠，13次調査では，土塁の際で泉状遺構や石組溝からなる庭園遺構や小規模な炉，土取穴など，14次調査では池や石敷きからなる庭園遺構や礎石列などが確認されている。また14次調査では遺構埋土や遺構を覆う焼土層から多量の輸入陶磁器や堆黒・蒔絵などの高級漆芸品が出土している。16・17次調査では通路状遺構，柱列，集石遺構，石組溝群，土塁屈曲部，刀埋納遺構，また同敷地内の18次調査では石組井戸，風呂関連遺構群，塀，土塁などが確認されている。20・21次調査では宗主空間の中央部で南北方向の土塁基底部と整地土のほか，建物や山科本願寺期の現存土塁構築以前に遡る可能性のある濠が確認されている。

以上のように，調査地周辺では山科本願寺「御本寺」に関連する遺構が多数検出され，建物の密度の高さや庭・風呂遺構などから，調査地の南側一帯が宗主一族の居住空間および本願寺の実務空間にあたると想定されている。そしてその東側に阿弥陀堂や御影堂などの主要堂舎が位置すると推測されている。この他，「御本寺」を囲む土塁についても調査が進められている。７次調査のように土塁構築と整地が同時に行われていることが確認されている箇所もあるが，11・12・17・20・21次調査のように整地後に土塁が築かれていることが確認されている。またこれらの調査成果により，現在複雑な折れをもつ濠や土塁で囲まれる山科本願寺は創建当初にはその姿ではなく，いくつかの変遷を経て形成されたことが明らかになるなど，新たな知見が得られている（表１）。

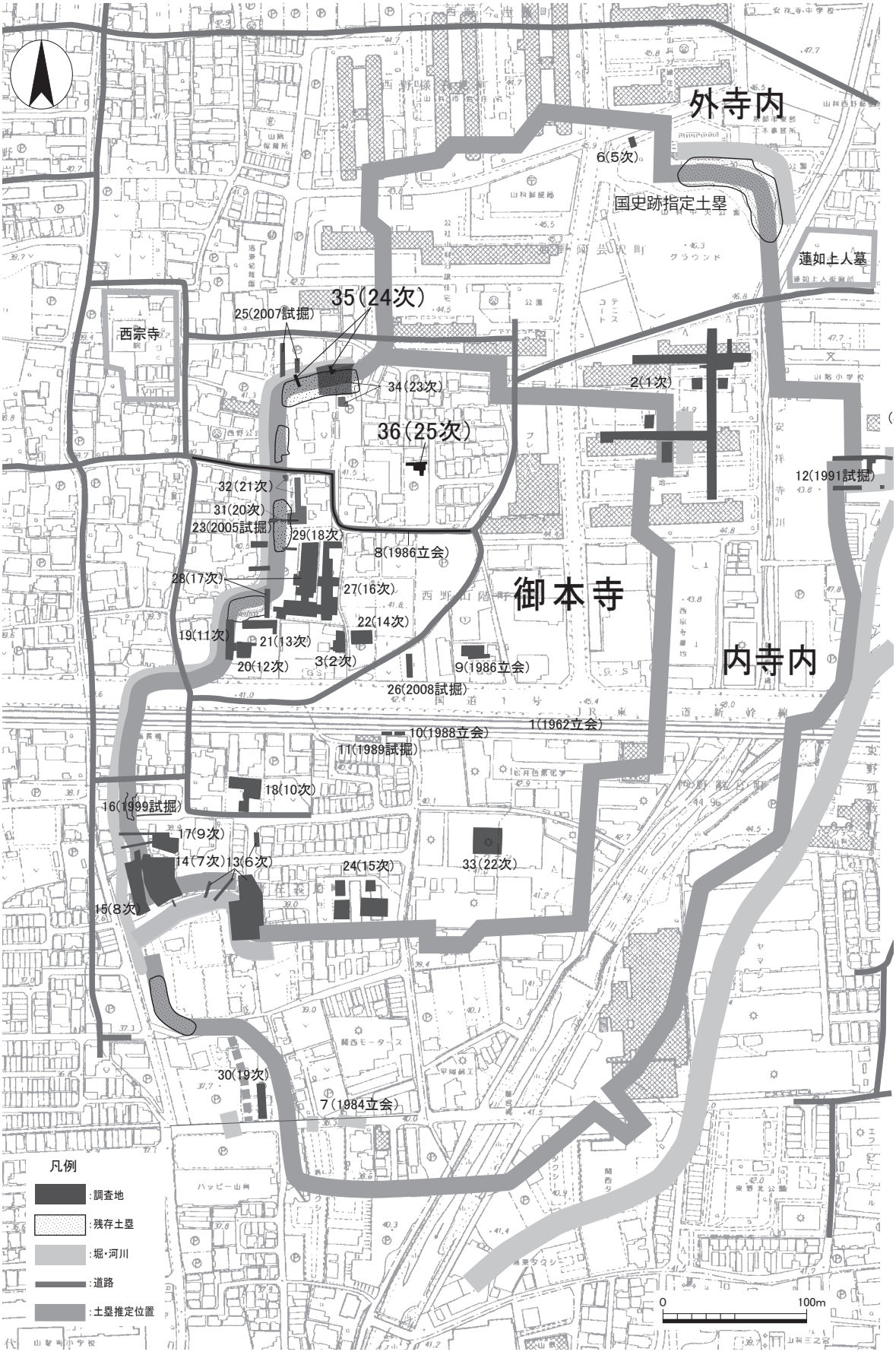


図12　主要調査位置図（1：4,000）

表１　近隣調査事例一覧（図１に対応）

No.	次数・調査名(調査記号)	所在地：山科区	調査期間	方法	概　要	文献
1	新幹線立会	西野左義長町・山階町・離宮町	1962.8.9～11.11	立会	南北方向の石組溝，暗渠，南北方向の土塁	1
2	１次調査	西野阿芸沢町・山階町・離宮町	1973.5.21～8.4	発掘	建物・鍛冶場，石垣，柵，南北方向の堀・土塁	2
3	２次調査	西野山階町	1974.10.9.～11.3	発掘	石組溝，石室，庭園の一部	2
4	３次調査(76RT-YG001)	西野今屋敷町９（安祥寺中学校）	1976.11.17～11.30	発掘	旧耕作土層	3
5	４次調査(76RT-YG002)	西野大手洗町20（山階小学校）	1977.2.14～3.5	発掘	江戸時代以降の落込み	4
6	５次調査(76RT-JN001)	西野阿芸沢町（山科中央公園）	1978.10.30～11.13	発掘	撹乱のみ	5
7	下水立会(83RT-SW061)	西野左義長町・東野舞台町ほか	1984.3.6～11.17	立会	東西および南北方向の堀，土坑群	6
8	下水立会(85RT-SW054)	西野大手洗町・今屋敷町ほか	1986.4.1.～1987.5.16	立会	南北方向の堀と土塁，土坑	7
9	(86BB-RT0109)	西野山階町12	1987.1.27～1.30	立会	東西方向の石組溝	8
10	(88BB-RT005)	西野山階町29	1988.5.30～6.2	立会	東西方向の石組溝	9
11	(89BB-RT021)	西野山階町29	1989.10.2～10.14	試掘	東西方向の石組溝	10
12	(91RT-AH001)	西野大手洗町20（山階小学校）	1991.8.2～10.18	試掘	土塁と堀の屈曲部	11
13	６次調査(96RT-HG001)	西野左義長町16ほか	1997.4.20～7.10	発掘	東西および南北方向の堀，東西方向の土塁，暗渠，建物，井戸	12
14	７次調査(97RT-HG002)	西野左義長町23	1997.7.16～9.18	発掘	鉤型に曲がる土塁と堀，建物，井戸，鍛冶場	13
15	８次調査(98RT-HG003)	西野左義長町23-1，23-4	1998.8.17～11.9	発掘	南北方向の堀と土塁，暗渠	14
16	(センターNo.60)	西野左義長町19-1ほか	1999.10.28	試掘	南北方向の土塁を測量	15
17	９次調査(00RT-HG004)	西野左義長町19-1ほか	2000.5.10～6.30	発掘	建物，溝，暗渠，土塁基底部	16
18	10次調査(04RT-HG006)	西野左義長町13-2	2005.1.17～3.18	発掘	東西および南北方向の堀，塀，柵	17
19	11次調査(04RT-HG007)	西野山階町30	2005.3.1～3.15	発掘	土塁基底部の構築状況を調査	17
20	12次調査(05RT-HG008)	西野山階町30	2005.5.11～5.25	発掘	土塁内側斜面と暗渠	18
21	13次調査(05RT-HG009)	西野山階町30	2005.5.30～7.2	発掘	土塁屈曲部，泉状遺構，炉，土取穴，暗渠	17
22	14次調査(05RT-HG010)	西野山階町28-5，28-6	2005.11.11～12.16	発掘	焼成土坑，庭園遺構，柱列，多量の輸入陶磁器，ガラス玉出土	17
23	(保護課No.05S208)	西野広見町31-1ほか	2005.9.20	試掘	御本寺西側を限る堀の西肩口	19
24	15次調査	西野左義長町25-4ほか	2006.7.31～9.15	発掘	御本寺南側を限る堀状の落込，土坑，井戸，溝，柱穴	20
25	(保護課No.07S274、275)	西野広見町5-7，5-10	2007.9.25	試掘	御本寺北側を限る堀の北肩部	21
26	(保護課No.08S103)	西野山階町11-5ほか	2008.9.1	試掘	GL-0.4mで整地層を確認	22
27	16次調査(10RT-HG012)	西野山階町30-1ほか	2011.1.11～3.11	発掘	整地面，焼土の堆積，通路状遺構	23
28	17次調査(11RT-HG013)	西野山階町30-1ほか	2011.7.21～9.30	発掘	整地面，石組溝，土塁など	23
29	18次調査(12RT-HG014)	西野山階町30-1ほか	2012.7.17～10.4	発掘	石組井戸，風呂関連遺構群，塀状遺構，土塁など	24
30	19次調査(13RT-HG016)	東野舞台町20，20-4	2013.10.28～11.25	発掘	中世の盛土または整地土，平安時代中期の建物，溝，土坑など	25
31	20次調査(13RT-HG017)	西野山階町35ほか	2014.1.20～2.7	発掘	整地土，土塁裾部	26
32	21次調査(14A001)	西野山階町35ほか	2014.7.22～9.30	発掘	整地面，土塁，堀，溝，柱穴など	27
33	22次調査(14S612)	西野離宮町40	2015.7.30～9.18	発掘	建物，埋甕，土坑などの酒造遺構，堀	28
34	23次調査(18A007)	西野山階町37-2，37-3	2018.12.3～12.27	発掘	整地土，柵，土坑など，土塁地形測量及び断面観察	29
35	24次調査(19A008)	西野山階町36-2，38-1，51	2019.12.9～12.19	発掘	土塁の形状と基底部の構築状況を調査	本報告
36	25次調査(20A001)	西野山階町44	2020.6.1～6.30	発掘	土坑，井戸，整地土など	本報告

文献一覧（表１の文献番号と一致）

1　杉山信三・堤圭三郎「27．山科本願寺」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』日本国有鉄道，1965年。

2　岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第８集，1985年。

3　「山科本願寺跡１」『昭和51年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2008年。

4　「山科本願寺跡２」『昭和51年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2008年。

5　「山科本願寺跡」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2011年。

6　平方幸雄「山科本願寺跡」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1987年。

7　百瀬正恒・吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年』京都市文化観光局，1988年。

8　百瀬正恒「山科本願寺跡」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1989年。

9　久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局，1989年。

10　久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』京都市文化観光局，1990年。

11　本弥八郎「山科本願寺跡」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1995年。

12　永田宗秀・近藤知子「山科本願寺跡１」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1999年。

13　近藤知子「山科本願寺跡２」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1999年。

14　吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成10年度』京都市文化市民局，2000年。

15　長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成11年度』京都市文化市民局，2000年。

16　吉崎　伸「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成12年度』京都市文化市民局，2001年。

17　小檜山一良・清藤玲子・柏田有香「山科本願寺跡（１）（２）（３）（４）」『京都市内遺跡発掘調査報告平成17年度』京都市文化市民局，2006年。

18　柏田有香『山科本願寺跡』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2005年。

19　長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成17年度』京都市文化市民局，2006年。

20　未報告（古代文化調査会による調査）

21　家原圭太「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成19年度』京都市文化市民局，2008年。

22　堀　大輔「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成20年度』京都市文化市民局，2009年。

23　柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成23年度』京都市文化市民局，2012年。

24　柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成24年度』京都市文化市民局，2013年。

25　近藤奈央「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成25年度』京都市文化市民局，2014年。

26　近藤章子「山科本願寺跡（1）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成26年度』京都市文化市民局，2015年。

27　新田和央・馬瀬智光「山科本願寺跡（2）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成26年度』京都市文化市民局，2015年。

28　佐藤好司『山科本願寺跡・左義長町遺跡―建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』イビソク京都市内遺跡調査報告第14輯　株式会社イビソク，2017年。

29　奥井智子「山科本願寺跡　第23次」『京都市内遺跡発掘調査報告　令和元年度』京都市文化市民局，2020年。

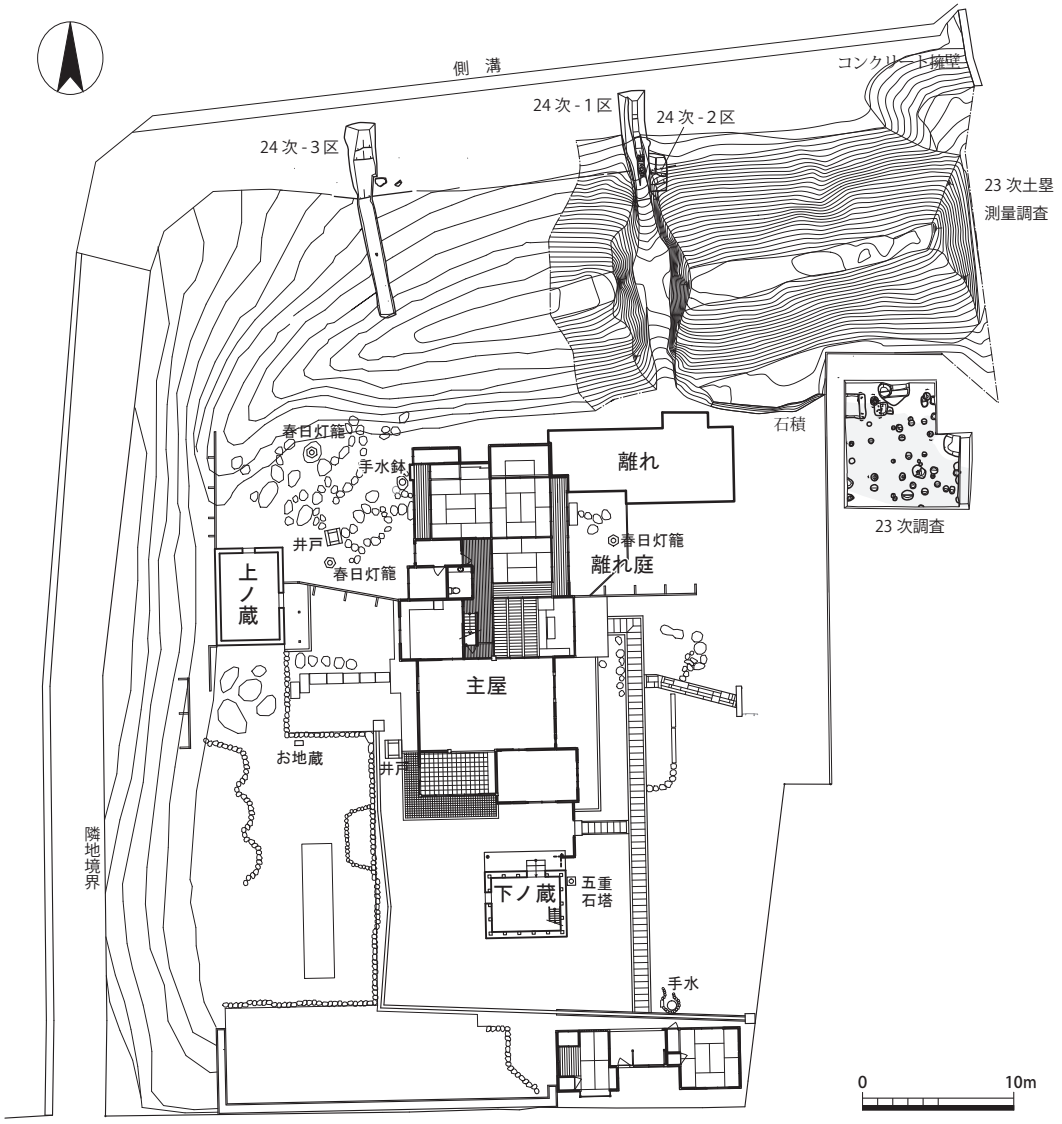


図13　奥田家住宅と23・24次調査（1：500）

3．遺　構

本調査は，奥田家北側の現存土塁外側部分（24次調査区）と東側の駐車場（25次調査区）である。今回の調査起因上，将来的な再検証のため遺構は完掘はせず半裁や断割りにとどめたものが多い。そのため規模や深さは，確認できた範囲の値である。以下，主要遺構について報告する。

（1）24次調査（土塁北側）

23次調査では，現存する東西方向の土塁に対して設けられた南北方向の切通しを利用し，露出部分の土層観察を行った。その結果，土塁は概ね粘質シルトや粘質土に小礫が混じる土で構成されている。核となる堆積を主に，概ね北から南へと積まれており，土塁の内側へ向かって斜め積みされている様子が明らかになった。今回の24次調査ではこの土塁断面に続いて，土塁北側の裾部から濠の状況を確認するため，切通しに続く形で調査区（1区）を設けた。なお，1区の補足調査として，土塁裾部分の一部を拡張し，平面確認を行った（2区）。また，現存土塁西側の形状の把握と2007年の試掘調査成果を基に土塁外濠の規模を推定するための調査区（3区）を設けた。

1・2区（土塁）

昨年断面調査を行った土塁裾部分から，土塁北側に想定している外濠の状況を確認するために設定した調査区である。

基本層序は，表土，近代盛土（図15-1），近代盛土以前の旧表土（図15-6），切通し形成時に積まれた土塁崩落土1・2（図15-7～16），土塁崩落土3（図15-17～21）及び土塁崩落土4（図15-22～24），土塁構築土（図15-25～30），地山（図15-31～40）となる。

遺構は，近代盛土以前の旧表土上面（第1面）と土塁崩落土1・2を除去後（第2面）に検出を行った。第1面では，調査区の中央に既存切通しから続く当初の切通しが埋まった痕跡を確認した。切通しの掘削は土塁側では，構築土を越え地山（41.1m）にまで達し，調査区中央部（40.2m）まで確認できた（図15）。第2面は，土塁崩落土1・2を除去し，崩落土3・4と土塁構築土を切り出した地山の形状を確認した。調査中に，崩落土3・4を除去し，土塁存続時の形状を確認した。崩落土3は，その断面形状から濠埋土の可能性があるものの，やや締まりのない小～中礫を多く含むにぶい黄色粘質土や灰黄色粘質土，その下はやや粘性のある灰黄色シルトとなる。今回確認した濠埋土では，明確に滞水していた痕跡は確認できなかった。しかし最下層でやや粘性のある灰黄色シルトが確認できたことから，この層以下で滞水の様子が確認できる可能性がある。

表2　遺構概要表（24次）

時　代	遺　構	備　考
山科本願寺期	土塁構築土	
江戸時代～近代	土塁外濠	

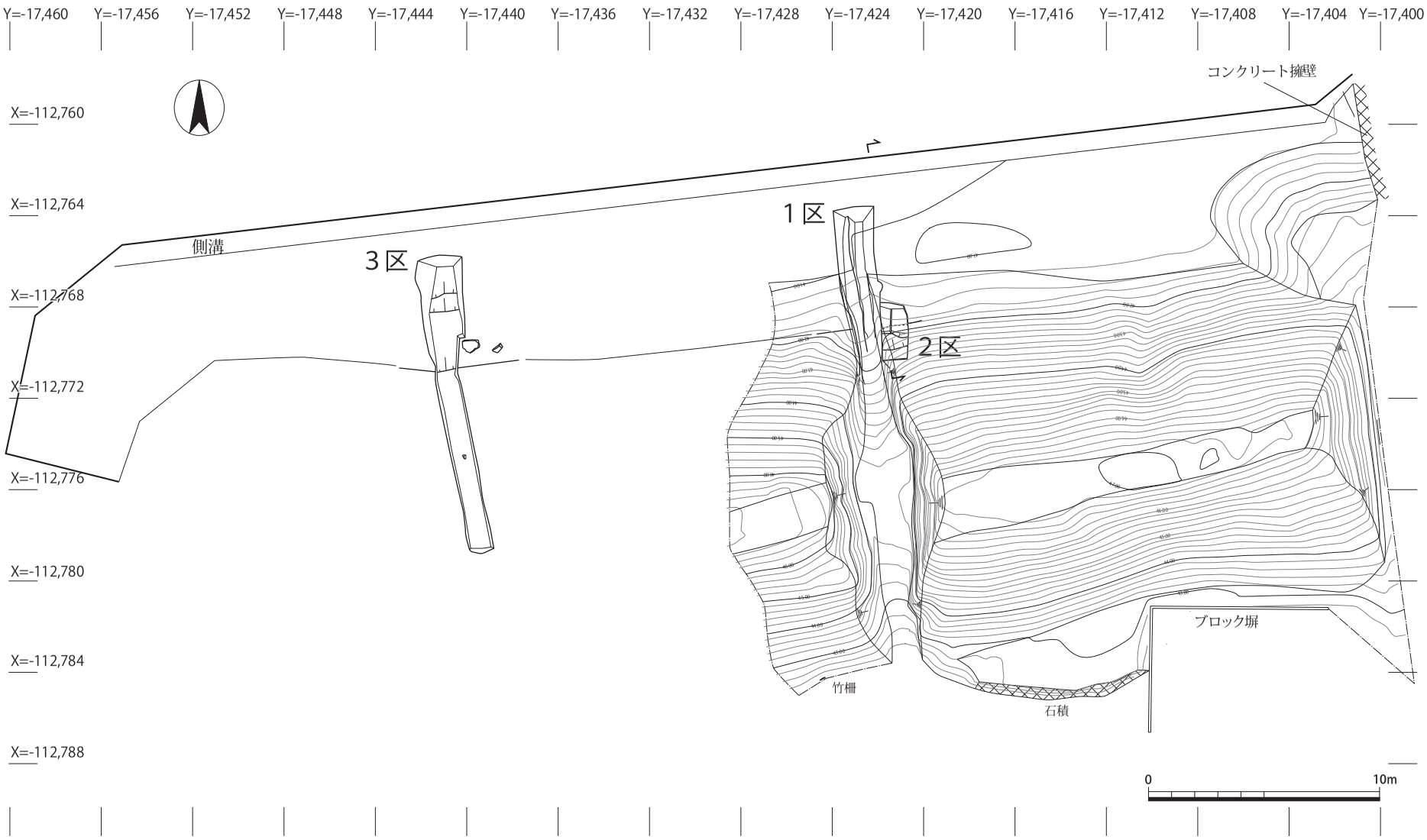


図14　土塁と各調査区配置図（1：250）

土塁裾部分にあたる調査区の南端では，表土の下，GL-0.3ｍで灰黄色シルトやにぶい黄色シルトなどの土塁構築土，-0.6ｍで灰白～淡黄色の礫の地山を確認している。土塁裾部分では，地山の凹部分に構築土（図15-29・30）を充填し，地山とほぼ水平になった高さから，構築土をほぼ水平に積んでいること（図15-25～28）を確認した。また今回確認した東壁では土塁構築土が確認できるが裾が抉られるような形状をしている。西壁では崩落土下は地山となり構築土は確認できておらず，様相が大きく異なる。このため１区の東側の土塁裾部分を拡張し，平面確認を行った（２区）。結果，東壁の様相と同じく，土塁裾部分が抉られている状況が確認できたため，土塁裾部分は形成後，何らかの浸食を受けたと考えられる。

土塁構築土下で確認した灰白～淡黄色の礫や小礫を多く含む黄色シルトやにぶい黄色粘質土については，地山であるか明確に判別するため，断ち割り調査を行った。層序は上から下へ，小礫～礫，締まりのあるシルト，小礫と粘質土，礫と粘質土，シルトになる。締まりのあるシルトの上面には５～15㎝の凹凸が見受けられ，上位層の礫が入り込んでいたことから，礫堆積時の浸食の痕と考えられる。この礫については，石粒の堆積方向から大きく４層に区分でき，それぞれの石面は概ね揃っている。この礫層自体は流れの強い河川堆積の結果と考えられる。この地は土塁形成以前にも礫が厚く堆積するほどの強い流れがあったと考えられることから，土塁裾部分が北東から西に向かって大きく抉られている要因も，何らかの強い流れによるものの可能性がある。

３区（土塁外濠）

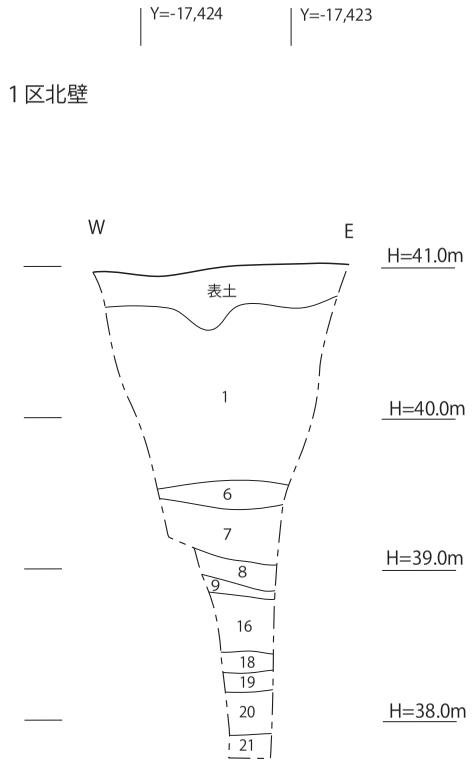
土塁頂部から濠想定部分にかけて，土塁の形状を確認するために設定した調査区である。土塁部分は，厚さ0.1～0.25ｍの表土直下で，土塁構築土を確認した。当該区は，形状把握が主目的の為，土塁構築土の掘削は行っていない。また土塁裾から濠想定部分については，表土，現代盛土の下，GL-2.4ｍ（38.4ｍ）で鉄分沈着のある灰オリーブ色粘質シルト，-2.5ｍ（38.3ｍ）で灰オリーブ色粘質シルト，-3.0ｍ（37.8ｍ）で細砂が混じる灰オリーブ色粘質シルトを確認し，-3.18ｍ（37.65ｍ）まで同層を確認した。安全管理上の問題で，これ以上の掘削を取りやめた。濠部分では旧表土が途切れ，鉄分沈着のある灰オリーブ色粘質シルトとなる。東壁断面では南端に木杭の痕跡が確認できた。護岸のための杭の可能性がある。土塁裾を確認するため，一部断ち割りを行った結果，40.85ｍ以上では締まりのある黄色シルトの土塁構築土，40.85ｍ以下はにぶい黄色粘質土やシルトの地山を確認した。またこの構築土と地山が確認できた箇所の傾斜はきつく，平面でも傾斜角度の変化点を41.05ｍ地点で確認できる。この変化点が土塁と濠の境と考えられる。今回の土塁頭頂部は47.6ｍ，土塁裾は41.05ｍとすれば，土塁高は6.55ｍである。また今回，濠の底まで確認することはできなかったが，濠は深さ3.4ｍ以上であり，土塁頭頂部から現状確認した濠底までの比高は9.95ｍ以上となる。土塁構築土の傾斜は35度である。土塁南斜面である奥田家庭側の土塁は後世の作庭の影響で，段造成されており，やや土塁の形状が崩れている。頭頂部には幅2.3ｍほどの人が行き交うことが可能な広さの平坦面が確認できる。

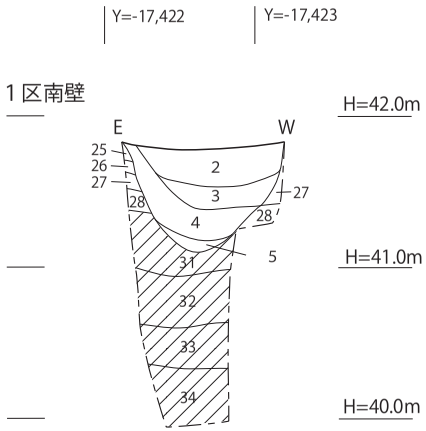
平成19年度に行った試掘調査[3)]では，土塁の外濠北肩を検出している。土塁の外濠北肩は地山上面に堆積する無遺物の灰オリーブ泥砂を切り込んで形成されている。今回，当時のKBMに標高

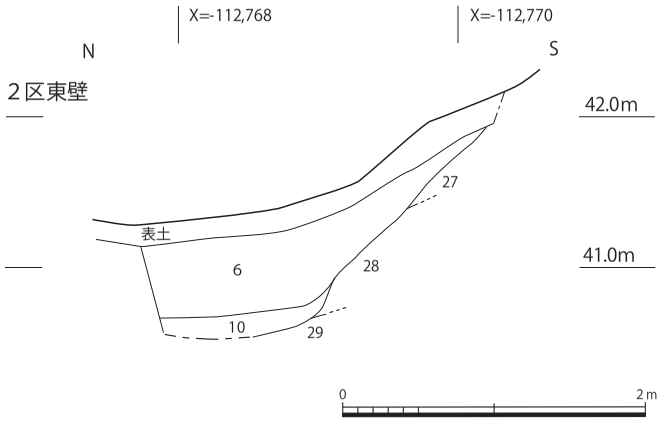


図15　1区東壁断面図（1：50）及び土塁東壁断面模式図（1：300）

をあたえた。今回の調査成果と勘案すると，検出高は41.0ｍで，また濠の想定幅は11.4ｍと考えられる（図18）。先に想定した土塁と濠の境と考えられる変化点の標高は41.05ｍであり，試掘調査で検出した濠の検出高と近しい値を示すことからも，断面，平面で確認できた傾斜角度の変化点は，土塁と濠の境であるといえる。







1　5Y8/6 黄色粘土【近代盛土】
2　5Y5/1 灰色粘質土【切通し埋没土】
3　5Y7/4 浅黄色粘質土【切通し埋没土】
4　5Y5/2 灰オリーブ粘質土【切通し埋没土】
5　5Y6/2 灰オリーブ粘質土【切通し埋没土】
6　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土（３㎝大の礫少量含む）【旧表土】
7　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土（小礫わずかに含む）【土塁構築土の崩落土１】
8　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト（炭化物・細砂含む）【土塁構築土の崩落土１】
9　2.5Y4/1 黄灰色シルト（鉄分沈着あり）【土塁構築土の崩落土１】
10　2.5Y5/3 黄褐色粘質土（小礫多く含む・遺物有）【土塁構築土の崩落土２】
11　2.5Y7/4 浅黄色シルトまじり粘質土【土塁構築土の崩落土２】
12　2.5Y6/2 灰黄色粘質土（小礫多く含む）【土塁構築土の崩落土２】
13　2.5Y6/2 灰黄色粘質土（小礫多く含む）【土塁構築土の崩落土２】
14　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（小礫多く含む・やや締まりなし）【土塁構築土の崩落土２】
15　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（小礫～中礫多く含む・やや締まりなし）
【土塁構築土の崩落土２】
16　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（小礫～中礫多く含む・やや締まりなし・遺物有）
【土塁構築土の崩落土２】
17　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（小礫～中礫多く含む・やや締まりなし）
【土塁構築土の崩落土３】
18　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（小礫少し含む）【土塁構築土の崩落土３】
19　2.5Y6/2 灰黄色粘質土（炭化物少し含む・遺物あり）【土塁構築土の崩落土３】
20　2.5Y6/2 灰黄色粘質土（小礫入る）【土塁構築土の崩落土３】
21　2.5Y6/2 灰黄色シルト（粘質性ややあり）【土塁構築土の崩落土３】
22　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土【土塁構築土の崩落土４】
23　2.5Y7/4 浅黄色シルト（やや締まりなし）【土塁構築土の崩落土４】
24　2.5Y7/2 灰黄色粘質土（小礫～中礫含む・やや締まりなし）
【土塁構築土の崩落土４】
25　2.5Y6/2 灰黄色シルト【土塁構築土】
26　2.5Y6/3 にぶい黄色シルト【土塁構築土】
27　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト【土塁構築土】
28　2.5Y6/4 にぶい黄色～ 7/6 明黄褐色シルト（締まりあり）【土塁構築土】
29　2.5Y6/4 にぶい黄色～ 7/6 明黄褐色粘質土（小礫多く含む）【土塁構築土】
30　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（小礫多く含む）【土塁構築土】
31　2.5Y8/2 灰白色～ 8/3 淡黄色礫【地山】
32　2.5Y8/2 灰白色～ 8/3 淡黄色礫【地山】
33　2.5Y8/2 灰白色～ 8/3 淡黄色礫【地山】
34　2.5Y8/2 灰白色～ 8/3 淡黄色礫【地山】
35　2.5Y8/6 黄色シルト（締まり有）【地山】
36　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（小礫多く含む）【地山】
37　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（小礫多く含む）【地山】
38　2.5Y7/6 明黄褐色シルト（締まりあり）【地山】
39　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（小礫多く含む）【地山】
40　2.5Y6/2 灰黄色シルト【地山】

図16　１区北壁・南壁断面図，２区東壁断面図（１：50）

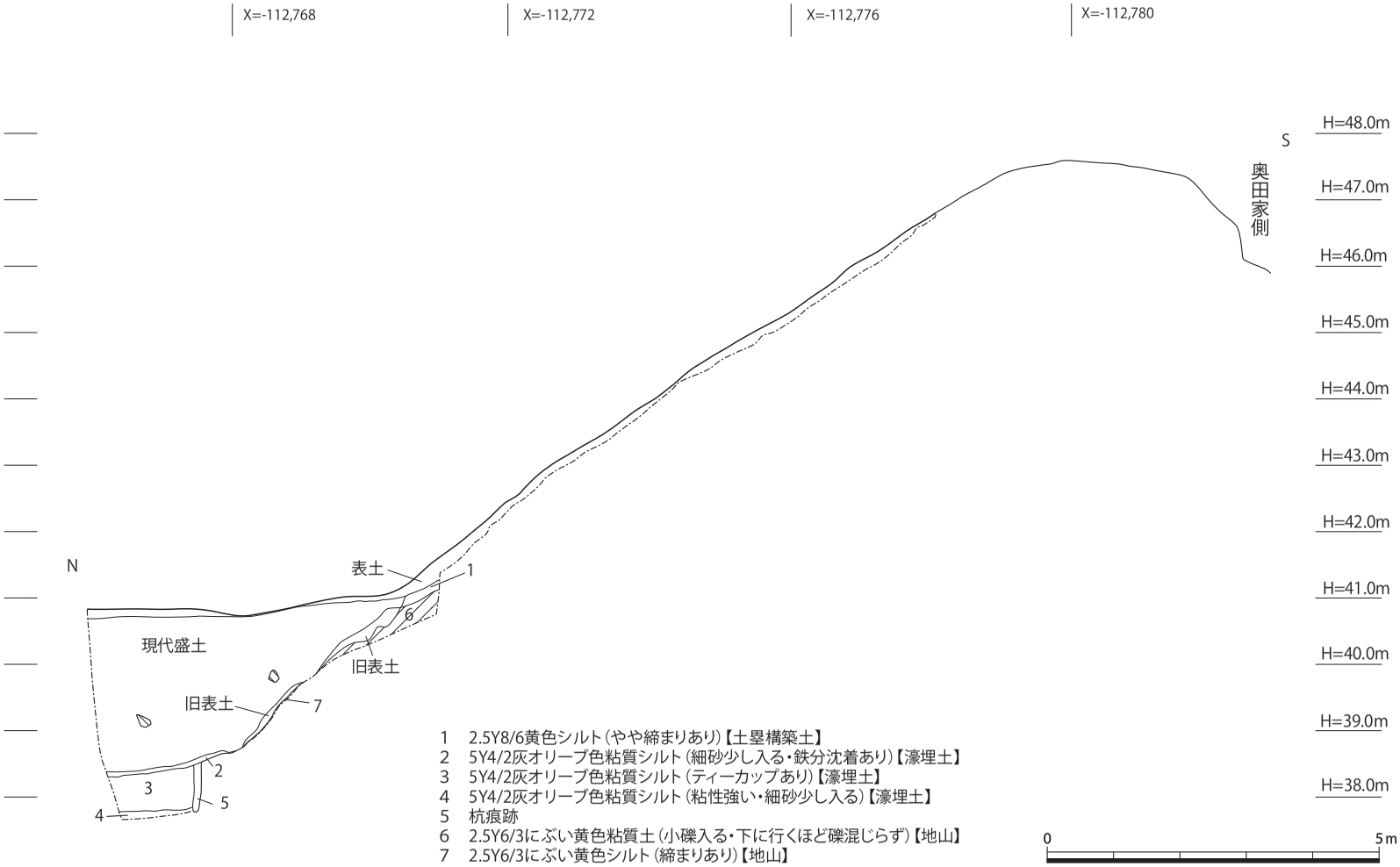


図17　3区東壁断面図（1：100）

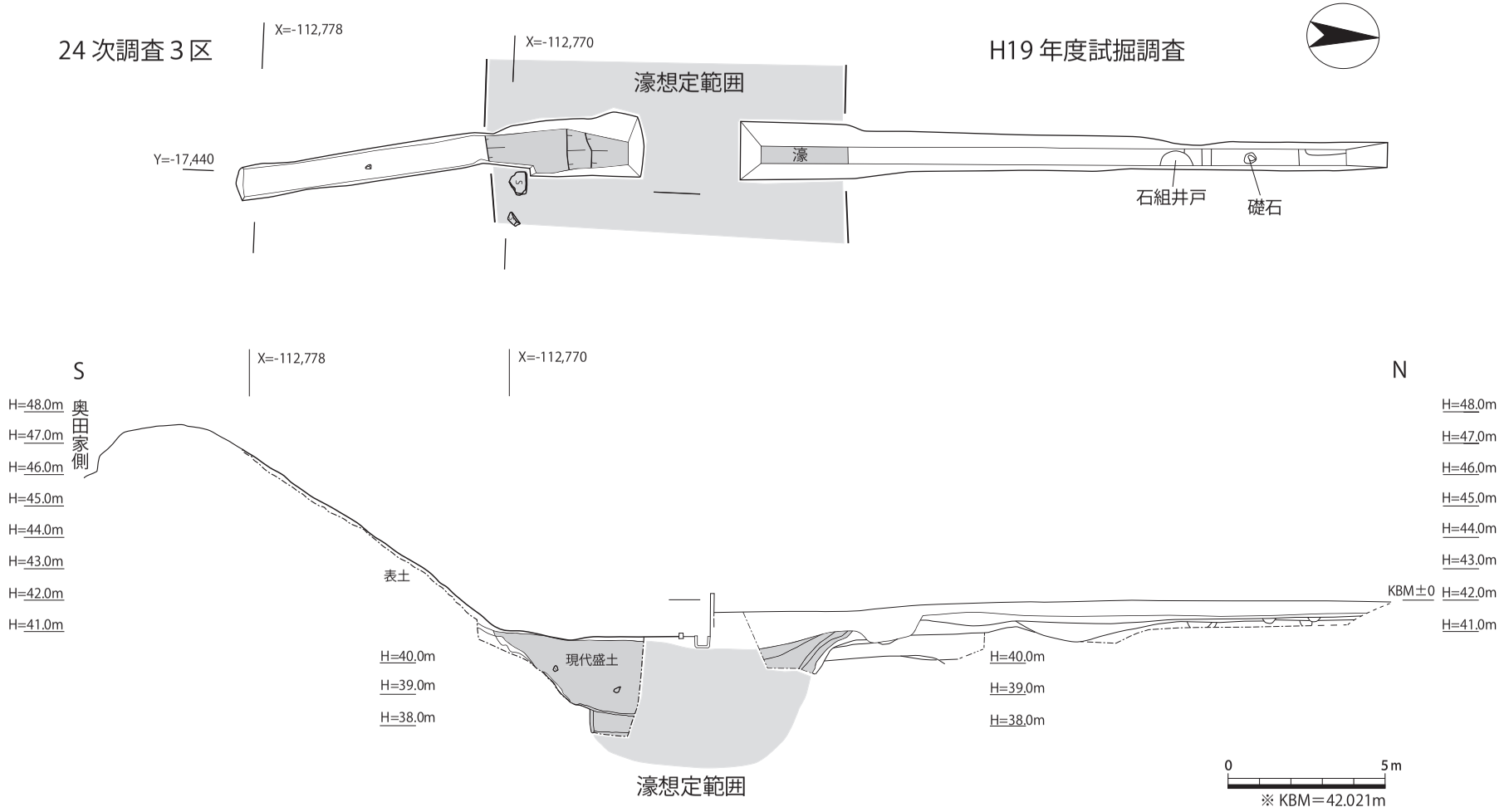


図18　24次調査とH19年度試掘調査の合成図（1：200）

（２）25次調査（御影堂）

今回の調査は，御本寺内北側に想定している御影堂の状況を確認するために行った。御影堂想定範囲内での初の発掘調査となる。想定では，御影堂の東辺中央部にあたる。

基本層序は，アスファルト・現代盛土，旧耕土や床土の下，厚さ0.2～0.5ｍの近世包含層を挟み，GL-0.8ｍで黒褐色粘質土や灰黄褐色粘質土の整地土，-1.8ｍで浅黄色シルトの地山に至る。ただし整地土は調査の北半のみに広がっており，調査区の南側では確認できず，近世包含層の下，GL-0.9ｍで灰白色砂礫や浅黄色シルトの地山に至る。

遺構検出はまず整地土上面で行い，その後，北側に広がる整地土下の様相を確認するため，一部地山まで断ち割りを行い，地山上面で遺構検出を行った。整地土上面では土坑を４基，地山上面では井戸を１基確認した。以下に遺構の概要を述べる。

SK８・９・10・11

調査区北部で検出した土坑である。土坑８～10は直径0.5～0.6ｍで，深さ0.05～0.15ｍである。埋土は上下二層に区分でき，上層は暗赤褐色細砂混じり粘質土，下層は暗褐色細砂混じり粘質土である。ともに焼土と小礫が少量含まれる。土坑８からは宋銭が１枚出土した。土坑11は東西1.0ｍ，南北0.7ｍの楕円形で，深さ0.4ｍである。埋土は暗褐色粘質土である。上面には暗赤褐色細砂混じり粘質土がわずかに認められる。

整地土

調査区の北側に広がる整地土の南肩を確認した。南から北へ向かう堆積で，概ね３～４層に区分できる。上部になるほど固く締まる。遺物は含まれるが，大半が小片である。調査区の西端，中央，断ち割り内にあたる東側の３ヶ所で南肩部の断面観察を行ったが，地山に対し緩やかな傾斜を確認した箇所と掘り込むような急傾斜の箇所があり，礫や砂質の強い地山部分が緩やかな傾斜で，シルトの地山部分が急傾斜である傾向がある。

SE17

整地土の様相確認のために設定した断ち割り内で検出した素掘りの井戸である。全体が整地土により覆われており，整地土除去後，地山上面で検出した。検出径は3.0ｍ，深さは2.5ｍまで掘り進めたが，安全を考慮し，これ以上の掘削は断念した。ただボーリングステッキにて下層を確認したところ，１ｍ以上が埋土であることが分かり，井戸の深さは3.5ｍ以上と考えられる。埋土は上下二層に区分でき，上層は灰黄褐色粘質土や褐灰色粘質土，下層は地山ブロックが少量混じる灰黄褐色粘質土が主体となり，いずれにも小礫が多く混じる。上層は層厚が0.2～0.3ｍほどで締まりがあり，下層は層厚が0.5ｍほどで，特に砂礫が多く，締まりがない。埋土は整地土と類似した堆積土であり，出土遺物に大きな時間差が認められないことから，廃棄後，すぐに埋め戻しと整地が行われたと考えられる。

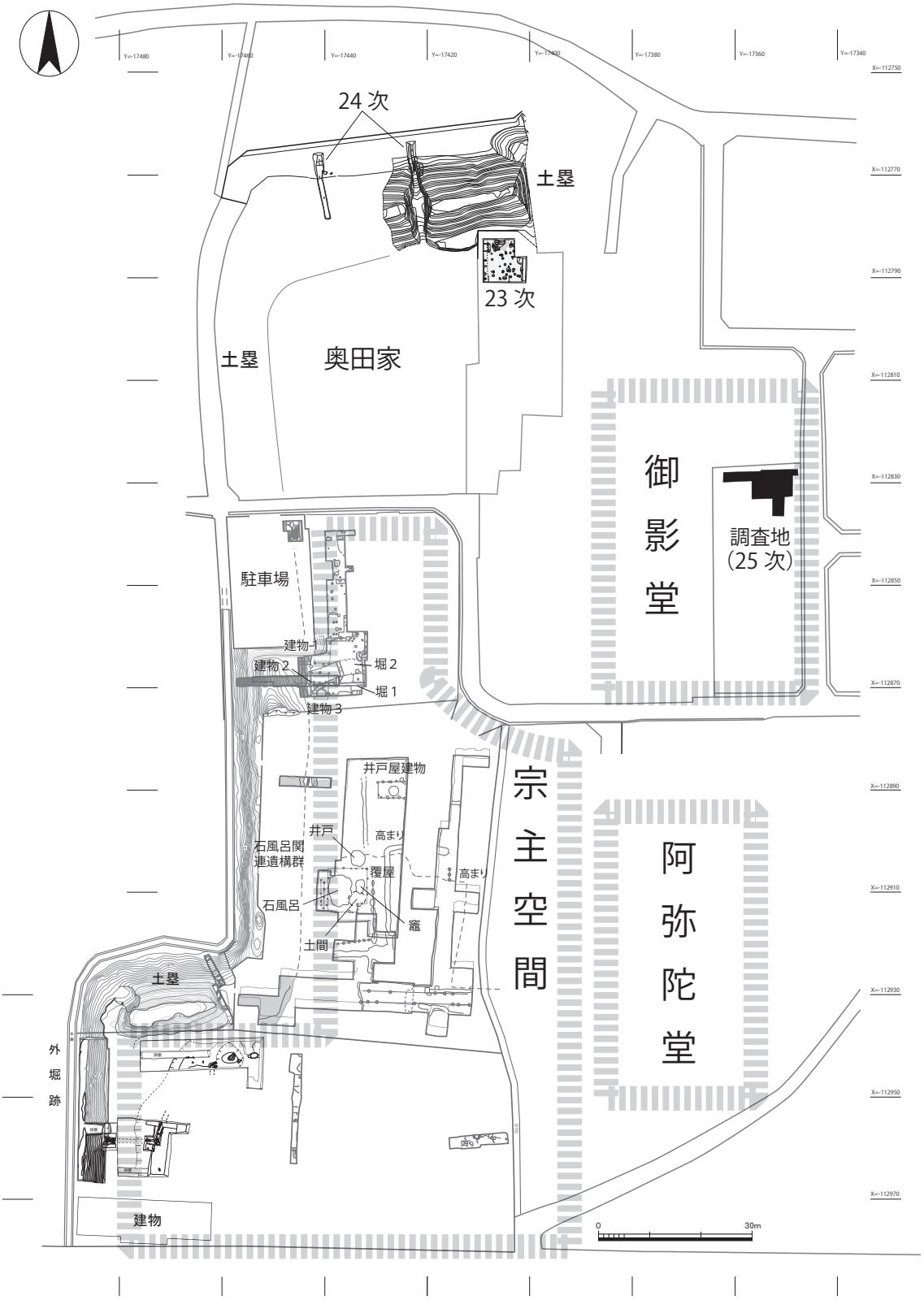


図19　25次　調査区配置図（1：1,200）

表3　遺構概要表（25次）

時　代	遺　構	備　考
山科本願寺期	井戸17，整地土	
山科本願寺廃絶後	土坑8・9・10・11	

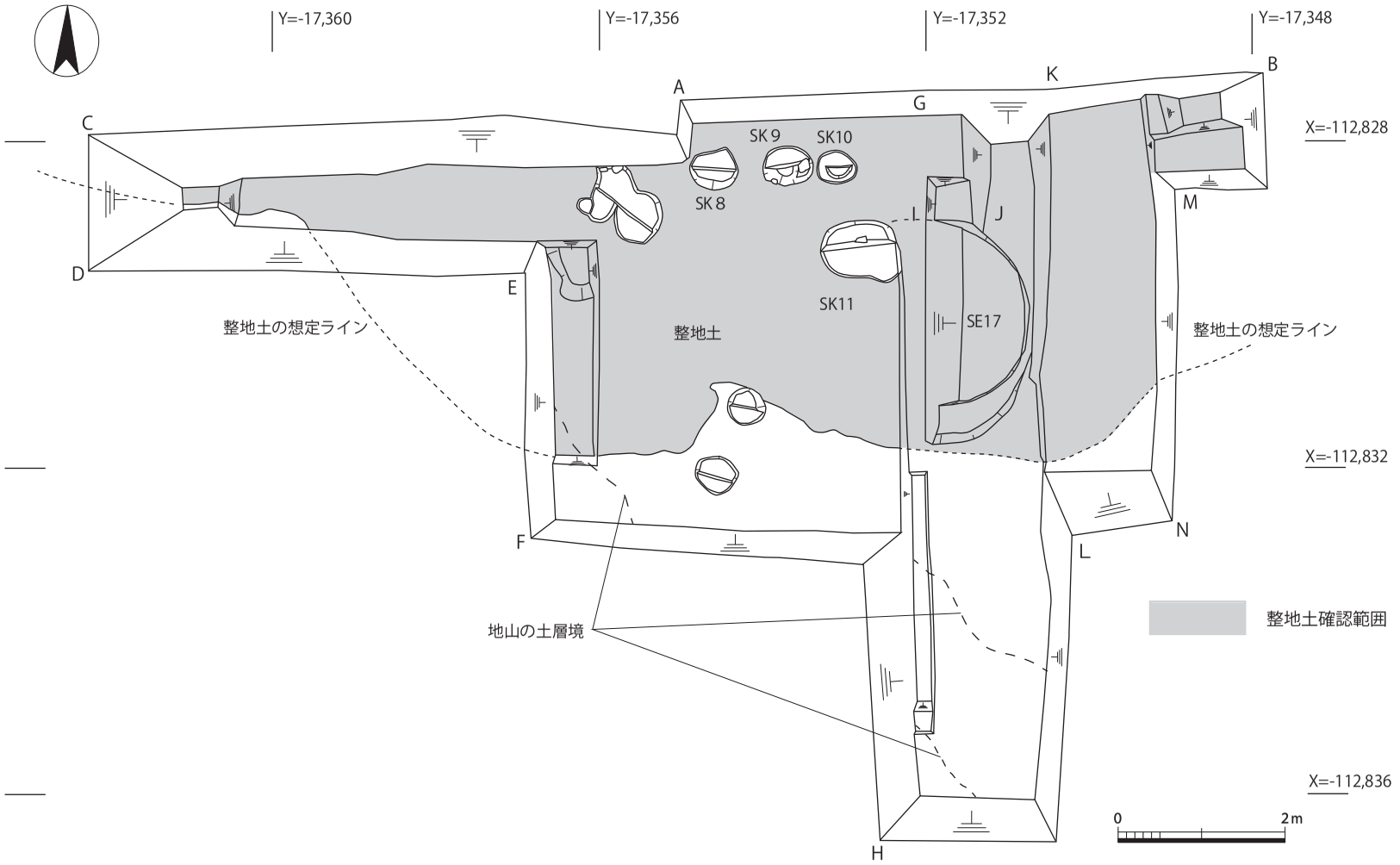


図20　25次　平面図（1：80）

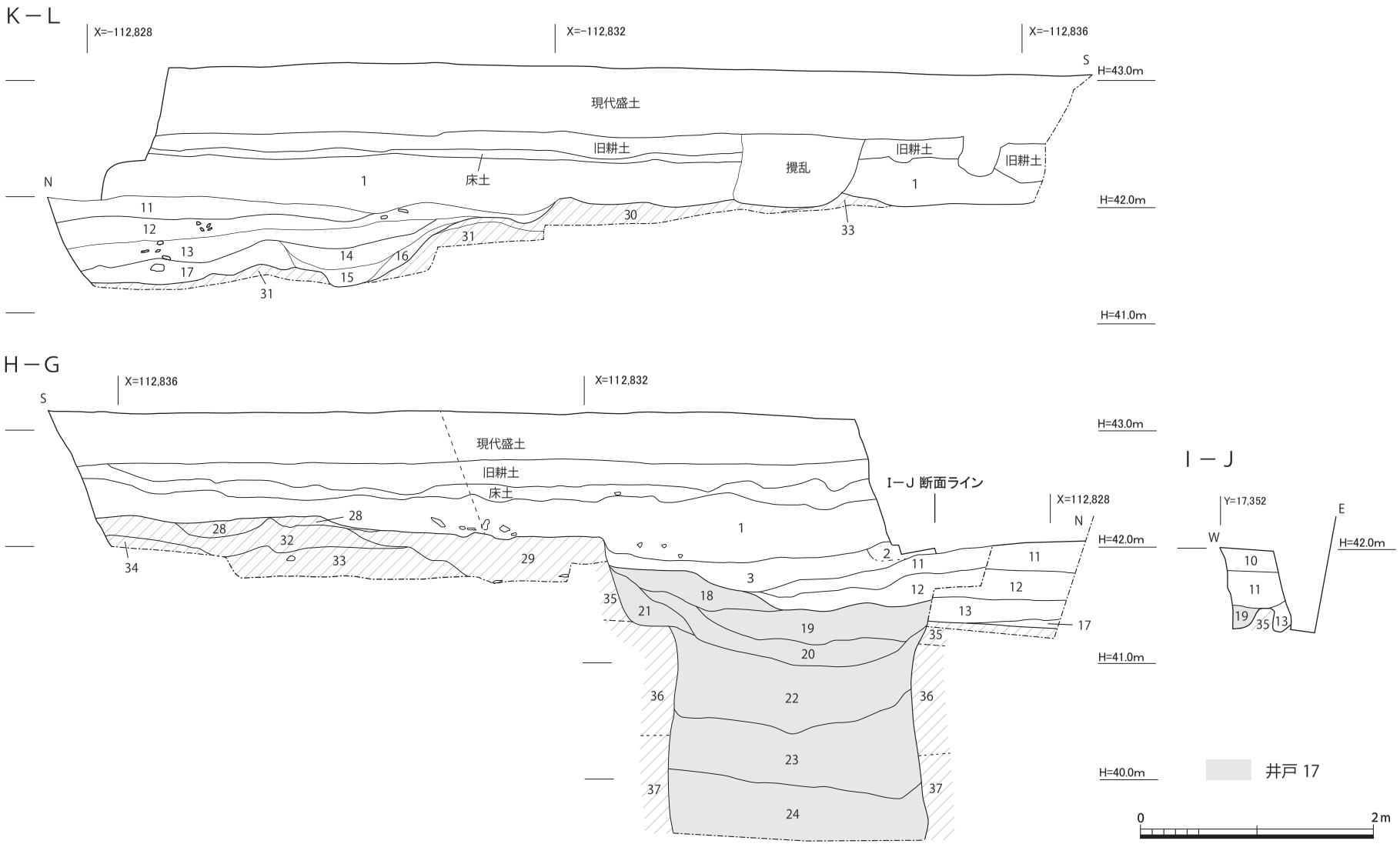
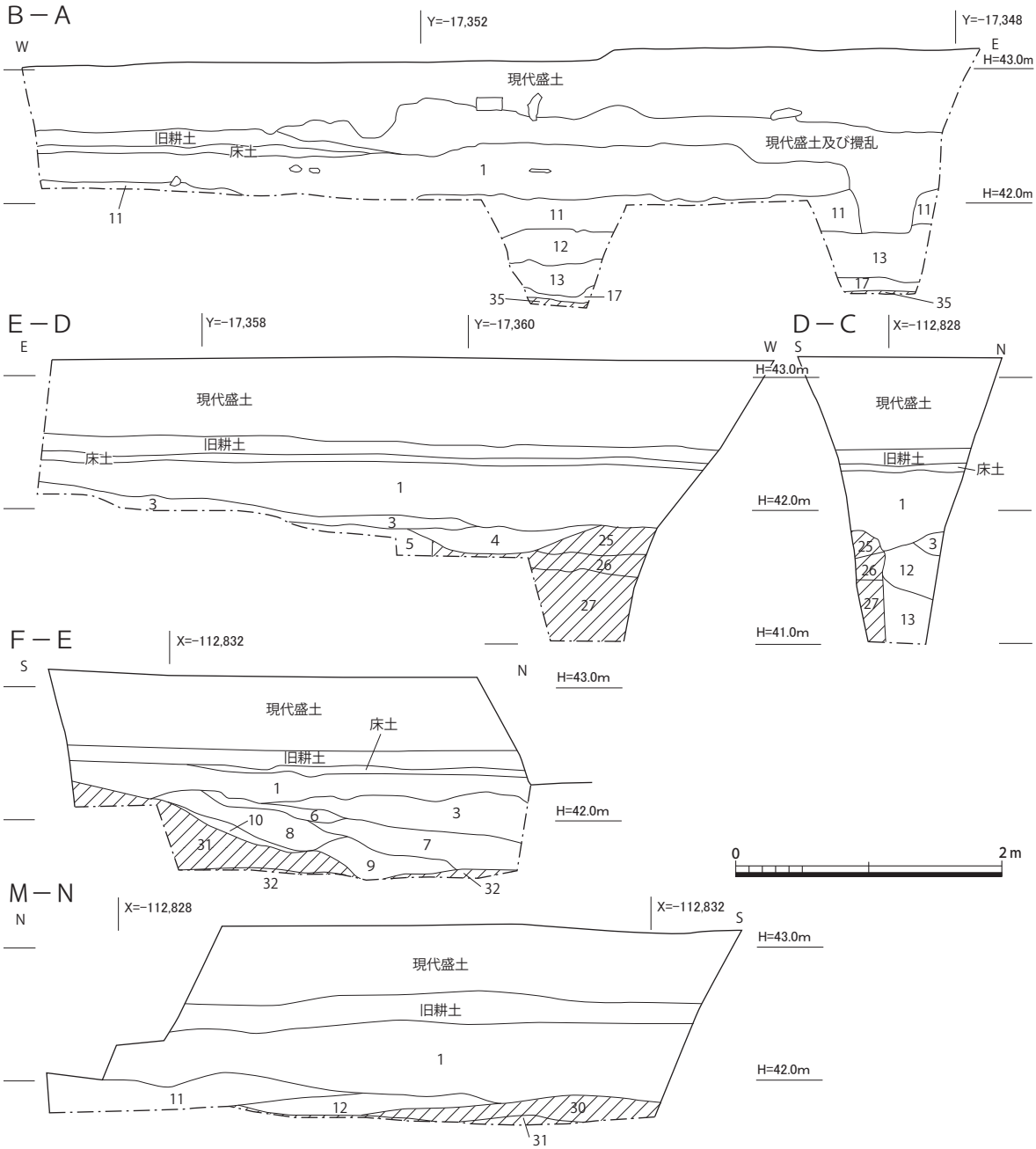


図21　25次　断面図１（１：50）



1　10YR5/2 灰黄褐色粘質土（小礫まじり）【近世包含層】
2　7.5YR3/3 暗褐色粘質土（細砂少量含む）【SK11】
3　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（黒褐色に見える・遺物あり）【整地土】
4　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（褐灰色粘質土ブロック含む）【整地土】
5　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（遺物含む・締まりあり）【整地土】
6　10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土（シルトに近い・締まりあり）【整地土】
7　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土（小礫・細砂多く含む）【整地土】
8　10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土（地山ブロック含む）【整地土】
9　10YR6/2 灰黄褐色細砂（締まりあり）【整地土】
10　10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土（地山ブロック・細砂含む）【整地土】
11　10YR3/2 黒褐色粘質土（遺物含む）【整地土】
12　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（小礫含む）【整地土】
13　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（少量の拳大礫・細砂含む）【整地土】
14　10YR5/2 灰黄褐色粘質土（少量の細砂・小礫含む）【整地土】
15　2.5Y4/1 黄灰色粘質土（細砂・小礫含む）【整地土】
16　10YR5/2 灰黄褐色粘質土（細砂・小礫少し含む）【整地土】
17　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（地山ブロック点在）【整地土】
18　10YR6/2 灰黄褐色粘質土（3～5㎝大の礫多く含む）【SE17 上層】
19　2.5Y6/2 灰黄色粘質土（締まりあり）【SE17 上層】
20　10YR6/1 褐灰色粘質土（細砂多く含む・下部に鉄分沈着があり）【SE17 上層】
21　10YR5/1 褐灰色粘質土（3～5㎝大の礫多く含む・締まりあり）【SE17 上層】
22　10YR6/2 灰黄褐色粘質土（細砂多く含む・地山ブロック含む）【SE17 下層】
23　10YR6/2 灰黄褐色粘質土（細砂多く含む・地山ブロック少し含む）【SE17 下層】
24　10YR6/2 灰黄褐色粘質土（細砂多く含む・地山ブロック少し含む・締まりややあり）【SE17 下層】
25　2.5Y6/4 にぶい黄色シルト（細砂含む）【地山】
26　2.5Y6/4 にぶい黄色シルト（2～3㎝大の礫含む）【地山】
27　2.5Y6/3 にぶい黄色シルト【地山】
28　10YR4/2 灰黄褐色シルト（上部に小礫少し含む）【地山】
29　10YR4/2 灰黄褐色シルト（上部に小礫を含むが下部ほど含まれない）【地山】
30　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（小礫まじる・微砂多く含む）【地山】
31　2.5Y7/4 浅黄色シルト【地山】
32　10YR7/1 灰白色礫砂（1～3cm 大の礫が主）【地山】
33　10YR7/1 灰白色礫砂　（3～5cm 大の礫が主）【地山】
34　2.5Y6/4 にぶい黄色シルト【地山】
35　2.5Y7/4 浅黄色シルト【地山】
36　2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルト（粘性強い）【地山】
37　7.5YR6/4 にぶい橙色細砂（締まりあり）【地山】

図22　25次　断面図2（1：50）

4．遺　物

（1）24次調査（図23・表4）

出土遺物の多くは濠を埋め立てた際の近代造成土からカルピスや牛乳の瓶，ティーカップなどが出土している。この他，崩れた土塁構築土中（図7-3層）から数点の遺物を確認した（図23・表4）。1・2は土師器皿，3は焼締陶器壺の底部である。いずれも細片であるが，10A期に帰属すると考えられる。

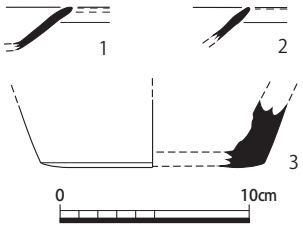


図23　24次　出土遺物実測図
（1：4）

表4　遺物概要表（24次）

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
山科本願寺期	土師器，焼締陶器，		土師器2点，焼締陶器1点	0箱	1箱
江戸時代～近代	土師器，焼締陶器，焼締陶器，ガラス製品				
合　計		2箱	3点（1箱）	0箱	1箱

※　コンテナ箱数の合計は，整理後，Aランクの遺物を抽出したため，出土時より1箱多くなっている。

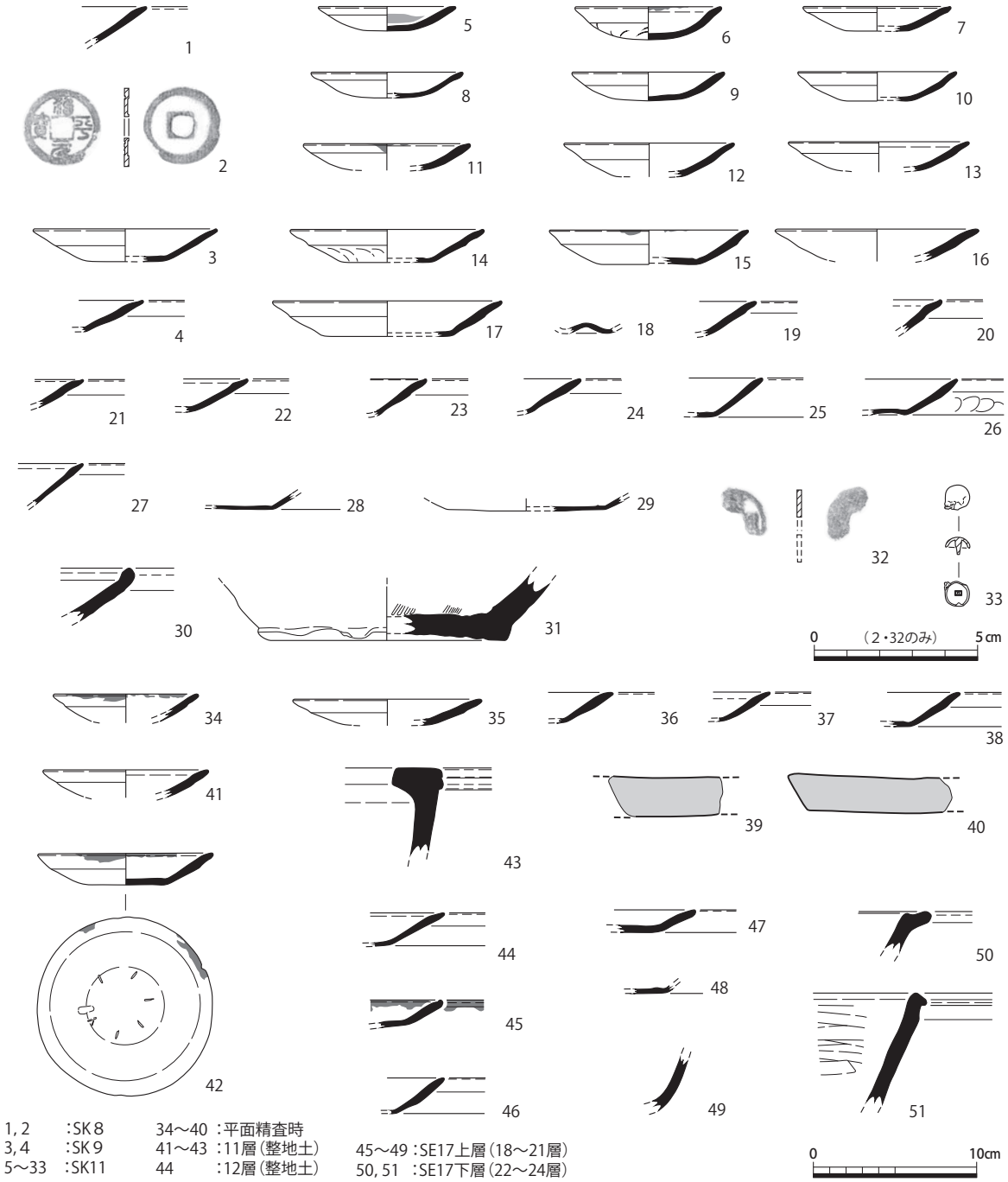
（2）25次調査（図24・表5）

SK11を中心に整理箱2箱分の遺物が出土した。大半は土器・陶磁器であり，瓦なども少量出土している。またいずれも小片であるが，特に遺構に伴ない，図化できたものを中心に述べる。

SK8（1・2）　1は土師器皿の口縁部である。2は治平通宝である。直径2.4㎝。篆書体で銘が施される。

SK9（3・4）　3・4は土師器皿である。3は口縁部は直線的に立ち上がり，端部は丸く収める。底部内面に口縁部のナデによるかすかな盛り上がりが確認できる。4は口縁部は外反し，端部はややつまみ上げる。

SK11（5～33）　5～29は土師器皿である。破片が多く，口径を復元できたものは少ない。口径が復元できたものの中では，大きく小・中・大の3法量にまとまりがあるものの，法量の分化が認められる。口径は8.2～10.8㎝の小皿（5～13），11.6～12.2㎝の中皿（14～16），14.0㎝の大皿（17）である。小皿は底部と口縁部の境が不明瞭で，端部は外反気味に開く。端部は丸く仕上げるものが多い。中皿と大皿は，底部と口縁部の境が明瞭で，口縁部は直線的に開く。端部は，ナデ痕跡が明瞭に残る。この他，破片ではあるが，図化できたものは，底部中央を上に押し上げた「へそ皿」と呼ばれるもの（18），口縁端部がややつまみ上げられるもの（20），直線的に開く口縁端部（32～33），および底部内面に口縁部のナデによるかすかな盛り上がりが確認できるもの（28・29）などがある。出土した土師器皿は738点確認できたが，破片が多く，法量推定が困難なものが76％を占め，この他，判別可能なものとしては，小皿が5％，中皿が7.5%，大皿が11.5%を占める。30は炮烙である。31は信楽焼擂鉢の底部である。内面に4条一単位のすり目が施される。32は銭である。1/4ほどしか残存しておらず，銘も確認できない。33は飾り金具である。



1, 2 ：SK８
3, 4 ：SK９
5～33 ：SK11
34～40 ：平面精査時
41～43 ：11層（整地土）
44 ：12層（整地土）
45～49 ：SE17上層（18～21層）
50, 51 ：SE17下層（22～24層）

図24　25次　出土遺物実測図（１：４，２・32のみ１：２）

表5　遺物概要表（25次）

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
山科本願寺期	土師器，瓦質土器，焼締陶器，輸入陶磁器，瓦，銭，金属製品		土師器41点，瓦質土器１点，焼締陶器３点，輸入陶磁器１点，平瓦２点，銭２点，金属製品１点	１箱	２箱
江戸時代～近代	土師器，焼締陶器，施釉陶器，瓦				
合　計		４箱	51点（１箱）	１箱	２箱

整地土（平面精査時）（34～38） 34～38は土師器皿である。いずれも破片で，口径が分かるものは少ない。34～37は小皿で，口縁部は外反し，端部は丸く収める。38は大皿で，底部内面に口縁部のナデによるかすかな盛り上がりが確認できる。39・40は平瓦片である。摩滅はしているものの，かろうじて布目が確認できる。

整地土（11層）（41～43） 41・42は土師器皿である。口径は10.0～10.6㎝で，ともに小皿である。42は口縁部が外反し，端部にナデを施す。底部には放射状の圧痕が６か所確認できる。口縁端部に煤が付着しており，灯明皿と考えられる。43は瓦質土器浅鉢である。

整地土（12層） 44は土師器皿である。口縁部は直線的に立ち上がり，底部内面に口縁部のナデによるかすかな盛り上がりが確認できる。

SE17（45～51） 45～49は上層，50・51は下層から出土した。45～48は土師器皿である。45の口縁端部には煤が付着し，灯明皿と考えられる。48の底部内面に口縁部のナデによるかすかな盛り上がりが確認できる。49は青磁椀，50・51は信楽焼摺鉢である。

いずれの出土遺物も10Aに帰属すると考えられ，また二次焼成を受けた形痕は認められなかったことから，山科本願寺が焼き討ちにあう前の様子を示す遺物と考えられる。なお，明らかに９Cと考えられる遺物は確認できず，造営当初を示す遺物は認められなかった。

5．まとめ

24次調査では，23次調査に引き続き土塁形状や構築の様子や土塁外側の濠の形状や規模を明らかにすることができた。また25次調査では御影堂想定地内で初めての発掘調査を行い，山科本願寺期の土坑や井戸のほか，北側に非常に硬く締まった整地土，南側に安定した地盤を確認した。土層観察から，SE17は廃絶直後に埋め戻され，南側の安定した地盤の高さまで整地が行われたと想定できる。出土した土器の年代から，整地した時期は山科本願寺の焼き討ち前と考えられ，寺の維持管理の一環として，計画的かつ大規模な寺内造成が行われていたことがうかがえる。御影堂は，本願寺にとって重要な施設であり，山科本願寺の造営直後に建立が始まっている。建て直しの記述などは認められず，直後に創建された建物が焼き討ちまで存在したといえる。堂の規模は明らかではないが，少なくとも七間以上で，またこれに見合うような広い外陣や施設があったとされている[4)]。今回の調査では，現在御影堂が推定される範囲で井戸と造成土を確認したが，当初目的としていた御影堂に直接関わる建物の柱跡などは確認できなかった。このほか確認した井戸（SE17）は，御本寺内で確認した井戸では６例目となり，最も北でかつ，標高の高い場所に位置している[5)]。このあたりは扇状地に位置しているため，これまでの調査でも井戸の深度は３m以上と深く，地下水位が低い場所である。今回の調査でも深度が3.5m以上と深く，底を確認することはできなかった。このような場所に井戸が配置されていることから，付近に水を必要とする施設が存在したと可能性が考えられる。調査対象地が現状，御影堂想定地範囲にあたることから，井戸の性格については，今後十分に検討する必要がある。

（奥井 智子）

註

1）「Ⅵ　山科本願寺跡（23次）」『京都市内遺跡発掘調査報告書　令和元年度』京都市文化市民局，2020年。

2）「Ⅴ　山科本願寺跡　7．総括」『京都市内遺跡発掘調査報告書　平成24年度』京都市文化市民局，2013年。

3）「Ⅳ-4　山科本願寺跡　№88・89」『京都市内遺跡試掘調査報告書　平成19年度』京都市文化市民局，2008年。

4）櫻井敏雄「第二節　山科本願寺の宇堂とその類型」『浄土真宗寺院の建築史的研究』法政大学出版局，1997年。

5）現状，御本寺内での報告事例は7例確認できる。このうち14次調査の庭園関連の2基の井戸は溜井と想定され，湧水層に達する井戸は5例となり，今回が6例目となる。以下に，北から順に事例の概要と出典を示す。この他，15次調査（表1-24）の第3トレンチにて，直径1mの素掘り井戸が1基（井戸27），確認されている。深さは2m以上とのこと。ただ未報告資料で，時期など詳細は明らかでなく，山科本願寺期の遺構か判別できないため，今回は除外する。

事例概要

①18次調査SE3020：直径1.9m，深さ4m以上。底は確認できず。石組が確認できる。炊事関係と推測される。

②18次調査SE3080：直径約3m，深さ4m以上。底は確認できず。石は確認できず，抜き取られたと考えられる。風呂関連遺構の構成要素とされる。

③14次調査井戸27：一辺約1mの方形石組井戸。深さは0.7mと浅く，そこに粘土が貼っていたことから，溜井と推測されている。庭園に関連するものの可能性が指摘されている。

④14次調査井戸10：一辺約1mの方形石組井戸。深さ0.5mと浅く，木枠が組まれていた可能性が高い。溜井と推測されている。庭園に関連するものの可能性が指摘されている。

⑤10次調査井戸71：直径2.8mの円形井戸。深さ3mで石組の一部が確認できた。石はほぼ抜き取られているが，石組井戸と考えられる。

⑥6次調査井戸　：直径2mの円形井戸。2区にて確認。平面図のみの報告のため，詳細不明。

⑦7次調査井戸　：深さ4mの石組井戸。最下層には枠組みの板材が確認できたことから，井戸底には円形の木枠が据えられていたものと考えられている。近接地に鍛冶場が想定されており，金属生産に関係すると推測されている。底を確認している。

出典

①・②：「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成24年度』京都市文化市民局，2013年。

③・④：「Ⅶ　山科本願寺跡（4）」『京都市内遺跡発掘調査報告平成17年度』京都市文化市民局，2006年。

⑤　：「Ⅳ　山科本願寺跡（1）」『京都市内遺跡発掘調査報告平成17年度』京都市文化市民局，2006年。

⑥　：「山科本願寺跡1」『平成9年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1999年。

⑦　：「山科本願寺跡2」『平成9年度　京都市埋蔵文化財査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1999年。

Ⅷ　鳥羽離宮跡（156次）

1．調査に至る経緯と経過

（1）調査に至る経緯

本件は，伏見区竹田浄菩提院町内において実施した発掘調査に係る報告である。調査地は，油小路通と新城南宮道の交差点の北東に位置する一画で，鳥羽上皇の勅願により建立された北向山不動院の東区画に相当する（図1）。令和2年11月，この地点に個人住宅兼事務所の建設が計画されたため，文化財保護法第93条第1項に基づく届出が提出された。当課では，当該地点が重要遺跡である鳥羽離宮跡に該当すること，また周辺の発掘調査成果より遺構・遺物の残存が見込まれることから本発掘調査が必要であると判断し，国庫補助事業として実施した。

（2）調査の経過と調査方法

調査区は，建物予定範囲のうち50㎡を設定した（図2）。調査期間は，令和2年11月9日～19

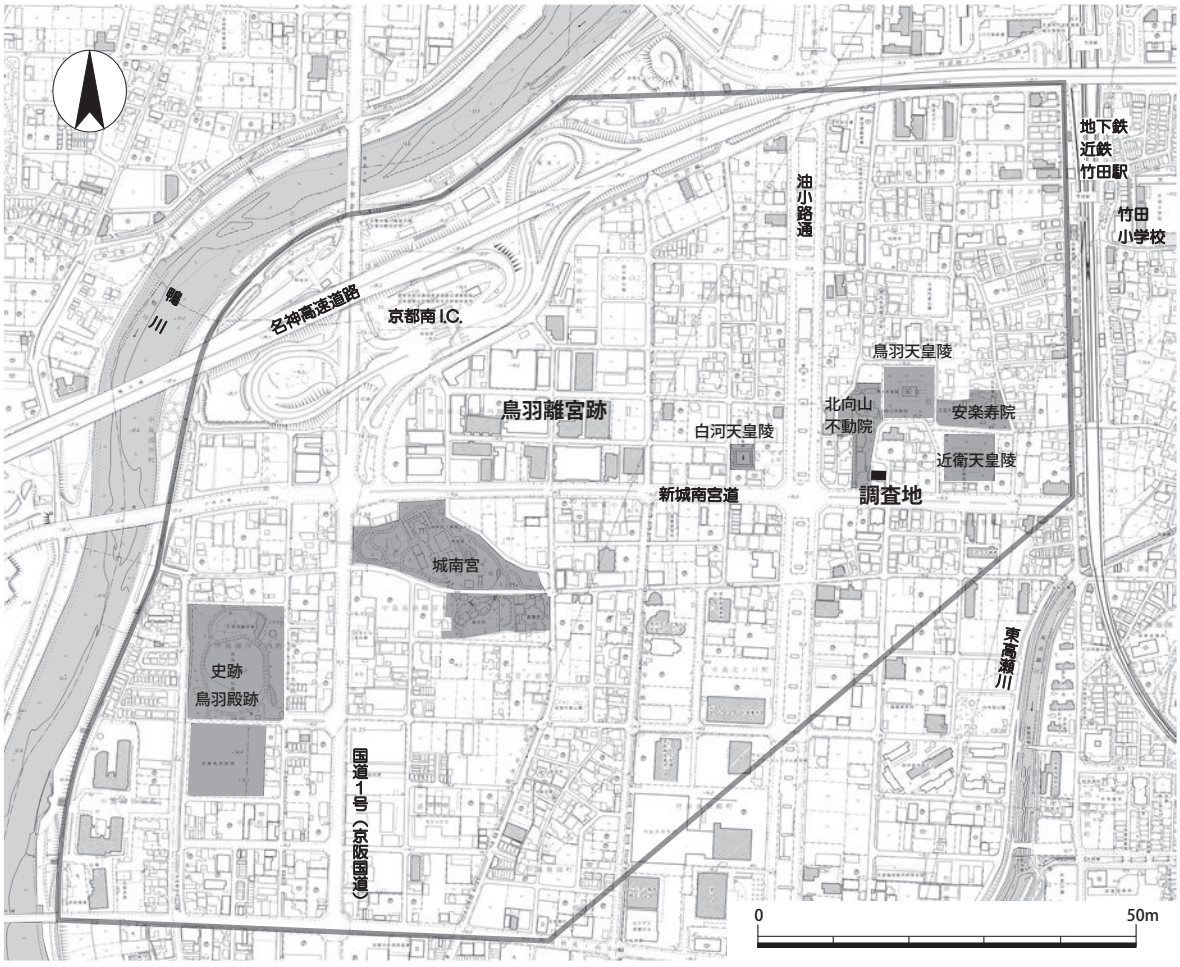


図1　調査位置図（1：10,000）

日（うち実働９日間）である。

現地では，現代盛土（解体撹乱土）を重機で除去した後，それ以下の土層を人力にて掘削した。人力掘削は，土壁の崩落を回避するため，段をつけて深掘した（図３）。

人力掘削では層相の違いにより遺物を分別採取し，その変化面を遺構面として検出に努めた。今回検出した遺構面は計３面である。各遺構面では，全景写真の撮影や検出遺構の個別写真撮影，平面図の作成，標高値の計測等の一連の記録作業を行った。

なお今回の調査では，既往の調査成果より平安時代末期に造営された池の存在が予測された。このため，掘削は池底までとし，これ以下の掘削は一部にとどめた。掘削及び記録作業終了後は埋め戻しを行い，現地調査を終了した。

続く整理作業では，出土遺物の洗浄，選別（抽出），実測，遺構図の精査，版組，トレースを行い，報告書としての体裁を整えた。一連の作業は，本報告の刊行をもって完了した。

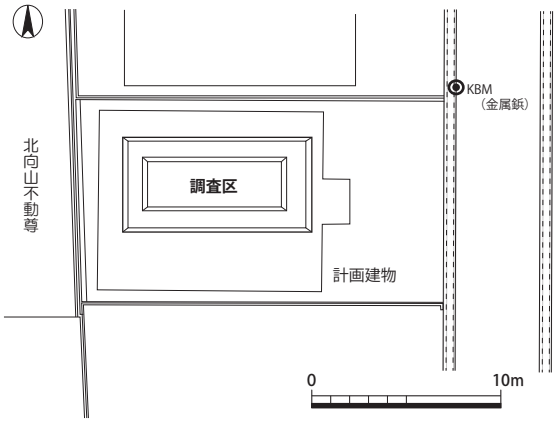


図２　調査区配置図（１：400）


図３　調査区全景（東から）


図４　調査区南壁断面（北から）

２．位置と環境

（１）遺跡の位置と環境（図１・５）

調査地が立地する伏見区竹田地域は，近世には竹田村，中世には竹田庄と呼ばれた地域で，主に東寺の管理下にあった。東には高瀬川，北西には鴨川が流れており，これらの河川が担う水運と京へ続く竹田街道を利用した陸運の結節点にあたるため，早くから物流の拠点として栄えてきた。

現在，鴨川の本流は竹田地域の北を流れるが，中世以前は東から南西に向かって流走した後，北西から南下する桂川に合流していた（図５）。このため鳥羽離宮が営まれた平安時代の当地は，東西を大河が蛇行する開けた水郷の地であり，狩猟や遊楽の適地であった。

応徳３年（1086）10月，この地に山荘を構えていた藤原季綱がこれを白河天皇に献上したことを契機として，離宮の造営が開始された。『扶桑略記』は，その規模を百余町に及ぶ広大なものと

記し，諸国への課役によって急がれた造営はさながら遷都のようであると表現する[1]。

白河天皇は同年退位し，翌寛治元年（1087）には実際に鳥羽の地を訪れた。その後，約70年にわたり建物の造営は続き，白河上皇の孫である鳥羽上皇の代に完成，以後，院御所として使用された。

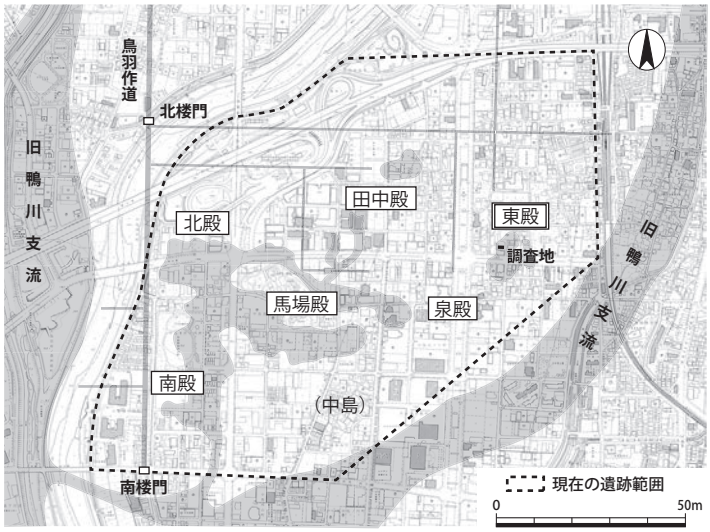


図５　鳥羽離宮内御所位置推定図（１：20,000）

現在，包蔵地としての鳥羽離宮跡の範囲は，東を近鉄京都線，北を名神高速道路，西は現鴨川，南東は旧鴨川推定岸から府道202号（津知橋通）までである。この範囲内に，朱雀大路の延長にあたる鳥羽作道，その北楼門から分岐して東へのびる北大路，旧鴨川支流から作道への入口である南楼門等が設けられた。離宮内には，南殿，北殿，東殿，泉殿，田中殿，馬場殿等の御所が建立され，それぞれ寝殿と付属する御堂，池を伴う庭園のほか，院に仕える貴族達の邸宅等が整備された。

最初に造営された御所は鳥羽作道の終点付近にあり，後に「南殿」と呼ばれる建物群である。その後，承徳２年（1098）に「北殿」が建立された。天仁元年（1108），白河上皇は旧鴨川右岸に自身の墓所を定めて多宝塔を建立し，周囲を「東殿」とした。白河上皇の後は鳥羽上皇が東殿の造営を引き継ぎ，御堂である安楽寿院を建立，後に「泉殿」を造営し，白河上皇の陵墓が築かれた。またその北を「田中殿」として整備し，離宮内では最大規模の御堂となる金剛心院を造営した。

承久３年（1221），南殿を御所とした後鳥羽上皇は，鎌倉幕府の倒幕を図り，承久の乱が勃発する。しかし，これが失敗したことにより院の勢力は徐々に衰えを見せる。鳥羽離宮が院御所として使用された最後の記録は，建長２年（1250）に行われた後嵯峨上皇の北殿遷御であるが，皇室と幕府の攻防や度重なる風水害，戦禍によって建物は損壊し，離宮は徐々に衰退したものと推測される。

なお東殿の御堂である安楽寿院は，永仁４年（1296）の焼亡，貞治２年（1363）の戦禍，天文17年（1532）の焼亡等により被害を受けたが，天正13年（1585）に豊臣秀吉より500石の寺領を与えられたことから徐々に回復し，慶長地震（1596）で倒壊した新御塔も，後に豊臣秀頼により再建された。江戸時代には子院のひとつである前松院が寺籍を継ぎ，現在に至っている。

（２）周辺の調査（図６・表１）

鳥羽離宮跡ではこれまでに計150回を超える調査が行われている。ここでは，今回の調査地が含まれる東殿エリアで実施された既往の調査成果について記述する。

東殿エリアでは計69回の調査が行われており，弥生時代中期～江戸時代の遺構が検出されている。このうち，鳥羽離宮存続時にあたる平安時代末～鎌倉時代の遺構は西端（油小路通付近）に集

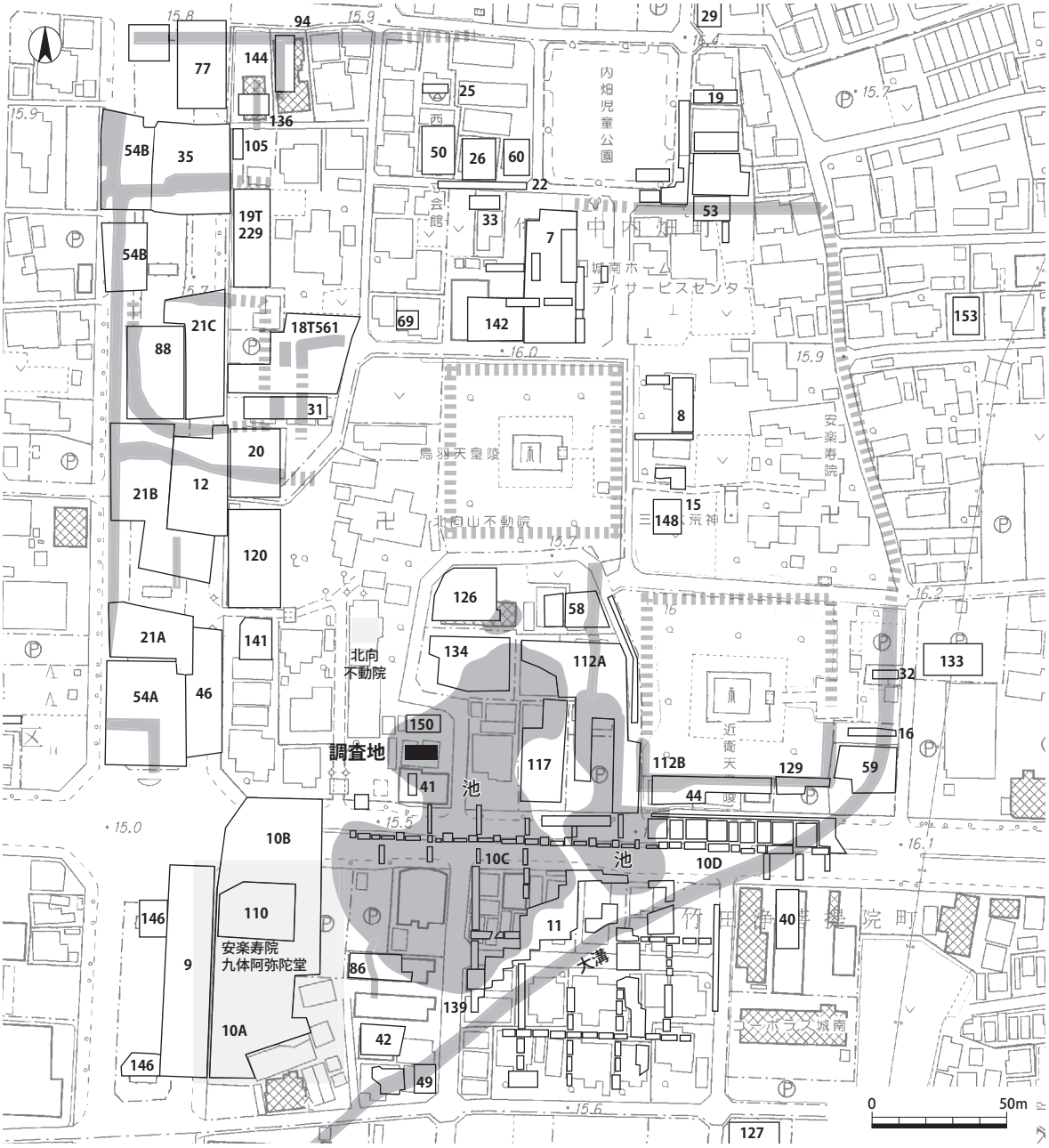


図６　東殿推定地の既往の調査（１：2,500）

表１　東殿地区の既往の調査

次	調査年度	住所	調査遺構・出土遺物	文献
7	1968	伏見区竹田中内畑町	桃山～江戸／安楽寿院金堂跡 遺物／灰釉瓦	京都府教育委員会「２鳥羽離宮昭和 43 年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1969 年
8	1969	伏見区竹田中内畑町	室町～江戸／溝，築地，焼土（推定：子院金蔵院，玉蔵院） 遺物／土師器，瓦器，瓦	京都府教育委員会「２鳥羽離宮昭和 44 年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1969 年
9	1971	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／〔A 点〕石積地業跡，堰 遺物／土師器，緑釉陶器，瓦，凝灰岩	鳥羽離宮調査研究所　『鳥羽離宮跡 1972』1973 年
10	1972	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／〔A・B 地区〕石積地業跡，景石　〔C 地区〕池 室町／〔D 地区〕火葬墓 遺物／土師器，磁器，瓦，網代	京都市文化観光局文化財保護課「鳥羽離宮跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告 1972』1974 年
11	1973	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／池汀 遺物／木製品（人形頭，漆器椀，五輪塔）	京都市文化観光局文化財保護課「鳥羽離宮跡発掘調査概要」『史跡西寺跡・鳥羽離宮跡　京都市埋蔵文化財年次報告 1973－Ⅱ』1975 年
12	1973	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／掘立柱建物，屈曲溝，堀，石敷溝	(財) 京都市埋蔵文化財研究所「発掘調査 100 次の経過」『増補改訂鳥羽離宮跡』1984 年
15	1975	伏見区竹田浄菩提院町	江戸／掘立柱建物，池（推定：子院玉蔵院）	(財) 京都市埋蔵文化財研究所「発掘調査 100 次の経過」『増補改訂鳥羽離宮跡』1984 年

次	調査年度	住所	調査遺構・出土遺物	文献
16	1975	伏見区竹田浄菩提院町	室町／溝	(財) 京都市埋蔵文化財研究所「発掘調査 100 次の経過」『増補改訂鳥羽離宮跡』1984 年
19	1975	伏見区竹田中内畑町	平安／河川　　江戸／溝（推定：明照院東溝）	
20	1976	伏見区竹田中内畑町	室町／溝，道？　　遺物／土器多数	
21	1976	伏見区竹田浄菩提院町 伏見区竹田中内畑町	平安末／礎石立建物　　鎌倉～桃山／溝 遺物／土器，木器（仏像，墨書板）	
22	1976	伏見区竹田中内畑町	遺構／未確認	
25	1976	伏見区竹田中内畑町	遺構／遺構未確認（推定：大善院）	(財) 京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概要』1977 年
26	1976	伏見区竹田中内畑町	平安／落込み，河川 桃山～江戸／礎石立建物（推定：大善院） 遺物／瓦，土師器	
27	1976	伏見区竹田中内畑町	遺構／未確認	
29	1976	伏見区竹田中内畑町	平安末～鎌倉／柱穴群，池　　鎌倉～室町／柱穴群，井戸 桃山～江戸／整地層，礎石，井戸 遺物／土師器，瓦器，陶磁器，瓦，木器	(財) 京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡　－国庫補助による発掘調査概要－』昭和 52 年度　1978 年
31	1976	伏見区竹田中内畑町	平安末～桃山／大溝　　近世～近代／溝 遺物／土師器，瓦，陶磁器，木器（漆器，曲物，箸，下駄，加工木）	
32	1976	伏見区竹田浄菩提院町	平安末～鎌倉／大溝　　桃山～江戸／整地層 遺物／土師器，陶磁器，木器（下駄，曲物，漆器，箸，加工木）	
33	1976	伏見区竹田中内畑町	江戸／区画溝，路面（推定：遍照院，大善院） 遺物／土師器，瓦器，陶磁器，瓦	
35	1976	伏見区竹田中内畑町	平安／湿地（池？）　　平安末～鎌倉／溝 平安末～桃山／溝，井戸，土坑	(財) 京都市埋蔵文化財研究所「発掘調査 100 次の経過」『増補改訂鳥羽離宮跡』1984 年
36	1976	伏見区竹田中内畑町	遺物／土師器ほか	(財) 京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡　－国庫補助による発掘調査概要－』昭和 52 年度　1978 年
40	1978	伏見区竹田浄菩提院町	鎌倉～室町／火葬墓，掘立柱建物，水田	京都市文化観光局，(財) 京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡　－国庫補助による発掘調査－』昭和 53 年度
41	1978	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／池汀　　遺物／土器，瓦，自然木	
42	1978	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／池汀　　遺物／土師器，瓦器	
44	1978	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／池汀，州浜，石列，集石 室町～桃山／溝，護岸施設　　江戸／溝，陵墓堀 遺物／土師器，瓦器，山茶碗，木器（人形，下駄，箸，柿経，五輪等婆），銭，瓦	
46	1979	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／礎石立建物，溝，井戸，土坑　　鎌倉～桃山／溝 遺物／土器，木器（仏像，墨書板）	(財) 京都市埋蔵文化財研究所「発掘調査 100 次の経過」『増補改訂鳥羽離宮跡』1984 年
49	1979	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／溝，井戸 遺物／土師器，瓦器，山茶碗，輸入陶磁器，木器（曲物，箸，独楽，墨書板）	京都市文化観光局，(財) 京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡　－文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要－』昭和 54 年度　1980 年
50	1979	伏見区竹田中内畑町	江戸／礎石立建物，井戸，溝（推定：遍照院） 遺物／土師器，瓦器，木器（平安末～鎌倉）	
51	1979	伏見区竹田中内畑町	室町／油小路東側溝 遺物／土師器，瓦器，陶磁器，瓦，木器	(財) 京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡　－区画整理道路予定地内発掘調査概要－』昭和 54 年度　1981 年
52	1979	伏見区竹田西桶ノ井町	遺物／土師器，瓦器，(平安末～鎌倉)，木器（箸，曲物ほか），弥生土器（中期）	京都市文化観光局，(財) 京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡　－文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要－』昭和 54 年度　1980 年
53	1979	伏見区竹田中内畑町	平安末～鎌倉／落込み 室町／掘立柱建物，井戸，堀 江戸／寺院建物，埋鉢（推定：明照院） 遺物／土師器，瓦器，木器（箸，鳥形，舟形，墨書板）	京都市文化観光局，(財) 京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡　－文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要－』昭和 54 年度　1980 年
54A	1979	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／溝，井戸，土坑，礎石 遺物／土師器，陶器，輸入陶磁器，瓦器，黒色土器，緑釉陶器，瓦，木器（卒塔婆，杓子，人形）	(財) 京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡　－区画整理道路予定地内発掘調査概要－』昭和 54 年度　1981 年
54B	1979	伏見区竹田中内畑町	平安末／土坑，溝 鎌倉～室町／堀，溝，土坑，柱穴	
58	1980	伏見区竹田浄菩提院町	平安末～江戸／石敷，溝 遺物／土師器，瓦器，山茶碗，瓦	京都市埋蔵文化財調査センター，(財) 京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡調査概要』昭和 55 年度　1981 年 (財) 京都市埋蔵文化財研究所『昭和 55 年度京都市埋蔵文化財調査概要』2011 年
59	1980	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／溝　　鎌倉～室町／掘立柱建物，井戸，溝 江戸／掘立柱建物，井戸，土坑 遺物／土師器，瓦器，青磁，三彩，瓦，木器（舟形，人形，将棋駒），錐，刀	京都市埋蔵文化財調査センター，(財) 京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡調査概要』昭和 55 年度，1981 年
60	1980	伏見区竹田中内畑町	平安末／石敷 江戸／掘立柱建物，土塀，井戸，暗渠（推定：大善院） 遺物／瓦，陶器，玉	
61	1980	伏見区竹田中内畑町	平安末～鎌倉／落込み 江戸／井戸，柱穴，土坑	(財) 京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡』1981 年
66	1980	伏見区竹田中内畑町 伏見区竹田西桶ノ井町	平安末／湿地状堆積	京都市埋蔵文化財調査センター，(財) 京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡調査概要』昭和 55 年度，1981 年
69	1981	伏見区竹田中内畑町	中世以後／井戸，土坑，溝，礎石，ピット 遺物／土師器，瓦器，輸入陶磁器，瓦	京都市文化観光局，(財) 京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡調査概要』昭和 56 年度，1981 年
71	1981	伏見区竹田中内畑町 伏見区竹田真幡木町	弥生中期後半／溝　　古墳初頭／土坑（布留） 平安／溝，土坑，井戸，柱穴 室町～江戸／溝，土坑，井戸，柱穴，墓，竈 遺物／弥生土器，土師器，須恵器，緑釉陶器，瓦器，瓦，石器（石剣，石斧，石包丁，石錘，砥石），木器（斧柄，馬鍬，杵，弓，籠）	(財) 京都市埋蔵文化財研究所『昭和 56 年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』1983 年

次	調査年度	住所	調査遺構・出土遺物	文献
77	1982	伏見区竹田西内畑町	平安中／河川？　平安末／溝，柱穴 室町／溝，井戸，土坑，柱穴 桃山／溝，井戸，土坑，柱穴，礎石 江戸／溝，井戸，柱穴，礎石 遺物／土師器，須恵器，瓦器，輸入陶磁器，焼締陶器，施釉陶器，金属器，木器（板絵，木簡，塔婆，将棋駒，人形，木球，漆器，下駄，箸）	（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和 57 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1984 年
84	1982	伏見区竹田西内畑町	弥生中期／溝　平安／柱穴 鎌倉～室町／柱穴，土坑，溝，井戸 遺物／土師器，須恵器，瓦器，緑釉陶器，輸入陶磁器，石器（石斧，石鏃）	
86	1983	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／池汀，庭石，溝，陸部（地業） 遺物／土師器，瓦器，瓦	京都市文化観光局，（財）京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 58 年度，1984 年
88	1983	伏見区竹田中内畑町	古墳／溝　平安～鎌倉／井戸，土坑，溝 室町～江戸／柱穴，井戸，溝（堀） 遺物／土師器，須恵器，瓦器，輸入陶磁器，木器（卒塔婆，下駄，櫛，箸）	（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和 58 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1985 年
94	1983	伏見区竹田中内畑町	中近世／溝　遺物／土師器，須恵器，陶器，瓦	
105	1984	伏見区竹田浄菩提院町 伏見区竹田中内畑町	平安中／溝　平安末／土坑，ピット 遺物／土師器，須恵器，灰釉陶器，黒色土器，輸入陶磁器，白磁，瓦	（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和 59 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1987 年
110	1985	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／石積地業（推定：九体阿弥陀堂） 遺物／土師器，須恵器，瓦器	京都市文化観光局，（財）京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 60 年度，1986 年 （財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和 60 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1988 年
112	1985	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／池，溝，突堤状遺構，集石遺構 遺物／土師器，瓦器，輸入陶磁器，瓦，木器（漆器，下駄，杓子，五輪塔）	
117	1985	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／池，出島，州浜，景石 遺物／土師器，瓦器，輸入陶磁器，瓦，木器（五輪塔）	京都市文化観光局，（財）京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 61 年度，1987 年
120	1986	伏見区竹田浄菩提院町	江戸／溝（撹乱のため遺構削平？） 遺物／土師器，須恵器	（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和 61 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1989 年
124	1987	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／溝，土坑　室町／井戸 遺物／土師器，瓦器，須恵器，輸入陶磁器，木器（呪符，柿経，塔婆，題箋，漆器，折敷，下駄，木球）	京都市文化観光局，（財）京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 62 年度，1988 年
126	1988	伏見区竹田浄菩提院町	平安中／流路　平安末／溝，池汀，石敷遺構，流路 遺物／土師器，須恵器，瓦器，輸入陶磁器	（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和 63 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1993 年
127	1988	伏見区竹田田中宮町	平安末～鎌倉／掘立柱建物，柱穴，溝，土坑 遺物／土師器，須恵器，瓦器，輸入陶磁器，銭貨，	
129	1988	伏見区竹田浄菩提院町	平安末～室町／溝　遺物／土師器，瓦，木器	
130	1989	伏見区竹田中内畑町	平安末／池落込み，堀 遺物／土師器，輸入陶磁器，木器（漆器，下駄，曲物，草履）	
133	1989	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／池　室町／溝 遺物／土師器，須恵器，瓦器，輸入陶磁器，瓦，木器（下駄，蒔絵器材	京都市文化観光局『鳥羽離宮跡発掘調査概報』平成元年度 1990 年 （財）京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1990 年
134	1989	伏見区竹田浄菩提院町	平安末期／池，州浜 遺物／土師器，須恵器，瓦器，白磁，瓦，金属器，石器（経石），木器（建築材）	
136	1990	伏見区竹田中内畑町	平安前／流路　鎌倉～江戸／井戸，溝，土坑 遺物／土師器，須恵器，瓦器，焼締陶器，施釉陶器，輸入陶磁器，煙管，銭貨，瓦，木器（漆器碗，曲物，箸，杓子，下駄）	京都市文化観光局『鳥羽離宮跡発掘調査概報』平成 2 年度 1991 年 （財）京都市埋蔵文化財研究所『平成 2 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1991 年
139	1993	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／池汀，州浜 遺物／土師器，瓦，木器（仏像）	京都市文化観光局『鳥羽離宮跡発掘調査概報』平成 5 年度 1994 年
141	1999	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／整地層，溝，ピット，土坑 遺物／土師器，瓦器，瓦	（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成 11 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』2002 年
142	1999	伏見区竹田中内畑町	平安末／溝　桃山～江戸／安楽寿院本御塔跡，溝，地業 遺物／土師器，瓦器，白磁，灰釉瓦，染付，焼締陶器	
144	2001	伏見区竹田中内畑町	室町／溝，柱穴，井戸 遺物／土師器，瓦器，焼締陶器，輸入陶磁器，瓦	京都市文化市民局『京都市内遺跡発掘調査概報』平成 13 年度，2002 年
145	2001	伏見区竹田真幡木町	鎌倉～室町／溝，湿地状堆積 遺物／弥生土器，土師器，瓦器，青磁，木器（柿経），石器（石鏃，石錐，石刀）	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-8「１鳥羽離宮跡 145 次調査（第３工区）」『鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡』2002 年
146	2001	伏見区竹田浄菩提院町	平安末～鎌倉／石敷地業，池，溝，土坑 遺物／円筒埴輪，土師器，須恵器，瓦器，灰釉陶器，輸入陶磁器，山茶碗，瓦，木器（下駄，曲物，漆器ほか）	（財）京都市埋蔵文化財研究所，京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-8「１鳥羽離宮跡 146 次調査（第４工区）」『鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡』2002 年
148	2003	伏見区竹田中内畑町	平安末／池　室町～桃山／流路，整地層，根石列 江戸／溝，土坑，石組遺構，礎石列 遺物／土師器，瓦器，青磁，施釉陶器，焼締陶器，瓦	（財）京都市埋蔵文化財研究所，京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-12『鳥羽離宮跡』2004 年
149	2003	伏見区竹田西内畑町	鎌倉～室町／溝，湿地状堆積 遺物／土師器，瓦器，瓦	（財）京都市埋蔵文化財研究所，京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-14『鳥羽離宮跡』2004 年
150	2004	伏見区竹田浄菩提院町	平安末／池 遺物／土師器，瓦器，山茶碗，白磁，瓦，木器（卒塔婆，木球）	京都市文化市民局『京都市内遺跡発掘調査概報』平成 16 年度，2005 年
153	2010	伏見区竹田中内畑町	平安～室町／池，柱穴，落込み 遺物／土師器，瓦器，須恵器，輸入陶磁器，施釉陶器，瓦，石器（巡方），木器（下駄，漆器碗，箸）	京都市文化市民局『京都市内遺跡発掘調査報告』平成 22 年度，2011 年
154	2010	伏見区竹田真幡木町	弥生中／竪穴状土坑，溝，柱穴列，ピット 平安～鎌倉／溝，井戸，ピット，流路 遺物／弥生土器，土師器，須恵器，瓦器，輸入陶磁器，施釉陶器，石器（石斧，石剣，石鏃），木器	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成 22 年度，2011 年

中する。第21次，第54次調査では，南北方向にのびる直線溝が確認されており，西接する田中殿との区画溝（もしくは道路側溝）として理解されている。また北向不動院に近い第46次・第141次調査では，掘立柱建物や礎石列，井戸等が複数検出されており，御所や僧房等の建物が想定される[2)]。また，南西地点（第10次・第110次調査）では安楽寿院九体阿弥陀堂と目される大規模な石積地業が発見されている。一方，東殿エリアの中央南半部には大規模な池があり，小礫を丁寧に敷き詰めた汀が確認されている（第41次・第150次）。以上のことから，東殿は池の西側に御所と御堂を南北方向に配した構成であったと復原できる。

このほか室町時代の遺構には，近衛天皇陵南側の火葬墓群（第10次D区，第40次）,東殿エリアの東～南端をめぐるように設けられた大溝等がある。この溝は旧鴨川の流れに沿って延びることから，離宮の東限を示す区画溝であるとともに滲水の排出溝であった可能性がある。また室町時代の築城とされる竹田城跡が調査地の北西にあり，第12次，20次，31次，35次，88次等で検出された大溝が城の堀跡にあたると推定されている。なお近年では，建物跡が想定されるピット群が試掘調査によりまとまって確認されている（19T229）[3)]。

このほか，江戸時代の遺構としては，安楽寿院の子院（計12院）に関する遺構が，鳥羽天皇陵の北において集中して確認されている。

以上の調査成果より，今回の調査地は鳥羽離宮東殿に設けられた池の西端付近にあたると推定される。北側隣接地（第150次）では敷地の北西で玉砂利を敷いた汀が確認されており，この延長部の存在が予測された。

3．調査成果

（1）基本層序（図7・表2）

調査地の現地標高は14.6～14.7ｍで，西から東へ向かって僅かに下がる。

基本層序は，上位から現代盛土，江戸時代堆積層，室町時代包含層，平安時代末期～鎌倉時代包含層，砂礫層の順であり，このうち古代末期包含層は鳥羽離宮存続時の池埋土，室町時代包含層はその最終埋土に相当する。この層序は，基本的に隣接地の成果と調和的である。

現代盛土（撹乱土）は層厚1.2～1.5ｍを測り，下位の江戸時代堆積層（耕作土）を大きく撹き上げる。池の埋土は上下２層に大別できる。上層は暗褐色粘土質シルト，下層は暗褐色粗砂混じりシルトを主体とする。ともに植物遺体や炭化物を多く含む軟質土壌で，上層からは14世紀の土師器皿が，下層からは12世紀の瓦器，土師器皿等の破片が出土した。

表２　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
平安時代	池	土器,瓦,木製品を含む。
室町時代	池	土器片を含む。池の最終埋土。

池底である砂礫層は褐灰色細砂～粗砂を主体とし，斜め方向もしくは水平方向のラミナを形成する。湧水が顕著で，その水量も多い。汀を構成するような礫敷きは特に認められないが，砂礫層の上位に径３cm程度の礫が混じることから，これが池底であると判断した。

池底の検出レベルは東が低く，西へ向かって徐々に上る。このため，池の汀は調査区の西側にあると推定される。北隣接地で検出された汀の礫敷きも西へ向かって延びると解釈される。

（２）出土遺物（図８・表３）

今回出土した遺物はコンテナ２箱を数える。このうち土器・瓦は小片が多い。一方，木製品は残存状態が良好で，使用品が一定量出土した。

１～３は土師器皿である。１・３ともに口縁部は１段ナデ，底部は指オサエで成形する。２はコースター形皿の小片で，端部を内折する。いずれも12～13世紀の製品である。第３層より出土した。

４～８は軒丸瓦，９は軒平瓦である。４は蓮華文軒丸瓦の破片で，瓦当外周はタタキ，瓦当裏面はナデて仕上げる。花弁の外側に唐草状の装飾がある。５～８は巴文軒丸瓦である。５・６は右巻き，７・８は左巻きで６・７は界線の外に珠文を付す。５の瓦当外周はナデ，裏面にはケズリを施す。７の瓦当外周には木目が残る。９は唐草文軒平瓦である。瓦当成形は折曲技法によるもので，

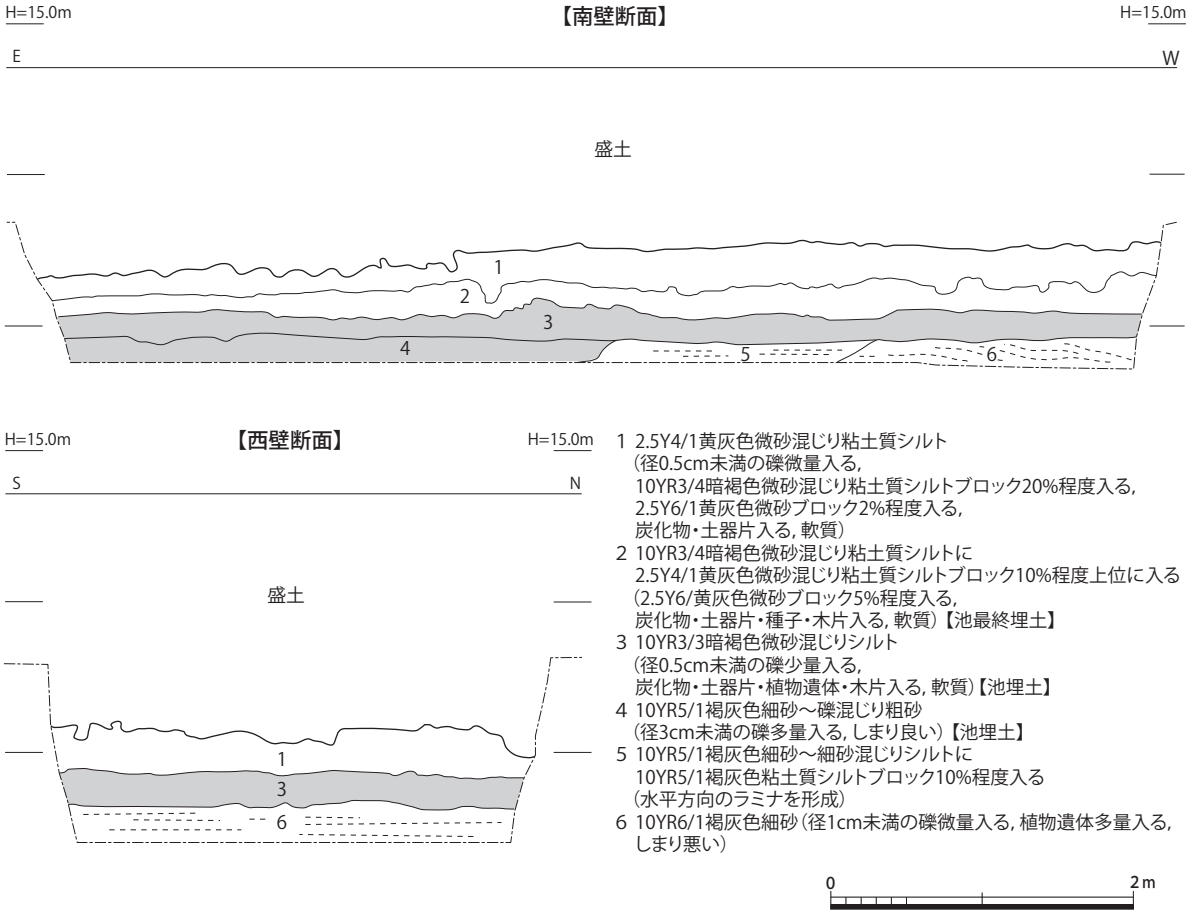


図７　調査区壁断面図（１：50）

瓦当部から平瓦部凹面にかけて一連の布目痕が顕著に残る。顎部はケズリを施す。すべて第３層より出土した。

10～15は木製品である。いずれも使用痕跡のある破損品で，未成品は存在しない。10は紡錘車の紡輪である。側面は粗く切断されるため，平面形状は多角形に近い。表面側部付近には正円に近い線刻が施されている。また中央孔の周囲と，ここから放射線状にのびる線刻もあり，意図的な装飾として理解される。裏面には刃物疵が複数残る。中央孔は小さいため鉄芯を通して使用したと考えられる。用材はスギである。第２層より出土した。11は折敷の底板で薄い板目材を使用する。12～14は曲物桶板で，12は正円，13は楕円形に復原される。曲物側板を側面に装着するタイプであ

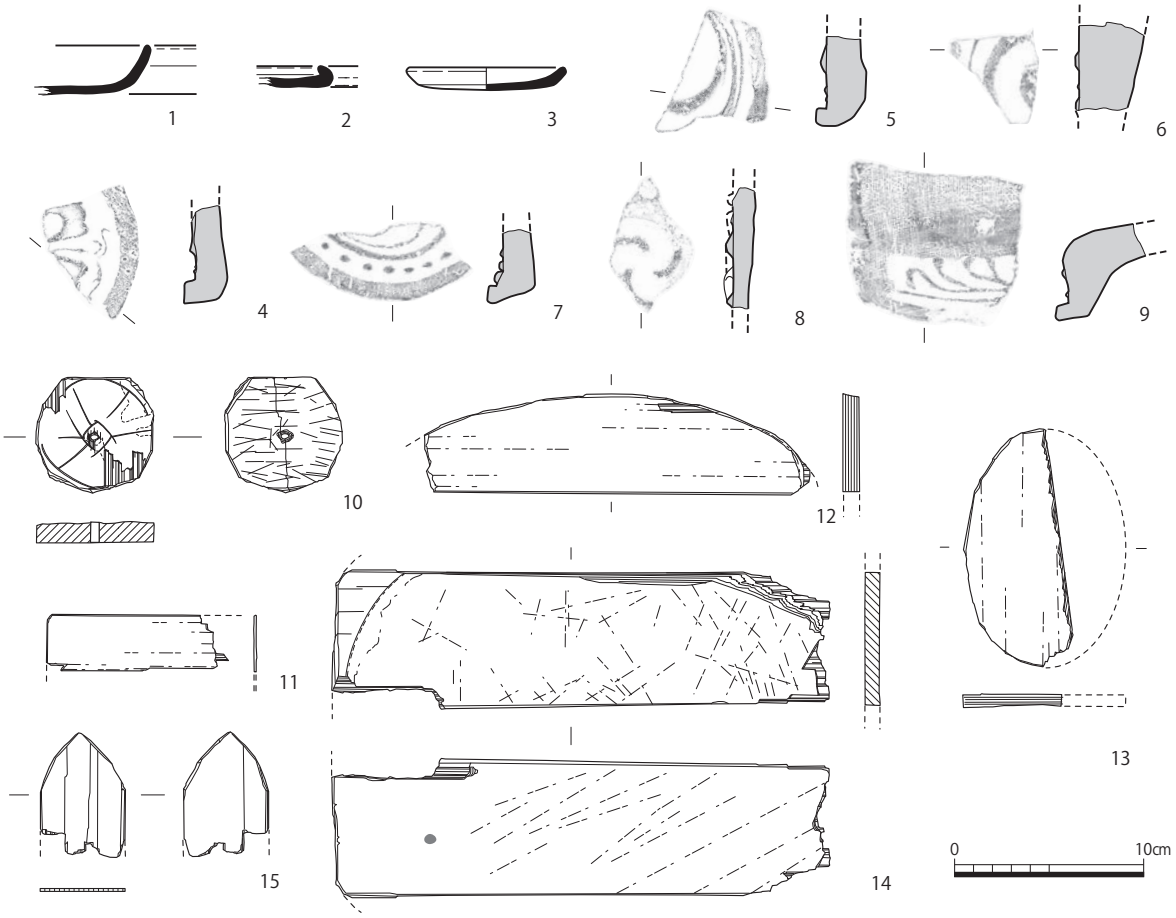


図８　出土遺物実測図（１：４）

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安～鎌倉時代	土師器, 須恵器, 緑釉陶器, 瓦器, 白磁, 青磁, 瓦, 木製品		土師器３点, 軒丸瓦５点, 軒平瓦１点, 木製品6点		
室町時代	土師器, 焼締陶器, 染付				
江戸時代	土師器, 染付				
合　計		２箱	15点（１箱）	０箱	１箱

るが，木釘孔等は確認できない。用材はともにスギである。第３層より出土した。14は隅丸方形の板状品で，曲物側板を受けるタイプの底板である。表面に円形の側板を装着した痕跡が残る。表裏面ともに刃物キズが多数残る。また裏面には焦痕も認められる。用材はスギである。第３層より出土した。15は圭頭形に成形された薄い柾目材で，用途は不明である。最大幅は4.5cmを測る。側面は丁寧に加工されている。墨書等は確認することができなかった。用材はヒノキ科である。第２層からの出土である。

４．まとめ

以上，鳥羽離宮跡の調査成果について記述した。今回の調査では，鳥羽上皇が造営した東殿のうち，庭園の池の一部を確認した。州浜等の遺構を発見することはできなかったことから，池はさらに西へ続き，その汀は調査区外にあると考えられる。このことは，池が隣接する北向山不動院の敷地内へも連続することを示唆しており，久寿２年（1155）に藤原忠実によって建立したとされる不動堂の位置復原にも影響を及ぼす。

既述のとおり，北向山不動院を含む一角は，御所や僧房が存在した可能性が濃厚である。このため，今後の調査成果が待たれるとともに，150次を超える既往の調査成果の再整理にも期待したい。

（黒須 亜希子）

註

１）『扶桑略記』応徳三年十月条には「近習，卿相，侍臣，地下雑人，等，おのおの家地を賜る。舎屋を営造す。さながら都遷りのごとし」と記載される。

２）関白藤原頼長の日記『台記』には，安楽寿院に法華三昧の僧が常駐し，その房舎が御塔の北にあったと記載される。『日本歴史地名大系第27巻　京都市の地名』1979年，平凡社。

３）京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』令和元年度，2020年。巻末一覧表に掲載。

参考文献・引用文献

奈良国立文化財研究所，『木器集成図録　近畿古代編』奈良国立文化財研究所史料第27冊，1985年。

（財）京都市埋蔵文化財研究所，『鳥羽離宮跡Ⅰ　金剛心院跡の調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊，2002年。

京都渡来文化ネットワーク会議　編，『院政期最大の遺跡　鳥羽離宮を歩く』，2017年。

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課，『京瓦　―生産者の足跡―』京都市文化財ブックス第33集，2019年。

報　告　書　抄　録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく　れいわにねんど
書　　名	京都市内遺跡発掘調査報告　令和２年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬瀬智光・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子・清水早織
編集機関	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
所在地	〒604-8006　京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394　Y・J・Kビル２階
発行所	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
発行年月日	西暦2021年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 いちじょうさんぼうじゅういちちょうあと 一条三坊十一町跡・ きゅうにじょうじょうあと 旧二条城跡	きょうとし　かみぎょうく 京都市上京区 むろまちどおりしもたちうりあが 室町通下立売上る かげゆこうじちょう 勘解由小路町171	26100	1 243	35度 01分 12秒	135度 45分 29秒	2020年４月 ７日～2020 年５月15日	81㎡	個人住宅
さいじあと へいあんきょううきょう 西寺跡・平安京右京 くじょういちぼうじゅうさんちょうあと 九条一坊十三町跡・ からはしいせき 唐橋遺跡	きょうとし　みなみく 京都市南区 からはしさいじちょう 唐橋西寺町17	26100	1 755 756	34度 58分 49秒	135度 44分 13秒	2020年６月 １日～2020 年６月26日	75㎡	範囲確認
とくべつしせき とくべつめいしょう 特別史跡・特別名勝 ろくおんじ きんかくじ ていえん 鹿苑寺（金閣寺）庭園	きょうとし　きたく 京都市北区 きんかくじちょう 金閣寺町１	26100	A-105	35度 02分 22秒	135度 43分 53秒	2020年８月 31日～2020 年10月21日	34.2㎡	検証発掘

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京左京一条三坊 十一町跡・ 旧二条城跡	都城跡 城跡	室町時代 江戸時代	濠・溝	土師器皿・陶磁器など	旧二条城跡の濠を 確認。
西寺跡・平安京右京 九条一坊十三町跡・ 唐橋遺跡	都城跡 寺院跡 集落跡	平安時代	西僧房整地土	瓦など	
特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園	寺院跡	室町時代	土壇・被熱面	須恵器・土師器・瓦・ 現代の遺物など	土壇の遺存状況を確認 するための検証発掘。

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく　れいわにねんど
書　　名	京都市内遺跡発掘調査報告　令和２年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬瀬智光・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子・清水早織
編集機関	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
所在地	〒604-8006　京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394　Y・J・Kビル２階
発行所	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
発行年月日	西暦2021年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょくぶつえんきたいせき 植物園北遺跡	きょうとし　さきょうくまつがさき 京都市左京区松ヶ崎 しばもとちょう 芝本町4-3, 4-8	26100	146	35度 03分 04秒	135度 46分 25秒	2020年４月 27日～2020 年５月19日	73㎡	個人住宅
きたしらかわはいじあと 北白川廃寺跡・ かみはてちょういせき 上終町遺跡	きょうとし　さきょうく　きたしらかわ 京都市左京区北白川 ひがしせのうちちょう 東瀬ノ内町25-1	26100	397 400-1	35度 02分 09秒	135度 47分 27秒	2020年４月 ６日～2020 年４月22日	78㎡	個人住宅
きたしらかわはいじあと 北白川廃寺跡・ かみはてちょういせき 上終町遺跡	きょうとし　さきょうく　きたしらかわ 京都市左京区北白川 ひがしせのうちちょう 東瀬ノ内町25-2	26100	397 400-1	35度 02分 09秒	135度 47分 26秒	2020年10月 ７日～2020 年11月５日	85㎡	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
植物園北遺跡	集落跡	古墳～平安時代	掘立柱建物・溝	土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦	奈良時代～平安時代の掘立柱建物を確認。
北白川廃寺・ 上終町遺跡	寺院跡 集落跡	飛鳥時代	溝・土坑	土師器・須恵器・瓦	飛鳥時代の溝３条を確認。
北白川廃寺・ 上終町遺跡	寺院跡 集落跡	飛鳥時代～ 奈良時代	溝・土坑・整地面・ピット	土師器・須恵器・瓦	奈良時代の溝や土坑などを確認。

報　告　書　抄　録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく　れいわにねんど
書　　名	京都市内遺跡発掘調査報告　令和２年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬瀬智光・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子・清水早織
編集機関	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
所在地	〒604-8006　京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394　Y・J・Kビル２階
発行所	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
発行年月日	西暦2021年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やましなほんがんじあと 山科本願寺跡 （24じ・25じ） （24次・25次）	きょうとし　やましなく　にしの 京都市山科区西野 さんかいちょう 山階町36-2, 38-1, 51	26100	A603-1	34度 58分 59秒	135度 48分 32秒	2019年12月９日～2019年12月19日 （24次）	30㎡	範囲確認
	きょうとし　やましなく　にしの 京都市山科区西野 さんかいちょう 山階町44			34度 58分 58秒	135度 48分 35秒	2020年６月１日～2020年６月30日 （25次）	64㎡	
とばりきゅうあと 鳥羽離宮跡	きょうとしふしみくたけだ 京都市伏見区竹田 じょうぼだいいんちょう 浄菩提院町65	26100	1166	34度 57分 06秒	135度 45分 11秒	2020年11月９日～2020年11月19日	50㎡	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山科本願寺跡 （24次）	寺院跡	山科本願寺期	土塁・濠	土師器・焼締陶器など	
山科本願寺跡 （25次）		山科本願寺期	井戸・土坑・整地層など	土師器・瓦質土器・焼締陶器・輸入陶磁器など	
鳥羽離宮跡	離宮跡	平安時代～鎌倉時代 室町時代	池	土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器・瓦・木製品	離宮東殿の池を確認。

図　　版

図版１　平安京左京一条三坊十一町跡・旧二条城跡　遺構



1　第１面全景（東から）



2　第２面全景（東から）

図版２　平安京左京一条三坊十一町跡・旧二条城跡　遺構



1　A-A’断面（旧二条城濠跡SD18）（北西から）

図版３　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）　遺構

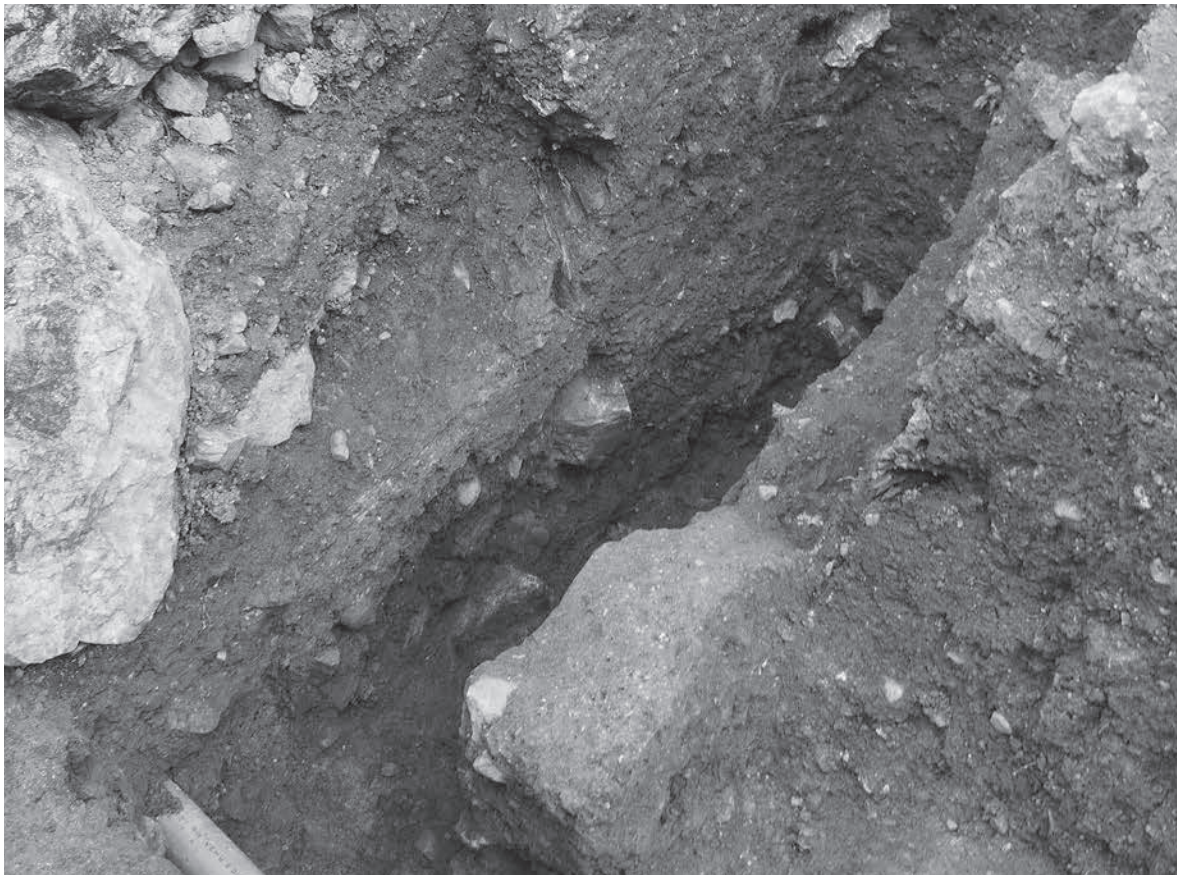


1　第１トレンチａ区東壁（西から）



2　第１トレンチａ区北壁東部（南から）

図版４　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）　遺構



1　第１トレンチａ区断割西壁全景（南東から）



2　第１トレンチｂ区（南から）

図版５　特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園（25次）　遺構



1　第２トレンチ（南東から）



2　第２トレンチ盛土層近景（東から）

図版６　植物園北遺跡　遺構



1　拡張前全景（北西から）



2　SD14（北東から）



3　拡張後全景（掘立柱建物37）（北から）



1　調査区全景（西から）



2　SD 5・6（西から）

図版８　北白川廃寺・上終町遺跡Ⅱ　遺構



1　調査区全景（北から）



2　　SD ２セクション断面（東から）



1　拡張区　SD 2（北東から）



2　拡張区　SD 6（南から）

図版10　山科本願寺跡（24次）　遺構



1　24次　1区土塁断面1（北西から）



2　24次　1区土塁断面2（北西から）



3　24次　1区土塁基底部断面（北西から）

図版11　山科本願寺跡（24次）　遺構



1　24次　２区土塁検出状況（南東から）



2　24次　２区土塁検出状況（北西から）



3　24次　２区土塁濠断面状況（北西から）



4　24次　３区検出状況（北西から）

図版12　山科本願寺跡（25次）　遺構



1　25次　調査区　遺構検出状況（北東から）



2　25次　拡張区１　遺構検出状況（東から）



1　25次　調査区東壁及び断割り断面状況（南西から）



2　25次　SE17断面状況（東から）

図版14　山科本願寺跡（25次）　遺構



1　25次　調査区西壁（E-F間）断面状況（北東から）



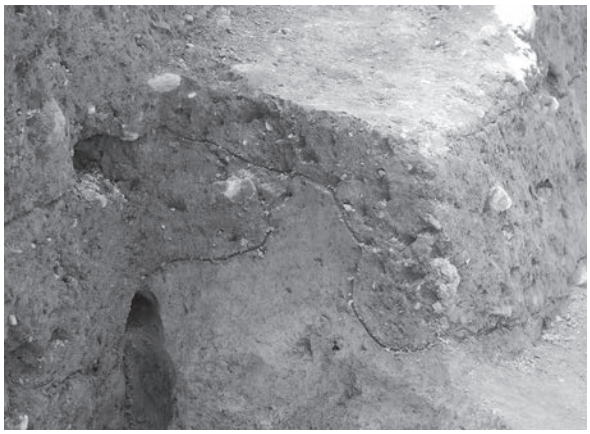
2　25次　調査区西壁（H付近）断面状況（北東から）



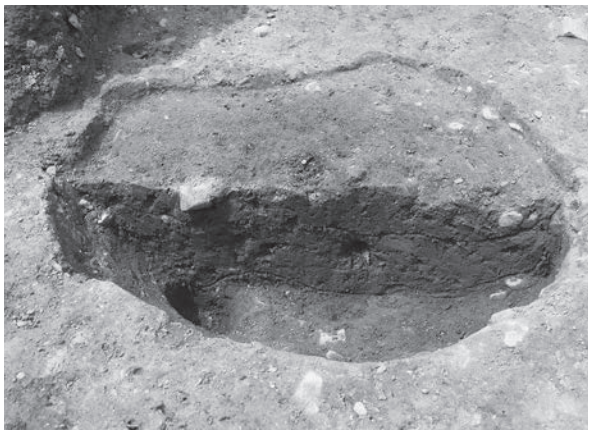
3　25次　調査区遺構検出状況（北東から）



4　25次　整地土断面及び井戸検出状況（南東から）



5　25次　SE17北肩検出状況（南東から）



6　SK 8断面状況（南東から）



7　SK 9断面状況（南から）



8　拡張区2　整地土検出状況（北西から）

京都市内遺跡発掘調査報告
令和２年度

発行日　２０２１年3月３１日
発　行　京都市文化市民局
編　集　京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
住　所　京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町３９４番地
Y・J・Kビル２階
TEL.（０７５）３６６－１４９８
印　刷　奥田印刷株式会社
TEL.（０７５）４４１－７０６０